

谷崎潤一郎と中国古典

——受容の実態と軌跡——

文学研究科博士課程後期課程国文学専攻

二〇一二年度 三六〇三番

李 春草

目次

凡例

序章 谷崎潤一郎と中国……………1

第一節 少年時代の漢学教育……………2

第二節 青年時代の中国旅行……………7

第三節 本論の射程と意義……………11

第一部 少年時代から初回の中国旅行まで

第一章 少年谷崎の思想遍歴——儒家、道家思想の受容と理解……………16

第一節 明治期における儒教復興……………17

第二節 陽明学ブームと谷崎の陽明学理解……………25

第三節 自己内面の自覚と明治の〈煩悶青年〉……………31

第四節 ニーチェイズムと荘子との出会い……………39

第二章 「麒麟」論——漢籍から変奏した物語……………48

第一節 中国古典における「麒麟」の記録と象徴性……………49

第二節 『史記』に見る孔子の二回の敗北……………53

| | | |
|------------|------------------------------|-----|
| 第三節 | 道家への言及と小説の構図 | 61 |
| 第三章 | 「人魚の嘆き」論——背景としての東洋 | 70 |
| 第一節 | 小説の舞台南京の都市像と設定の意味 | 71 |
| 第二節 | 『板橋雜記』との関連 | 75 |
| 第三節 | 西洋人魚の登場とその象徴性 | 80 |
| 第四章 | 「人間が猿になつた話」論——典拠と創作動機 | 89 |
| 第一節 | 中国旅行までの経緯と読書活動 | 90 |
| 第二節 | 「白猿伝」との関連性 | 92 |
| 第三節 | 物語の時空間と小説のモチーフ | 99 |
| 第四部 | 初回の中国旅行以後 | |
| 第五章 | 「鮫人」論——東西融合の試みと東洋への接近 | 105 |
| 第一節 | 中国文献における鮫人記録 | 106 |
| 第二節 | 林真珠の人物像と鮫人伝説 | 111 |
| 第三節 | 林真珠のイメージとヨーロッパの人魚像 | 115 |
| 第四節 | 二人の藝術家と谷崎の東洋への関心 | 119 |
| 第六章 | 「鶴唳」における漢籍要素と東洋的詩情 | 127 |

| | | |
|---------------|---------------------------|-----|
| 第一節 | 谷崎と『西湖佳話』 | 128 |
| 第二節 | 「鶴唳」と『西湖佳話』卷五「孤山隱蹟」 | 131 |
| 第三節 | 「鶴唳」と白楽天の詩 | 136 |
| 第四節 | 鶴のイメージの変容とタイトル「鶴唳」の象徴性 | 140 |
| 終章 | 中国古典の受容と終焉 | 147 |
| 第一節 | 艶情から詩情へ | 147 |
| 第二節 | 受容の終焉及びその理由 | 152 |
| 参考文献一覧 | | 157 |
| 附録 | 谷崎潤一郎全集・書簡に言及された漢籍 | 174 |
| 初出一覧 | | 197 |

凡例

- 一、本稿で引用した谷崎潤一郎の文章は、『谷崎潤一郎全集』決定版、全二六卷（二〇一五年五月一〇日）二〇一七年六月一〇日、中央公論新社）を底本とした。ただし決定版全集に収録されていない谷崎の書簡は、『谷崎潤一郎全集』愛読愛蔵版、全三〇卷（一九八一年五月二五日）一九八三年一月一〇日、中央公論社）から引用した。
- 一、文学作品のタイトル、雑誌名・新聞名などはすべて「」で示し、書籍名は『』で示した。
- 一、引用の際、ルビを簡略化し、漢字は原則として新字体に改めた。引用部分は二字下げか、「」の中に組み込んだ。省略箇所は「（…）」と表記した。引用に際して付した「／」は、実際の本文では改行されていることを示す。誤字・誤植であると見られる箇所には「ママ」を付した。引用箇所に説明が必要な場合は、「引用者注――説明」 という形で説明を挿入した。傍線は引用者による。
- 一、タイトル以外の「」は原則として引用を示す。キーワードとして強調した言葉には「〜」を用いた。
- 一、注の番号は本文に「（1）」のようにアラビア数字を用いて付し、各章の末尾にその内容を示した。
- 一、雑誌の出版年月、巻号は漢数字で、頁数はアラビア数字で表記した。
- 一、谷崎潤一郎の作品に「支那」「支那趣味」など、現代の判断基準では差別用語とされる単語が存在する。原文を尊重し、今回の論文ではそのまま用いることにした。
- 一、本文中の年次の記載については、引用文を除き、原則として西暦を採用した。

- 一、中国古典を引用する際、日本語訳を添付しているため、返り点等の符号を省略した。
- 一、添付している日本語訳は（ ）で囲んだ。
- 一、引用した漢籍について、日本語訳の有無が不詳の場合、引用者の訳を用いた。
- 一、本文中に出てきた人物について中国の詩人のみ生没年や時代を明記している。
- 一、敬称はすべて省略した。

序章 谷崎潤一郎と中国

谷崎は明治、大正、昭和にかけて五五年もの間作品を書き続けた（三代の文豪）と言われる。その作家生涯は一般的に明治・大正期と昭和期と分けられている。明治、大正期の創作期間は昭和期の半分にも満たなかったが、谷崎の生涯において重要な意味を持っており決して見逃せない時期である。失敗作が多い試行錯誤の時代だったとされるが、この時代があつたからこそ『昭和時代』への飛翔も成熟も可能だった^①との秦恒平の指摘もある。これまでこの時期は、しばしば（西洋崇拜）（悪魔主義）（支那趣味）などと様々なキーワードの下に語られたが、中国古典の受容は、（支那趣味）という言葉で片付けずに谷崎文学のもう一つの特徴として注目されるべきである。

谷崎の（支那趣味）の作品は中国古典に取材したものが多く中国古典の受容問題にもかかわっているが、決して中国古典の受容問題と同一視することができない。谷崎の（支那趣味）は一般的に一九一〇年代から一九二〇年代まで、特に一回目の中国旅行前後の一九一七年から一九二六年までの間とされる^②。これに対して中国古典の受容は文壇デビュー以前の初期文章に見られた。また（支那趣味）の作品は中国への憧れや賛美などの主旨を持つており必ずしも古典にかかわると限らない。中国を舞台にするものや中国の風物を中心とするものもある。例えば「天鷲絨の夢」（『大阪朝日新聞』一九一九・一一・二六―一二・一九）や「美食倶楽部」（『大阪朝日新聞』一九一九・一・五―二・三）などである。逆に中国古典に取材した作品は、決まった主旨がなく時期によって異なっている。例えば「人魚の嘆き」（『中央公論』一九一七・一）は西洋への憧憬を、「人間が猿になつた話」（『雄弁』一九一八・七）は遠ざかった故郷（東京）への懐かしさを表した。（支那趣味）と中国古典の受容とは重なる部分があるが、谷崎文学における位置づけを異にしておりそれぞれ独立した問題として見なさなければならぬ。

少年時代に漢文を勉強し数多くの漢文古典をむさぼるように読み漁った谷崎にとって、漢文学は早くも教養の

一部となりその文学のよき土壤にもなっていた。谷崎の全作品を通観すれば中国古典に取材した文章や作品は、文壇デビュー以前にも見られる。例えば「道德的觀念と美的觀念」（「学友会雑誌」一九〇二・六）、「無題録」（「学友会雑誌」一九〇三・九）、「文藝と道德主義」（「学友会雑誌」一九〇四・五）などである。また文壇デビュー後の「刺青」（「新思潮」一九一〇・一一）や「麒麟」（「新思潮」一九一〇・一二）、「人魚の嘆き」（前掲）、「人間が猿になつた話」（前掲）、「鮫人」（「中央公論」一九二〇・一、三、五、八、一〇）、「鶴唳」（「中央公論」一九二一・七）など明治から大正一〇年まで数多く書かれていた。

これらの作品は谷崎文学においてどう位置付けられるか、中国古典受容の変容と終焉がどのような暗示性を持っているか、これらの問題の究明は谷崎文学の全貌、最後の帰着点への歩みを正確に把握するために重要な意味を持っている。

第一節 少年時代の漢学教育

谷崎文学と中国古典との関係を論じる際、まず彼はどのような経験を通じて中国古典の教養を得たかを知っておく必要がある。これは谷崎という作家を知る基礎的な作業であるとともにその文学の基盤を探る営為でもある。この意味で谷崎の幼少時代の教育経験を遡ることは重要な意味を持っている。

谷崎は、一八八六（明治一九）年七月二四日、東京市日本橋蛸殻町二丁目一四番地に生まれた。この時代は、夏目漱石や森鷗外のような明治初年前後に生まれた作家たちのように小学校に通う前に漢学塾に通わせられたり、四書五経や左国史漢のような難しい中国古典を暗誦させられたりすることはなかったが、漢学を学ぶという前時代の名残があったため、基礎的な漢文古典との接触がまだ多く見られる。小学校に通う傍ら秋香塾という漢学塾にも通っていた谷崎は、当時学んだ漢文古典について次のように回顧した。

初歩の者は、日本外史や日本政記のやうな和臭のあるやさしい漢文から始めたが、私は稲葉先生から洗心洞割記ばかりでなく、大槻磐溪の近古史談のやうなものや、その他和漢の詩集の類を不規則ながら授かつてゐたので、秋香塾では「大学」から「中庸」、「論語」、「孟子」と云ふ順序で進み、十八史略、文章軌範ぐらゐまで習つた。

（「秋香塾とサンマ」、「幼少時代」、「文藝春秋」一九五五・四〜一九五六・三）

その漢文の素養は、小学校時代の担任稲葉清吉（先生）との運命的な出会いによつて深められた。稲葉は和漢の古典に詳しく授業時間にしばしば漢文古典の話をし、美文の暗誦を勧めたり、漢詩を作らせたりしたので、谷崎は大いに啓発された。浜本浩は「大谷崎の生立記」（一九五六・三）において次のように述べている。

稲葉訓導は東京府師範学校出身の正教員で、その頃三十歳前の独身だった。漢学が得意で授業の間には面白い話をして聞かすので生徒の受けもよかった。高等一年生に程朱学、陽明学の根本解義を試みたり、仏教の教理を解いたりしたので、天才児童の谷崎さんは忽ち啓発されて、（…）そればかりではなく、稲葉訓導は、十一、二歳の少年達に科外授業として四書五経、近古史談などを講義してきかせ、抜き書きを謄写版刷にして「光風霽月」と題して、生徒に配つたりした。³⁾

谷崎は稲葉の影響で四書五経以外に『莊子』『老子』『伝習録』など数多くの漢文古典を読み漁つた。この経験は「幼少時代」のほか「学校時代」（『文芸雑誌』一九一六・四・一）、「幼年の記憶」（『新文学』一九四七・五・七）や「少年の頃」（『主婦之友』一九五〇・一一）などに幾度も言及されている。附録の「谷崎潤一郎全集・書簡に言及された漢籍」で示したように、谷崎が言及した中国古典は、数が多いのみならずその範囲が非常に広い。

四書五経、『莊子』『伝習録』『史記』『十八史略』『詩経』『唐詩選』『游仙窟』『唐才子伝』『水滸伝』『三国志』『剪燈新話』『西湖佳話』など、哲学書、歴史書、漢詩集、小説類というように広汎なものが含まれており、さらに李北海（唐・六七八〜七四七）、呉道子（唐・生没年不詳）、倪雲林（元・一三〇一〜一三七四）などの書家や画家たちへの言及も見られる。相当の漢文の教養がなければ谷崎はこれらの古典を繙くことが出来なかつただろう。実際に谷崎の漢文の才能は早くも少年時代に作った漢詩から窺い知れる。

牧童

牧笛声中春日斜。青山一半入紅霞。行人借問歸何処。笑指梅花溪上家。

〔学友会雑誌〕一九〇一・一〇〇

護良王

鹿走三山運竟空。南朝往事泣英雄。天闔未掃妖雲影。賊子屠龍土窟中。

觀月

薄暮東山待月來。卷簾間倚小樓台。忽看林杪清輝閃。娥影先浮激灩杯。

殘菊

十月江南霜露稠。書窓呼夢雁声流。西風此夜無情甚。吹破東籬一半秋。

〔学友会雑誌〕一九〇一・一一一

「観月」以外の三首は、いずれも韻を踏んでいる。また典拠については、「牧童」のモチーフは唐・杜牧（八〇三〜八五三年）の詩「清明」「清明時節雨紛紛、路上行人欲断魂。借問酒家何處有？牧童遙指杏花村。」に近いと指摘され、⁽⁴⁾ 当時の習字の先生岩佐眉山から「語調寛間、有景有情」と高く評価された。⁽⁵⁾ 「護良王」の「鹿走三山運竟空」は清・吳偉業（一六〇九〜一六七一）の詩「功臣廟」「鹿走三山争楚漢、鷄鳴十廟失蕭曹」⁽⁶⁾（鹿は三山を走り楚漢を争ふ。鷄鳴く十廟、蕭曹を失ふ）の句から採ったと考えられる。また「屠龍」は「莊子・列禦寇」「朱泚漫学屠龍於支離益。單千金之家、三年技成、而無所用其巧。」⁽⁷⁾（朱泚漫は、龍を屠ることを支離益に学ぶ。千金の家を單し、三年にして技成りて、而も其の巧を用ふる所無し。）に、「殘菊」の「東籬」は陶淵明「飲酒 其五」⁽⁸⁾「採菊東籬下、悠然見南山」（菊を采る 東籬の下、悠然として 南山を見る）⁽⁸⁾が出典だと考えられる。特に「殘菊」の詩について岩佐は「愛黄花之節。傷其凋零。自是陶家遺意。」と陶淵明の遺風が漂っていると評価した。⁽⁹⁾

また「娥影」と「激灑」については、高青邱（高啓、一三三六〜一三七四）「題美人対鏡図」の「月里分明見娥影」⁽¹⁰⁾（月分明なるぞ娥影見ゆる）と蘇東坡（一〇三六〜一一〇一）「飲湖上初晴後雨」（湖上に飲せしが初めは晴れ後は雨）の「水光激灑晴方好」（水光激灑として 晴れて方に好し）⁽¹¹⁾の句に見られるようにいずれも漢詩に多用される語句である。

この時期の谷崎の詩才は、後年の自伝的性格を持つ作品「神童」（「中央公論」一九一六・一）にも書かれている。「日没西山外。月昇東海辺。星橋弥両極。爛々耀秋天」という五言絶句を作った主人公の春之助は、先生に「李白の俳がある」と讚嘆されて生徒たちに神童と呼ばれた。春之助の経験は谷崎の実経験でもある。津島寿一は『芳塘随想第十三集 谷崎潤一郎君のこと』（一九六五・三）において谷崎の幼少時代からの親友だった笹沼源之

助の言葉を引用して次のように述べている。

「谷崎の『神童』を読む人は、それが創作であることを知りながらも、主人公春之助の面影を著者谷崎に重ね合わせて読んでゆくのではあるまいか、谷崎が小学生時代から非凡な児童であったのは事実で、日清戦争のとき牙山陥落に刺激され漢詩を作ったほど異常な才能を有っておった。それは二年生のときである。谷崎が府立一中の一年生のときの国漢の先生は渡辺という人で、この人が非常に谷崎の才能を認め、「神童」という

言葉を使った。」⁽¹²⁾

谷崎の漢詩に対する興味は後年まで続いた。作品における漢詩の言及と引用の頻度から見れば、谷崎はとりわけ李白、杜甫、白居易、高青丘（啓）、呉梅村（偉業）の詩を愛読したことがわかる。彼は「鮫人」（『中央公論』一九二〇・一、三〇五、八〇一〇）の登場人物南の口を借りて漢詩を「支那文学の精髓」、「其の最も模範的なもの」であり、「僅か二十字の詩でもつて、ダンテやゲーテの領域へ一息に行き着くことが出来る」と非常に高く評価した。また一九一八年の一回目の中国旅行後に漢文版の『西湖佳話』巻三「六橋才蹟」に取材し戯曲「蘇東坡」（『改造』一九二〇・八）を書いたことから谷崎の漢文の素養の一斑を窺い知ることが出来る。⁽¹³⁾

秋香塾での勉強と稲葉の薰陶によって築かれた漢学の基礎は谷崎の人生に大いに影響を与え、その文学に種々の影を投ずることになった。この経験とその後の知識の構成や作家としての成長に与えた影響について、谷崎は自ら次のように語った。

それにつけて思ふことは、自分が小説作家として今日までに成し遂げた仕事は、従来考へてゐたよりも一層多く、自分の幼少時代の環境に負ふところがあるのである。……私の場合は、現在自分が持つてゐるものゝ大部分が、案外幼少年時代に既に悉く芽生えてゐたのであつて、青年時代以後に於いてほんたうに身についたものは、そんなに沢山はないやうな気がするのである。たとへば私が、「幼少時代」に於ける小学校の「稲葉先生」などから学び取つたものは後年いろ／＼な形でさまざまな作品の中に跡を印してゐるのである（…）中学以後の先生たちから受け入れたものは、それに比べればさほど著しい感化を遺してゐない。

（「私の『幼少時代』について」「心」一九五五・六）

中国との因縁が少年時代の中国古典との接触到に始まつたとするなら、一九一八年の中国旅行はさらにそれを深めた。中国旅行を通じて谷崎は豊富な素材を得たとともに中国に対して更なる親近感を覚えた。それは旅行後に書いた紀行文や旅行記から窺われる。

第二節 青年時代の中国旅行

谷崎の七九年にわたる生涯の中で、中国との縁が深いことを論じるにあたり、少年時代の中国古典の勉強だけでなく、二回の中国旅行も注目すべきだろう。特に一回目の旅行はその後の谷崎文学の方向性において重要な意味を持つ。谷崎が初めて中国を訪れたのは一九一八年一〇月中旬であつた。「マルニヶ月」（「支那旅行」「雄辯」一九一九・二）の滞在でその年の暮れに帰国したという。¹⁴ 旅程は「支那旅行」に記されたとおりである。

十月の九日に東京を出発した。途中の行程は、朝鮮から満州を経て北京へ出、北京から汽車で漢口へ来て、

漢口から揚子江を下り、九江へ寄つてそれから廬山へ登り、又九江へ戻つて、此度は南京から蘇州、蘇州から上海へ行き、上海から杭州へ行つて再び上海へ立戻り、日本へ歸つて来た様な順序である。

谷崎はこの旅行を準備するため、資金の工面はもちろん、予備知識を得るために中国古典や旅行に関する書物も数多く読んでいた。例えば『剪燈新話』（「蘇州紀行」「中央公論」一九一九・二〇三）、李笠翁の一〇種曲（「西湖の月」「改造」原題「静磁色の女」一九一九・六）、『西湖佳話』（「西湖の月」同上）、「廬山誌」（「廬山日記」「中央公論」原題「廬山日誌」一九二一・九）などである。⁽¹⁵⁾ 旅行の動機について後年谷崎は「東京を思ふ」（「中央公論」一九三四・一〇四）で次のように語っている。

もしあの時分に金があり、妻子の束縛がなかったならば、多分私は西洋へ飛んで行つて、西洋人の生活に同化し、彼等を題材に小説を書いて、一年でも多く向うに留まつてみたであらう。大正七年に私が支那に遊んだのは此の満たされぬ異国趣味を纔かに慰めるためであつたが、旅行の結果は私を一層東京嫌ひにし、日本嫌ひにした。

西原大輔は、谷崎は強い洋行の願望を持っていたが経済的余裕がなかったため、その代償として当時流行っていたへ支那漫遊に慰藉を求めたと指摘した。⁽¹⁶⁾ 西洋を崇拜していた谷崎においては確かだろうと考えられるが、当時芸術と生活の問題に悩まされていた谷崎の実状を考えるとより深層的な理由があるのではなからうか。芸術と生活の問題については「饒太郎」（「中央公論」一九一四・九）の中で次のように書かれている。

彼の所謂「美」と云ふものが全然実感的な、官能的な世界にのみ限られて居る為めに、小説の上で其の美を想像するよりも、生活に於いて其の美の実体を味ふ方が、彼に取つて余計有意味な仕事となつて居る。

この時期の谷崎はひたすらに「生活の芸術化」⁽¹⁷⁾を追い求めていた。一九一五年に千代夫人と結婚したが、結婚生活では期待に背き生活と芸術の一致が実現できなかつた。千葉俊二によれば、「この時期の谷崎は従来からの生活の芸術化の試みが決定的な破綻をきたし、自己の芸術の方向を失いかけた一種の行き詰まり状態にあつた」⁽¹⁸⁾。当時の心境と苦悩は「父となりて」(「中央公論」一九一六・五)からも窺われる。

やがて私は、自分の生活と藝術との間に見逃し難いギャップがあると感じた時、せめては生活を藝術の為に有益に消費しようと企てた。(…)私の心が藝術を想ふ時、私は悪魔の美に憧れる。私の眼が生活を振り向く時、私は人道の警鐘に脅かされる。

谷崎の中には常に「矛盾した二つの心の争闘」(「父となりて」)があつた。彼は自己の文学の方向性を探るため、さまざまな模索を試み数多くの作品を創作した。たとえば、「神童」、「鬼の面」(「東京朝日新聞」一九一六・一・一五〜五・二五)、「異端者の悲しみ」(「中央公論」一九一七・七)のような自己省察を試みた自伝的な作品、「人魚の嘆き」、「魔術師」(「新小説」一九一七・一)のような幻想的な作品、「人面疽」(「新小説」一九一八・三)、「白昼鬼話」(「東京日日新聞」一九一八・五・二三〜七・一〇)、「大阪毎日」同く七・一一)などのような推理小説仕立ての怪奇小説、「金と銀」(「黒潮」一九一八・五)、「中央公論」一九一八・七)、「AとBの話」(「改造」一

九二一・八) などのような自己の世界観を検証した芸術家小説などである。(19)

この模索の中の旅行も、新たな局面を開拓するための一つの試みではなからうか。谷崎が期待したのは旅行自体ではなく、豊富な材料を得て創作意欲が刺激され、文学の方向性を明確にすることだろう。このような期待の下に谷崎は一回目の中国旅行に出かけた。自らの文学の新たな方向性と可能性を発見するための実践と見られるこの旅の成果として、谷崎は一群の所謂「支那趣味」の作品を書いた。しかし紀行文や旅行記のようなドキュメンタリーに近い作品以外、創作といえるほどのものはそれほど多くなかった。中国古典から取材した創作は「鶴唳」以後ほとんど見られなくなった。

この旅行より八年後の一九二六年に谷崎は再び中国を訪れた。内山完造を介して田漢、郭沫若、歐陽予倩ら多くの中国の知識人と出会った。帰国後に旅行の行程や中国人知識人との交流を記録する「上海見聞録」(『文藝春秋』一九二六・五)と「上海交遊記」(『女性』原題「上海交遊記」一九二六・五、六、八)を書いたが、その他の創作はない。西原大輔は「第二回中国旅行における中国の知識人との対話を通じて、オリエントとしての中国イメージを、問いなおさざるを得」ず、もう「安心してオリエント的『支那趣味』の美に浸ることができなくなった」⁽²⁰⁾と、「支那趣味」と決別した理由を指摘したが、別の理由もあるのではなからうか。文壇デビューの時期から中国古典に取材しつづけた谷崎がなぜ「鶴唳」を以て「支那趣味」の作品の創作に終止符を打ったか、一回目の中国旅行が谷崎の思想とその後の創作にどんな影響を与えたか、本論では谷崎文学と中国古典との関わりという視点から、各時代の作品の考察を通じて、谷崎における中国古典摂取の実態と軌跡を究明し、これらの疑問を解決することを試みる。

第三節 本論の射程と意義

谷崎と中国古典の関係を考察する営為は、谷崎と中国、また谷崎文学と中国古典という二つの面に関わっている。いうまでもなくこの二面は谷崎にとって「他者」である。個人にとって他者を語る事が結局自己を表現することになるように、谷崎文学における中国古典に対する考察は谷崎の思想と文学の特性を探究することに繋がる。谷崎文学と中国古典に関する考察を通じて個々の作品の成立の鍵を探ることができのみならず、谷崎の思想と文学及びその変化への理解も深められるだろう。

ところが谷崎文学と中国古典に関する論考はまだ少ない。谷崎と古典に関する論考のほとんどが日本古典に限られている。中国古典との交渉については原田親貞の論文「中国文学と谷崎潤一郎（一）」（『学苑』一九六八・一二・一）と「谷崎潤一郎と中国文学（二）」（『学苑』一九六九・一二・一）が見られるが、概観に留まり個別の作品を対象とした具体的な分析は行われていない。錢曉波「谷崎文学における『支那趣味』について——大正八年前後を中心として——」（『研究年報』二〇〇二・三）は、谷崎の「支那趣味」を軸に大正八年前後の「支那趣味」の作品を取り上げ、中国古典との関連を分析した上で谷崎の「支那趣味」の実質が「西洋崇拜」から「日本回帰」へ移入する重要な経由点と位置付けた。宮内淳子「谷崎潤一郎——異郷往還」（一九九一・一）「国書刊行会」第四章「なつかしき異国——『西湖の月』の改稿をめぐる」は「西湖の月」（『改造』一九一九・六）、「蘇東坡」（『改造』一九二〇・八）と『西湖佳話』との関連について考察した。西原大輔は『谷崎潤一郎とオリエンタリズム——大正日本の中国幻想』（中央公論新社、二〇〇三・七）において谷崎の二回の中国旅行及び中国への眼差しを中心に論じていると同時に、谷崎の少年時代における漢学の学習や漢文の才能にも触れた。西原論を契機として谷崎と中国に関する論考が増えたが、その多くは谷崎の「支那趣味」をめぐるその中国旅行及び中国知識人との交流を論じたもので中国古典に関する体系的な論考は見当たらないようである。²¹ 同じ支那趣味に関する考察は張栄順『谷崎潤一郎と大正期の大衆文化表象——女性・浅草・異国』第六章「『鮫人』における浅草表象と脚色さ

れる支那趣味——『鮫人』論」(二〇〇八・六 語文学社)がある。張は登場人物の浅草観を視点として彼らの大衆文化観及び浅草表象に示される支那趣味を検討した。田鎖数馬『谷崎潤一郎と芥川龍之介』『表現』の時代』「補論 谷崎と孝子説話」(二〇一六・三 翰林書房)は少年谷崎が修身の授業で聞いた孝子説話の出典と後の創作との関連を指摘した。個別作品に関する考察については、銭暁波「谷崎潤一郎の思想性の在処について——『麒麟』における漢学の受容を中心に」(杏林大学研究報告・教養部門)二〇〇二・三)や細江光『人魚の嘆き』の典拠について」(日本近代文学)一九八九・一〇)があるが、いずれも掘り下げる余地のあるものである。

本論文では、谷崎の少年時代の試作から日本回帰までの間に書かれた中国古典と関連のある作品を対象にそれぞれの典拠を掘り下げ、典拠との比較を通じて谷崎の中国古典の捉え方を考察していく。時代順に個々の作品の考察を通して谷崎における古典の捉え方の変化及びその原因を分析する。具体的な論考において個々のテキストの分析とともに同時代的な資料を用い実証的に研究する。

本論は谷崎の一九一八年の中国旅行を境目として第一部と第二部と分けた。第一章から第四章までは第一部で第五章と第六章は第二部にあたる。

第一章では、文壇デビュー以前に「学友会雑誌」に発表された論説文を中心に少年谷崎の思想遍歴及び時代思潮との関連を探っていく。

第二章では、春秋時代の中国を舞台に儒家の聖人・孔子と衛霊公の妃・南子との物語を描いた小説「麒麟」を対象に、中国古典における麒麟の記録からタイトル「麒麟」の象徴性を検討し、具体的な典拠を明らかにした上で典拠との相違から南子の人物像と小説のモチーフを探っていく。さらに南子、孔子、林類それぞれの人物像から小説全体の構図を読み取って前章で述べた谷崎の思想傾向との繋がりにも触れる。

第三章では、清朝の南京を舞台とする小説「人魚の嘆き」を対象に、舞台に南京を選んだ理由として南京の歴史や特別なイメージを検討する。また話柄や登場人物の人物像の類似から新たな典拠——清・余懷『板橋雜記』

を指摘し両者の関連性を分析する。さらに西洋の人魚のイメージを分析し、その出現において「南京」と「板橋雑記」がどんな役割を果たしているかを検討する。

第四章では、中国旅行直前に発表された小説「人間が猿になった話」の典拠と創作動機を探っていく。この小説は美女が猿にかどわかされた話が描かれ、谷崎の作品としては少し風変わりなものだった。ところが女性が猿にかどわかされた伝説は中国古典に散見される。その中で特に「白猿伝」は「人間が猿になった話」に最も類似している。谷崎は何を契機としてこの小説を書いたか、旅行前の谷崎の読書活動と交友関係を考察しながらこの小説の典拠と創作動機を明らかにする。

第五章では、一回目の中国旅行後に書かれた中編小説「鮫人」を対象にタイトル「鮫人」の意味、ヒロインの人物像、エピソードの役割などを探っていく。この小説はエピソードとして冒頭に唐・岑参「送張子尉南海」が引用された。「鮫人」というタイトルは「邑里雜鮫人」の一句から取ったと考えられる。谷崎はなぜ中国の伝説のような「鮫人」をタイトルにしたか、この言葉は何を象徴しているかを検討する。その手がかりとしてまず中国古典における鮫人の記録からそのイメージを明らかにする。さらにヒロイン林真珠の人物像を分析し古典に記された鮫人のイメージとの関連性を探っていく。その他、芸術理念が対立する二人の芸術家——南と服部を設定した意味や二人の対談から、漢詩をエピソードにした谷崎の意図、この時期における谷崎の思想の変化を読み取っていく。

第六章では、熱狂的な中国趣味者・靖之助を描いた小説「鶴唳」を対象にその典拠を探っていく。「鶴唳」に描かれた鶴Ⅱ女性のイメージと中国古典におけるそれとの相違を考察し谷崎文学における「鶴」の新たな象徴性を探っていく。この小説は中国文化に強烈な親近感を持つ人物を主人公と設定しながら、タイトル「鶴唳」が暗示しているようにその裏に一種の恐怖や不安も漂っている。この作品を最後に中国及び中国古典に関する作品は見られなくなった。

本論文では、中国旅行以前と以後における中国古典の捉え方の異同から旅行が谷崎にどんな影響を与えたか、中国古典に対する捉え方の変容を通じてその後の思想と文学の傾向を明らかにすることを試みる。

注

- (1) 秦恒平「谷崎潤一郎の大正時代」(『國文學 解釈と教材の研究』第三〇巻第九号 一九八五・八・二〇 60頁)
- (2) 西原大輔『谷崎潤一郎とオリエンタリズム——大正日本の中国幻想』(中央公論新社 二〇〇三・七・二五 9頁、11頁)
- (3) 浜本浩「大谷崎の生立記」初出「文芸」第一三三号 一九五六・三、吉田精一『近代文学鑑賞講座9 谷崎潤一郎』(角川書店 一九五九・一〇・五) 所収 218～231頁。
- (4) 原田親貞「谷崎潤一郎と中国文学(一)」(『学苑』第三四八号 一九六八・一二・一)
- (5) 辰野隆『辰野隆選集第四卷 忘れ得ぬ人々と谷崎潤一郎』(改造社 一九四九・四・三〇 212頁)
- (6) 呉梅村『呉梅村詩集箋注』(廣智書局 一九五九・三・一 369頁)
- (7) 市川安司編訳『新釈漢文大系8 莊子(下)』(明治書院 一九六七・三・二五 788頁)
- (8) 一海知義注『中国詩人選集第四卷 陶淵明』(岩波書店 一九五八・五・二〇 45頁)
- (9) 前掲、辰野隆『辰野隆選集第四卷 忘れ得ぬ人々と谷崎潤一郎』 213頁。
- (10) 金檀注『高青邱全集』卷三(青木嵩山堂 一八九七 1頁)
- (11) 小川環樹、山本和義訳注『蘇東坡詩集』第二冊 卷六く卷九(筑摩書房 一九八四・五・三〇 488頁)
- (12) 津島寿一『芳塘随想第十三集 谷崎潤一郎君のこと』(芳塘刊行会 一九六五・三・一 3頁)
- (13) 谷崎が参考にした『西湖佳話』の版本についての考察は第六章参照。

- (14) 谷崎が東京を立つのは、「支那旅行」(「雄弁」一九一九・二・一)によれば、一九一八年一〇月九日、「奉天時代の奎太郎氏」(「藝林閒歩」一九四六・一〇)によれば一月上旬だったというが、「大阪朝日新聞」の記事「谷崎潤一郎氏の支那行き」(一九一八・一〇・一一)と西田禎元の論考「谷崎潤一郎と中国」(「創大アジア研究」第一三号、一九九二・三・一 45頁)によれば、一〇月九日のほうが正しい。谷崎の中国滞在は一九一八年一〇月中旬から一二月月上旬から中旬頃までの間である。
- (15) 谷崎が読んだと推測される具体的な書物とその出自については附録参照。
- (16) 前掲、西原大輔『谷崎潤一郎とオリエンタリズム——大正日本の中国幻想』¹⁴⁷頁。
- (17) 千葉俊二『鑑賞日本現代文学 8 谷崎潤一郎』(角川書店 一九八二・一二・三〇 17頁)
- (18) 注(17)に同じ、19頁。
- (19) 注(17)に同じ、18頁。
- (20) 前掲、西原大輔『谷崎潤一郎とオリエンタリズム——大正日本の中国幻想』²⁵⁶頁。
- (21) 例えば、陳雲哲「谷崎潤一郎の中国幻想」(「西南学院大学国際文化論集」第一九卷第二号 二〇〇五・二・二五)、李雁南「美味・美景・美女の理想郷——谷崎潤一郎における『中国江南』」(「神女大國文」第二〇号 二〇〇九・三・一)、王書「イ」(「大正作家の『支那趣味』——谷崎潤一郎と芥川を軸として」(「千葉大学人文社会科学研究」第二二号 二〇一一・三・三〇)、閻瑜「谷崎潤一郎の中国旅行と『支那趣味』の変貌」(「大妻国文」第四一号 二〇一〇・三・一五)など。

第一部 少年時代から初回の中国旅行まで

第一章 少年谷崎の思想遍歴——儒家、道家思想の受容と理解

谷崎は阪本尋常高等小学校（尋常科 一八九二・九—一八九七・二、高等科 一八九七・四—一九〇一・三）入学から東京府立第一中学校（一九〇一・四—一九〇五・三）卒業までの間に史伝、詩文、雑録、評論などさまざまなジャンルの文章を書き、雑誌「学生倶楽部」「学友会雑誌」「校友会雑誌」に発表し、「少年世界」に投稿した。それらの文章はほとんどが漢文か擬古文というスタイルで書かれたもので、「初期文章」として全集（没後版第二四卷 一九七〇・七、愛読愛蔵版第二四卷 一九八三・八、決定版第二五卷 二〇一六・九）にまとめられてきた。文壇デビュー以前の習作と見なされ、文学的価値が認められなかったためか、谷崎研究史を見ると、初期の作品及び作家を扱う研究においても、ほとんどは文壇デビュー以後の作品しか考察対象にされなかった。管見の限りでは、この点への言及は辰野隆『辰野隆選集第四卷——忘れ得ぬ人々と谷崎潤一郎』（改造社 一九四九・四・三〇）、橋本芳一郎『谷崎潤一郎の文学』（桜楓社 一九六五・六・一〇）、野村尚吾『伝記谷崎潤一郎』（六興出版 一九七二・五・二五）、などに見られるが、いずれも谷崎の生い立ちや成長過程を中心に書いたもので、この時期の文章や思想をめぐる詳しい検討は少ないようである。その他、千葉俊二は『谷崎潤一郎 狐とマゾヒズム』において明治の舶来思想を論じる際、ニーチェ主義と美的生活論争に言及し、それが谷崎に影響を与えたと指摘した。千葉は美的論争に関する論説のうち、谷崎は真岡勢舟の論文「青鬼堂に与ふる書——莊子とニーチェを論ず」（「精神界」一九〇二・二）に最も心を動かされ、その後書いた「文藝と道德主義」（「学友会雑誌」一九〇四・五）は真岡の「模倣の域を出ない」と批評した。¹しかし、谷崎と真岡の文章を比較してみると、ニーチェと莊子の理解において二人の間には差異があることがわかる。後に言及したい。

「初期文章」に関する論考は少ないものの、この文章群は作家準備期の少年谷崎像を正確に捉えていく鍵として大いなる意味を持つと考えられる。谷崎の文章修行の跡をさながらに見ることができのみならず、儒家、道家といった中国伝統思想と西洋の新思想とのせめぎあいにおける谷崎の思想の実態も窺うことができる。

本章では主に「学友会雑誌」に掲載された中国伝統思想と関わりがある文章——「道德的觀念と美的觀念」（「学友会雑誌」一九〇二・六）、「無題録」（「学友会雑誌」一九〇三・九）、「文藝と道德主義」（「学友会雑誌」一九〇四・五）の三篇と、谷崎の最初の自叙伝というべき「春風秋雨録」（「学友会雑誌」一九〇三・一二）に的を絞り、少年期の谷崎が儒家、道家などの思想をどのように理解していたか、その後の思想にいかなる変化があったかを考察していく。

具体的には明治期における儒家思想の復興とりわけ陽明学ブーム、明治〈煩悶青年〉の出現、美的生活論争におけるニーチェ思想の受容などを視野に入れながら、当時の谷崎の思想の実態及び遍歴を明らかにする。さらにこれらの思想がその後の谷崎の創作にいかなる影響を与えたかを考察する。

第一節 明治期における儒教復興

谷崎は少年時代の一時期、儒家思想、特に陽明学に興味を持っていたことを懐旧談「幼少時代」（「文藝春秋」一九五五・四）、「一九五六・三」に書いている。

嵩山堂へは大塩中斎の洗心洞劄記も買ひに行つた。小学生の癖にそんな本を読むやうになつたのは、野川先生のあとを襲つた稲葉先生の感化であつた。
（「幼年より少年へ」）

私はそれらの話の中では、近江聖人中江藤樹がまだ藤太郎と云つてゐた少年の頃の物語に最も強い感銘を受

け、野川先生の話だけでは物足りないで、自ら村井弦齋の「近江聖人」を買って愛読したことがあつた。(…)それがいかにも少年の胸に訴へるやうに、感傷的に書いてあつたので、私は何度も読み返しては泣いたことを覚えてゐる。

(「稲葉清吉先生」)

文中の野川先生と稲葉先生とは、それぞれ谷崎の小学校尋常科時代の担任野川闇栄先生と高等科時代の担任稲葉清吉先生のことである。「幼少時代」によると、野川は「三十歳前後の」「日本画が得意で」、「漢学仕込み」の先生だった。また稲葉は「お茶の水を出たばかりの」「経験の浅い若い先生」で、谷崎が小学校に入って初めての担任であつたが、谷崎が出席不足で落第したので、受け持った期間はたった七ヶ月だったという。しかし谷崎が尋常科を卒業し高等科へ進級してから再び担任となつた。谷崎は野川から『漢楚軍談』の鴻門の会の話、近江聖人中江藤樹の話など様々な歴史談を聞いたのみならず、この先生のお蔭で「自分が一般の生徒よりも優れた子供であることを知り」、「抱いてゐた劣等感から脱却することが出来た」という。稲葉については「後年私に非常に深い感化を及ぼした先生で」、「私の全生涯を通じ、凡そ師と名づくべき人々のうちで此の人以上に私に強い影響を与へた先生はない」と述べた。

二人のことは措き、文中で言及された『洗心洞劄記』と『近江聖人』に注目したい。『洗心洞劄記』は儒者大塩中齋の語録と、中国儒者の言葉及び儒家經典に関する中齋独自の解釈を記した本である。一八三三年に家塾版として出版されて以来しばしば再版されていた。嵩山堂より出版されたものは管見の限り見当たらなかつたが、一八八〇年代から一九〇〇年までの間に東京文玉圃(一八八一・三)、大阪三書堂(一八八四・三)、秀英舎(一八九二・一二)、東京辻本尚古堂(一八九七・一)などから多数出版されている。いずれも松本乾知点、松本誠之・但馬守約校のものである。青木育志「青木嵩山堂の出版活動」によれば、当時の嵩山堂は出版の規模と質の高さにおいて「東の博文館、西の嵩山堂」と言われるほどの出版社であり、東京日本橋にも店舗をもっていた。嵩山

堂は出版社であると同時に印刷所、小売書店でもあって、谷崎はよく本を買いに行つたという。²⁾ 谷崎が購入した『洗心洞劄記』がどの版本かは確定できないが、嵩山堂ならばいずれかを取り扱っていただろう。

村井弦齋「近江聖人」は一八九二年一〇月に叢書『少年文学』の第一四編として東京博文館より出版された。少年向きの読物として扉や章ごとに挿絵が描かれており少年藤樹の勉強、特に母への孝行にまつわる様々なエピソードが記された。谷崎が「幼少時代」に書いたように、この叢書には「近江聖人」のほか、漣山人「こがね丸」(第一編)、川上眉山「宝の山」(第六編)、高橋太華「新太郎少将」(第二編)などがあり、総計三二編になる一大シリーズであった。その後博文館や東京堂などの出版社によって再版が繰り返された。

周知のように中江藤樹と大塩中齋は江戸時代の儒学者かつ陽明学者である。谷崎が彼等に関する話や伝記に接したのは、直接には二人の教員からの影響であったが、その背景には儒家思想の復興といった時代思潮があった。前に述べたように、谷崎の小学校時代は一八九二年から一九〇一年までにあたる。この時期における日本国家の意識について石田一良は次のように説明する。

明治時代前期における楽天的な西洋文化摂取の結果、日本国は西洋化の代償にその「根拠」を失い、独立を達成しようとしてその「個性」を失いつつある――と懸念し始めたのである。第二には、国家を富強にするはずの民主主義は、すでに国民を二分して君・民の抗争をひき起し、また近い将来、資本主義は労・資の対立をもたらして、国民的統一を破壊する恐れがある、と考え始めたのである。³⁾

このような時勢の中、明治一〇年代の末より「国民精神の回復発揚」(前掲石田論)と「国民団結の鞏固」を目指して国粹保存の運動が明治青年たちの間に台頭して来たという。一八八八年には三宅雪嶺を中心に政教社が結成、機関誌「日本人」が発刊され、ついで一八八九年に陸羯南を中心に国民論派の機関新聞「日本」が発刊された。

彼等はこれまでの西洋文明の撰取に批判的な態度をとった。また官の側から、太政官大書記官兼内務大書記官の井上毅はこの時期に燃え上がった自由民権運動を鎮めるため、一八八一年に「五箇条の方途」を記し、「漢学ヲ進ム」(第四条)と、漢学と英仏の学との平衡を持すべきだと主張した。⁴⁾その後、明治天皇の侍講の職にあつた元田永孚は、国民に対する道德教育の見地から儒教を尊重すべきだと、儒教の国教化を唱えた。この動向の結果として一八九〇年に「教育勅語」が發布された。その中には、

父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信ジ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ学ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ知能ヲ啓
発シ徳器ヲ成就シ進デ公益ヲ広メ世務ヲ開キ常ニ国憲ヲ重シ国法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天
壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ⁵⁾

と書かれており、国民が守るべき徳目は法律という形で規定された。このような思想は一八九一年に制定された「小学校教則大綱」の中にも反映された。

第一条 徳性ノ涵養ハ教育上最モ意ヲ用フヘキナリ故ニ何レノ教科目ニ於テモ道德教育国民教育ニ関連スル
事項ハ殊ニ留意シテ教授センコトヲ要ス
第二条 修身ハ教育ニ関スル勅語ノ旨趣ニ基キ兒童ノ良心ヲ啓培シテ其徳性ヲ涵養シ人道実践ノ方法ヲ授ク
ルヲ以テ要旨トス⁶⁾

「教育勅語」に列挙された徳目の中には儒教の教えと共通するものが少なくなかった。儒教の教えは学校の道德教育の基本として定められた。これについて井上哲次郎は、「明治二三年に賜はつた教育勅語は我邦における国民

道徳の粹であると考へらるゝ。あの中には総て国民道徳の要点と思ふものが列挙してあります。」と解釈し、教育勅語が国民教育の方針を示した明治の聖典であることを強調した。教育勅語の渙発による儒教の復興について、町田則文は「儒教に神道に何れも復旧が起つて来て、さらに新意義なる研究が加へられることになった。之れを称して我が国文化の第二次の明治維新とも云へるであらう。」とその意義を高く評価した。

西洋文明が浸透する中で、独自の国民国家を建設していく際の精神的支柱として、儒教倫理は再び脚光を浴び、教育の現場を通じて全国民に宣伝されるようになった。したがって、このような時流の下に野川が生徒の谷崎らに儒者中江藤樹の話をした動機は理解されるだろう。

谷崎は学校で儒教的な修身教育を受けたのみならず、漢塾・秋香塾にも通って、『大学』『中庸』『論語』『孟子』『文章軌範』『十八史略』など多くの儒家經典にも直接に触れるようになった。この時期に受けた儒家思想は谷崎の初期文章にしばしば引用される。例えば、「無題録」（「学友会雑誌」一九〇三・九）に次の内容がある。

近頃吾人は我校の生徒否、満都の学生は最も悪むべく又恐るべき一種の悪風に漸次感染せんとするを見る。即ち自習力の欠乏なり学校にて課せられたる学課の予習を等閑に附し之れ木に縁りて魚を求め水に入りて火を求むが如し動すれば曰、『能はざる也』と恬として耻づる色なし孟子嘗て齊の宣王に云つて曰く『王之不王、不レ為也。非レ不レ能也。』と王更に問ふて曰く『不レ為者与不レ能者一之形何以異。』対て曰く『挟ニ泰山一以超ニ北海一。語レ人曰。我不能。是誠不能也。為ニ長者一折レ枝。語レ人曰。我不レ能。是不レ為也。非レ不レ能也。』と中学の生徒をして高等学校の生徒と同じく事をなさしめんとするは、之れ泰山を挟んで北海を超ゆるの類なり能はずと云ふも誰か宜ならずとせんや。

傍線部は『孟子』「梁惠王章句 上」の内容であり、孟子が「挟泰山以超北海」（泰山を挟みて以て北海を越えん

とす」と「為長者折枝」(長者の為に枝を折らんとす)⁹⁾といった巧みな譬えで宣王が素質も能力もありませんながら王道を行うことを怠たり、本末を誤っていることを責め立てる言葉が引かれている。つまり宣王が王者にならないのは「不能」(できない)なのではなく、「不為」(しない)からではないかと言うのだ。ここで谷崎は孟子の「不能」と「不為」の理論を援用して「不為」による「自習力の缺乏」という青年たちの悪習を批判したのである。

「道徳的觀念と美的觀念」(「学友会雑誌」一九〇二・六)では儒家の「誠」の思想に触れた。

蓋、満心の誠を挙げて之を衆生に注ぐ者は聖人也、然而して其の満腔の熱血も注ぐに由なく、発するにもなく、遂に天然の風物に向て迸出したる者は即ち詩人ならずや、故に詩人たらんと欲する者は須く先づ致誠の人たらざるべからず、(…)

「誠」は最も重要な儒家の道徳思想の一つであり、『大学』『中庸』『孟子』の中にしばしば論じられている。『中庸』においては、

誠者、天之道也。誠之者、人之道也。(…)
唯天下至誠、為能盡其性。能盡其性、則能盡人之性。能盡人之性、則能盡物之性。能盡物之性、則可以贊天地之化育。可以贊天地之化育、則可以與天地參矣。(…)
誠者物之始。不誠無物。是故君子誠之為貴。

(誠は、天の道なり。之を誠にするは、人の道なり。(…)
唯天下の至誠のみ、能く其の性を尽くすと為す。能く其の性を尽くせば、則ち能く人の性を尽くす。能く人の性を尽くせば、則ち能く物の性を尽くす。能く物の性を尽くせば、則ち以て天地の化育を賛く可し。以て天地の化育を賛く可ければ、則ち以て天地と参た

る可し。(…) 誠は物の終始なり。誠ならざれば物無し。是の故に君子は之を誠にするを貴しと為す。(10)

と、「誠」は一つの世界原理であり、誠であることが自己を完成させるばかりではなく、他の物をもそれぞれに完成させることになるものとされる。もし誠でなかったら、その物は独自の価値ある存在ではない。また『大学』にも「所謂誠其意者、毋自欺也。」(所謂其の意を誠にするとは、自ら欺く毋きなり。)や「故君子必誠其意。」(故に君子は必ず其の意を誠にす。)(11)などの内容があり、「誠」が人として最も肝要な心のあり方であり、君子の証であることが強調されている。谷崎が文中で「誠」の思想に言及し、「詩人たらんと欲する者は須く先づ致誠の人たらざるべからず」と書いたのは恐らくこれらの儒家經典から「誠」の思想を会得し感化されたためだろう。続いて谷崎は次のように書いた。

孔子曰く、詩三百、一言以蔽之、曰思無邪。と、或は欲学詩、先学道、学道則性情正、性情正則原本得。といひ、或は詩以道性情。といひ、或は紀貫之が「やまとうたは人の心を種としてよろづの言の葉とぞなれりける」といへるもの一として之を證言せるにあらずして何ぞ。

ここで谷崎は孔子の言葉と清代(一六一六〜一九一二)の文人徐増(一六一二〜不詳)の詩論を引用して「詩以道性情」——つまり詩が担う道德教化の役目を指摘した。中国では昔から文学における「道」の役割が重視され、「文以載道」(文を以て道を載せる)(12)の思想が提唱されていた。孔子の「入其国其教可知也。其為人也、溫柔敦厚、『詩』教也」(其の国に入りて其の教知る可きなり。其の人と為りや溫柔敦厚なるは詩の教なり。)(13)という言葉は、「詩」の道德的教化作用を指摘したものである。さらに孔子は「詩三百、一言以蔽之、曰思無邪」(詩三百、一言以て之を蔽ふ。曰く、思邪無しと)(14)と言ひ、道德的教化の役割を果たす「詩」の思想の純正、純粹なること

を力説した。

徐増は、「文須有益天下」⁽¹⁵⁾（文は須く天下に益有るべし）の思潮のもとにいつそう詩の教化作用を重視した。また「夫詩之盛衰、関乎国運之興衰。（…）夫欲天下大治、必先使一世之心帰於正、而人心之邪正尤糸於声詩」⁽¹⁶⁾（夫れ詩の盛衰は国運の興衰に関する乎。（…）夫れ天下大治せんと欲すれば、必ずや先づ一世の心をして正に帰さん、而して人心の邪正は尤も声詩に繋ぐ）と、詩は国家の運命にまで関わる一大事業であると強調した。さらに、著書『而庵詩話』において、「欲学詩、先学道、学道則性情正、性情正則原本得」⁽¹⁷⁾（詩を学ばんと欲すれば、先づ道を学ぶべし。道を学ばば則ち性情正し、性情正しければ原本を得たり）と、自らの詩論思想を表明した。この「道」とは具体的に何を指すか。徐増は次のようにも論じる。

蓋詩本性情、而性情之感触則在乎人事。（蓋し詩は性情なり。而して性情の感触は則ち人事にあり。）⁽¹⁸⁾

「道」に規定される「性情」はあくまで「人事」に関わっている。「人事」とは即ち儒家道徳にある君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信という五倫と、仁、義、理、智、信という五常のことである。

谷崎は孔子の言葉と徐増の詩論を引用して、道徳主義を重んじる儒家の文学観に肯定的な態度を示した。谷崎が次のように述べたこともその証左である。

道徳の美点を知る能はざる者は又自然の美を知る能はず、聖人を知らざる者は詩人を知らざる也、而して現今の世人の道徳的觀念を養ふなくして而も亦美的觀念のうすきこと何ぞ夫れ甚しきや、吾人は是等の先驅となりてこの觀念を養成し、釈迦孔子を崇拜すると共に、杜子美を崇拜し、沙翁を崇拜せざるべからざる也。

谷崎は儒家思想の復興という時代風潮の下に学校で儒教的な教育を受けたのみならず、自らも多くの儒家經典に接していた。その影響として、『孟子』を引用し、「誠」の思想や、道德教化を重視する儒家の文学觀に好意的な態度を持っていたのだろう。

第二節 陽明学ブームと谷崎の陽明学理解

谷崎における儒家思想の受容において興味深い事実がある。儒家思想に関する言及が最も多いのが陽明学であったことである。前述したように、谷崎は野川の影響で「近江聖人」を、稲葉の影響で大塩中斎の「洗心洞劄記」を愛読したという。これは漢塾で習った伝統的な儒家經典とは異なり、いずれも陽明学者あるいは陽明思想に関する書物である。当時の儒教復興の動向の中で、なぜ陽明学は特別に注目されたのか。荻生茂博によれば、「近代における日本の陽明学は、このような『国粹主義』『平民主義』の内から始まった『民』の儒学」で、「それは同時代的な主張を含んで作為されて近代的な政治言説であった。」⁽¹⁹⁾という。

陽明学の盛行は儒教の復興という時代思潮によったほか、さらに「民」の儒学として「国粹の保存」運動や「国民道德」の提唱などの時代的な主張にも深く関わっていた。その具体的な表現として、徳富蘇峰は国民的精神を唱えて『吉田松陰』（一八九三・一二）を著した。蘇峰はここで王陽明の「知行合一」（真の認識は必ず実践を伴う）の思想を意識した上で、実践主義を重視した松陰の思想を高く評価した。⁽²⁰⁾また国民道德の提唱という見地から鉄華書院は雑誌「陽明学」（一八九六・七〜一九〇〇・五）を発行し、「発行の辞」で「たゞそれ東邦倫理の大道義を看透し、之を我国固有の風氣士道に照らし、之を宇内通有の大原理に質し、敢て悖らざるものは、儒家の大道を發明したる陽明学乎」、また「個人の涵泳修養は、主として知行合一に在り、知行合一の教えは、主として陽明学に待つある也。陽明学は、今日の人心を陶冶し、一代の風気を革新する一大興奮劑也」⁽²¹⁾と、陽明学が国家を構成し支える個人の品格修養の学問であり、国民的道德の基礎であることを宣言した。

陽明学が流行した理由はもう一つある。西洋哲学の隆盛を目の前にした当時、陽明学はもはや外来の思想ではなく、日本の伝統的な學術思想と認識されて、西欧哲学に対峙する思想に選ばれたのである。例えば、三宅雪嶺によつて陽明学に西洋哲学、特にドイツの觀念論哲学と一致する要素が発見された。

良知の義は、或は普通稱する所の良心にも当り、或はカントの所謂理性と相似て、圍繞の稍と大なるものにも通ず。或は其の未發之中即良知也、無前後内外而渾然一体者也、有事無事可以言動靜、而良知無分於有事無事也、寂然感通可以言動靜、而良知無分於寂然感通也と説けるより見れば、シエリングの所謂絶対と相近し。或は其の先天而天弗違、天即良知也、後天而奉天時、良知即天也と云ひ、或は天地間活発々地無非此理、便是吾良知的流行不息、致良知便是必有事的工夫、此理非惟不可離、実亦不得而離也、無往而非道、無往而非工夫と云ふより見れば、ヘーゲルの所謂理法と選ぶ所なし。(…)故五穀禽獸之類皆可以養人、菓石之類皆可以療疾、只為同此一氣、故能相通耳と云ふより見れば、これショットペンハウエル、ハルトマン等の唱ふる意志なる者と相類して、稍狭き意義を有す、而して其の全く相異なる尽頭所は二家の如く厭世に傾かざるにあり。⁽²²⁾

荻生茂博は三宅雪嶺『王陽明』(一八九三・一一)について、「雪嶺は、儒教が孔孟の盲信に非ずして真理を探究する「独立」性と「創作」性をもつて發達してきた西洋哲学と同様の「哲学」であり、陽明学はその頂点だとした」と評価した。

この時期、陽明学関係の書物は、三宅雪嶺『王陽明』のほか、西村茂樹『心学講義』(一八九二・九)、高瀬武次郎『日本之陽明学』(一八九八・一二)、井上哲次郎『日本陽明学派之哲学』(一九〇〇・一〇)、白河次郎『王陽明』(一九〇〇・九)、高瀬武次郎『王陽明詳伝』(一九〇四・五)などがあった。このように、陽明学は儒教復

興の風潮の中でとりわけ知識人たちに親しまれていた。谷崎に最も影響を与えた稲葉もその一人であった。稲葉の事は「幼少時代」に次のように書かれている。

先生の思想は王陽明派の儒学と、禅学と、それにプラトンやショーペンハウエルの唯心哲学を加味したものであつたらしく、(…)私は先生が青木嵩山堂で売つてゐた、六号でベタで組んだ活字版の白文の王陽明全書十卷を蔵してゐて、折々その一卷を携へ来つて学校で読んでゐたことを覚えてをり、王陽明の詩集の中から、陰夷原不レ滞ニ胸中一。何異浮雲過ニ大空一。夜静海濤三万里。月明飛レ錫下ニ天風一。と云ふ詩や、破ニ山中賊一易。破ニ心中賊一難。と云ふ詩などを黒板に記して説明してくれたことを覚えてゐるから、先生の漢文の素養は、一般に今より程度の高かつた当時としても、普通の小学校の教師よりは水準を抜いてゐたであらうと思ふ。

(「稲葉清吉先生」)

先生はその頃王陽明全書や伝習録や井上哲次郎の「日本陽明学派之哲学」などを読み、陽明学に心酔してゐた。

(「小学校卒業前後」)

谷崎と陽明学との出会いは儒教復興という時代思潮のためであるほか、直接に二人の先生からの影響によるものだろう。特に稲葉は「自分の鑄型に箝めることに力を注」ごうとするまで谷崎を「古への聖賢の道で」「儒教的に、もしくは仏教的に育成することを念とした」(「幼少時代」)。

谷崎の陽明学理解はいかなるものであつたか。それは「無題録」(前掲)における陽明思想の言及から窺える。

嗚呼現時の青年、真に憐れむべき哉。彼等は道德を知らずして道德を嫌ふ、或は曰く、『道德は人間を束縛す

るもの也』と。予は切に望む、彼等少しく王陽明の唯心哲学を研究し而して後道德を是非し得べし。『此心無私欲之蔽一即是天理。不須外面添一分。以純乎天理一之心。發レ之事レ父便是孝。發レ之事レ君便是忠。發レ之交レ友治レ民。即是信與仁』これ王陽明が伝習録中の言也。陸子曰く『六経我れを註し我れ六経を註す』と。他律的道德に支配せらるる人は実に不自由なる人也。然れども陽明が所謂良知を致して仏の頓悟の暁に至れば、即ち大悟徹底天空快豁、物外に超然として行く所として自由ならざるはなし。眞の自由とは之れをこそ云ふべけれ。

文中に引用されたのは王陽明『伝習録』で、陽明「心」学を論じる最も重要な部分である。陽明の「心」学については『伝習録』に次のように論じられている。

心即理也。天下又有心外之事、心外之理乎。(…)此心無私欲之蔽、即是天理、不須外面添一分。以此純乎天理之心、發之事父便是孝、發之事君、便是忠、發之交友治民、便是信與仁。只在此心去人欲存天理上用功便是。

(心は即ち理なり。天下又心外之事、心外の理有らんや、と。(…)此の心に私欲の蔽無ければ、即ち是れ天理にして、外面より一分を添ふるを須ひず。此の天理に純なるの心を以て、之を發して父に事ふれば、便ち是れ孝、之を發して君に事ふれば、便ち是れ忠、之を發して友に交り民を治むれば、便ち是れ信と仁となり。只だ此の心の人欲を去り天理を存する上に在りて功を用ふれば、便ち是なり。)

王陽明の言う純粹な「心」すなわち「良知」とは感性の自然的欲望などに拘束されない、絶対的、超越的な存在

である。人間は外からの所与的、形式的な道德や法律よりもこの純粹たる「心」の命令のままに行動し続けなければ良知を致し、真の自由に到達するという。谷崎は「道德」と「自由」に対する青年たちの無知を批判するため、『伝習録』の該当部分を引用し、真の道德とは「他律的道德」ではないと論じた。陽明学が他律的道德ではないという谷崎の理解は井上哲次郎の陽明学理解と通じる。井上は『日本陽明学派之哲学』において次のように論じていた。

功利主義の如き、国家経済の主義として固より可なり、但之れを個人に関する唯一の道德主義とするは不可なり、何んとなれば、其場合には道德は他律的となりて毫も心徳を養成するに効なければなり。(…)然れども世は実に様々にてこの如き我が国民的道德心を根柢より撲滅せんとする異端邪説、公々然として世に行はれつゝあるなり、是れ余が此書を訂正するの日を俟たず、姑く稿本のまゝ、之れを發行する所以なり、我国民的道德心は即ち心徳の普遍なるものにして、心徳は実に東洋道德の精粹と謂ふべきなり。⁽²⁾₍₄₎

井上は国民の普遍なる心徳を養成するには他律的道德ではなく「東洋道德」としての陽明学が必要であると指摘した。井上はカントによる道德の分類を意識した上で陽明学を他律的道德と異なる一種の自律的道德として見なしたのである。つまり他からの支配、制約を受けずに自らの意志によって普遍的道德を立てこれに従うということである。

谷崎は陽明学を三宅雪嶺や井上哲次郎のような明治知識人によって新たに発見された「東洋哲学」として捉え、さらに西洋哲学概念を意識した上でそれが「他律的」道德ではないと判断したと考えられるが、彼の陽明学理解、主に陽明「心」学の理解には独自のものも見られる。谷崎は次のように続ける。

險夷原不滯胸中。何異浮雲過大空。夜靜海濤三万里。月明飛錫下天風。と是れ王陽明の詩也。我小学校の高
等二三年の頃始めて此詩を読み当時深く感ぜり以来艱難に遭遇する毎に、三唱以て心を慰めぬ、惟ふに王陽
明深く老積二氏の書に造詣する所あるが如し凡べての事己が心の持ちやうによりて、いかやうにもなるなり
怯者には棕櫚籐木も鬼に見え、好酒家には太陽も徳利にみゆるとか。若し胸中慈悲心ありて一切衆生我子な
りと観ずれば天下何者か復悪むべき者あらん。(…)大塩中齋も曰く心に妄想を払ひ常に空しうして無念無想
ならば則ち苦も苦ならずと織田信長嘗て甲州を攻め武田氏の帰依せる某寺を焼きしとき、其僧「心頭を滅却
すれば火も亦涼し」と云ひて平然として火中に説教したりとかや。斯くの如き人は実に絶対的自由の人也。
何処に行くも苦しき事なく楽しからざる事なければ也。

谷崎は王陽明の詩「汎海」を引用して「凡べての事己が心の持ちやうによ」るのだと王陽明の「心」学を理解し
た。その理解は一見三宅雪嶺の「陽明学の学説の重なる一点は、予じめ先づ心を認了す、苟も一心にして正しけ
れば、世間の事悉く之に拠て解釈せられざるなし。」⁽²⁵⁾という解釈と一致するが、谷崎が「心」を説明するために
引用した「心頭を滅却すれば火もまた涼し」の一文は実は甲斐国恵林寺の僧・快川紹喜の言である。

天正一〇(一五八二)年四月三日、恵林寺が織田信長の焼き討ちにあった時、快川国師は「安禅必ずしも山水
を須いず、心頭滅却すれば火も自ら涼し」との言葉を残して、一山の僧とともに焼死した。この二句はもともと
中国唐の詩人・杜荀鶴の詩「夏日題悟空上人院」の転結句「安禅不必須山水、滅得心中火自涼」⁽²⁶⁾から来たものだ
と考えられる。つまり、どんな苦痛であっても、心の持ち方次第でのげ、無念無想の境地に至れば、火さえも
涼しく感じられるということである。このエピソードを記録する歴史書や仏教書は数多くある。そのうち、久保
田政弘が書いた『甲斐史談』(温故堂 一八九四・六)は、児童の道德教育のために、「教育勅語」と「小学校教

則大綱」に基づいて編集された郷土の史談であり、小学校で教科書として使われていたようである。稲葉は仏教徒だったため、生徒たちにこの話をした可能性があろう。また自叙伝「春風秋雨録」(前掲)にも、谷崎は自分の丁稚奉公の経験を切実に書き記し、当時の悲しみや寂しさを紛らわすために様々なジャンルの本を読み漁ったというが、その中には仏教関係の本もあった。したがって谷崎は快川紹喜のこの逸話をよく知っているはずである。さらに、仏教思想に対してもある程度の理解を持っていると考えられる。故に陽明学の「心」学を説明する際、快川紹喜の言葉を援用して陽明「心」学と仏教の「心」の思想とを関連させながら人間の認識における「心」の重要性について自らの考えを述べたのである。その陽明「心」学の理解には元来の陽明学要素のほか仏教の色彩も濃く帯びている。

第三節 自己内面の自覚と明治の〈煩悶青年〉

ところが、谷崎は陽明学をはじめとする儒家思想に対する好意的な態度を長く保持することはなかった。翌年に発表された「文藝と道德主義」(前掲)には大きな揺れが見られる。

厳肅なる道德主義として西洋にカントの倫理学あり、東洋に儒教あり、然れども彼等の説く所や、あまりに乾燥なり、あまりに理性的なり、彼等は吾人の胸中に蟠れる煩悶に対し、懊悩に対しあまりに冷淡なり。彼等の云ふ所や、あまりに単調真面目なり。

谷崎は陽明学を含む儒家思想と西洋のカント倫理学を「厳肅なる道德主義」として同一視し、それまでの儒学に対する態度を一変させた。その理由については後述するが、まず日本におけるカント哲学の移入について述べておく。早期のカント哲学の紹介として、西周「人生三宝説」(一八七五・六、八、一〇)、井上哲次郎『倫理新説』

(一八八三・四)、竹越与三郎『独逸哲学英華』(一八八四・一二)、中江兆民『理学鉤玄』(一八八六・六)、三宅雪嶺『哲学涓滴』(一八八九・一一)、清野勉『韓図純理批判解説』(一八九六・六)、論文集『倫理学書解説』(一九〇一・四)などが挙げられる。特に明治二十年及び三十年代において「日本の移植西洋哲学の中でカント哲学は常に渴仰的であり、」当時の日本の西洋哲学書の殆んどことごとくカントに対して特別の注意を払っている⁽²⁷⁾。谷崎が「文藝と道德主義」(前掲)において「カント曰く『汝の意志の格率^{グレート}が不変立法の原理たり得るやうに行動せよ』」と、カント倫理学の道德法則をそのまま引用したことから、その時期に彼が既にカントに関する何らかの書物に目を通したことがわかる。

カントの倫理学は当時日本の知識人によって如何に受け取られたのだろうか。蟹江義丸は「カント倫理学」(『倫理学書解説』育成会 一九〇一・四)においてカント倫理学の形式主義、厳肅主義、個人主義、先天主義に対して批判を試みた。西田幾多郎もカントの倫理学を首肯しなかった。彼は「グリーン氏倫理哲学の大意」(一八九五・五)の中で、グリーン⁽²⁸⁾の倫理学に共感し、個人の「如何なる情欲をも抑制して之」(引用者注——「道德的法」)に服従すべき⁽²⁹⁾ことを義務とするカントの道德哲学に対して違和感を覚えた。また三宅雪嶺『王陽明』と井上哲次郎『日本陽明学派之哲学』における陽明学とカントの比較や論説によって、陽明学を含む儒家思想とカントの道德哲学との類似性——即ち自律的道德であることが注目されていたようである。つまりカントの道德哲学と儒家思想はいずれも個人の感情、欲望を抑え、理性の義務命令に従い、厳格に道德的法に服従し、禁欲的生活を实践することを要求するものだった。

谷崎は恐らくこれらの認識を意識した上で「厳肅なる道德主義として西洋にカントの倫理学あり、東洋に儒教あり」と書いてカント倫理学と儒学への反感を示したのだろう。谷崎はカント倫理学と儒家思想が「吾人の胸中に蟠れる煩悶に対し、懊悩に対しあまりに冷淡なり」と述べたが、その「煩悶」とは一体何を指すか。谷崎の初期文章を一覧すると、「煩悶」という言葉が最も頻繁に使われたのは「春風秋雨録」(前掲)においてであった。

かくてわれ煩悶にたへずして、昔少しく心をよせて読みたりし哲学、文学、宗教の書を繙きぬ。

トルストイが「我懺悔」をよみ、大聖釈迦が伝記をよむに及びて再煩悶の児となりけり。そは人生につきての煩悶なりき。

かくて我が心は一物もなく、煩悶を払ひ執着を去り、非想非々想処に入りぬ。

エホバは人の心を迷に引き入るゝ夜又よ、如来は思を常闇に導く羅刹よ、あなおそろしと心の中は乱れに乱れて煩悶又煩悶。

われの心は鉄となりぬ。我の心は死しぬ。狂熱もなく、煩悶もなく、神もなく、仏もなく、涙もなく、たゞ我が靈淵内、冷かなる石の如き一物のみのこりぬ。

この頃の谷崎は、家運が傾いて将に退学に至らんとしたが、本人の懇願や稲葉の勧告、伯父の援助でようやく中学校に入学した。だがその後父の商売がさらに苦境に陥り廃学を迫られた。一九〇二年六月に周囲の人の斡旋で、数え一七歳だった谷崎は築地精養軒の経営者北村重昌宅の住み込み家庭教師となり、雑用までも担当した。³⁰おかげで無事に退学せずに済んだが、「富裕の身」だった幼少時代を追憶する度に「寒さを知らぬ夜の床に」「父母の事をおもひては袂をしぼ」「春風秋雨録」る谷崎は果敢なき貧書生になった自分の境遇を悲しんでならなかった。この時期の心境は一高時代に発表した「死火山」（「校友会雑誌」一九〇七・一二）にも描かれている。

願ればわれ十七歳の夏、親に別れて恩人の家に引取られし夕ぐれの心地、今にわすれず。薄ぐらき六畳の書生部屋の隅々に蚊のなくこゑそゞろかなしく、人知れぬくらがり忍び泣きの涙頬をつたはりて一碗の夕飯も喉につまりき。それより後は浮世と云ふものゝ冷かさ、貧といふものゝ口惜しさ、腸にしみ、世をのろひ他人をにくむおもひ胸に凝りて、おぞや血のもゆる青春の心はひたふるに名利のあとをのみ追うて走り、我につらき、われをさげすむ世の人に復讐せんず一念の外、愛もなく歌もなく、黙々として日々書籍にむかひぬ。

これは恐らくその時期の谷崎が「煩悶」するに至った重要な契機だろう。野村尚吾が指摘したように「自負する秀才意識と屈辱的な日常生活といった相反するものを同時に体験せざるをえなかった矛盾撞着」である。⁽³¹⁾この内面的な煩悶は、かつて何不足ない富裕な家庭で育てられただけに一層大きなものがあつた。

谷崎は家運の傾きを悲しむほか、内心にもう一つの煩悶を抱えた。この時期の心境は自伝的な作品と指摘された⁽³²⁾「神童」(「中央公論」一九一六・一)からも窺われる。「神童」において主人公の少年春之助は自分の煩悶を次のように語っている。

己は決して自分の中に宗教家的、若しくは哲学的の素質を持つて居る人間ではない。己がそのやうな性格に見えたのは、兎に角一種の天才があつて外の子供よりも凡べての方面に理解が著しく発達して居た結果に過ぎない。己は禅僧のやうな枯淡な禁欲生活を送るにはあんまり意地が弱過ぎる。あんまり感性が鋭過ぎる。恐らく己は靈魂の不滅を説くよりも、人間の美を歌ふために生れて来た男に違ひない。己はいまだに自分を凡人だと思ふ事は出来ぬ。己はどうしても天才を持つて居るやうな気がする。己が自分の本当の使命を自覚

して、人間界の美を讃へ、宴樂を歌へば、己の天才は真実の光を發揮するのだ。(…)彼は十一二歳の小児の頃の趣味に返つて、詩と芸術とに没頭すべく決心した。

谷崎は「はしがき『異端者の悲しみ』」(「中央公論」一九一七・七)の中で、「神童」に言及して「その実予の境遇に多少似よりの一青年に仮托して、予が胸中の傀儡を述べたに過ぎない」と述べた。その時期の谷崎は「神童」の主人公と同じく自分の本領が哲学でも宗教でもなく詩と芸術にあることを自覚したが、この心情は自分の立身出世を願う父母に理解されなかった。

而もあはれなる両親は我の心を知らずして、我の立身出世の後名誉あり財産ある学士、博士となるをたのしみに、孜孜として悲しくつらき思をこらへ、其日／＼をおくり玉ふなり。(前掲「春風秋雨録」)

息子の立身出世を願う父母と、詩と芸術を志す谷崎との価値観の乖離は彼が煩悶を抱くもう一つの要因であろう。この乖離は「煩悶青年」たちの大きなバックグラウンドであり、若者は「煩悶」することによって自分たちの新しさを確認していると平石典子は指摘した。⁽³³⁾ 谷崎も「煩悶」することによって自己の内面を自覚したといえよう。谷崎はこの「煩悶」を解決するにあたり、「孝」(信)「友」などの徳目を専らに強調する儒家にも、「人欲を去り天理を存」し良知を致す陽明学にも、西洋の哲学思想にも、仏教思想にも満足することができなかつたようである。

「煩悶」とは谷崎が独自に編みだした用語ではなく、当時既に流行語となっていた言葉である。明治二〇年代、高山樗牛や国木田独歩を経由して、「煩悶」は青年の内面的な苦悩を意味する特別な言葉として用いられるようになり、一九〇三年、藤村操の投身自殺と、その遺書を契機に流行語となった。⁽³⁴⁾ 藤村操は谷崎と同年齢で東京第一

高等学校の学生であった。藤村は一九〇三年五月二二日、「巖頭之感」を書き遺して華嚴の滝に投身自殺をした。そこには次のような内容が書かれている。

悠々たる哉天壤、／遼々たる哉古今、／五尺の小軀を以て此大をはからむとす、／ホレーショの哲學竟ついでに何等のオソリチイーを價するものぞ、／萬有の眞相は唯だ一言にして悉す、曰く「不可解」。／我この恨を懷いて煩悶、終に死を決するに至る。／既に巖頭に立つに及んで、／胸中何等の不安あるなし。／始めて知る、／大なる悲觀は大なる樂觀に一致するを。⁽³⁵⁾

この遺書は藤村の叔父である高等師範学校教授、那珂通世が黒岩周六主幹「万朝報」（一九〇三・五・二六）に寄せた痛哭文を掲載したのを皮切りに、新聞・雑誌によってしばしば取り挙げられた。

当時の知識人の間でも藤村の死及びそれが象徴する青年の自殺に対する評価を巡って議論が交わされた。大町桂月は「一身あるを知りて、社会あるを知らず」と藤村の自殺を酷評した。⁽³⁶⁾ また大塚素江は「自己に対する残賊は、自己一身の損失として、不合理に諦め得べきも、社会国家に被らしめる損失危害は、如何にして償ひ得可きか」と青年の自殺を厳しく批判した。⁽³⁷⁾

国家や社会の視点から展開されたこれらの批判と違い、藤村の立場からの評論もあつた。黒岩周六は藤村の自殺が「万有の眞理を疑うより出でたる」「思想の為の自殺」として「空前の珍事」であると思見なした。⁽³⁸⁾ 姉崎正治は「現時青年の苦悶について」において、

要するに彼れの苦悶を自由に発露せしめなかつた為、即ち教育や社会の拘束圧制の為に内の苦悶を強め、

而して外からは此の決定解釈を翻へさせるだけに有力なる慰藉が来なかつたからである事だけ明白であれば十分である。(…)小なる個人の『我れ』がまだ十分に知れておらぬ、其の『我れ』の問題の為に煩悶してをる青年に、大なる国家の影を持って来て之を拝めといふのは、恰も大峯山行者に千尋の谿谷にのぞかせて神変大菩薩の御影が見えたかといふ類ではないか。³⁹

姉崎は自殺の理由は教育と社会によつて形成された規範に縛られ、「煩悶」から解放されるすべをつかむことができなかつたことにあると指摘した。個人の人格を重んじない当時の教育の徒らなる形式主義が自我に目覚めつつある青年を煩悶へ追いやっているとして、忠君愛国主義に対する反省の要を説いている。

藤村の自殺前後、つまり明治三〇年代の青年たちは、親の世代の価値観と違い、国家より自己の内心を重んじ、煩悶しながらも自分なりの価値観や人生の理想を真剣に考えるようになった。これについて末木文美士は次のように述べた。

国家有為の人材ではなく、本当に自分の頭で考え、自分の足で立てる人間はいかにして可能か。それが明治三〇年代の課題となる。いわゆる個の確立という課題である。人生の価値はどこに見出されるのか。人生の理想は、国家に尽くし、国家に吸収されることで済むはずがあるうか。今まで国家政治に向かつていた知識人の目は、ここで一転して、個の内なる探求に向かう。⁴⁰

このように藤村操の自殺は近代における自我の眼覚めと苦悩の象徴として広く受け取られ、多くの青年の心を動かした。この事件について谷崎は回想記「青春物語」(「中央公論」一九三二・九―一九三三・三)で次のように書いた。

余談ながら、当時の文学青年の間では一時神経衰弱症が大流行であつたことを、此処では一言しておきたい。尤も、若い者が不眠症に罹つたり煩悶病に憑かれたりするのは有りがちのことで、われ／＼のひと時代前にも、藤村操流の厭世観が一世を風靡して自殺や心中が讚美されたことがある。が、あの時分のは、あの「巖頭の感」の文章が示してゐるやうに、何処か甘つたるい、センチメンタルなものであつて、恐らくシヨオペンハウエルや仏教哲学などの影響を受けてゐたのであらうが、われ／＼の時代の神経衰弱は、もつと世紀末的な、廢頹的なものであつた。

（「神経衰弱症のこと、並びに都落ちのこと」）

当時の青年たちの自殺や厭世主義に対する態度は、谷崎の「厭世主義を評す」（「学友会雑誌」一九〇二・三）からも窺われる。谷崎はこの文章の中で仁義のために自殺した伯夷、屈原の話や西行、芭蕉に言及しながら厭世主義を論じ、次のように締めくくつた。

蓋古今の大偉人は悉皆清高なる快樂を有す、而して人間は遂に楽天主義によらざる可からず、厭世主義は頗る不完全なるを免れざるなり然れども厭世思想は眞の楽天家が一度は経験すべき通路にして、彼の肉体的快樂に耽り、浮世の無常を悟らずして徒に輕躁にして浮華を事とせる所謂楽天家に比すれば勝ること万々なり。

厭世思想や自殺に対する谷崎の好意的な態度は彼の煩悶の一つの体現ではなからうか。この「煩悶」を一層明確にさせ自己の内面に目を向けさせた契機は莊子とニーチェ思想との出会いだろう。

第四節 ニーチェイズムと莊子との出会い

谷崎におけるニーチェ思想への関心は主に「美的生活論争」を通じて生まれた。谷崎は「文藝と道德主義」(前掲)において次のように述べる。

而して往年本邦の文壇をして為めに沸騰せしめ、未曾有の壯觀を呈せしめしものは実にニイチエイズムなりき。彼の才藻一世を圧倒せる故文学博士高山樗牛、一度筆を太陽紙上にとるや、忽にして美的生活の鼓吹となり、日蓮上人の崇拜となり、青春血氣の文学士登張竹風、亦其の鋭利深刻なる才筆を、「帝国文学」紙上に振うて、博士の思想がニイチエに出でたるを云ひて口を極めて賞讃し、其の結果遂に文壇より遠ざかれる早稲田の坪内博士を攪醒して、起て読売紙上に「馬骨人言」を草せしむるに至る。

この文壇における「未曾有の壯觀」が美的生活論争を指す。美的生活論争は一九〇一年から一九〇三年にかけて当時の論壇を賑わせた、ニイチエ、あるいはニイチエ主義をめぐる論争であった。その発端となったのは「太陽」一九〇一年八月号に掲載された高山樗牛「美的生活を論ず」である。過中には、坪内逍遙、登張竹風、長谷川天溪、樋口竜峽、久保天随、森鷗外などがいた。西尾幹二によればこれは明治期のニイチエ受容の中心的な出来事として大きな影響があった。美的生活論争の起こった一九〇一年以後、ニイチエをめぐる論文の数は飛躍的に増している。⁽⁴¹⁾

谷崎は一九〇三年一二月に書いた「春風秋雨録」でニイチエに言及していることから既にこの時点で論争に関心を寄せていたと推察される。この時期のニイチエ受容には「限界があった」「正視するに忍びない」⁽⁴³⁾と指摘されるが、ニイチエイズムは国家主義や制度化した儒教倫理への反抗、抑圧された人間の内的衝動や欲望の解放、自我の強調、本能の満足、快樂の肯定などの思想として理解された。

論争のうち、谷崎の心が最も動かされたのは真岡勢舟「青鬼堂に與ふる書」という論文である。⁽⁴⁾ 谷崎のニーチェ理解もこの論文から大いに影響を受けた。谷崎は「文藝と道德主義」(前掲)に真岡の論点を引用して次のように論じた。

而も我之を雜誌精神界の真岡勢舟氏にきく、曰く「莊子は東洋のニーチェにして、ニーチェは西洋の莊子なり」と。(…)然れども冷嘲熱罵の筆を逞しうして縦横に社会を語り、狭頑なる道德主義に対して大反駁を試みし点に於て、吾人が磊塊の不平を遣るの点に於ては即ち一なり。

真岡はその論の全篇を通じてニーチェと莊子の思想を関連させながら二者の共通性を論じた。真岡は、「莊子の無為を説き、天道を説き、至楽を説き、達生を説き、至道を説くもの、具さに之を考察すれば、固よりニーチェの主義と同じからず。然れども敵は本能寺にあり。莊子⁽⁴⁾対⁽⁵⁾道学先生は、ニーチェの対するそれと又相似たらずや。我が反動の狂児を説くに至ては則一なり。」と、ニーチェと莊子を二人とも「反動の狂児」と見て、道德主義への反抗において共通すると指摘した。

谷崎による最も早い莊子への言及は「春風秋雨録」(前掲)である。谷崎はこの文章に「莊子が胠篋、盜跖の篇を味ひては、もろともに此の世の中を笑うと書いて反世俗的な莊子に同感を持っていた。この理解は真岡のいう「反動の狂児」とほぼ一致している。恐らく谷崎は真岡の論文を通じて莊子と出会ったのではなからうか。さらに真岡の論点を意識しながら「文藝と道德主義」(前掲)を書いた。千葉俊二は「その論旨のみならず、『莊子』からの引用箇所やその用語の端々に至るまで、後者〔引用者注——谷崎〕は前者〔引用者注——真岡〕の模倣の域を出ない」と指摘する。⁽⁴⁶⁾しかし、そこに谷崎独自の見解も見られる。谷崎は真岡の論点をそのまま受け継いだのではなく、道德主義への反抗において莊子とニーチェが共通するという真岡の考えを認めながらも、莊子とニ

イチエには異なる面があると自らの考えも表明した。

彼等の道徳主義を攻撃するや、蓋二種の方面より来る、一は芸術主義を主張する詩人、文学者流に起りて、彼のミルトンがパラダイスロストのサタンの如き（…）個人意志の絶対的自由を渴仰し、獸欲的本能を切望するより来る、ニイチエの如き、ゴルキイの如きバイロンの如きは之に属すべからずや、一は即ち大乘仏教、ギリシヤ古代の哲学の一派の如き、無宇宙論、虚無主義、迷妄論を主張して、實在を疑ひ認識を疑ひ、高き自道徳以上に超越せんとする哲学観より来る、老子の如き、列子の如き、莊子の如き、達磨の如きは之に属すべきが如し。

（前掲「文藝と道徳主義」）

谷崎は、ニイチエイズムを「獸欲的本能」主義、「個人意志の絶対的自由」への渴仰であると理解し、これに対して莊子を「無宇宙論、虚無主義、迷妄論」と見なした。のみならず、彼は真岡論に言及されなかつた『莊子』「斉物論」を引用してその論を展開した。

嗚呼社会の逆流に沈倫せる天才諸子よ、諸君若しニイチエ、ゴルキイを知る能はざれば来て列子、莊子を読め、庶幾くは以て其の胸中の不平を慰むるに足らむ歟。（…）「南郭子綦。隠几而坐。仰天而嘘。嗒焉似レ喪ニ其耦レ。」を以て起せる莊子斉物論の一篇は莊子中の大文章也。端倪捕捉すべからざる大理想を歌うて幽玄高尚なる哲理を説き、是と非と相混じ、善と悪と相詬り、美と醜とを一にする所、真に東洋哲学史上、絶えて無うして稀に見る底の文章なり。嗚呼民溼に寝ぬれば即ち腰疾偏死す、鱸は然らん哉、木に処れば則ち惴慄恟懼す、猿猴は然らんや、三者何れか正処なるを知らん。民は芻豢を食ひ、麋鹿は薦を食ひ、螂蛆は帯を甘んじ、鴟鴞は鼠を嗜む、四者孰れか正味なるを知らむ。毛嬙麗姬は人の美とする所なり、而も魚之を見れば

深く入り、鳥之を見れば高く飛び、麋鹿之を見れば決驟す、四者孰れか天下の正色なるを知らむ。仁義の端是非の塗、何ぞ樊然として爾く殺乱せるや。莖と楹と、厲と西施と、恢詭譎怪なるを通じて、唯大道は之を一となす。

(前掲「文藝と道德主義」)

「斉物論」は「物論」つまり諸子の思想を齊一にするというものである。莊子は諸子の思想が事物に区別を設け、人間や物事の本来の状態を歪めてしまうと考え、「斉物論」において諸子の思想、殊に儒家思想を徹頭徹尾批判した。莊子は「是と非と相混じ、善と悪と相詬り、美と醜とを一」にし、世間一切の価値判断や、あらゆる主観的な認識を超越する絶対的世界を最高の理想とする。この点において莊子は、世俗の一切の道德、宗教に縛られない「個人意志の絶対的自由を渴望」するニーチェの思想と共通する。しかし一方で、莊子のいう絶対的世界に達するには一切の価値判断、主観的な認識を超越するのみならず、「吾喪我」つまり主体としての自我も捨て、自己中心から解脱しなければならぬ。所謂谷崎が指摘した「實在を疑ひ認識を疑う」「虚無主義」である。この点において莊子思想とニーチェの「個人主義」や「本能主義」とは異なっている。⁴⁷

谷崎は道德主義に反抗するニーチェと莊子思想との出会いを通じてこれまでの儒家的価値観を疑い、何にも囚われない個人意志の絶対自由の共感を覚えた。恐らくこの時期から、谷崎は自分の真に志すところが父母が願う学問の精進による立身出世でもなければ、稲葉が期待する古への聖賢になることでもなく、文学にあることを悟りはじめたのだろう。

谷崎の初期文章は決して文学的価値が高いとはいえないが、谷崎の思想傾向及びその変化を理解するのに重要な文献である。明治期の儒教復興の風潮の中で谷崎は『大学』『中庸』『孟子』など多くの儒教経典を読み、特に陽明学に親しんでいた。しかしながら、家運が傾き貧困に陥った谷崎は、自負と屈辱を同時に体験せざるをえなかった矛盾撞着に煩悶を覚え、さらに藤村操の自殺によって自己内部に蟠る煩悶をはっきり自覚するようになって

た。その後、文壇に起こった美的生活論争に関心を寄せ、真岡勢舟の論文を通じてニーチェや荘子の思想に接するようになった。特にニーチェと荘子思想の受容によって谷崎は儒家の道德主義を見直し、ニーチェの本能主義、個人主義と荘子が主張する生命の絶対自由に対して共鳴した。

これらの思想の受容は、時代思潮の影響が大きかったと考えられるが、それぞれに対して谷崎独自の理解も見られる。例えば陽明「心」学の理解において、谷崎は元来の陽明「心」学の要素のほか、仏教の「心」学要素も取り入れた。そしてニーチェと荘子の理解においても「道德主義への反抗」として二者が共通するという真岡論を認めた上に、ニーチェイズムが「本能主義」「個人主義」であることに対して、荘子思想が「無宇宙論」「虚無主義」だと判断し、二者の相違点を指摘した。この時期の谷崎は時代風潮に関心をもちながらもそれに流されず常に独自の判断や理解を持っている。これは後の創作に見られる豊かな想像力や特異性と無関係ではなからう。

これらの思想の受容及びそれぞれに対する谷崎の態度はその後の創作にも窺われる。小説「麒麟」（「新思潮」一九一〇・一二）は最も代表的な作品である。「麒麟」は『論語』『史記』などに取材して書かれた作品で、儒家の聖人〓孔子のみならず、対立する人物として接輿、林類といった道家の代表者や淫婦と見なされる南子も登場した。谷崎が読んだと確定できる麒麟に関する書物では、『文章軌範』に収録される韓愈の「獲麟解」がその最初のものである。「獲麟解」は僅か一八〇余字であるが、麒麟を記録する古典がいくつか列挙されたほか、麒麟と聖人との関連も言及された。小説「麒麟」は直接にこれに取材したのではないが、谷崎における麒麟イメージの形成や創作のヒントはこの一篇から受けたのではなからうか。

また「麒麟」において谷崎は孔子を嘲る接輿のエピソードを書いたほか、「無題録」（前掲）にも言及された『列子』に記された林類と孔子の弟子である子貢の対話も引用して、儒家の価値判断を無視し、道德や秩序に縛られない生命の絶対的な自由へ戻ろうとする林類の思想を肯定的に書いた。特に生と死を同一視する林類の思想は、「是と非と相混じ、善と悪と相話し、美と醜とを一にする」という『莊子』「斉物論」の内容を思わせる。官能と

肉欲の具現者南子はその美貌で国王を魅惑し、孔子の道德主義に挑戦する人物として設定された。「麒麟」におけるこの三者——孔子Ⅱ儒家、林類Ⅱ道家、南子Ⅱ官能の具現者の設定及びその対立関係は、「無題録」で論じられた、道德主義、莊子とニーチェとの対立関係と相似するだろう。その詳細は次章で論じる。

注

- (1) 千葉俊二『谷崎潤一郎 狐とマゾヒズム』(小沢書店 一九九四・六・一〇 38頁)
- (2) 青木育志「青木嵩山堂の出版活動」(吉川登編『近代大阪の出版』創元社 二〇一〇・二・一〇 75頁)
- (3) 石田一良「明治の精神と国民道德の形成」(吉川哲史、石田一良編『日本思想史講座6 近代の思想1』雄山閣 一九七六・二・一五 214頁)
- (4) 大久保利謙『明治国家の形成』第五章「明治十四年の政変」(吉川弘文館 一九八六・五・一〇 379頁)
- (5) 国民精神文化研究所編『教育勅語渙発関係資料 第一巻』(国民精神文化研究所 一九四〇・六・二五 扉資料)
- (6) 「小学校教則大綱」(森岡常蔵『小学教授法』金港堂 一八九九・一〇・二二 付録1〜2頁)
- (7) 井上哲次郎『国民道德概論』(三省堂 一九二二・八・一 16頁)
- (8) 町田則文『教育名著叢書5 明治国民教育史』(誠進社 一九八一・九・二五 265頁)
- (9) 内野熊一郎編訳『新釈漢文大系4 孟子』(明治書院 一九六二・六・一五 33頁)
- (10) 赤塚忠編訳『新釈漢文大系2 大学・中庸』(明治書院 一九七〇・三・二五 280頁)
- (11) 前掲、赤塚忠編訳『新釈漢文大系2 大学・中庸』52〜53頁。
- (12) 北宋の周敦頤の言葉。文学は社会的な教化作用を發揮するために、その内容が一定の思想や道理を表わさなければならぬということである。

- (13) 竹内照夫編訳『新釈漢文大系 29 礼記(下)』(明治書院 一九七九・三・一〇 755頁)
- (14) 吉田賢抗編訳『新釈漢文大系 1 論語』(明治書院 一九六七・一・二〇 35頁)
- (15) 顧炎武『顧炎武全集 19 日知録(二)』(上海古籍出版社 二〇一一・一二 739頁)
- (16) 徐增「詩選元氣集序」(『清代詩文集彙編 41 九誥堂集』上海古籍出版社 二〇一一・一二所収 333頁)
- (17) 徐增「而庵詩話」(王夫之等撰『清詩話(上)』上海古籍出版社 一九六三・九 所収 429頁)
- (18) 徐增「申最庵詩序」(前掲『清代詩文集彙編 41 九誥堂集』所収 340頁)
- (19) 荻生茂博『近代・アジア・陽明学』(ペリかん社 二〇〇八・四・三〇 426頁)
- (20) 前掲、荻生茂博『近代・アジア・陽明学』 355頁。
- (21) 無署名「発行の辞」(『陽明学』第一巻 第一号 鉄華書院 一八九六・七・五)
- (22) 三宅雪嶺『王陽明』(政教社 一八九三・一一・二八 93頁、94頁)
- (23) 近藤康信編訳『新釈漢文大系 13 傳習録』(明治書院 一九六一・九・一 32頁)
- (24) 井上哲次郎『日本陽明学派之哲学』(富山房 一九〇〇・一〇・一三 4頁、6頁)
- (25) 前掲、三宅雪嶺『王陽明』 76頁。
- (26) 引用は <http://www.shicimingju.com/chaxun/list/714927.html> (詩詞名句綱)による。
- (27) 三枝博音『近代日本哲学史』(書肆心水 二〇一四・七 81頁)
- (28) 西田幾多郎「グリーン氏倫理哲学の大意」(『西田幾多郎全集』第一三巻 岩波書店 一九六六・二・二六 41頁)
- (29) 岡野浩「若き日の西田とカント倫理学」(『学習院大学史料館紀要』第一二号 二〇〇三・三・三一)を参照。
- (30) 前掲、小谷野敦「谷崎潤一郎・詳細年譜」。

- (31) 野村尚吾『伝記谷崎潤一郎』(六興出版 一九七二・五・二五 73頁)
- (32) 例えば、橋本芳一郎は『谷崎潤一郎の文学』(桜楓社 一九六五・六・一〇 99頁)において『神童』は自伝的要素を多く含む、作者谷崎潤一郎の人間形成と自己発見との物語である」と評した。
- (33) 平石典子『煩悶青年と女学生の文学誌——『西洋』を読み替えて』(新曜社 二〇一二・二・一五 19頁)
- (34) 前掲、平石典子『煩悶青年と女学生の文学誌——『西洋』を読み替えて』16頁。
- (35) 久山康編『現代日本記録全集 16 青春の記録』(筑摩書房 一九六八・一一・二五 30頁)
- (36) 大町桂月『今の思想界』(「太陽」第九卷第八号 一九〇三・七・一 博文館 167頁)
- (37) 大塚素江『自殺と青年』(「太陽」第九卷第八号 一九〇三・七・一 博文館 207頁)
- (38) 黒岩周六『藤村操の死に就て』(「万朝報」一九〇三・六・一六〜一八)
- (39) 姉崎正治『現時青年の苦悶について』(「太陽」第九卷第九号 一九〇三・八・一 博文館 87頁)
- (40) 末木文美士『明治思想家論——近代日本の思想・再考』(「トランスビュー」二〇〇四・六・二〇 111頁)
- (41) 高松敏男・西尾幹二『ニーチェ全集別巻・日本人のニーチェ研究譜』(白水社 一九八二・九・二五)の統計によれば、ニーチェに関する論文は一九〇一年から一九〇三年の間に七〇本以上あったという。その主なものとして高山樗牛『美的生活を論ず』(「太陽」第七卷第九号、一九〇一・八)、長谷川天溪『美的生活とは何ぞや』(「読売新聞」一九〇一・八・一九〜二六)、坪内逍遙『馬骨人言』(「読売新聞」一九〇一・一〇・一二〜一一・七)、登張竹風『美的生活論とニイチェ』(「帝国文学」第七卷第九号、一九〇一・九)、長谷川天溪『ニーツエ主義と美的生活』(「読売新聞」一九〇一・一〇・二一、二八)、登張竹風『馬骨人言を難ず』(「帝国文学」第七卷第一二号、一九〇一・一二)、高山樗牛『猶多放言——ニイチェ自らの言を假りて』(「太平洋」第三卷第一号、一九〇二・一)、登張竹風『ニイチェの影響』(「文藝界」第一号、一九〇二・三)、中島徳藏『ニイチェ』

チェの説に就きて」（『丁酉倫理会倫理講訳集』第一〇輯、一九〇三・一）、内田魯庵「フリードリヒ・ニーチェ」（『学燈』第七年第二号、一九〇三・二）、藪の子「精神病学よりニーチェを評す——ニーチェは発狂者なり」（『読売新聞』日曜附録、一九〇三・四・一二）、などが挙げられる。

(42) 谷崎は「春風秋雨録」（前掲）に「ニイチェが超人の説をきゝては、其の大なる思想の前にひれ伏し」と書いている。

(43) 前掲、高松敏男・西尾幹二『ニーチェ全集別巻・日本人のニーチェ研究譜』518頁。

(44) 前掲、千葉俊二『谷崎潤一郎 狐とマゾヒズム』38頁。

(45) 真岡勢舟「青鬼堂に與ふる書——莊子とニーチェとを論ず」（『精神界』第二卷第二号 一九〇二・二・一〇 13頁）

(46) 注（44）に同じ。

(47) 『莊子』「斉物論」について、陳鼓応は『莊子今注今訳（上）』（中華書局 二〇一四・一 38頁）において莊子の理想境界に達するには「吾喪我」「除去成心」つまり自執を止揚し、自己中心を打ち破ることが必要であると指摘した。（原文…『齋物論』的主旨は肯定一切人と物的独特意義内容及其価値。（…）第一章劈頭提示「吾喪我」的境界、「喪我」即去除「成心」（成見）、揚棄我執、打破自我中心。）これに対してニーチェは自我や肉体を肯定する立場から既成道徳——キリスト教に反抗し、新しい価値体系を自ら創造しようとする。

第二章 「麒麟」論——漢籍から変奏した物語

「麒麟」は「刺青」発表の翌月、一九一〇年一二月発行の第二次「新思潮」第四号に掲載された。「刺青」とともに、翌年の「三田文学」誌上で「今日までに発表された氏の作品中殊に注目すべきもの」¹⁾の一つであると永井荷風に激賞され、谷崎は文学的な出発と同時に作家としての名声を得た。発表する前には、「満天下を聳動させる意気組みである」²⁾と予告された注目作でもあった。孔子を題材に書かれた作品で、背景にはさまざま漢籍があり、漢籍からのリフレーズがところどころに見られる。「麒麟」は谷崎がデビューして以来、中国古典と関わって書かれた本当の意味での第一作といえ、谷崎文学における漢籍受容を考察する上で重要な一作である。

作品の材源に関してはこれまでいくつかの論考が見られる。例えば大島真木「谷崎潤一郎の初期の創作方法——『麒麟』再論と『信西』の材源」(『東京女子大学論集』一九七三・三・一)や徳田進「谷崎文学と中国古典との交渉——『麒麟』を中心に」(『中国古典と日本近代文学との交渉 論集』芦書房 一九八八・四・一〇)など。大島真木は「麒麟」の内容と中国古典を比較し、『史記』『論語』『列子』『詩経』などとの関連を指摘した。前掲徳田論と銭暁波「谷崎潤一郎の思想性の在処について——『麒麟』に於ける漢学の受容を中心に」(『杏林大学研究報告 教養部門』、二〇〇二・二・二五)においても同様の指摘が見られる。しかし、これらの論考は、「麒麟」がタイトルにされた理由、そして物語全体の基調や結末などとの関連に言及していない。また文末の「吾未見好われいまだとくをこのむこと徳如好色者也」という孔子の慨嘆の背景に南子との戦い以外にもう一つの敗北があることや、南子像における古典との相違、小説のモチーフとの関連についても指摘していない。本章では先行研究を踏まえながら、作品に取り上げられた漢籍をさらに明らかにした上で、タイトルの意味、典拠と主題の関連性、物語全体の構図などを究明する。その手続きとして、「麒麟」という言葉の歴史的、文化的意味を分析し、物語及びその基調との関連、孔子の敗北の本質、道家及び儒家への谷崎の言及とそれぞれに対する態度に焦点を絞る。

第一節 中国古典における「麒麟」の記録と象徴性

谷崎の作品においては、動物、特に特別な文化的意味を持つ存在がタイトルに選ばれることが多い。例えば「鮫人」(「中央公論」一九二〇・一、三〇五、八〇一〇)「鶴唳」(「中央公論」一九二一・七)などである。往々にしてそれは常にある象徴的価値を持ち、物語及びその全体の基調と関わっている。したがってその意味を明らかにしない限り物語は十分に理解できない。「麒麟」も同様である。「麒麟」を理解するため、まず麒麟という言葉の意味を明らかにしなければならない。論述の便宜を図るためあらずじを述べておく。

——中国春秋時代の放浪の哲人・孔子は魯の国政に志を得ず、弟子たちとともに、やむなく伝道の旅に出る。衛の国に赴いた孔子は衛の靈公に徳治思想を伝授して、女色に耽溺した靈公を感化しようとする。ところが教化されたかにみえた靈公は夫人南子のもとに戻った。失望した孔子はまた放浪の旅を続ける。——
作品の創作動機について谷崎は次のように述べる。

私の青年時代の作に「麒麟」と云ふ小篇がありますが、あれは実は、内容よりも「麒麟」と云ふ標題の文字の方が最初に頭にありました。さうしてその文字から空想が生じ、あゝ云ふ物語が発展したのであります。

(「文章読本」「用語について」一九三四・一一)

創作における文字や言葉の重要性について谷崎は次のように書いている。

最初に使った一つの言葉が、思想の方向を定めたり、文体や文の調子を支配するに至ると云ふ結果が、屢々起るのであります。(…)多くの作家は、初めからさうはつきりしたプランを持つてゐるのではなく、書い

てゐるうちに、その使用した言葉や文字や語調を機縁として、作中の性格や、事象や、景物が、自然と形態を備へて来、やがて渾然たる物語の世界が成り立つやうになるのであります。

(前掲「文章読本」「用語について」)

物語の成立より「麒麟」という言葉が先に発想され、その後に物語の性格や出来事、さらにその展開を決めたという。

それでは「麒麟」にはどのような意味合いがあるか、まず古典の記録から見ておく。その形態については、劉向『説苑』(前漢・前一七年)「辨物篇」によれば「麋の胴体に牛の尾、蹄は円く、頭に一本角があり、角の先には肉が付いている姿をして、鳴けば声が音楽に合い、歩けば規矩に中る」という。³また『礼記』(前漢・前二〇二〜八年)「礼運第九」には「麟鳳龜龍、謂之四靈。」(麟鳳龜龍、之を四靈と謂ふ。)⁴、『孟子』(戦国・前四〇三〜前二二一年)「公孫丑上」には「麒麟之於走獸、鳳凰之於飛鳥」(麒麟の走獸に於ける、鳳凰の飛鳥に於ける)⁵、『管子』(同上)「封禪第五十」には「今鳳凰・麒麟不来、嘉穀不生、而蓬・蒿・藜・莠茂、鴟梟数至。」(今、鳳凰・麒麟は来らず、嘉穀は生ぜずして、蓬・蒿・藜・莠茂り、鴟梟数と至る。)⁶などの記録がある。その他、『荀子』(同上)「哀公篇」の「古之王者有務而拘領者矣、其政好生而惡殺焉。是以鳳在列樹、麟在郊野。(古の王者は務して拘領する者有り、其の政生を好みて殺を惡む。是を以て鳳は列樹に在り、麟は郊野に在る。)⁷『呂氏春秋』(前二三九年ごろ)「宥同篇」の「刳獸食胎、則麒麟不来」(獸を刳き胎を食えば、則ち麒麟来たらず)⁸との記録によると、王者が酷政を施かなければ、その世には麒麟が出現する、とある。

つまり麒麟は生物中で最も尊敬されるべき高貴な存在であり、純粋な善を体現する「瑞獸」「仁獸」で、悪と穢れの対極に位置している。太平の到来を予告し、社会の安定や豊穡の徴と見なされ、さらに平和を好み、皇帝が良い政治を行うと現れる神聖なる動物である。ところが、文献の中で見る麒麟の出現はすべてが吉兆ではなく、

乱世に現れた記録もある。そのほとんどは孔子の誕生と逝去に結びついたものである。麒麟と孔子の誕生に関する伝説は古くからあり、東晋（三一七～四二〇年）の王嘉『拾遺記』⁹には次の記述がある。

周靈王立二十一年、孔子生於魯襄公之世。夜有二蒼龍自天而下、來附徵在之房、因夢而生夫子。有二神女、擊香露於空中而來、以沐浴徵在。天帝下奏鈞天之樂、列以顔氏之房。空中有声、言天感生聖子、故降以和樂笙鏞之音、異於俗世也。又有五老列於徵在之庭、則五星之精也。夫子未生時、有麟吐玉書於闕里人家、文云、水精之子、糸衰周而素王。故二龍繞室、五星降庭。¹⁰

（周靈王立の二一年、孔子は魯の襄公の世に生まれけり。夜に二の蒼龍天より下り、徵在の房に來附きたり。夢に因りて夫子を生みたる。二の神女有り、空中に香露を撃げて來たり、以て徵在にて沐浴す。天帝、鈞天の樂〔引用者注——天の音楽〕を奏で、顔氏の房に列せしむ。空中声あり、言うことは天、聖子生まると感ずる、故に和樂笙鏞の音を以て降し、俗世に異なるなり。又、五の老人徵在の庭に列すこと、則ち五星の精なり。夫子未だ生まるる時、闕里の人家に玉書を吐きたる麟有り。文に云はく、「水精の子、衰周而して素王に系る」と。故に二の龍室を繞り、五星庭に降りたる。）

これは孔子の誕生にまつわる伝説である。「麒麟」におけるこの部分の説明は次のようである。

其の男の生れた時、魯の国には麒麟が現れ、天には和樂の音が聞えて、神女が天降つたと云ふ。

麒麟と孔子にまつわる伝説がもう一つある。孔子と麒麟との出会いである。これは史書『春秋』（春秋・前七七〇

（前四〇三年）、『左伝』（同上）、『公羊伝』（戦国・前四〇三〜前二二一年）、『史記』、『孔子家語』（春秋・前七七〇〜前四〇三年）などに記されているが、谷崎が読んだと確定できるのは『史記』のみである。『史記』の記録は次のようである。

『史記』「孔子世家第十七」

魯哀公十四年春、狩大野。叔孫氏車子鉏商獲獸。以為不詳。仲尼視之曰、麟也。取之。曰、河不出閫、雒不出書。吾已矣夫。顔淵死。孔子曰、天喪予。及西狩見麟、曰、吾道窮矣。

（魯の哀公十四年春、大野に狩す。叔孫氏の車子鉏商、獸を獲たり。以て不詳と為す。仲尼之を視て曰く、「麟なり」と。之を取る。曰く、「河は閫を出さず、雒は書を出さず。吾已んぬるかな」と。顔淵死す。孔子曰く、「天、予を喪ぼす」と。西の狩に麟を見るに及びて、曰く、「吾が道窮せり」と。）⁽¹⁾

またこの記録に基づいた歌「獲麟歌」は、孔子が詠んだという。

唐虞世兮麟鳳遊、今非其時來何求、麟兮麟兮我心憂

（唐虞の世に麟鳳が遊びけむ。今其の時にあらず何を求めて來たるや、麟よ麟よ我が心憂う。）⁽²⁾

明・馮夢龍（一五七四〜一六四六年）は著書『東周列国志』においてこの伝説を小説化した。殺された麒麟を見

た孔子は、琴を弾きながら悲しくこの歌を歌った。孔子は麒麟が現れるべきではないのに出現したことには不祥を感じ、嘆いた。しかも生涯唯一であるはずの麒麟との対面は、生きた麒麟ではなくその死体であった。麒麟の無残な死に様と対面した孔子は自らの不遇の末路や大業の挫折を予感する。弟子顔淵の死も相まって、伝説には一種の悲愴感が生じている。史書はこれらの要素を重ね合わせることで孔子と麒麟にまつわる伝説に独特の悲劇的階調を生み出す。このような背景を持って生み出された孔子の物語「麒麟」は、最初からその悲劇的な基調が定められていたのである。したがって標題とした麒麟は単なる聖人〓孔子の存在を讃える存在であるのみならず、さらにその反面――聖人〓孔子の敗北の運命を予告する。

第二節 『史記』に見る孔子の二回の敗北

さて、孔子の敗北はどのように書かれ、またその本質は何を意味するだろうか。孔子は儒家の祖とされており、堯、舜、文王、武王、周公らを尊崇し、仁を思想の根底として、孝悌と忠恕とを以て理想を達成する。五十一歳で魯国の官吏になるが、五十五歳の時、国王の政策に失望し、辞任した。その後衛国に入った孔子は衛の靈公に自分の徳性思想を宣伝しようと試みたが、靈公の夫人南子の存在により再び挫折した。「麒麟」はまさにこの史実を素材に書かれた、孔子の伝道の体験を中核とした作品であるが、その主題について吉田精一は次のように述べる。

この小説は孔子の生涯、もしくは孔子その人を書くことを主題としたものではない。主人公は孔子でも、主題は精神と肉体、道徳と官能という、人間内部の二つの力の争いであり、後者が前者を圧倒するという事実である。この小説における孔子は前者のシンボルであり、南子は後者を具現したものである。¹³

確かにこの小説の主題は「精神と肉体、道徳と官能」の対立だが、主題を表現するにあたり、孔子の敗北が二度に亘って設定されたことは重要である。一度目の失敗は詳しくは書かれていないが、孔子が魯を離れた要因を知るならば、その事実は容易に分かるだろう。冒頭で孔子一行が魯国を離れた際の事情は次のように書かれていた。

或る日、いよ／＼一行が、魯の国境までやって来ると、誰も彼も名残惜しさうに、故郷の方を振り顧つたが、通つて来た路は龜山の蔭にかくれて見えなかつた。すると孔子は琴を執つて、われ魯を望まんと欲すれば、／＼龜山之を蔽ひたり。／＼手に斧柯なし、／＼龜山を奈何にせばや。／＼かう云つて、さびた、皺唄れた声であつた。

この歌は後漢・蔡邕（一三三―一九二年）の『琴操』によれば、「龜山操」⁽¹⁴⁾といい、孔子が魯の龜山で作つたという。魯を離れようとする孔子は母国の政治に対する無力さと苦悶をこの歌を通じて表した。ここで孔子は魯の政敵・季桓子のことを龜山と譬えて、季氏の独断専行は、まるで龜山が魯を蔽っているように、魯の将来を見えなくさせていると言っている。だが政治を改善しようとする自分は手に（斧柯）（権力の譬え）がなく、どうすることもできないと嘆いた。しかしここには、孔子がどのような契機で魯を去ったかは具体的に書かれていない。その理由は、『論語』「微子第十八」と『史記』「孔子世家第十七」に記されている。

『論語』「微子第十八」

齊人婦女樂。季桓子受之、三日不朝。孔子行。

（齊人女樂を帰る。季桓子之を受けて、三日朝せず。孔子行る。）⁽¹⁵⁾

『史記』「孔子世家第十七」

齊人聞而懼、曰、孔子為政、必霸。霸則吾地近焉。我之為先并矣。蓋致地焉。／黎鉏曰、請先嘗沮之。沮之而不可、則致地。庸遲乎。／於是、選齊國中女子好者八十人、皆衣文衣而舞康樂、文馬三十駟、遺魯君。陳女樂・文馬於魯城南高門外。季桓子微服往觀再三、將受。乃語魯君為周道游、往觀終日、怠於政事。子路曰、夫子可以行矣。／孔子曰、魯今且郊。如致膳乎大夫、則吾猶可以止。／桓子卒受齊女樂、三日不聽政。郊、又不致膳俎於大夫。孔子遂行、宿乎屯。／而師己送曰、夫子則非罪。孔子曰、吾歌、可夫。／歌曰、彼婦之口、可以出走、彼婦之謁、可以死敗。(蓋)優哉游哉。維以卒歲。

(齊人聞きて懼れ、曰く、「孔子、政を為さば、必ず霸たらん。霸たらば則ち吾が地は焉に近し。我は之れ先づ并せられん。蓋ぞ地を致さざる」と。／黎鉏曰く、「請ふ先づ嘗みに之を沮まん。之を沮みて不可ならば、則ち地を致さん。庸ぞ遅からんや」と。／是に於て、齊の国中の女子の好き者八十人を選び、皆文衣を衣せて康樂を舞はせ、文馬三十駟、魯君に遺る。女樂・文馬を魯の城南の高門の外に陳ぬ。季桓子微服して往きて観ること再三、將に受けんとす。乃ち魯君に語げ、周道の游を為し、往きて観ること終日、政事に怠る。子路曰く、「夫子、以て行る可し」と。／孔子曰く、「魯今且に郊せんとす。如し膳を大夫に致さば、則ち吾猶以て止まる可し」と。／桓子卒に齊の女樂を受け、三日、政を聴かず。郊して又膳俎を大夫に致さず。孔子遂に行り、屯に宿す。／而して師己送りて曰く、「夫子は則ち罪に非ず」と。孔子曰く、「吾歌はん。可ならんか」と。／歌ひて曰く、「彼の婦の口、以て出で走る可し。彼の婦の謁、以て死し敗る可し。(蓋ぞ)優なるかな游なるかな、維に以て歳を卒へざる」と。)

魯は孔子を用いて国がよく治まり盛大になってきたので、隣国の齊が恐れを抱き、それを妨げようと、美しい八十人の女楽団を贈った。大夫の季桓子は喜び受けて、酒樂に耽り、魯の定公とともに朝政を廢すること三日に及んだ。魯の君主が徳性より美色の方に耽溺すると悟った孔子は止むを得ず魯を去って、弟子らと再び諸国を歴遊し自分の説に賛同する国を探し回る。これは作中で示唆された孔子の初めての敗北であり、女色との一度目の戦いでもある。

その後、魯を離れた孔子は衛に入って靈公と南子と面会したとあるが、『史記』「孔子世家第十七」によれば、孔子は魯を離れて一旦衛に行ったが、すぐそこを去って陳に赴いた。陳へ行く途中に匡というところで悪人の陽虎と間違えられて匡の人々に取り囲まれた。逃げ出した孔子は再び衛に戻ったという。南子と面会したのは実際には二度目の入衛の際のことである。しかし「麒麟」は史書に縛られることなく、魯を去った孔子が直接衛に入ったと設定した。これによって物語の緊張感が高められるのみならず、道徳と官能との対立という物語の主題も一層際立つ。

さて、衛に來た孔子はどんな境遇に置かれたか、これは「麒麟」の最も重要な部分である。その主なストーリーは『論語』と『史記』の「子見南子」に取材している。孔子が女性と面会した記録は史書では極めて少ない。『論語』「陽貨第十七」における孔子の言葉「子曰、唯女子与小人、為難養也。近之則不孫。遠之則怨。」（子曰く、唯女子と小人とは、養ひ難しと為す。之を近づぐれば則ち不遜なり。之を遠ざぐれば則ち怨むと）⁽¹⁷⁾から、彼の女性に対する態度が窺われる。

さて、「子見南子」ではどのように記録されたか。『論語』「雍也第六」と『史記』「孔子世家第十七」には次のように書かれている。

『論語』「雍也第六」

子見南子。子路不説。夫子矢之曰、予所否者、天厭之。天厭之。

(子、南子を見る。子路説はず。夫子之に矢いて曰く、予が否なる所は、天之を厭たん。天之を厭たん。)⁽¹⁸⁾

『史記』「孔子世家第十七」

靈公夫人有南子者。使人謂孔子曰、四方之君子不辱欲與寡君為兄弟者、必見寡小君。寡小君願見。孔子辭謝、不得已而見之。夫人在絺帷中。孔子入門、北面稽首。夫人自帷中再拜。環佩玉声璆然。孔子曰、吾郷為弗見。見之礼答焉。子路不説。孔子矢之曰、予所不者、天厭之天厭之。

(靈公の夫人に、南子という者有り。人をして孔子に謂はしめて曰く、「四方の君子、寡君と兄弟と為らんと欲するを辱とせざる者は、必ず寡小君に見ゆ。寡小君も見んことを願ふ」と。孔子辭謝すれども、已むを得ずして之に見ゆ。夫人、絺帷の中に在り。孔子、門に入り、北面して稽首す。夫人、帷中より再拜す。環佩の玉聲璆然たり。孔子曰く、「吾、郷には見えざらんことを為せり。之に見えて礼答せり」と。子路説はず。孔子之を矢て曰く、「予、不なる所の者あらば、天之を厭たん、天之を厭たん」と。)⁽¹⁹⁾

南子に関する記録は極めて簡潔で、君主を誘惑する妖艶な様子は窺えない。彼女の詳しい記録は『史記』「衛康叔世家第七」と劉向(前漢・前七七く前七)『列女伝』「孽嬖伝」に見られる。

『史記』「衛康叔世家第七」

三十九年、太子蒯聵與靈公夫人南子有惡。欲殺南子。蒯聵與其徒戲陽遯謀、朝使殺夫人。戲陽後悔、不果。蒯聵數目之。夫人覺之、懼呼曰、太子欲殺我。靈公怒。太子蒯聵奔宋。

(三十九年、太子蒯聵、靈公の夫人、南子と、悪しき有り。南子を殺さんと欲す。蒯聵、その徒戲陽遯と謀り、朝にして夫人を殺さしめんとす。戲陽後に悔い、果さず。蒯聵、数々之を目す。夫人之を覺り、懼れ呼びて曰く、太子、我を殺さんと欲す、と。靈公怒る。太子蒯聵、宋に奔る。⁽²⁰⁾)

『列女伝』『孽嬖伝』

衛二乱女者、南子及衛伯姫也。南子者、宋女、衛靈公之夫人、通於宋子朝。太子蒯聵知而惡之。南子讒太子於靈公曰、「太子欲殺我」。靈公大怒蒯聵、蒯聵奔宋。(…)頌曰、「南子惑淫、宋朝是親。讒彼蒯聵、使之出奔」。

(衛の二乱女なる者は、南子及び衛の伯姫なり。南子なる者は、宋の女、衛の靈公の夫人にして、宋の子朝と通ず。太子蒯聵、知りて之を惡む。南子、太子を靈公に讒して曰く、「太子、我を殺さんと欲す」と。靈公大いに蒯聵に怒る。蒯聵、宋に奔る。(…)頌に曰く、「南子惑淫し、宋朝にぞ是れ親む。彼の蒯聵を讒して、之をして出奔せしむ。」)⁽²¹⁾

南子は春秋時代に実在した人物で、宋から衛に嫁いで来たが、宋の公子宋朝と通じるなど、淫行の噂の絶えない妃であった。彼女の不品行は国の内外で話題になっていたが、これを知った靈公は彼女を罪に問わないのみならず、さらに寵愛し、その放蕩なる行為を放任した。このため太子の蒯聵は南子と折り合いが悪く、彼女を殺そうとしたが、失敗して父の靈公に知られ宋に出奔した。

これらの文献には南子と孔子との面会の詳細について書かれておらず、「麒麟」における描写はフィクションの

部分が多い。特に人物造型において、孔子はほぼ経書や史書で受ける印象通りの人物として描かれている一方で、南子には多くの想像的要素が注入されている。作中で彼女は淫蕩奔放な妖婦、徹底した悪女として描かれる。孔子はなぜ不品行な南子夫人との面会を受けたのか、これについて後世の儒家は注釈書で、聖人としての孔子の存在を守るため、孔子の行為はあくまで正当であると解釈する。例えば、朱熹（宋・一一三〇〜一二〇〇）は『四書集注』で「聖人道大徳全、無可不可。其見悪人、固謂在我有可見之礼、則彼之不善、我何與焉」（聖人は道大に徳全く、可不可無し。其の悪人を見るも、固より謂へらく、我に在りて見ゆ可きの礼有り。則ち彼の不善は我何ぞ與らんと。）⁽²²⁾ と言い、孔子の言動が礼に適うと主張する。しかし、清代の経学家毛奇齡（清・一六二三〜一七一六）は著書『四書改錯』に「古者仕于其国有見其少君之礼、古併無此礼編考諸礼文及漢晋唐諸儒者亦併無此説惊怪甚久」⁽²³⁾（古より其の国に仕えて其の小君に見る礼あらず、諸礼を編考して、文及び漢晋唐諸儒礼を言う物に、亦此の説無き、甚だ久しく惊怪したり）と書いて、一国に仕えるにはその小君（引用者注——国君の妃など）に面会する礼があるという記述はどこにもないと前人の解釈の誤りを指摘した。なぜ南子が自ら孔子との面会を積極的に求めたか、その理由は『史記』「孔子世家第十七」の次の内容から窺われるだろう。

居衛月余、靈公與夫人同車、宦者雍渠參乘出。使孔子為次乘、招搖市過之。

（衛に居ること月余、靈公、夫人と車を同じうし、宦者雍渠參乘して出づ。孔子をして次乗と為らしめ、市を招遙して之を過ぐ。）⁽²⁴⁾

南子は孔子との会見を求めたのみならず、孔子を後車に乗せて、市中を遊び廻った。南子が奔放な王妃であることは周知の事実であるため、世間の矚蹙を買った彼女は徳性で名高い孔子との接触を世間に見せびらかしてその

汚名を返上しようと考えたのではなからうか。この意味で南子が徳性に対してまだ敬慕或いは畏怖の念を持っていることは明らかである。これと異なり、「麒麟」において南子は徹底的に官能の具現者として描かれ、徳性を利用するのではなく、公然と徳性に挑戦すると設定される。彼女は夫の霊公に対して、

「あゝ、あの孔丘と云ふ男は、何時の間にかあなたを妾の手から奪つて了つた。妾が昔からあなたを愛して居なかつたのに不思議はない。しかし、あなたが妾を愛さぬと云ふ法はありません。(…)妾は総べての男の魂を奪ふ術を得て居ます。妾はやがて彼の孔丘と云ふ聖人をも、妾の捕虜にして見せませう。」／と、夫人は誇りに微笑みながら、公を流眊に見て、衣摺れの音荒く霊台を去つた。

と言ひ、孔子Ⅱ徳性に正面から宣戦した。

南子夫人と孔子との対立はあくまで霊公を間に置いていることに注意したい。善と悪の対置、精神と肉体のせめぎ合いはすべて霊公の態度の変化によつて表される。一時は聖人孔子の教えに感化の涙を流し、南子を払い除けたが、最終的には南子の誘惑により平静を失つた。孔子の「私の欲に打ち克ち給へ」という誠を守つてきた霊公は南子のこの宣言を聞いて「其の日まで平静を保つて居た」「心には、既に二つの力が相闘いで居た」という。結局、霊公は南子の魔性の肉体美に屈して再びその虜になつた。

「私はお前を憎むで居る。お前は恐ろしい女だ。お前は私を亡ぼす悪魔だ。しかし私はどうしても、お前から離れる事が出来ない。」／と、霊公の声はふるへて居た。夫人の眼は悪の誇に輝いて居た。

一方、孔子との対面において、南子は香や美酒で誘惑したが、その挑発に対して孔子の「顔の曇は深くな」り、

「眉の鬢みは濃くな」り、「顔の曇は晴れなかつた」。それでも南子は勝利を確信する女王の如く、終始「にこやかな顔」で香や美酒を勧めた。ついに孔子は徳性思想を慕う靈公の誠意がなくなつたことを悟つて衛を去ることを決めた。去る時、自分が同じ挫折を繰り返したことを思い、「吾未見好徳如好色者也」と嘆いたのだろう。これは冒頭に書かれた彼の遭遇と呼応して挫折の本質を示している。

第三節 道家への言及と小説の構図

前述したように「麒麟」は儒家の聖人孔子の徳性思想の敗北を題材にした作品であり、谷崎の儒家思想に対する否定的な態度が窺われる。南子のほかに接輿、林類といった道家を代表する人物も設定され、道家との比較によつて一層その態度が際立てられている。

冒頭に「鳳兮。鳳兮。何徳之衰。往者不可諫。來者猶可追。已而。已而。」（鳳よ鳳よ、如何ぞ徳の衰えたる。往く者は諫む可からず、來る者は猶ほ追ふ可し。已みなん已みなん）⁽²⁵⁾という歌が引用されるが、これは孔子の楚滞在時に楚の接輿が歌つたもので、孔子が官吏に熱中することを嘲笑したものである。この逸話は『論語』『微子第十八』に記録され、のちに「接輿而歌」として広く知られた。接輿は隱者で、皇甫謐（二一五〜二八二年）『高士伝』によれば、本名は陸通⁽²⁶⁾という。道家の經典『莊子』（戦国・前四〇三〜前二二一年）に理想の人物として描かれた。李白の詩「廬山謠寄盧侍御虛舟」（廬山の謠盧侍御虚舟に寄す）にも「我本楚狂人 鳳歌笑孔丘」（私はもと楚の狂人 鳳歌孔子を笑ふ）⁽²⁷⁾の名句がある。「接輿而歌」は、政治は常に腐敗しているため隱居すべきという譬えである。接輿その人と思想については『莊子』『逍遙遊』、『莊子』『人間事』、『莊子』『応帝王』の記述が詳しい。そのうち孔子及び儒家に関して次の記録が見られる。

孔子適楚、楚狂接輿遊其門曰、鳳兮鳳兮、何如德之衰也。來世不可待、往世不可追也。天下有道、聖人成焉、天下無道、聖人生焉。方今之時、僅免刑焉。福輕乎羽、莫之知載、禍重乎地、莫之知避。已乎已乎、臨人以德。殆乎殆乎、畫地而趨。迷陽迷陽、無傷吾行。吾行却曲、無傷吾足。

（孔子楚に適く。楚の狂接輿其の門に遊びて曰わく、鳳や鳳や、何如ぞ徳の衰えたる。來世は待つ可からず。往世は追う可からず。天下に道有れば、聖人成し、天下に道無ければ、聖人生く。今の時に方りては、僅かに刑を免れんのみ。福は羽より軽きも、之を載するを知る莫く、禍は地より重きも、之を避くるを知る莫し。已まん已まん、人に臨むに徳を以てするは。殆し殆し、地を畫して趨るは。迷陽よ迷陽よ、吾が行くを傷る無かれ。吾行くに却曲すれば、吾が足を傷る無かれ。）⁽²⁸⁾

『莊子』「応帝王」

肩吾見狂接輿、狂接輿曰、日中始何以語女、肩吾曰、告我、君人者、以己出經式儀度、人孰敢不聽而化諸。接輿曰、是欺徳也。其於治天下也、猶涉海鑿河、而使蚊負山也。

（肩吾、狂接輿を見る。狂接輿曰く、日中始、何を以て女に語ぐ、と。肩吾曰く、我に告ぐ、人に君たる者、己を以て經式義度を出さば、人孰か敢て聴きて諸に化せざらんや、と。接輿曰く、是れ欺徳なり。其の天下を治むるに於けるや、猶ほ海を渉り河を鑿するがごときに、蚊をして山を負わしむ。）⁽²⁹⁾

接輿は、一国の君主が自ら規範や法度を立てて天下を治めることはとてもできないと悟っており、政治に関わるよりむしろ避けたほうが賢明であると主張する。これは道家のいう「知其不可奈何而安之若命」（『莊子』「人間

世) (出来ない)と知って命のままに従う)の思想ではなからうか。ところが、無理に行動せず常に自然な成り行きに任せるといふ考え方に反して、儒家は常に現実の人間社会に強い関心を持ち、(知其不可而為之) (出来ない)と知りながら敢えて行動する)の思想を強調する。南子夫人の淫行を知りながらも敢えて面会の要求を受けた孔子はまさにこの思想の実践者だろう。早い時期から『莊子』などの道家經典を読んだ谷崎が接輿のエピソードを引用したのは、恐らく儒家のこの思想に対する反発あるいは風刺のためではないか。

作中にもう一つ道家関係の逸話が引用されている。「畦路に落穂を拾ひながら」「屈託のない声」で歌う老人林類のエピソードである。この話は『淮南子』「齊俗訓」(前漢・前二〇二〜八年)と『列子』「天瑞」(同上)に見られる。谷崎が『淮南子』「齊俗訓」を読んだか確定出来ないが、『列子』「天瑞」は、「麒麟」の六年前に発表された「文藝と道徳主義」(「学友会雑誌」一九〇四・五)で林類についての章を全文を引用したことから読んだことが分かる。

『列子』「天瑞第一第八章」

林類年且百歳、底春被裘、拾遺穗於故畦、並歌並進。孔子適衛、望之於野、顧謂弟子曰、彼叟可与言者。試往訊之。子貢請行、逆之壟端、面之而嘆曰、先生曾不悔乎、而行歌拾穗。林類行不留、歌不輟。子貢叩之不已。乃仰而応曰、吾何悔邪。子貢曰、先生少不勤行、長不競時、老無妻子、死期将至。亦有何樂、而拾穗行歌乎。林類笑曰、吾之所以為樂、人皆有之。而反以為憂。少不勤行、長不競時。故能壽若此。老無妻子、死期将至。故樂若此。子貢曰、壽者人之情、死者人之惡。子以死為樂何也。林類曰、死之与生、一往一反。故死於是者、安知不生於彼。故吾知其不相若矣。吾又安知當當而求生非惑乎。亦又安知吾今之死、不愈昔之生乎。子貢聞之、不喻其意。還以告夫子。夫子曰、吾知其可与言、果然。然彼得之而不尽者也。

（林類年且に百歳ならんとす。春に底りて裘を被り、遺穂を故畦に拾い、並び歌い並び進む。孔子衛に適き、之を野に望み、顧みて弟子に謂つて曰く、彼の叟は与に言う可き者なり。試みに往いて之に訊え、と。子貢請い行き、之を壟端に逆え、之に面して歎じて曰く、先生曾て悔いざるか、而して行々歌いて穂を拾う、と。林類行いて留まらず、歌つて輟めず。子貢之を叩いて已まず。乃ち仰いで応えて曰く、吾何をか悔いん、と。子貢曰く、先生少くしては行を勤めず、長じては時を競はず、老いては妻子無く、死期將に至らんとす。亦何の楽しみ有りて、穂を拾い行々歌うや、と。林類笑いて曰く、吾の楽しみを為す所以は、人皆之れ有り。而るに反りて以て憂と為す。少くして行を勤めず、長じて時を競はず。故に能く寿なること此の若し。老いて妻子無く、死期に將に至らんとす。故に楽しむこと此の若し、と。子貢曰く、寿は人の情にして、死は人の悪むところ。子死を以て楽しみと為すは何ぞや、と。林類曰く、死と生とは、一往一反なり。故に是に死とせらるる者、安くんぞ彼に生とせられざるを知らん。故に吾其の相若かざるを知るなり。吾又安くんぞ営として生を求むるの惑に非ざるを知らん。亦又安くんぞ吾の今死するは、昔の生けるに愈らざるを知らん、と。子貢之を聞いて、其の意を喩らず。還りて以て夫子に告ぐ。夫子曰く、吾其の与に言う可きを知れるに、果たして然り。然れども彼は之を得て尽くさざる者なり、と。）

「麒麟」における該当部分は恐らく『列子』「天瑞」に取材したものでらう。林類は生死を超越し、一切の束縛から自由に、無為自然に生きることを理想とする。生死を超越し、何者にも捉われない絶対的自由を体得した林類の言葉を聞いた孔子だが、「なか／＼話せる老人であるが、然し其れはまだ道を得て、至り尽さぬ者と見える」といつて自ら異なる立場を表明する。

谷崎はなぜ道家と儒家を対立するように設定したか、その理由は「文藝と道德主義」（前掲）を読めば分かるだろう。

而も我之を雑誌精神界の真岡勢舟氏にきく、曰く「莊子は東洋のニーチェにして、ニーチェは西洋の莊子なり」と。旨い哉言や、彼が真人の理想を以て、此が超人に比し、その逍遙遊を以て、このザラトフストラに比す、夫れ或は大に当らざるあらむ。然れども冷嘲熱罵の筆を逞しうして縦横に社会を詬り、狭頑なる道徳主義に對して大駁撃を試みし点に於て、吾人が磊塊の不平を遣るの点に於ては即ち一なり。古来道徳主義に大なる反抗を試みしもの、印度ウパニシャツドの哲学時代にありては、即ち順世学派あり。希臘にありてはソクラテス出で、概念論を主張せし当時、既にソフィストの学徒あり。支那にありては、老子あり、列子あり、莊子あり、韓非子あり、楊墨の徒ありて儒教の道徳主義に反對せり。彼等の道徳主義を攻撃するや、蓋二種の方面より来る、一は芸術主義を主張する詩人、文学者流に起りて、彼のミルトンがパラダイスロスのサタンの如き、バイロンがカインのルシファアの如き、個人意志の絶對的自由を渴仰し、獸欲的本能を切望するより来る、ニーチェの如き、ゴルキイの如きバイロンの如きは之に属すべからずや、一は即ち大乘仏教、ギリシヤ古代の哲学の一派の如き、無宇宙論、虚無主義、迷妄論を主張して、實在を疑ひ認識を疑ひ、高く自道徳以上に超絶せんとする哲学觀より来る、老子の如き、列子の如き、莊子の如き、達摩の如きは之に属すべきが如し。

谷崎は道徳主義に對してあくまで否定的な態度を取り、それに反抗する思想としてインドの順世学派、ギリシヤのソフィストの学徒、中国の老子、列子、莊子などを挙げた。さらに真岡勢舟の言葉「莊子は東洋のニーチェにして、ニーチェは西洋の莊子なり」を借りて、ニーチェを個人主義の代表者とし、莊子が東洋のニーチェのような存在であると強調した。ところが、道徳主義との對立において、ニーチェと莊子はまた異なる方面に属すという。ニーチェの「個人意志の絶對的自由」、「獸欲的本能」の重視に對して、莊子ら道家は生死を同一視して、無

宇宙論、虚無主義、迷妄論を主張する。この三者の位置関係は「麒麟」でも同じ構図を採る。孔子と対立する側には南子のほか、接輿、林類ら道家を代表する人物もいる。南子は強い意志の持ち主で、肉体の解放、官能の享楽を追求し、まさにニーチェが強調する「絶対的自由」、「獣欲的本能」の体现者である。これに対して老荘思想を体现する接輿と林類は生死をも超越し、実在を疑う虚無主義を強調する。千葉俊二は次のように述べる。

この冒頭部は、いわば座標の設定のようなもので、もはや百歳にもなる林類は、道德主義など一切の外的束縛から自由なばかりか、その生のエネルギーにおいても限りなく零点に近い存在だといえる。つまり、孔子は道德主義の座標軸が置かれるとするならば、南子夫人に理性の支配と抑圧から解放された無際限な欲望そのものともいえる生のエネルギーの座標軸が設定され、このふたつの座標軸の交わるところに林類が、そしてその函数として衛の靈公が存在するのだといえよう。孔子と南子夫人は、善と悪、男と女、精神と肉体、禁欲と享楽といった二項対立的な関係にあるが、生死を同一視してともに幻化の人齣と見做す林類の視点からは、南子夫人との間にそうした対立関係はなく、両者の差異はもっぱら生のエネルギーの量的な多寡ということになる。⁽²³⁾

接輿、林類と南子とは儒家の道德への反発において、また生命の自由への追求において共通する。ところが俗世の掟に縛られずに生命の本能に自然な欲望を無際限に追求する南子と違って、道家は生死の区別を超越した上で、生命の最も自然な状態に戻ることを理想とする。一方は積極的に生のエネルギーを発揮するが、一方は消極的に生の自然状態に順応する。孔子は道德主義を以て生のエネルギーを抑圧するとするなら、道家は俗世の束縛から逃れて生の自然状態を求め、さらに南子は、生を抑圧し歪めるあらゆる価値の体系から逃れ、積極的に生のエネルギーを発揮すると言ってもよい。儒家と道家に対する谷崎の態度は、宗教ではなく、それぞれの生に対する態

度を軸に生じたものだろう。千葉（俊二）が指摘したように、「谷崎は真岡勢舟經由のニイチエから『一切の宗教、一切の哲学、一切の道徳、一切の法律、一切の教育』より解脱しなければならぬことを学んだに違いない」⁽³³⁾。谷崎にとつての儒教と道教は宗教の領域を超えて、追求する文学像との相性により共鳴したり、反発したりするのである。

「麒麟」は、中国古典文学の多読の結果、谷崎が得た歴大な知識を巧みに組み合わせた作品である。これまで麒麟Ⅱ聖人Ⅱ孔子と認識されてきたが、孔子と麒麟に関連する記録を調査すると、そこには一種の悲劇的諧調を読み取ることができた。標題とした「麒麟」は単に聖人Ⅱ孔子を象徴するのみならず、孔子の挫折を示唆し、物語の結末を予告していた。また作中における孔子の敗北は南子との戦いに失敗したことだと考えられるが、冒頭に書かれた、孔子が魯を離れた理由を調べると、そこはに魯定公が女色に耽溺した史実が隠されていた。したがって、作中で孔子の敗北は二回も設定されており、いずれにおいても女色に敗れていたことがわかった。

『史記』『論語』に取材したにも拘らず、「麒麟」は道徳と官能、精神と肉体の対立を主題に設定した。しかもこの対立は孔子と南子の二項対立ではなく、儒家の道徳主義への反発を示す人物として、道家の代表者——接輿、林類が登場し、それぞれの生に対する態度の違いによって作中に一つの「座標軸」（前掲千葉論）を構成していた。肉体的、官能性の具現者Ⅱ南子の最終的な勝利を以て物語が終わるのは、「刺青」以来の主題——「すべて美しいものは強者であり、醜いものは弱者であつた」——である。「美」への讃仰のもう一つの展開だろう。これはこの時期における谷崎文学の主旋律で、中国古典に取材し舞台を中国に設定しても根本的な思想は変わらない。七年後の「人魚の嘆き」（「中央公論」一九一七・一）にも類似した作風が見られる。

注

(1) 永井荷風「谷崎潤一郎氏の作品」（「三田文学」第二卷第一号 一九一一・一一・一

148頁）

- (2) 「新思潮」第二第三号(一九一〇・一一・一 125頁)〈消息〉欄に「谷崎は孔子を材料とした戯曲を書いて満天下を聳動させる意気組みである」との予告が見られる。
- (3) 劉向『説苑』「辨物篇」原文「故麒麟麋身牛尾、頂一角含仁懷義、音中律呂行步中規折旋中矩」。日本語訳は川端夕「中国資料に見られる『麒麟』の一考察」(『東洋史訪』第一七号 二〇一一・三 3頁)を参考にした。
- (4) 竹内照夫編訳『新釈漢文大系 27 礼記(上)』(明治書院 一九七一・四・二五 345頁)
- (5) 内野熊一郎『新釈漢文大系 4 孟子』(明治書院 一九六二・六・一五 102頁)
- (6) 遠藤哲夫編訳『新釈漢文大系 43 管子(中)』(明治書院 一九九一・五・一〇 844頁)
- (7) 藤井専英編訳『新釈漢文大系 6 荀子(下)』(明治書院 一九六九・六・三〇 874頁)
- (8) 南山春樹編訳『呂氏春秋(中)』(明治書院 一九九七・五・二五 336頁)
- (9) 中国の志怪小説集。上古より東晋に及ぶ志怪稗史の類を収めている。
- (10) 王嘉『拾遺記』(上海古籍出版社 二〇一二・八 25頁)
- (11) 吉田賢抗編訳『新釈漢文大系 87 史記(七)』(明治書院 一九八二・二・一〇 877頁)
- (12) 遼欽立編『先秦漢魏晉南北朝詩(上) 先秦詩 卷二』(中華書局 一九八三・九 26頁)
- (13) 吉田精一『近代文学鑑賞講座 九 谷崎潤一郎』(角川書店 一九五九・一〇・五 61頁)
- (14) 「龜山操」の原文は「子欲望魯兮龜山蔽之。手無斧柯。奈龜山何」。遼欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩(上) 漢詩卷一一(中華書局 一九八三・九 301頁)
- (15) 吉田賢抗編訳『新釈漢文大系 1 論語』(明治書院 一九六七・一・二〇 400頁)
- (16) 前掲、吉田賢抗編訳『新釈漢文大系 87 史記(七)』 825頁、827頁。
- (17) 前掲、吉田賢抗編訳『新釈漢文大系 1 論語』 395頁。

- (18) 前掲、吉田賢抗編訳『新釈漢文大系 1 論語』143頁。
- (19) 前掲、吉田賢抗編訳『新釈漢文大系 87 史記(七)』830頁～831頁。
- (20) 吉田賢抗編訳『新釈漢文大系 85 史記(五)』(明治書院 一九七七・九・五 248頁)
- (21) 山崎純一編訳『列女伝 (下)』(明治書院 一九九七・七・一五 865頁)
- (22) 松宮春一郎編訳『四書集注 上』(世界聖典全集刊行会 一九二〇・八・二〇 128頁)
- (23) 毛奇齡『四書改錯』第一六卷「子見南子」6頁。
(<http://guji2.guoxuedashi.com/4130/>[国学大师 www.guoxuedashi.com]50378_八.pdf)
- (24) 前掲、吉田賢抗編訳『新釈漢文大系 87 史記(七)』831頁。
- (25) 前掲、吉田賢抗編訳『新釈漢文大系 1 論語』400頁。
- (26) 晋・皇甫謐著、清・任渭長、沙英絵『高士伝』(上海古籍出版社 二〇一四・一二 104～105頁)
- (27) 大野實之助注『李太白詩歌全解』(早稲田大学出版部 一九八〇・五・一〇 1074頁)
- (28) 阿部吉雄、山本敏夫、市川安司、遠藤哲夫編訳『新釈漢文大系 7 老子 莊子(上)』(明治書院 一九六・一一・五 224頁)
- (29) 前掲、阿部吉雄、山本敏夫、市川安司、遠藤哲夫編訳『新釈漢文大系 7 老子 莊子(上)』280頁。
- (30) 一九〇四年五月、「学友会雑誌」第四三号に発表した「文藝と道德主義」に『莊子』「斉物論」「駢拇篇」「胠篋篇」の内容を引用したことから『莊子』を讀んだと推測できる。
- (31) 小林信明編訳『新釈漢文大系 22 列子』(明治書院 一九六七・五・二五 38頁)
- (32) 第一章注(1)に同じ、41頁。
- (33) 前掲、千葉俊二『谷崎潤一郎 狐とマゾヒズム』39頁。

第三章 「人魚の嘆き」論——背景としての東洋

前章では『史記』や『論語』に取材した小説「麒麟」（「新思潮」一九一〇・一二）のタイトルの意味や典拠との異同、作品のモチーフなどを検討した。本章では同じ中国古典に取材し中国を舞台とする作品「人魚の嘆き」を対象にその典拠や舞台設定をめぐって作中の東洋的要素の意義や全体のモチーフを検討する。「人魚の嘆き」は、「中央公論」一九一七年一月号に掲載され、清朝時代の中国・南京を舞台に、巨万の富を持つ貴公子と美しい人魚との恋物語が描かれた短篇である。「朝日新聞」（一九一七・五・一九）に掲載された単行本『人魚の嘆き』（外五篇 春陽堂 一九一七・四）の広告文に「人魚の嘆き」を含む六篇は「何れも悪魔主義と幻想主義との凝集にして同時に東方思想と西方芸術との渾熟境たり。」と書かれている。¹ 芥川龍之介はこの一篇が「正に天下第一の奇文」²であると絶賛した。宮島新三郎は刊行された際の角書を援用して「雄大なる一篇の無韻詩」³と、その特色を指摘した。谷崎自らも「真に鏤心彫骨の苦しみを以て書いたものであり、当時の文壇では随分評判の高かった作品である」（『明治大正文学全集第三十五卷 谷崎潤一郎篇』解説）一九二八・二と述懐した。

確かに、本作は短いながらもストーリーの発想や舞台設定及び人魚の造形などの面において、かなりの工夫が凝らされたことが窺われる。「人魚の嘆き」に関する論考はこれまでも多く見られるが、単行本が出版された際の広告文に書かれた「東方思想と西方芸術との渾熟境」が具体的にどんな素材で織り成されているのか、またこれらの素材に対して谷崎がどんな捉え方をしたのかという問題にはあまり触れられていないようである。これらの問題の究明によって、谷崎が言う「鏤心彫骨の苦しみ」の内実のみならず、本作のモチーフも一層明確になってくるだろう。

本章では舞台設定への疑問から出発し、先行研究で指摘された典拠を再考し、谷崎が南京を舞台にした意味を検討する。そして「人魚の嘆き」と関連すると思われる『板橋雑記』及びその他の資料を掘り下げ、本作の意図

及びモチーフを明確にする。

第一節 小説の舞台南京の都市像と設定の意味

細江光は「人魚の嘆き」の典拠について、作中の風俗、建築の構造、酒の名称や産地、特徴、さらに主人公の名前までが、いずれも中川忠英（一七五三～一八三〇）『清俗紀聞』に記された内容と一致しているため、谷崎が『清俗紀聞』を参考にしたと指摘した。⁴『清俗紀聞』は中川忠英が長崎奉行として在任中、部下の唐通事たちに命じ、清朝の商人たちに乾隆年間の清国南方地域の習俗を問わせて記録したもので、一七九九年に上梓されたという。⁵「人魚の嘆き」の関係部分と照らし合わせて見れば、谷崎が確かにこれを参考にしたことは間違いない。ただし『清俗紀聞』所載の中川忠英による跋文のうち、編集に参加した者たちの氏名と出身が列記されている箇所、孟世燾に関して次のように記されている。

画工 石崎融思、安田素教

清国蘇州 孟世燾、蒋恒、顧鎮⁶

孟世燾は南京ではなく蘇州の人である。また『清俗紀聞』「附言」に「今崎陽へ来る清人多く江南浙江の人なれハ、斯に記す処も亦多く江南浙江乃風俗と知るへし。」⁷とあるように、同書には中国江南地域、特に浙江省の風俗が多く記されている。南京も中国江南地域に属するが、浙江省ではなく江蘇省にある都市である。谷崎は「孟世燾」という名前をそのまま使ったが、出身地は蘇州から南京に変えたのである。もちろん、小説は必ずしも事実即さねばならないわけではないが、谷崎が物語の舞台に南京を選んだことには特別な意味があると考えられる。

まずは南京という都市のことを知っておく必要がある。かつて南京は金陵ともいい、中国江南地域の由緒ある

（六朝の古都）として知られていた。城内を南北に貫く運河・秦淮河も名高い。特に明・清時代の有名な文人、才子の吳承恩、唐伯虎、錢謙益、鄭板橋、袁枚らがこの地に生まれ、また「金陵八艷」（秦淮八艷とも）の馬湘蘭、卞玉京、李香君、柳如是、董青蓮、顧橫波、寇白門、陳円円といった名妓、佳人も多く輩出した土地である。運河の兩岸に立ち並んだ樓閣から流れてくる管弦の音と、川面に浮かぶ画舫の美女をめぐって、文人墨客の風流韻事が繰り広げられ、その繁栄は明末に頂点に達したという。⁹ 南京歴代の名勝を詠む詩文集『秣陵集』（別題『金陵歷代名勝志』清・陳文述撰 一八二三）において作者は、明・晏鐸の詩「金陵春夕」「花月春風十四樓」の句を引用し、南京秦淮河の畔に豪華な妓楼だけで十四軒もあると指摘した。興味深いことにこの一句は、谷崎が二年後に秦淮を舞台に書いた作品「秦淮の夜」（原題「南京奇望街」「中外」一九一九・二）に登場する妓女の名前「花月楼」を連想させる。また「明治時代の書生にして」「知らぬものは殆無かつた」とされた『柳橋新誌』冒頭の題詞にも「秦淮の情事、揚州の説」と記され、南京秦淮が色町として日本にも広く知られていたことがわかる。秦淮の過去の繁栄を述懐する『板橋雜記』上巻「雅游」の項に、作者・余懷（一六一六～一六九六）は秦淮士女の口吻を借りて遊里と南京の地の繁栄のさま、宗室王孫の豪華な風俗、酒宴の華やかな様子、遊客の往来、樓舎の有様などを詳しく記している。

金陵為帝王建都之地公侯戚畹甲第連雲宗室王孫翩翩裘馬以及烏衣子弟湖海賓游靡不挾彈吹簫經過趙李每開筵宴則傳呼樂藉羅綺芬芳行酒糾觴留髡送客酒闌棋罷墮珥遺簪真欲界之仙都昇平之樂國也。

金陵ハモトヨリ花ノ都ナレバ御屋シキモ町モ光リカヽヤキ重ナル屋根ハ雲ノ如ク又富士ノ山ニ似タリ公達若殿エラク衣裳ヲハリ込ミ役人ノムスコ町ノ若イモノ田舎ノ客ヲアヘマゼテ入カヘツメカヘ曲中ノ内ヲ行チガフ客ガミヘテ盃マカリ出レバ妓ニ芸子舞子ヲアツメ懸香梅花ノ香り座シキニ満盃ノセリフヤカマシクコチラ

ハ髯客ヲ引トメアチラハ佳士ヲ送り酒ガシコツテ棋ヲ打ヲキ大ザヤシノエラサワギ櫛簪ノ落ルモシラズ客モ
妓モ有天津天コレゾ誠ニ色里ノ最天上ニテ治マル御代ノ極樂世界ヂヤ。¹¹

ここで金陵の地は「仙都」や「楽国」と譬えられ、俗界のあらゆる享樂を体験できる極樂世界のようにだとされる。日常世界の中にありつつ、そこから閉じられた別世界でもある。杜牧（八〇三〜八五三）に「商女不知亡国恨 隔江猶唱後庭花」（「泊秦淮」商女は知らず亡国の恨 江を隔てて猶唱ふ後庭花）¹²と詠まれたように、金陵は日常の常識や外界の秩序や価値観が無意味なものにされてしまう不思議な空間である。

この地にまつわる数多くのロマンスが生み出されてきた。しかもそのロマンスには美貌と才気を兼ね備えた女性**が必ず登場する**。そのうち、「秦淮八艷」と称される女性たちに関する逸話が数多く残されている。例えば、「衝冠一怒為紅顔」（清・吳梅村（一六〇九〜一六七一）「円田曲」冠を衝いて 一怒するは 紅顔の為なり）¹³と歌われた清の武将吳三桂と陳円田の話、復社の愛国青年侯方域と李香君の恋愛物語（清・孔尚任（一六四八〜一七一八）『桃花扇』）、江南名士冒襄と董小宛の逸話（清・冒襄（一六一一〜一六九三）『影梅庵憶語』）、江左三大詩人の一人吳梅村と卞玉京の悲恋、また当時の江南文壇の大御所であった錢謙益（一五八二〜一六六四）と柳如是の物語など、いずれも有名な才子佳人の色恋沙汰としてよく知られている。「八艷」の女性のことは、余懷『板橋雜記』に記録され、また清末・葉衍蘭（一八二三〜一八九七）の彫刻画「秦淮八艷図詠」（一八九二）にも描かれている。谷崎が、主人公の孟世燾が七人の美貌の妾に加えて、さらに人魚を八番目の妾として買い取ったと設定したのは、恐らくこの「秦淮八艷」の話を意識したからであろう。

また中国（四大名著）の一つ『紅樓夢』（清・曹雪芹（一七二四〜一七六三））においても、貴公子賈宝玉の分身と言われる甄宝玉が金陵（南京）で暮らすと設定され、登場する主な女性たちも出身地に拘らず、その家柄や容姿や才能などによって「金陵十二釵 正冊」、「金陵十二釵 副冊」、「金陵十二釵 又副冊」と格付けされた。

しかしここに登場する女性は「佳人薄命」と表現されるようにいずれも病弱で早死したり、不幸な運命に弄ばれたりして、不遇な最期を遂げている。明清王朝の転換期に生きた「秦淮八艷」はもちろんのこと、『紅樓夢』の女性たちも一族の没落とともに次々とこの世を去っていった。彼女たちは、『紅樓夢』に描かれた神仙界「太虚幻境」から降りてきた天女のように、人間界に一時滞在して必ず消えていく宿命を持っており、常に一種の神秘性と悲劇性を帯びている。

このように南京は、享樂の空間でありながら「美人塵土、盛衰感慨」⁽¹⁴⁾というように、きらびやかで艶めかしい夢から覚めた後に深い感傷が残るような町でもある。それゆえ谷崎が舞台を南京に設定したのは、放蕩や贅沢の限りを尽くした貴公子に相応しく、また美しい人魚と遭遇して不思議な体験をした場所にも似つかわしい。そして、かつてのこの地にまつわる幾多のロマンスより醸し出された感傷的基調は人魚と貴公子との恋の結末をも暗示しているだろう。

谷崎が創作の際にどのような古典を参照したのかは断定できないが、「人魚の嘆き」の初稿で南京の旧称「金陵」を用いたことから⁽¹⁵⁾、古典に記述された昔の南京の面影を意識しながら書いていたと考えられる。「人魚の嘆き」の創作よりやや遅れて南京を舞台に書いた紀行文や小説からも、谷崎における南京のイメージが窺われる。彼の初回の中国旅行について、「大阪朝日新聞」(一九一八・一〇・一一)に「谷崎潤一郎の支那行き」という短文が載せられた。「ざつと二月ばかりの予定で京城へ行ってから奉天、夫から北京漢口の順序です。南京には是非行かうかと思つて居ます、何か面白い話の土産でもあればいいですが(…)。」という谷崎の話から、南京に対する谷崎の憧れが窺われる。旅行後に書かれた「秦淮の夜」(前掲)には、主人公の「私」が伝説の美女を探すために暗い迷路を辿りながら秦淮の妓楼を巡り、何度も交渉を失敗するが、ようやく「花月楼」という愛らしい妓女を見つけたという虚構の混じった体験談が書かれている。

谷崎にとって南京は、美女との出会いや不思議な体験が期待できる絶好の土地だったろう。谷崎は杜牧の詩「泊

秦淮」を引き合いに出しながら、「其の時分と今と余り変つてない」（「南京夫子廟」「中央文学」一九一九・二）と書いて南京にまだ昔の面影が残っていることを強調した。一方、芥川龍之介は、同じ場所、同じ風景を見て、「俗臭紛紛たる柳橋なり」と貶めた。当時の中国の実情を考えれば、恐らく芥川の評価が現実に近いと思われる。谷崎が記した南京は、古典や伝説に基づいて織り成した幻想的空間にすぎない。南京イメージの形成や「人魚の嘆き」の創作において、谷崎が参考にした資料の全容を解明することは難しいが、主人公の原型や登場人物の名前から細部の描写まで比べると、『板橋雑記』と類似していることは明らかである。

第二節 『板橋雑記』との関連

「人魚の嘆き」の典拠に関しては、細江の論考が詳しい。しかし、細江が指摘した『清俗紀聞』のほかに、主人公の原型やその他の人物名などにもそれぞれ拠り所がある。本章では新たな参考資料として『板橋雑記』などを採り上げ、「人魚の嘆き」との関連性を考察したい。

両作品を比較するにあたり、まず日本における『板橋雑記』の受容及びその影響について述べておく。『板橋雑記』は中国遊里文学の代表作の一つである。一七七二年にはじめて山崎蘭齋の訓点を付けた和刻本が出版され、その後たびたび版を重ねて広く流布し、江戸文芸特に洒落本に大きな影響を与えた。⁽¹⁾ 例えば、寺門静軒（一七九六〜一八六八）『新鴻繁昌記』（一八五九）や成島柳北（一八三七〜一八八四）『柳橋新誌』（一八七四）などはいずれも『板橋雑記』を粉本にした作品である。⁽²⁾ 特に柳北は『柳橋新誌』において『板橋雑記』を引用しつつ秦淮板橋と柳橋の風景を類比した。山東京伝（一七六一〜一八一六）『傾城買四十八手』（一七九〇）の口絵に記された「欲界之仙都 昇平之楽国」の一節も『板橋雑記』から採ったと指摘されている。⁽³⁾ 『板橋雑記』は日本に渡来して以来、遊女評判記や遊里探訪記の手本という形で受け止められる傾向にあったが、⁽⁴⁾ 実際には、その裏に潜む亡びさった江南の文華や青春への追慕、南京の栄華を踏み躪り破滅させた異民族に対する憤りという感傷的な基

調も読み取られたことが出版当時の序文から窺える。⁽²¹⁾ 南京のイメージや憧れは、『板橋雑記』を通じて江戸時代の日本人の中に早くから定着していた。

また山崎蘭齋に翻訳された『板橋雑記』は『日本書紀唐土名妓傳』という書名で一九〇〇年に東京松山堂書店より再版されるほど、明治の知識人の間でも広く読まれた書物だった。谷崎が私淑した永井荷風は、成島柳北『柳橋新誌』について「其体例を近くは寺門静軒の江戸繁盛記に、遠くは明人曼翁の板橋雑記に則つ⁽²²⁾」ていると指摘しており、その内容を熟知していたことがわかる。南京の風景、特に秦淮の色町や名妓を記したこの本は、常に女性をテーマにする谷崎文学の特質にも合致すると言えよう。「人魚の嘆き」の舞台を南京にした以上、谷崎がこの本に目を通した可能性も高い。では、『板橋雑記』と「人魚の嘆き」はどのように関連しているか。まず主人公の原型と話柄を検討したい。

武田寅雄は「人魚の嘆き」は『金瓶梅』中の話柄にヒントを得て書かれたものである⁽²³⁾と指摘したが、両作品は舞台や主人公の年齢、出身などを全く異にしている。『金瓶梅』は市井の庶民の生活を描く作品で、舞台は清河县、中国北方の小さな町である。対して「人魚の嘆き」の舞台である南京は、江南地域にある副都といわれるほどの大都市である。また『金瓶梅』の主人公である西門慶は三十歳前後で妻子持ちの身分の低い薬商であるのに対して、孟世燾は美貌と才智を兼ねたうら若い貴公子と設定された。

孟世燾の人物像は、『板橋雑記』下巻「逸事」の項に記された南京城の貴公子——「徐青君」によく似ている。

中山公子徐青君魏国介弟也家貨鉅万性豪侈自奉甚豊廣蓄姬妾造園大功坊則樹石亭臺擬於平泉金谷每當夏月置宴河房選名妓四五人邀賓侑酒木瓜佛手堆積如山茉莉芝蘭芳香似雪夜以繼日把酒酣歌綸巾鶴氅真神仙中人也。

(中山ノキンダチ徐青君ハ魏ノ国ノ御二男ニテ大金モチナルウヘ甚エヨウヲ好何モカモ上品ヲスキ多クテカ

ヲ置園ヲツクリ坊ヲ大ニシツキ山チンウテナハ昔ノ平泉金谷ニカタドリ夏ニイタレバ濱ノ屋ニテ酒宴ヲモフケヨイ代物四五枚ヲエラミテ酒ヲスゝメサセ木瓜ブシユカンノルイ山ノ如ク茶ラン芝ランノカホリ向フノ川バタマデクンジワタリ夜ヲ日ニツイデサヤシウタヒ公子ハリン巾ヲイタゞキクハクセウヲ著シ羽扇ヲ持テマシ中ニ座スマコトニハヘヌキノ仙人トミエタリ。²⁴⁾

徐青君は、明朝の元老——魏国公徐達の次男として生まれたが、早くに両親を失い、兄が魏国公の号を受け継いだ後、独り身となった彼は南京の地に残り、莫大な財産を持って妓女たちと詩酒徵逐の日々を送っていた。彼は奢侈を極めた唐の大臣李徳裕の平泉荘と晋の富豪石崇の別業・金谷園を真似て自邸を造り、鶴の羽毛で造られた衣裳を着て贅沢の限りを尽くした。その豪華な暮らしや放蕩によつて南京の町中によく知られていた。南京の逸事を記録する『金陵鎖事』（明・周暉）や南京を舞台とする戯曲『桃花扇』（清・孔尚任）などにも彼の逸話が見られる。²⁵⁾

「人魚の嘆き」における孟世燾の身の上は以下の通りである。

此の貴公子の父なる人は、一と頃北京の朝廷に仕へて、乾隆の帝のおん覚えめでたく、人の羨むやうな手柄を著はす代りには、人から擯斥されるやうな巨万の富をも拵へて、一人息子の世燾が幼い折に、此の世を去つてしまひました。

一人身となった孟世燾は、徐青君と同じく莫大な財産を思うままに使つて煙花城中の婦女と遊び、遊里の酒に溺れて放縱の日々を過ごしていた。彼は「連夜の宴楽、連日の讌戯に浸り」、「歓楽の絶頂を極め、痴狂の数々を経験し尽くし」、常に「神思飄颻たる感興」が胸に湧いていたと描かれた。この描写は、徐青君の贅沢な暮らしを表

す言葉「夜以繼日把酒酣歌」、「真神仙中人也」と似通っている。また孟世燾の庭園の豪華さも徐青君と同様に強調されている。

其人買ひと美人とは、最初に先づ、豪華を極めた邸内の庁堂へ請ぜられ、長い間待たされた後、今度はさらに鏡のやうな花斑石の舗甃を踏んで、遠い廊下を幾曲りして、遂に奥殿の内房へ案内されます。(：)驢馬は貴公子の邸内深く引き込まれ、第一の大門を入り、第二の儀門を潜り、後庭の樹木泉石の門を繞つて、昼を欺く紅燈の光を湛へた、内庁の石階のほとりに据ゑられました。

孟世燾と徐青君は、時代がやや異なるが、出身、年齢、性格などにおいて多く類似している。また細かい箇所であるが、その他の登場人物の名前や細部の描写からも『板橋雜記』の強い影響が窺われる。貴公子の妾たちについては次のように書かれている。

紅々と云ふ、第一の妾は声が自慢で、隙さへあれば愛玩の胡琴を鳴らしつゝ、婉転として玉のやうな喉嚨を弄び、鶯々と云ふ、第二の妾は秀句が上手で、機に臨み折に触れては面白をかしい話題を捕へ、小禽のやうな絳舌蜜嘴をぺらぺらと轉らせる。肌の白いのを得意として居る、第三の妾の窈娘は、動ともすると酔に乗じて、神々しい二の腕の膩肉を誇り、愛嬌を売り物にする第四の妾の錦雲は、いつも豊頬に腮窩を刻んで、さもにこやかにほゝ笑みながら、柘榴の如き齒列びを示し、第五、第六、第七の妾たちも、それ／＼己れの長所を恃んで、頻りに主人の寵幸を争ふのです。

「紅々」という名前は、『板橋雜記』中巻「麗品」(『唐土名妓傳』上巻)と下巻「珠市の名妓」の項で二回も言及

されている。余懷は『板橋雜記』において、美しい歌声を持つ歌妓をしばしば「紅紅」と譬えて賞賛した。「麗品」によれば「紅紅記曲采春歌 我亦聞歌喚奈何 誰唱江南斷腸句 青衫白髮故婆婆」(琴ニカケテ爽ニウタフクルワノフシ 聞ツケテナツカシキハマヘカタノ青樓 ソノクルワブシウタフモノハ尹春 シラガアタマニ袖ヲカザシテシトヤカニマフ)という詩を作つて、歌声の奇麗な妓女の尹春に贈つたという。「珠市の名妓」においては「開著迷香、神鷄之勝、又何羨紅紅、拳拳之名乎」(王月ナド、云ヨリ栗ヲカキ(尺日) 記シ人ヲ迷ハスタキ込ノ奇南天人ノエウ向ヲアラハス中々赤ナアトシヤナララ位ヲケナリデハナイ)と教坊の歌妓を絶賛していた。

「紅々」とはすなわち唐の歌姫「張紅紅」のことである。唐・段安節『樂府雜錄』によると、唐憲宗の頃に張紅紅という歌妓がいて、宮廷に招かれ(記曲娘子)と称された。この呼称は右記余懷の詩句「紅紅記曲采春歌」と一致している。谷崎が貴公子の、声自慢の妾を「紅紅」と名づけたのは、恐らく『板橋雜記』の示唆を得たからではなからうか。

「窈娘」については、「肌の白」さを特徴とする記述から『板橋雜記』における名妓卞敏に関する描写——「類面白如玉脂」(面ノ白サハ玉子ムキタルガ如ク)を思わせる。その名前にも『板橋雜記』との関連が窺われる。『板橋雜記』における妓女の呼称に関する解説に「妓家僕婢称之曰娘外人呼之曰小娘假母称之曰娘兒」(妓家ノ僕婢ハ妓ヲヨビテ娘ト云ツキアイノ人ハ小娘ト云假母ヨリヨビテハ娘兒ト云)とあるように、「娘」の字には特別な意味が付与されている。「李十娘」「王節娘」「李三娘」などのように、「娘」の字が付いた名前を持つ女性は多い。一方、「窈」は女性のしとやかな貌を表す『詩経』「關雎」の名句「窈窕淑女 君子好逑」(窈窕たる淑女は君子の好逑)から採つたのではないか。

「鶯鶯」は、元稹(七七九〜八三一)『鶯鶯伝』とその改作である王実甫(生没年不詳)『西廂記』のヒロイン崔鶯鶯を思い起こさせる。崔鶯鶯は丞相府の令嬢として生まれ、類い稀な美貌を持つ才気煥発な性格を持った少女である。その名は唐代以来の中国人もさることながら、『西廂記』の伝来によって多くの日本人にもよく知られ

ており、⁽³¹⁾「鶯鶯」は「才色兼備の女性」という以上の意味も付与されるようになった。谷崎が「鶯鶯」という名を用いたのは『西廂記』のヒロインにちなんだと考えてもよからう。さらに、「錦雲」については、漢詩に多用される語句であるため特定の典拠を持つとはいえないが、⁽³²⁾南京が昔から「雲錦の故郷」と呼ばれるほど中国屈指の錦織りの名所であることにも関係があるだろう。

ほかに『板橋雑記』に記された「秦淮八艷」の一人——卞賽については、「若遇佳賓、則諧謔間作、談詞如雲、一座傾倒」(佳客ニアヘバキメ所デチャリヲマゼ甘イ話タヘマナク一座モノ涎ヲ流セリ)⁽³³⁾と描かれており、貴公子の「秀句が上手」な第二の妾と似ているとわかる。

谷崎は「人魚の嘆き」において昔の東洋の一都市のたたずまいと、そこに暮らした一人の貴公子の無類な放縦をリアルに描くため、豊かな想像力を発揮したほか、『清俗紀聞』や『板橋雑記』など数多くの中国古典を参照したと考えられる。その成果として東洋的情緒にあふれた物語空間を作り上げることができた。南京の風俗や建築の様式から酒の名称や登場人物の名前に至るまで、中国古典の典拠に遡れる。しかし、谷崎は古典や伝説が醸し出す特別な雰囲気を持つ、時空間ともに遠く離れた古い中国の町を舞台にしながら、一方で、近代において開かれた香港湾やシンガポール港といった時代的に矛盾する事象も設定し、物語時間を臙化した。時代錯誤ではあるが、このような設定が物語世界の非現実性を強め、非現実的な人魚の登場を自然に見えさせたともいえる。

人魚の登場によって生じた西洋と東洋との甚だしい対照は、作品の神秘性を強め、異質的な美を確保することに成功した。人魚は貴公子に強いインパクトを与え、彼の「香辣なる刺戟」への欲求は見事に満たされた。では、貴公子の目に映る人魚はどんなイメージを持つのか。また人魚と貴公子との間にはどんな物語が展開するのか。

第三節 西洋人魚の登場とその象徴性

人魚の故郷については、彼女を売ったオランダ商人の口から次のように語られている。

私の国は欧羅巴の北の方の、阿蘭陀と云ふ所ですが、私の生れた町の傍を流れて居るライン河の川上には、昔から人魚が住むと云ふ話を、子供の時分に聞いた事がありました。

ライン河の川上で、美しい歌声で舟人を誘惑し溺死させたヘローレイ（34）伝説による設定である。商人は次のように説明する。

昔から人間が人魚に恋をしかけられれば、一人として命を全うする者はなく、いつとはなしに怪しい魅力の罠に陥り、身も魂も吸ひ取られて、何処へ行つたか人の知らぬ間に、幽霊の如く此の世から姿を消してしまふのです。

これは従来指摘されてきたようにオスカー・ワイルドの童話「漁師とその魂」（1891・11）から来ている。（35）ある日、若い漁師が網を引き上げ、若く美しい人魚が中に寝ているのを発見した。人魚の願いを聞き入れ海に放してやったが、代わりに彼女を呼んだ時必ず歌いに来ると約束させた。しかし漁師は人魚の美しい声を聞いて虜になり、彼女との恋を実現するために魂を捨てたという。「人間よりも人魚の種属に墮落したい」、彼女と「永劫の恋を楽しみたい」と願う貴公子の設定と同工異曲である。しかし、人魚との恋を実現するために魂を捨てた漁師と違い、貴公子は結局人魚との恋を諦め、別れを選んだ。

九頭見和夫は両作品を比較して、「恋の実現のために自らは何の努力もせず運命を容易に受け入れる」と貴公子を批判し、漁師の選択との相違について「運命に対する東洋と西洋の受け入れ方の違い」、あるいは谷崎とワイルドの「個人レベルの考え方の相違」によると位置づけた。（36）しかし、「人魚の嘆き」の貴公子は、「歓楽の為に巨

万の富と若い命とを抛たうと」する、財産はもとより命までも惜しまない人物として描かれている。また、何の努力もしなかったわけではない。まず莫大な財産を費やしてオランダ商人から人魚を手に入れ、人魚のいる水甕を内房に置き、誰一人傍らへ近寄らせなかった。この空間は、外界から閉じられた、外界の人の参入を許さない、貴公子と人魚二人のみの隔絶された空間である。

貴公子が人魚に求めたものは、もちろん官能的な快楽もあるが、何よりも彼女が発するこの世のものと思えない美を視覚的に享受すること、それによって生じる強い刺激だろう。彼の目に映った人魚の美は、次のように書かれていた。

どうかすると、眼球全体が、水中に水の凝固した結晶体かと疑はれるほど、淡藍色に澄み切つて居ながら、底の方には甘い涼しい潤ほひを含んで、深い深い魂の奥から、絶えず「永遠」を視詰めて居るやうな、崇厳な光を潜ませて居ます。(…)けれども其処には習慣的な「美」を超越した、人間よりも神に近い美しさがあるのです。因襲的な「円満」を通り越した、生滅者に対する不滅の円満があるのです。(…)此の人魚には、欧羅巴人の理想とする凡べての崇高と、凡べての端麗とが具体化されて居るのです。あなたは此処に、此の生き物の姚冶な姿に、欧羅巴人の詩と絵画との精髓を御覧になる事が出来るのです。此の人魚こそは欧羅巴人の肉体が、あなたの官能を楽しませ、あなたの靈魂を酔はせ得る、『美』の絶頂を示して居ります。

貴公子にとって人魚は、「凡べての崇高」と「生滅者」に対する永遠性を持ち、現実のあらゆる美を抽出した精髓である。具体性を追究するほどイメージは朦朧としていき、実体はますますわからなくなる。人魚は幻想の世界の者であり、そこでしかその美は輝けない。人魚は貴公子に対して次のように話した。

貴公子よ、どうぞ私を憐んで、一刻も早く私の体を、広々とした自由な海へ放して下さい。たとへ私が如何程の神通力を具へて居ても、窮屈な水甕の中に捕はれて居ては、どうする事も出来ないのです。私の命と、私の美貌とは、次第々々に衰へて行くばかりなのです。

これは貴公子が人魚を海に放した理由であろう。人魚そのものより彼女が持つ永遠なる美こそが貴公子を酔わせる。この美が無くなれば一切の感覚的刺激もなくなり、人魚の存在自体が無意味になる。そのため、たとえ人魚と別れることになっても、貴公子は何よりもその美を大切にし、衰えを絶対に許せなかった。これは、神の裁きにより漁師と人魚に死を与えたという『漁師とその魂』の設定との最大の違いであり、「人魚の嘆き」のモチーフの所在である。

いささか趣を異にするが、類似する設定は、後の作品『春琴抄』（一九三三・六）にも見られる。佐助は理想の女性春琴の焼け爛れた顔を見ないために、瞳孔を針で突き刺し、自ら可視の世界を封印した。貴公子にしても佐助にしても、笠原伸夫が指摘したように「〈愛〉とはそのような美への殉教的意志に支えられて、はじめて燃えたつ」。つまりある種の喪失によって、「〈女〉の面ざしを永遠に己が内面に刻み付けようとする」⁽³⁷⁾のである。人間と人魚とが恋するという物語設定において谷崎は、「漁師とその魂」に素材を取ったが、その素材を自分の文学の完成に活用し、高みに上ることに成功したといってもよからう。

手の届かぬ理想女性として描かれた人魚は、もう一つの象徴性を持つ。彼女が純然たる西洋の美女のように描かれていたところには谷崎の西洋への畏怖、崇拜が宿っている。彼女がとうとう遥か離れた海へ消えたことは、谷崎が憧れる西洋への接近が、遂に実現しないまま終わりを告げたことを象徴しているだろう。

西洋への接近の失敗に対する谷崎の自覚は、その後の創作にどう反映しているだろうか。興味深いことに、彼は三年後に再び人魚をテーマに小説「鮫人」（「中央公論」一九二〇・一、三、五、八、一〇）を発表した。「鮫人」

にも林真珠という人魚のような人物が描かれている。真珠は性別国籍不明の謎めいた存在であるが、その人物像にはローレライ伝説に描かれた人魚像との類似が見られる。一方、タイトルやエピソードの詩句「邑里雜鮫人」が暗示するように、中国古典や伝説に記された人魚との関連性も見出せる。その容貌は西洋的というより中国の少年林真珠リンチエンチュウと間違えられるように東洋的なものである。東西要素を融合させた作品として、「鮫人」の真珠は「人魚の嘆き」の人魚のような純然たる西洋女性像から脱出しはじめた、西洋と東洋の（混血児）として設定された。

この二作の間に谷崎ははじめて中国を旅行しているため、人魚像の相違は一時の（支那趣味）によるとも考えられるが、西洋崇拜から東洋への開眼へという思想変化の体現と捉えることもできよう。この時期における谷崎の東洋に対する関心は「鮫人」の登場人物、南の口を借りて述べられるほか、「或る時の日記」（「雄弁」一九二〇・一）にも窺われる。その後の谷崎は、「鶴唳」（「中央公論」一九二一・七）のような典型的な支那趣味の作品群の創作を経て、やがて関西移住を契機にもう一つの東洋を発見し所謂古典回帰の時期を迎えるのである。

「人魚の嘆き」は、谷崎が「真に鏤心彫骨の苦しみを以て書いたもの」と述べたように、舞台設定、登場人物の原型、物語空間の描写などは、従来指摘された『清俗紀聞』のほか、『板橋雑記』などに拠ったと窺われる。谷崎はこれらの古典籍に基づいて意図的に南京という特別なイメージを持つ都市を舞台にし、東洋的情緒が溢れた幻想的空間を作りあげた。この空間は非現実的な人魚の登場を自然に見えさせるのみならず、西洋から来た人魚との対照によるインパクトは、「辛辣なる刺戟」を求めようとする貴公子の欲求を満たし、人魚の神秘性と異質な美をも増幅させた。同時に読者にも緊張感を与え物語のさらなる展開を期待させただろう。

結局、人魚が茫々たる海へ消えるにつれて、貴公子と人魚との恋は実現しないまま終わりを告げた。だがこの結末には、人魚と別れてこそ永遠の美がはじめて確保できるというモチーフが秘められている。これは谷崎が憧れる西洋への接近の失敗も象徴している。

同じ人魚を扱う作品「鮫人」の林真珠と比較すると、二つの人魚像が異なることがわかる。その異同は谷崎自

身の中国旅行に起因するところが多いが、作品史の観点から見れば、西洋人魚と林真珠とは違う時期のヒロイン像を代表していると位置づけられる。また「人魚から鮫人へ」の展開は谷崎の思想及び文学の方向性も暗示しているだろう。すなわち狂熱な西洋崇拜から離れてその思想にも文学にも東洋への関心が見えるようになったというのである。

注

(1) 春陽堂より出版された時の広告文である。初出は「朝日新聞」(一九一七・五・一九)で、「新小説」(第二年第一号、一九一八・一一)にも掲載されている。原文は「多年文壇を風靡せし凡庸主義を打破して光輝ある天才芸術の新旗幟を掲げたる著者が其作風の漸く円熟の境に入れる新作を集む「人魚の嘆き」「魔術師」「病蓐の幻想」「鶯姫」「捨てられる迄」「饒太郎」の六篇何れも悪魔主義と幻想主義との凝集にして同時に東方思想と西方芸術との渾熟境たり。名越氏の挿畫と共に芳醇なる芸術の至境。」

(2) 芥川龍之介『『人魚の嘆き・魔術師』広告文』(「新小説」第二四年第一〇号 一九一九・一〇・一)『芥川龍之介全集』第五卷(岩波書店 一九九六・三・八 154頁)から引用した。

(3) 宮島新三郎「小説界(三)」(「早稲田文学」第一五八号 一九一九・一・一)。一九一七年度の各作家の作品についての概評。「人魚の嘆き」に関する宮島の評価はそのうちの「主なる作家及び作品」に見られる。

(4) 細江光『『人魚の嘆き』の典拠について』(『谷崎潤一郎——深層のレトリック』和泉書院 二〇〇四・三・三一 821～827頁)

(5) 中川忠英著、村松一弥、孫伯醇編『清俗紀聞1』「解説」(平凡社 一九六六・三・一〇 127頁)による。出版月について、一八九四年一〇月一五日に刊行された寛政十一年(一七九九)の翻刻本の序文に「寛政己未秋九月」とある。

- (6) 中川忠英「清俗紀聞跋」『清俗紀聞』卷之一三(博文館 一八九四・一〇 28頁)
- (7) 前掲、中川忠英『清俗紀聞』卷之一「附言」
- (8) 清の余懷『板橋雜記』と清末葉衍蘭の彫刻画「秦淮八艷図詠」を参照。
- (9) 大木康『中国遊里空間——明清秦淮妓女の世界』(青土社 二〇〇二・一・一〇 62頁)
- (10) 永井荷風「柳橋新誌につきて」(原題「柳北仙史の柳橋新誌につきて」)『中央公論』第四二年第五号 一九二七・五・一。『荷風全集』第一六卷(岩波書店 一九九四・五・二七 213頁)から引用した。
- (11) 余懷著、山崎長卿訳『唐土名妓傳』(明和年間刊本の再印 松山堂書店 一九〇〇 1と2頁)
- (12) 市野澤寅雄『漢詩大系』第一四卷(集英社 一九六五・八・三〇 276頁)
- (13) 福本雅一注『中国詩人選集二集 第一二卷 吳偉業』(岩波書店 一九六二・六・二二 120頁)
- (14) 山崎蘭齋「題唐土名妓傳」(前掲『唐土名妓傳』所収)
- (15) 千葉俊二「『人魚の嘆き』について——解題に代えて」(『ユリイカ』第三五卷第八号 二〇〇三・五・一)によれば、「人魚の嘆き」の初稿は二百字詰原稿用紙八枚で、書き出しには「金陵の町中で第一の富豪、第一の美男と云はれる孟世燾は、十五の年から今年二十七になる迄(…)」とある。
- (16) 芥川龍之介「江南遊記」(『大阪毎日新聞』一九二二・一・一と二・一三)。『芥川龍之介全集』第八卷(岩波書店 一九九六・六・一〇 293頁)から引用した。
- (17) 麻生磯次『江戸文学と支那文学——近世文学の支那的原拠と読本の研究』(三省堂 一九四六・五・一〇 307頁)
- (18) 前田愛「『板橋雜記』と『柳橋新誌』」(『國語と國文学』第四一卷第三号 一九六四・三・一) 319頁)
- (19) 前掲、麻生磯次『江戸文学と支那文学』 314と319頁。
- (20) 前掲、前田愛「『板橋雜記』と『柳橋新誌』」

(21) 蘭齋は「唐土名妓傳序」と「題唐土名妓傳」において、それぞれ「美人塵土、盛衰感慨」と「美人黄土矣、回首夢華。可勝慨哉」と書いて慨嘆の意を表した。また異なる版本に載っている秦星池（一七六三〜一八二三）の序文が見られ、その中では「読之只為捏兩把淚。原名板橋雜記。今改題曰昇平樂國記。」と、同じく感傷の意を示した。

(22) 注（10）に同じ。

(23) 武田寅雄『谷崎潤一郎小論』（桜楓社 一九八五・一〇・一五 32頁）

(24) 前掲、中川忠英『唐土名妓傳』（下巻 10頁）

(25) 徐青君については『桃花扇』第一回「聽稗」と『金陵鎖事』「非非子」の項に書かれている。

(26) 前掲、中川忠英『唐土名妓傳』（上巻 11頁）

(27) 前掲、中川忠英『唐土名妓傳』（下巻 2頁）

(28) 前掲、中川忠英『唐土名妓傳』（上巻 24頁）

(29) 前掲、中川忠英『唐土名妓傳』（上巻 2頁）

(30) 石川忠久編訳『新釈漢文大系¹¹⁰ 詩経（上）』（明治書院 一九九七・九 16頁）

(31) 井上泰山「日本における『西廂記』研究」（『中国俗文学研究』第八号 一九九〇・一二・二〇）によれば、『西廂記』は一七世紀前半に日本に輸入されてから繰り返し訳注書が刊行されたのみならず、明治時代には教材として選ばれ広く読まれていたという。

(32) 錦雲については、漢・東方朔「海内十洲記」に「紫翠丹房、錦雲燭日」、唐・曹唐「小游仙詩」に「海水西飛照柏林、青雲斜倚錦雲深」、宋・張榘「金縷曲」に「且剩把、錦雲織」、清・龔自珍「夢玉人引」に「瓊欄月暖錦雲飛」などの句が見られる。

(33) 前掲、中川忠英『唐土名妓傳』（上巻 22頁）

- (34) 九頭見和夫『日本の「人魚」像——『日本書記』からヨーロッパの「人魚」像の受容まで』（和泉書院 二〇一二・三・一〇 84頁）は、「人魚の嘆き」とハイネの詩「ロオレライ」との関連について、谷崎が踏青軒主人訳の「ロオレライ」（『海潮』第一号 一八九一・五・一五）を参考にしたと指摘した。
- (35) 注(34)に同じ、89頁。同じ指摘は、吉田精一「谷崎文学と西欧文学」（吉田精一編『近代文学鑑賞講座9 谷崎潤一郎』角川書店 一九五九・一〇・五 279頁）のほか、小出博「谷崎潤一郎とワイルド・序説」（吉田精一編『日本近代文学の比較文学的研究』一九七一・四・一〇 305頁）にも見られる。
- (36) 注(34)に同じ、92頁。
- (37) 笠原伸夫『谷崎潤一郎——宿命のエロス』第四章（冬樹社 一九八〇・六・三〇 220頁）

第四章 「人間が猿になつた話」論——典拠と創作動機

前章では「人魚の嘆き」（「中央公論」一九一七・一）の典拠やモチーフを検討した。『清俗紀聞』や『板橋雜記』に取材したこの作品には物語の舞台や登場人物など多くの東洋的要素が見られるが、主題はやはり谷崎の西洋への憧れだった。また貴公子と人魚との別れは谷崎の西洋への接近が失敗だったことを暗示していると指摘した。西洋への接近に挫折した谷崎は、一年後に同じ中国古典に取材した小説「人間が猿になつた話」（「雄辯」一九一八・七）を発表した。本章では中国旅行の直前に書かれたこの小説の創作経緯、典拠及びモチーフについて検討し、中国古典の受容の実態及び変化を明らかにする。

「人間が猿になつた話」は、一九一八年七月、雑誌「雄辯」（第九卷第八号）に発表された短編小説であり、猿に見込まれた芸者・お染が、猿の崇りと深い執念から逃れられず、ついに猿とともに塩原の山奥に姿を隠したといった内容のものである。円地文子は、この作品が「怪異談の傾向の強いもの」であり、谷崎が生涯持ち続けていた「少年の情感とでも名づけたいものが、母体になって発展した作品の一つ」、「女性の肉体賛美の一変型」^①であると指摘した。千葉俊二は、「谷崎文学には珍しいテーマで、その手法、内容はむしろ鏡花のものだと思わせられるが、谷崎はどんな興味をもってこうした作品を書いたのだろうか。」^②と疑問を呈した。

ウオララック・クラウプロトック『「人間が猿になつた話」試論』^③では、民俗学の視点から、物語内容と日本の猿回し、猿舂入民話、谷崎における「お染久松物」の観劇体験との関連が論じられている。しかし、直接的な素材と創作契機に関しては言及されていない。谷崎はこの時期、ポーその他（西洋）の撰取と感化から「途上」（「改造」一九二〇・一）のような推理小説、映画体験から「人面疽」（「新小説」一九一八・三）のような小説を書いていた。^④だが、同じ年に書かれた「人間が猿になつた話」はそれらの類に属さない稀有な作品である。

一九一八年一〇月、谷崎は中国へ旅立った。「人間が猿になつた話」は、中国旅行の準備中に著した作品である。

谷崎の創作と中国旅行には関連があると推測できる。本章は、当時の谷崎の読書活動を調べ、「人間が猿になった話」と『唐代叢書』『白猿伝』との関連に焦点を絞って論じるものである。

第一節 中国旅行までの経緯と読書活動

馬場夕美子「谷崎潤一郎——大正七年の中国旅行」によれば、谷崎が中国旅行に出かけた直接のきっかけは末日会にあつた。⁵⁾一九一八年一月に始まった末日会は、政治家、実業家、官僚、文学者らの集まりで、席上、中国漫遊の計画が話し合われていたという。結局、この計画は実現しなかったが、谷崎個人の中国旅行を促す要因となつた。谷崎の中国旅行の準備に関しては、「時事新報」(文芸消息)欄(一九一八・七・九)、「読売新聞」(一九一八・七・二〇、八・二二)などでしばしば報道され、およそ三ヶ月も前(一九一八年七月上旬)から準備に取りかかっていたことが窺える。旅行資金を工面することはもとより、中国に関する知識の収集も必要であつた。少年時代から中国古典に親しんできた谷崎にとって、中国の歴史・地理の学習は、かつて古典から知った中国への思いを蘇らせたことだろう。

後に書かれる紀行文や小説、戯曲を読めば、この時期に谷崎が中国の古典を数多く受容したことがわかる。西原大輔によれば、谷崎が『支那趣味』の文学を集中的に生産したのはもっぱら一九一七年から一九二一年にかけての時期である⁶⁾という。この時期の谷崎作品に登場する中国古典について、次のような諸作品があることがすでに指摘されている。⁷⁾

『剪燈新話』(「蘇州紀行」「中央公論」一九一九・二一―三)

『水滸伝』(「西湖の月」原題「青磁色の女」「改造」一九一九・六、「鮫人」「中央公論」一九二〇・一、三―五、八―一〇)

『西湖佳話』(「西湖の月」)

『唐才子伝』（「鮫人」）

李笠翁による十種曲の「蜃中楼伝奇」「比目魚伝奇」（「西湖の月」）

『全唐詩』（「鮫人」）

楊鉄崖、高青丘、王漁洋の詩（「西湖の月」）

倪雲林、王摩詰の詩（「鮫人」）など

ところが、「人間が猿になつた話」と中国古典との関連はこれまで注目されてこなかった。しかし、「人間が猿になつた話」における「美女が猿に見込まれて山奥に連れ去られた」という主要な筋に似た話が、中国古典には散見される。中野美代子『孫悟空の誕生——サルの民話学と『西遊記』』⁸⁾によれば、「美人を拐かすサル」の話は「数え切れぬほどある」。最も古い例は漢代の焦延寿の著といわれる『易林』巻一で、ほかに、晋の干宝の著『捜神記』巻一二、晋の張華の著とされる『博物志』巻九、唐初の「補江総白猿伝」、唐の段成式の『酉陽雜俎』巻一六、明代の洪楸が編んだ『清平山堂話本』の「陳巡檢梅嶺失妻記」、『剪燈新話』巻三の「申陽洞記」など、枚挙に暇がない。

そのうち、最も影響力を持ったのは唐初の「補江総白猿伝」であり、後の「陳巡檢梅嶺失妻記」「申陽洞記」も「補江総白猿伝」から発展した話であると中野は位置づけた。「補江総白猿伝」は略して「白猿伝」ともいう、中国唐代志怪小説の一つである。作者と成立時期は不詳。『新唐書』、芸文志、子類、小説類における「補江総白猿伝一卷」との記述が最古の記録だが、具体的な作品内容はわからない。⁹⁾現在、「白猿伝」のテキストとして、『太平広記』巻四四四「欧陽紇」の條、明・顧元慶『顧氏文房小説』、明・陶宗儀『說郛』「白猿伝」などが流通しているほか、清代に陳世熙が編集した『唐代叢書』にも「白猿伝」が見出せる。日本では、江戸時代に林羅山によって和訳され、「欧陽紇」と題して『怪談全書』（福森兵左衛門・一六九八）巻一に収録された。また、一九二〇年一二月に出版された『国訳漢文大成』文学部第一二巻や、岡本綺堂訳『支那怪奇小説集』（サイレン社 一九三

五・一一)にも収録されている。各テキストには字句に若干異同が見られるが、主な話は共通している。

「人間が猿になった話」では、作中人物と舞台設定のいずれもが日本化されたが、(美女が猿に拐かされた)点については、右に挙げた話と共通しており、さらに、その細部の描写にも、「白猿伝」との類似点が多く見出せる。

第二節 「白猿伝」との関連性

「白猿伝」の梗概を、左に掲げる。

——梁の武帝の大同年間(五三五―五四五年)末頃、將軍歐陽紇は桂林まで攻め入り、現地の部族をことごとく平定して、さらに險阻の地へ分け入った。將軍は美しい妻を伴っていたが、土地の人から美人を攫う魔物がいるので気をつけるようにと忠告される。將軍は兵士に陣營を見張らせ、妻を密室に入れて下女たちに守らせたが、その甲斐もなく妻は何者かに攫われてしまう。將軍は軍隊を留め、妻を搜索した。

一ヶ月を過ぎた頃、竹林の中で妻の履物の片方が見つかった。さらに一〇日余りかけて、陣營から二百里ほど離れた、南に青山を望む谷川に着いた。絶壁の上の竹林に紅い綾絹が見え隠れし、女たちの笑い声が聞こえる。蔓につかまって登ると、異世界のような美しいところに出た。

將軍が来意を告げ、女たちに尋ねたところ、皆、白猿の精に攫われてきた者で、將軍の妻もここにいることが分かった。將軍は女たちの助力を得て白猿を退治し、妻を救助したが、白猿は、將軍の妻がすでに自分の子を身籠もっており、その子は必ず立派な人物となるという遺言を残した。一年後、歐陽紇の妻は白猿によく似た男の子を生んだ。その後、將軍は陳の武帝に殺されたが、彼の子は將軍と親交のあった江総に養われ、成長して文学と書道に長けた、名の知れた人物となった。――

「人間が猿になった話」と「白猿伝」とは、美女が魔力を持つ猿に攫われるというあらすじが共通している。のみならず、女性の美しさの描写や猿の魔力、女性を探す過程に関する発想なども似ている。

まず、猿に攫われた女性の外見について、両作品はいずれも女性の白皙と美しさを強調している。「人間が猿になつた話」のお染は、「体つきは少し小柄の方で、何となくおつとりとした、色の抜け上るやうに白い」少女で、「浅草の十二階で百美人の肖像を陳列した事があつたが」、その中に入っていたほどの美人とされている。同じく「白猿伝」の將軍の妻は、「紘妻織白、甚美。」（色白クシテカホヨシ）（林羅山『怪談全書』卷一「欧陽紘」一六九八）と表現されている。

また、猿が持つ魔力について、「人間が猿になつた話」では次のように描かれている。

一体何処から、いつあんな者が船の中へ紛れ込んだのだらう、船頭を始め皆が其れを不思議がつたが誰も謎を解く事は出来なかつた。船頭の家は江戸川の近辺にあつて、其処から今朝早く船を漕ぎ出して来たのだが、無論猿なんぞが忍び込んで居た筈はなし、万一忍び込んで居たにしても、それが今迄見附けからずに居よう道理がない。

猿は狭く限られた空間へ、人間に気づかれず潜入できる魔力を持つと設定されている。「白猿伝」にもこれと類似する魔力が記されている。

紘甚疑惧、夜勒兵環其廬、匿婦密室中、謹閉甚固、而以女奴十餘同守之。爾夕、陰風暗黒、至五更、寂然無聞。守者怠而仮寐、忽若有物驚悟者、即已失妻矣。関扃如故、莫知所出。

（紘キヒテ疑シキナガレモ夜ニ入テ兵ヲヨビテ家ヲトリマワシ。其女ヲ奥深くカクシテ下女十餘人ヲナラベ番トス。其夜事ナシ。明夜ニ及デ風吹テ天クラク夜半スギテシヅマル。守者クダビレテ仮寐ス。忽物ニオソ

ワルル如クニシテ。目サメレバ女既ニ見ヘス。門戸ノ扇ハモトノ如クニシテ出ル所ヲ知ルコトナシ。

(林羅山『怪談全書』卷一「歐陽紇」(福森兵左衛門 一六九八)から引用、以下同)

さらに、猿に攫われた女性を探す過程においても類似性が見られる。「人間が猿になった話」には、次の一節がある。

内藤さんはわざ／＼下野へ出かけて行って、草鞋穿きで日光から足尾、高原峠から塩原の方を十日ばかり尋ね回つたが、途中で何匹も猿に出遇つたにも拘らず、お染の姿は遂に見つかかなかつたさうだ。尤も、鬼怒川の川上の山路で溪川の瀬に突き出て居る巖の上に、お染の持つて居たらしい珊瑚の簪と鼈甲の櫛とが落ちて居たと云ふし、内藤さんは其れを東京へ持つて帰つて私に見せたくらゐだから、たしかにあの辺へ逃げ込んだのには違ひなからう。

お染を探し奔走した内藤だが、結局、見つけることはできなかつた。しかし、お染の髪飾りと思われる「珊瑚の簪」と「鼈甲の櫛」を発見できた。「白猿伝」にも類似した展開が見られる。

因辞疾、駐其軍、日往四週、即深凌險以索之。既逾月、忽於百里之外叢篠上、得其妻繡履一隻。雖侵雨濡、猶可弁識。

(病アリト云テ軍兵ヲトドメ毎日四方ヲ尋嶺ヲ越溪ヲ伝險ヲ凌ゲ是ヲモトム。月ヲ経テ百里ハカリノ外ニテ叢ノ上ニテ彼女ノ履一ツヲ得タリ。雨露ニヌレタリトイヘバ、履ノ形疑ナシ。)

女の遺留品を手掛かりとする発想において、ふたつの作品は共通する。しかし、「人間が猿になった話」では髪飾り、「白猿伝」では片方の履物と、違いがある。「人間が猿になった話」のお染が葭町の芸者と設定されていることからみれば、「履」よりも「珊瑚の簪」「鼈甲の櫛」がよりふさわしい。

そのほか、女が連れ去られた場所について、「人間が猿になった話」では、

或る年の夏、蛸殻町の野田さんが塩原の温泉へ行つて、塩の湯の奥の方にある滝を見物に行つた時に、向うの山の上で、猿と一緒に遊んで居る人間らしい影を見たことがあつたさうだ。(…)あれがきつとお染だつたかも知れないと、内藤さんはよく私に話したものだ。

と、「塩の湯の奥の方にある瀧」の「向うの山の上」とされている。千葉俊二が指摘した⁽¹⁰⁾ように、人間社会から遠く離れた「人外境」ともいえる。「白猿伝」でも同様に、將軍の妻が攫われた場所は次のように描かれている。

又旬餘、遠所舍約二百里、南望一山、蔥秀迴出。至其下、有深溪環之、乃編木以度。絶岩翠竹之間、時見紅彩、聞笑語音。

(深山ニワケ入ル十日餘テ。我家ノ外ニ百里計ト。オボシキ所ニテ。南ニ当テ一ノ山アリ高クシゲレリ其下ニ溪水アリテ流廻ル木ヲ編連テ巖竹ノ間ヲ渡ル時ニ女ノ笑ヒモノ云声ハルカニ聞ユ。)

「人間が猿になった話」と「白猿伝」とは、好色で魔力を持つ猿が美女に取り憑いたというあらすじにおいても、

女性の容貌、猿の魔力、女性を探す過程、連れ去られた場所などの設定においても、共通していることがわかった。

それでは、谷崎ほどの本文で「白猿伝」を読んだのか。「白猿伝」が収められた書物には、『太平広記』『顧氏文房小説』『説郛』『唐代叢書』あるいは『怪談全書』が挙げられる。中国旅行直前という時期、書物入手する際の難易度、書物を携帯する際の便宜性などの面を考慮し、各種刊本を年代順に検討していく。

『太平広記』は宋代に成立した説話集である。漢から宋初までの説話・伝奇などを収録した、全五百巻から成る龐大な叢書である。『顧氏文房小説』は、明代の顧元慶によって編纂された全五十八巻の叢書だ。『説郛』は、同じ明代に陶宗儀によって編纂された全百二十巻の叢書であり、その内容には、諸子百家の説、筆記、詩話、伝記、考古博物、地理風土などが含まれている。『唐代叢書』は『唐人説薈』ともいい、唐代及びその後の五代や宋代の文学作品全百六十四篇を収録したもので、一七九二年に清の陳世熙によって編纂された。その内容は、志怪や伝奇小説のみならず、稗史、園芸、地理、風土、宗教、詩歌、散文なども含んでいる。谷崎が好んだ中国南方の水郷・蘇州の地理、歴史伝説を記載する「吳州記」や、後に谷崎が紀行文「蘇州紀行」（原題「画舫記」「中央公論」一九一九・二〇三）、小説「西湖の月」で著すことになる、「真嬢」「柳士肩」に関する詩や伝説も収められていた。¹¹

『怪談全書』は林羅山が『史書』ほか中国の書物から怪異譚を集めて和訳した怪談集で、全五巻から成る。日本語で記されているため読みやすく、谷崎がこれを読んだ可能性は高い。しかし、中国旅行直前という事情を考慮すれば、『怪談全書』よりも、中国を知るための百科全書のような趣を持つ『唐代叢書』に拠ったと考える方が適切ではなからうか。谷崎が旅行後に著した戯曲「蘇東坡」（「改造」一九二〇・八）と小説「鶴唳」（「中央公論」一九二一・七）が、和訳『西湖佳話』ではなく、直接原典『西湖佳話』に題材を取ったという事実から、¹²原典を読むことは谷崎にとって珍しいことではなかった。

『唐代叢書』は刊行年代が最も近いうえに、清代から民国時代¹³にかけて再版が繰り返され、広く普及していた。

この間の事情について、魯迅はエッセイ「破『唐人説薈』」⁽¹⁴⁾（一九二二・一〇）で、次のように述べている。

『唐人説薈』也稱『唐代叢書』、早有小木板、現在却有了石印本了、然而反加添了許多脫落、誤字、破句。（…）只是因為是小説、從前的儒者是不屑辯的、所以竟沒有人來抨擊、到現在還是印了又印、流行到「不亦樂乎」。

（『唐人説薈』は『唐代叢書』ともいう、早くから小木版のものがあつたが、今は石印本もある、そのため、脱字、誤字、文の区切りが増加した。（…）小説であるため、以前の儒者の論争に値しないのであつて、畢竟、非難する人がいない。今に至つて相変らず印刷を繰り返し、楽しまれるほど流行っている。⁽¹⁵⁾）

具体的には、一七九二年の挹秀軒刊本、一八〇六年の序刊本、一八四三年の序刊本、一八六九年の右文堂刻本、光緒年間（一八七五～一九〇八）刻本、一九一一年の上海掃葉山房石印本、一九一一年の上海天寶書局石印本、一九二二年の上海掃葉山房石印本などが刊行されている。

大庭修『江戸時代における唐船持渡書の研究』（一九六七・三）によれば、『唐代叢書』の日本渡来は、天保二（一八四一）年（二回、一部六套、一部二包）、嘉永三（一八五〇）年戊五月（一部四本）、四年五月（二部各六套）・玄五月（一部六包）、安政二（一八五五）年一月（一部）であるという。現在、日本では、一七九二年の挹秀軒刊本をはじめとして、その後の刊本が流通している中でも一八〇六年の刻本（三六冊）と一九一一年、一九一三年の上海掃葉山房石印本（十六冊）が最も多い。芥川龍之介の蔵書中にも『唐代叢書』（三六冊）が見出せる。⁽¹⁶⁾海老井英次や村松定孝らによれば、「黄梁夢」（一九一七・一〇）や「杜子春」（一九二〇・七）の典拠を『唐代叢書』に求められるという。⁽¹⁷⁾

日本での所蔵が多い『唐代叢書』は、谷崎にとつても決して入手しにくい書物ではなかった。また、友人であ

る芥川と（支那趣味）を同じくしていたことから推して、「人間が猿になった話」を著す際に谷崎が参考にした文献として、一八〇六年の刻本『唐代叢書』を挙げてても良いと考えられる。創作年がやや遅れるが、二年後に発表された小説「鮫人」において谷崎は宋之間と劉廷芝の逸話に言及しているが、その逸話も『唐代叢書』「劉賓客嘉話録」に見られることも根拠となろう。

谷崎が「人間が猿になった話」を著した動機のひとつとして、この時期における芥川との頻繁な交流を想定できる。小谷野敦編『谷崎潤一郎詳細年譜』⁽¹⁸⁾を参照し、その詳細を確認する。

一九一七年

「1月、（…）芥川が来訪。両者菩提寺を同じくする。」「4月、（…）5日、手紙で芥川を慰める。」「5月、（…）28、29日頃か6月上旬、（…）佐藤春夫、江口渙（…）、赤木、芥川が谷崎を訪れる。」「6月、（…）27日、日本橋のレストラン『鴻の巣』で、谷崎が発起人の一人となって、芥川『羅生門』出版記念会。」「28日、芥川を訪問、遊んで帰る。」「（…）7月上旬、佐藤、芥川、江口、赤木を訪れる。」「10月「口の辺の子供らしさ」を『新潮』（芥川龍之介氏の印象）に掲載。」「10月30日、芥川を訪れて遊ぶ」。

一九一八年

「1月、芥川『良苦用心・谷崎潤一郎氏の文章』を『文章倶楽部』に掲載」、
「1月25日、芥川、鶴沼（引用者注——当時谷崎が泊まっている場所）へ一泊で遊びにゆく」。

さらに、一九一八年にふたりが発表した小説には共通性がある。一九一八年七月に谷崎が「人間が猿になった話」を発表する半年前、一月に芥川は『聊齋志異』に取材した⁽¹⁹⁾「首を落とす話」を「新潮」に発表、五月には「大阪毎日新聞」「東京日日新聞」（一く二二日）に「地獄変」を連載していた。「首を落とす話」と「人間が猿になった

話」とは、同じ説話風なスタイルを採っている。また、〈女性と猿〉の話に関しても、「地獄変」における〈良秀の娘と小猿〉の話と、「人間が猿になった話」における〈美女が猿に連れ去られた話〉とは、その取り合わせが一致している。谷崎は芥川を意識していた可能性があるろう。

さて、結末について、「白猿伝」では、救われた將軍の妻が猿の子を産み、しかもその子が後世に名が知られる人物となったというハッピーエンドで結ばれているのに対し、「人間が猿になった話」では、お染は猿の執念と崇りから逃れられず、ついには猿が住む山奥に入ってしまった、再び人間世界に戻ることはなかった。お染が猿になったという設定はいささか極端だが、女性が男性の執念によって変身するというモチーフにおいてこれまでの谷崎文学と一貫性を持っている。

第三節 物語の時空間と小説のモチーフ

中国古典「白猿伝」を素材としながらも、谷崎は、「人間が猿になった話」の人物名、時空間の設定、語り方などについては自身の創作意図に沿って改変した。とりわけ、物語の特別な時空間の設定によって、谷崎が「生涯持ち続けていられた少年の情感」⁽²⁰⁾をもう一度蘇らせたのである。作品の冒頭で、物語の時間について以下のように述べられている。

その時分はまだわしも三十代の男ざかりだった。さうして内のお鶴と一緒に、葭町へ芸者屋を出してからまだ間もない時分、さうよなあ、事に依るとまだあの人形町通りが今のやうに広くなくつて、電車なんぞはもちろん通つて居なかつた頃だった。考へて見るとあの近辺も変つたものさ。今ぢやあ水天宮の向うが土州橋まで突き抜けて居るが、あの辺は随分ごみ／＼した狭つ苦しいところだったよ。(…)——さう、さう、それから今の長谷川町近辺に、ちやうど尾張町の服部のやうな大時計があつたつけが、あれはつい此の頃まで残

つて居たやうぢやないか。親爺橋の通りで古いのは千束屋に蓬萊屋、牛屋の今清なんぞも新しい方ぢやあるまいな。芝居でも明治座なんて物はなくつて、彼処にはもと久松座と云ふものがあつて、その小屋が焼けてから今の明治座が出来たんだと覚えて居る。

右の引用から分かるように、物語が発生した時間は「今」より三〇年前の過去であり、舞台は当時の葎町である。さらに「明治座」「久松座」といった実在の劇場名が記されていることから、およそ一八七九年から一八九三年までの時期と推測される。⁽²¹⁾この時期は、明治維新後の近代初期に当たり、都市の近代化を象徴する「電車」や「電燈」が登場してくる前後の、新旧時代の過渡期でもあり、まだ徳川という前時代の風景が窺えた。とりわけ、葎町は江戸時代から引き続き遊興の地であり、都市の近代化の過程で取り残された町のたたずまいや人々のなりわいに、なお江戸の名残が色濃く残っていた。馬場孤蝶は『明治の東京』⁽²²⁾（一九四二・五）で、明治二〇年代末期の吉原には、昔ながらに鼈甲の簪を挿した娼妓を擁する店が幾軒もあった。また、明治二五年頃、銀座などの繁華街には既に電灯や軒灯が設置されていたにもかかわらず、「芸者屋」では格子戸の内に大きな提灯が下がっており、室内では行燈が用いられるという状態がつづいていたと記している。

この花街の特別な空間について、若林幹夫は次のように述べている。

吉原や新猿楽町のような、日常の身分制的な規範とは異なる「遊び」や「芸能」が展開される空間は、塀と木戸によって他の領域より一層慎重に囲い込まれていたのである。徳川期の都市における廓や芝居町などもつエネルギーは、それらの地域がこのような「統制された都市」の内部における制度的に開放された空間として存在したという、都市空間全体のなかでのこれらの地区の位置によって理解されなくてはならない。⁽²³⁾

明治維新以後、都市区分の变革や道路の改正などは東京に大きな変化をもたらしたが、遊びの場としての「芸者屋」は非日常的な空間とされ、そこにはまだ幾分前時代の面影が窺える。明治十九年、日本橋区蠣殻町で生まれた谷崎は、幼少時代に見た東京の風景と再会するためには、遠い昔に記憶を遡らせるか、あるいは、文明開化から取り残された下町の花柳界、遊興地といった特殊な空間に探し求めるしかない。

谷崎は中国古典に記述する猿伝説を活用し、理想女性への憧れという谷崎文学の一貫するテーマをお染に対する猿の執念という新奇な形で新たに展開させた。また明治末の吉原という物語舞台は、川本三郎が指摘したように「近代化が進み都市のなかに社会化され開かれていく空間がふえていくなかで」「外光が入りこまず、ひっそりとした暗がり⁽²⁴⁾が保たれている閉所」であり、『不思議』や『恍惚』が生まれる特別な場として必然性を持っている。このような場所は不思議な物語が展開する場としてふさわしいのみならず、なお江戸的情趣を漂わしている作家の淡い郷愁を慰めることもできただろう。

第一部では谷崎の少年時代の試作から初回の中国旅行までの中国古典と関連のある作品を対象にそれぞれの典拠を掘り下げ、谷崎文学における中国古典の捉え方を考察した。

第一章では少年谷崎の思想遍歴を考察した。谷崎は少年時代に漢学塾で漢籍古典を勉強し、儒教復興の時代風潮や学校の先生の影響で、一時、儒教特に陽明学に興味を持っていた。しかし苦悶を感じた谷崎は儒家が代表する道德主義に精神的な救済を得られず、自分の本当の使命が文学にあると自覚しはじめた。この時期の谷崎の思想の実態は文壇デビュー以後の作品「麒麟」(「新思潮」一九一〇・一二)にもつながっている。第二章では「麒麟」を考察した。「麒麟」は谷崎がデビューして以来、中国古典と関わって書かれた本当の意味での第一作である。本章では「麒麟」の典拠などを明らかにした上で、典拠との相違から道德と官能との対立というモチーフを読み取った。また儒家、道家などの言及に第一章で述べた谷崎の少年時代の思想との一致も見られた。第三章では、「人魚の嘆き」(「中央公論」一九一七・一)の舞台設定の意味と典拠を考察した。作品の典拠について従来指摘

された『清俗紀聞』のほか、清・余懷『板橋雜記』との関連を指摘した。谷崎は作品に多くの中国的要素を取り入れ、東洋的情緒にあふれた物語空間を作り上げることに成功した。しかし舞台は東洋的でありながら、そこに登場する人魚は、西洋の人魚伝説に描かれた女性のイメージと重なり純然たる西洋女性として描かれた。このよ
うな人魚像は谷崎の西洋憧憬の象徴と見られる。彼女が茫々たる海に消えたことは谷崎の西洋への接近の不可能性を意味する。第四章では、「人間が猿になった話」の典拠と創作動機を考察した。初回の中国旅行直前に発表されたこの小説は、中国の伝奇小説「白猿伝」との類似性を指摘した。谷崎は旅行準備の一環として漢籍の読書に取りかかり、その中で芥川を經由して『唐代叢書』を手に入れ「人間が猿になった話」の素材である「白猿伝」を読んだと推測した。谷崎は中国古典を活用し、理想女性への憧れという谷崎文学の一貫するテーマをお染に対する猿の執念という新奇な形で新たに展開させた。

この時期の谷崎文学における中国古典の受容は主に素材を中心とする受容である。その文学の主旋律はやはり官能美の強調や西洋及び理想の女性への憧れである。

注

- (1) 円地文子「若き日に愛読した作品」(『谷崎潤一郎全集』月報5)中央公論社 一九六七・三・二五 2頁)
- (2) 千葉俊二「感覚の錯乱」(『潤一郎ラビリンス』怪奇幻想倶楽部』解説 中央公論社 一九九八・一一・一八 299頁)
- (3) ウオララック・クラウプトック『人間が猿になった話』試論(『続…谷崎潤一郎作品の諸相』専修大学文学研究科畑研究室 二〇〇三・一二)
- (4) 秦恒平「谷崎潤一郎の大正時代」(『國文學 解釈と教材の研究』第三〇巻第九号 一九八五・八・二〇 61頁)

- (5) 馬場夕美子「谷崎潤一郎——大正七年の中国旅行」(「同志社国文学」第四四号、一九九六・三・二〇、47頁)
- (6) 西原大輔『谷崎潤一郎とオリエンタリズム——大正日本の中国幻想』(中央公論新社 二〇〇三・七・二五頁)
- (7) 原田親貞「谷崎潤一郎と中国文学(一)」(「学苑」第三四八号 一九六八・一二・一 55頁)
- (8) 中野美代子『孫悟空の誕生——サルの民話学と『西遊記』』(玉川大学出版部 一九八〇・一〇・五 37頁)
- (9) 西川幸宏「サルの異類婚姻譚と『白猿伝』」(「アジア学科年報」第一号 二〇〇七・一一・一)
- (10) 前掲、千葉俊二「感覚の錯乱」。
- (11) 「吳州記」、真嬢、柳士肩に関する記述はそれぞれ『唐代叢書』の第五、六、八集に見られる。
- (12) 第六章参照。
- (13) 一般に辛亥革命により清朝が打ち倒された一九一二年中華民国政府成立から一九四九年中華人民共和国成立までの時期を指す。
- (14) 初出「辰報副刊」(一九二二・一〇・三)。「魯迅全集8 集外集拾遺補編」(人民文学出版社 二〇〇五・一一 131頁)から引用。
- (15) 日本語訳は引用者による。
- (16) 張蕾『芥川龍之介と中国——受容と変容の軌跡』第三章「『杜子春』論——その新たな解釈への試み」(国書刊行会 二〇〇七・四・一〇 167頁)
- (17) 海老井英次は、「芥川龍之介文学典拠一覽」(「國文學 解釈と教材の研究」第三七卷第二号 一九九二・二・二〇)では、芥川龍之介の小説「黄梁夢」が「枕中記」から、「杜子春」が「杜子春伝」からその材を取っ

たと考察した。また、「杜子春」の典拠について、村松定孝は、「唐代小説『杜子春伝』と芥川龍之介の童話「杜子春」の発想の相違点」（『比較文学』（第八巻 一九六五・一一・一）において、「原典は『唐代叢書』、類似の話は『大唐西域記』『酉陽雜俎』に見え、これらの書籍は、既に江戸期に木版本が複製されているから、そういうものを桂湖邨の『漢籍解題』（一九〇五年）を参照しつつ漢文に堪能な彼が読む機会を持ち得たであろうことは容易に想像される。」と指摘した。張蕾『芥川龍之介と中国——受容と変容の軌跡』（前掲）では、芥川龍之介が一九二〇年に書いた小説「杜子春」は芥川所蔵の漢籍『唐代叢書』及び『太平広記』から材を取って創作したと推測した。

(18) 小谷野敦公式ウェブサイト <http://homepage2.nifty.com/akoyano/tanizaki.html>

(19) 芥川龍之介「文芸雑話 饒舌」（『新小説』第二三年第五号 一九一八・五）による。

(20) 前掲、円地文子「若き日に愛読した作品」。

(21) 『日本歴史地名大系』¹³ 東京都の地名（平凡社 二〇〇二・七・一〇）によれば、明治座の前身である芝居小屋は、明治初期に富田三兄弟により開かれた。その後、一八七三年に久松町に移転、喜昇座として改めて開場した。一八七九年に久松座と改称され、さらに一八八五年に千歳座に、一八九三年に左団次により明治座と命名された。

(22) 馬場孤蝶『明治の東京』（中央公論社 一九四二・五・二〇）

(23) 若林幹夫「空間・近代・都市——日本における〈近代空間〉の誕生」（吉見俊哉編『都市の空間・都市の身体』所収、勁草書房 一九九六・五・一五 23頁）

(24) 川本三郎『大正幻影』（岩波書店 二〇〇八・四・一六 322頁、324頁）

第Ⅱ部 初回の中国旅行以後

第一部では谷崎の少年時代の試作から初回の中国旅行までの中国古典と関連のある作品を考察し、それぞれの中国古典の捉え方を明らかにした。第Ⅱ部では初回の中国旅行以後に書かれた「鮫人」(「中央公論」一九二〇・一、三〇五、八〇一〇)と「鶴唳」(「中央公論」一九二一・七)を対象にそれぞれの典拠を明らかにした上で谷崎文学における中国古典の受容の実態と変遷を考察する。また初回の中国旅行は、中国古典の受容にどんな影響を与え受容の終焉とどう関連しているかを検討する。

第五章 「鮫人」論——東西融合の試みと東洋への接近

「鮫人」は、一九二〇年一月〜一〇月(二月・六月・七月は休載)、雑誌「中央公論」(第三十五年第一号〜第十一号)に連載され、未完に終わった作品である。未完であるが、「谷崎潤一郎の作品系列の中で特異な質を持つものとして、しばしば評家の注目を惹いた」という伊藤整の指摘は適切であろう。発表当時、松崎天民はこれが「最大級」の「浅草文学」である⁽²⁾と称賛し、「浅草礼讚小説」と位置づけた。また、野村尚吾はバルザックの「人間喜劇」を意識した上で生まれた作品であると指摘した⁽³⁾。そして、大正時代に芽生えた民衆芸術という視座からの論説もある。その他、この時期における東西芸術に対する作家の内心の葛藤も論じられる。森山由美が指摘したように、この葛藤は大正時代の谷崎作品によく見られる一つの設定といえる。それは相反する二つのタイプの芸術家を同時に登場させることである⁽⁵⁾。「金と銀」(「黒潮」一九一八・五、「中央公論」一九一八・七)の青野と大川、「AとBの話」(「改造」一九二一・八)のAとBなどが例として挙げられる。

「鮫人」においても同じような設定がある。それは南画を志す南と洋画家志望の服部という二人の青年である。

ところが作者はこの正反対の性格を持つ二人を対立させるのではなく、むしろお互いに認め合うように設定し、二人の対話を通じて東西芸術を論じた。そこに東西芸術の対立を超えて、それらを融合しようという作家の試みを窺い知ることができる。本章はヒロイン林真珠の人物造型、作品構成、登場人物の設定などを通して、東洋的特に中国的要素と西洋的要素の融合の実態を考察していく。

第一節 中国文献における鮫人記録

小説「鮫人」の冒頭には唐・岑参の「送張子尉南海」（張子の南海に尉たるを送る）という五言律詩が掲げられている。初出では「鮫人」という言葉に傍点が付けられていることから、題名はこの詩から取ったと考えられる。しかし、鮫人とは如何なるものか、それが小説の内容とどう関連しているか明らかにするためには、まず鮫人に関する記録を探ってみる必要がある。

『広辞苑』⁽⁶⁾の「鮫人」の項目には「中国で、想像上の人。人魚の類。南海に住み、常に機を織り、またしばしば泣き、涙はまろび落ちて珠となると伝える」とあり、『大漢和辞典』（修訂第二版）によれば、「水中に居るといふ怪しい人魚。海人の類。又、鮫人に作る」とある⁽⁷⁾。つまり鮫人とは中国特有の存在であり、それに関する記載や説話が古典に多く見られる。

此国（引用者注——味勒国）去長安九十里在日南人長七尺被髮至踵乘犀象之車乘象入海底取宝宿於鮫人之舍得涙珠則鮫人所泣之珠也亦曰泣珠。⁽⁸⁾

（味勒の国長安九十里去る。日南にあり。人長七尺、髪を被ひて踵に至る。犀象に乗る。象に乗りて海底に入り宝を取る。鮫人の舎に宿り涙珠を得たり。即ち鮫人の泣く所の珠は亦泣珠と曰ふなり。）

泉室潜織而卷綃、淵客慷慨而泣珠。⁹

（泉室に潜み織りて綃を巻く。淵客慷慨して泣きたるも珠なり。）

左思『三都賦』「吳都賦」（西晋二六五～三一六）

南海外、有ニ鮫人一。水居如レ魚、不レ廢ニ織績一。其眼泣、則能出レ珠。¹⁰

（南海の外に、鮫人有り。水に居ること魚の如し。織績を廢せず。其の眼は泣けば、則ち能く珠を出す。）

張華『博物誌』卷二・六九（西晋二六五～三一六）

南海出蛟綃紗泉先潜織一名龍紗其価百余金以為服入水不濡。

（南海で蛟綃紗なるものが産れる。龍紗ともいうが、百余金もする高価なもので、それで服を作れば、水中に入っても濡れることはない。）¹¹

任昉『述異記』卷下・三〇七（南朝・梁四二〇～五八九）

また、唐・李瀚が編纂したとされる書『蒙求』の「淵客泣珠 交甫解佩」の節に

旧注引博物志云、鮫人従水中出、向人家寄住、積日売絹。臨去従主人索器、泣而出珠、満盤以与主人。今本無載。左思吳都賦云、泉室潜織而卷綃、淵客慷慨而泣珠。淵客蓋鮫人也。述異記曰、南海中有鮫人室。水居如魚。不廢機織。其眼能泣則出珠。

(旧注に博物志を引きて云ふ、鮫人水中より出で、人家に向かひて寄住し、日を積み絹を売る。去るに臨み主人に従ひて器を索め、泣いて珠を出だし、盤に満たして以て主人に与ふ、と。今本には載する無し。左思の吳都の賦に云ふ、泉室に潜み織りて綃を巻き、淵客慷慨して珠に泣く、と。淵客とは蓋し鮫人なり。述異記に曰く、南海中に鮫人の室有り。水に居ること魚の如し。機織を廃めず。其の眼能く泣けば則ち珠を出だす、と。)⁽¹²⁾

との記録もある。その他、『文選』(蕭統編 唐・李善注 梁五〇二(五五七)第一二卷「江海」のうち、木玄虚「海賦」に「其垠即有天琛水怪、鮫人之室」(その垠には即ち天琛水怪、鮫人の室有り。)、⁽¹³⁾郭景純「江賦」に「淵客築室於巖底、鮫人構館於懸流」(淵客室を巖底に築き、鮫人館を懸流に構ふ。)、『太平御覧』(李昉・李穆・徐鉉編 北宋九六〇(一一二七)卷七九〇に「鮫人従水出、寓人家、積日売絹。将去、従主人索一器、泣而成珠満盤、以与主人」(鮫人は水より出で人家に寓す。日を積みて絹を売る。将に去らんとして主人より一つの器を索め、泣きて珠を成し盤に満たすことを以て主人に与ふ。)⁽¹⁴⁾とある。

唐代以降の漢詩や小説に描かれた鮫人は、概ね以下のようなイメージを持っている。例えば、唐・杜甫の「雨」に「神女花鈿落、鮫人織杼悲」(神女花鈿落つ、鮫人織杼悲し)、⁽¹⁵⁾唐・康翊仁「鮫人潜織」に「機動龍梭躍。絲縈藕滓添」(機動き龍梭躍り、絲縈り藕滓添ふ)、唐・無名氏「天竺国胡僧水晶念珠」に「紅精素貫鮫人泣」(紅の

精、素と貫き鮫人泣く)、唐・劉禹錫の「莫徭歌」の「市易雜鮫人。婚姻通木客」(市易は鮫人に雜え、婚姻は木客に通ず)、唐・李欣の「鮫人歌」に「鮫人潛織水底居」⁽¹⁶⁾(鮫人、潛かに織るは水底に居る)、宋・陳與義の「次韻家弟碧線泉」に「鮫人暗動卷綃梭」(鮫人暗に動きて綃梭を卷く)、元・楊維禎の「鮫人曲」に「鮫人夜飲名月腴、夜光化作眼中珠」⁽¹⁷⁾(鮫人、夜飲み名月腴く、夜光、化作して眼中の珠なり)などである。

これらの典拠に基づいて書かれた小説に、清・沈起鳳の「鮫奴」(小説集『諧鐸』(一七九二年)に収録)がある。あらずじは次のとおりである。

——昔、景生という青年がいて、旅先の閩(福建省の近辺)から帰郷する途中、砂浜に人のようなものが寝ているのを見た。近づいてみると、目が緑で、龍のような鬚を生やし、真つ黒な肌をして鬼に似ていた。何者かと尋ねると、鮫人であると答えた。龍宮で鮫綃紗を織っていたが、小さな罪を犯して追放されたという。景生は家まで鮫人を連れて帰った。鮫人は特殊な能力があるわけではないが、毎日池で水を浴びることを好んでいた。灌仏の日に景生はお寺で愛珠という美しい少女を見そめた。だが、彼女の家人が「万粒の真珠」を結納に求めていることを知り、途方にくれた彼は重い恋の病にかかり、次第に死期が近づいてきた。瀕死の主人を見て鮫人は悲しい涙を流した。不思議なことにその涙が珠となった。それを見た景生は急に元気を取り戻し、鮫人に頼んで一万粒の涙を出させてめでたく念願の女性を娶った。鮫人は龍王の赦免を得て懐かしい故郷に帰った。⁽¹⁸⁾——

この小説を粉本として書かれたのが、曲亭馬琴『新作塩梅余史』(寛政十一年正月序)に収録されている「鮫人」である。⁽¹⁹⁾主人公や舞台などはすべて日本化されたが、鮫人の容貌に関する描写は原話とほぼ同じである。

ある日、瀬田の橋をわたりけるに、かたはらなる砂の上に、一個の漢子眠居たり。その形状ミるに、碧の眼、蟒の鬚、満身、墨のごとく黒くして、鬼に似たり。喚起して、何者ぞと問へば、そのもの対て、我ハ海中の鮫人なり。⁽²⁰⁾

以上に挙げた中国古典とその影響を受けた日本の物語に描かれた鮫人は、人間世界のものではなく、異世界から来た、神性を帯びる伝説上のものである。彼らは海底に暮らし、高価な（鮫綃）（薄絹の類）を織って、泣けば真珠の涙を流すという。また鮫人は助けた人間に恩返しをすることで人間と似たような感情を持っている。

ところが、その性別に関する描写は極めて少ない。沈起鳳の「鮫奴」と馬琴の「鮫人」においては、男性であるように描かれたが、中野美代子によれば、「その性別は必ずしも一定していない、ところが、漢代を過ぎて三世紀の三国時代からいわゆる六朝時代になると、この鮫人が南の海底で機織りをしているとか、泣くと涙は真珠となるとかいうふうには、明らかに女性化していくのである」⁽²¹⁾。例えば、『太平広記』四百六十四卷「海人魚」の項目には鄭常によって八世紀頃に編まれた『拾聞記』（引用者注——『博聞記』あるいは『多聞記』）の内容を引用して次のように記されている。

海人魚東海有之大者長五六尺状如人眉目口鼻手爪頭皆為美麗女子無不具足皮肉白如玉無鱗有細毛五色輕軟長一二寸髮如馬尾長五六尺（…）⁽²²⁾。

（海産の人魚が東海の地方におり、大きなものは五尺から六尺もある。その状態は人のようで、眉や口もと、鼻などの顔立ちは美麗なる女子と同じである。たりないものはない。皮肉は白く、玉の如しで、鱗はなく細かい毛がある。五色にかがやき、輕軟で、長さは一寸ないし二寸。髪は馬の毛のようであり、長く、五尺ないし六尺⁽²³⁾。

また田辺悟『ものと人間の文化史 143 人魚』によれば、明（一三六八—一六四四年）の時代に編まれた『陳晦伯

『天中記』にも類似の記録が見られる。「隆安」（三九七〜四〇一年頃）、丹徒（江蘇省付近）の陳性が入江のほど近い浅瀬で魚捕りをしようとしていた。引き潮になったので行ってみると簾の中の砂州に六尺ほどの衣裳をつけない美しい女性が横たわっていたという²⁴。唐代や明代の文献に記されている鮫人は明らかに美女のイメージを持っている。

第二節 林真珠の人物像と鮫人伝説

さて、鮫人伝説と谷崎作品とはどのような関連があるか。まず鮫人が目から真珠の涙を流すというイメージは、その名の響きからして作品のヒロイン林真珠を容易に想像させる。その名前は日本人にしてはあまりにも奇妙であるため、はじめて「真珠」という名前を聞いた南は、

林真珠と云ふ名前も、偶然の暗合と云へばそれ迄だけれども、日本人の女の名にしては妙ぢやないか。

と違和感を持つ。

肌が真珠色をしているため「真珠」の芸名が付けられたというが、偶然の暗合自体がすでに興味深い。また名前のみならず彼女にまつわる事件がさらにその「鮫人」的な性格を浮き彫りにする。

それは北斗劇団の上海巡業時、『水滸伝』の浪子燕青を演じた林真珠が、会場外から入り込んだ支那人の苦力の老人に脅かされて卒倒したという出来事である。美少年燕青に扮した林真珠が、老人の行方不明中の息子林真珠リンチエンチユウと名前のみならず、容貌まで似ていたため、老人は興奮して暴れたのである。

真珠よ、真珠よ、お前はやはり私の悴だ。お前は決して女ではない。女の風をして世を欺き、私たちが親子を

見捨てる気なのだ。いくら隠しても私にはちやんと分つて居る。お前は何と云ふ薄情な子だらう！

浅草歌劇団の女優林真珠はなぜ老人の息子と思われたか、その時の扮装については次のように書かれている。

これは後で聞いた話だが、支那人達の間では燕青になった役者が一番いゝ、顔の作りにも何処となく支那人らしい趣があり、衣裳も一番よく似合ひ、どう見ても支那人の美少年だと云ふので感心した者が多かつたさうだ。のみならず彼等の殆ど総べてがしまひまで真珠を男だと思つて居た。

林真珠は見事に観客の目を欺いて男性を演じていた。彼女は少女でありながら少年としての美も持つ、性別が曖昧な存在のようである。その身元は、もともと東京の旧家生まれであり、落ちぶれて深川の猿江に住むようになったというが、上海での老人の突然の出現に対する反応から見れば、何らかの隠し事があると考えられる。当時の事情について次の描写がある。

唄の文句が例の『薄倅郎君何日到。』のところへ来た時に、又してもあの老人のほゝおツと云ふ奇妙な叫びが、前よりもずつと微かに、舞台裏の余程離れたところで鈸の如く響いた。さうしてそれが響くと同時に、天井へ向けられた真珠の顔はさらにぐつと仰向きになり、瞳はからくりが止まつたやうにうつとりと一つ所に漂ひ、喉からは声が出なくなり、手は力なく両方へ垂れた、――が、それもほんの一瞬間であつた。次の瞬間にはドタンと云ふ音を立て、彼女は仰向きに打つ倒れた。

追い払われた老人は劇場の外から再び中国語で罵っていた。日本人には意味が分からなかったが、それを聞いた

林真珠が突然卒倒したのは不思議に思われる。彼女が中国語を解するか解さないか、作中では曖昧に扱われている。

ここで注目したいのは彼女が卒倒する直前に歌った「漁家傲」⁽²⁶⁾という曲である。

一別家郷音信杳、一たび家山に別れてより音杳として、

百種相思、百種の相思、

腸断何時了。腸断何れの時にか了らん。

燕子不来花又老、燕子来らず花も又古い、

一春瘦得腰兒小、一春瘦せてきて腰兒も小し。

薄幸郎君何日到。薄幸の郎君何れの日にか到る、

思自当初、思う当初より、

莫要相逢好、相逢うを要むること莫かりせば好からんと、

好夢欲来還又覚、好夢成らんと欲て還つて又覚むれば、

緑窓但覚鶯啼曉。緑窓に但鶯の曉に啼くを覚ゆるのみ。⁽²⁶⁾

これは明・施耐庵の『水滸伝』第八一回「燕青月夜遇道君 戴宗定計出楽和」(燕青月夜に道君に会い 戴宗計を定めて楽和を出す)の一節だ。美少年燕青が歌伎李師師のところまで宋の道君皇帝のために歌った曲である。遠く郷里を離れて花柳界に落ちぶれた一人の女性の心境を描いている。故郷を離れて家族との音信が途絶えた女性は、国や親族のことを思うたびに、腸がちぎれるほどの悲しさがこみあげてくるという。林真珠はこれまでと違ってこの曲だけを「純然たる支那語で、支那風のメロディーを入れてうたった」。特に「莫要相逢好、好夢欲来還又覚」

の二句には、林真珠の身の上やそれが露見するのを心配する心情がこめられた。この歌だけを中国語で歌ったのは、あたかも老人に「もう私のことを諦めて」と伝えたかっただけのことである。ちょうどその時老人の喚き声を聞いて卒倒した。それは、親族と再会してその不幸な運命と悲惨な過去が思い出されたからか、それとも本当の身分が暴かれるのを怖がっていたからかは知る由もないが、事件自体が興味深い。林真珠は日本人の少女か中国人の少年かという謎に包まれてくる。

その他、林真珠と老人の娘林瑤娟の「容貌その他に於ける不思議な類似に驚かない者はなかつた」。その名前も不思議に類似している。「瑤娟」は美しい玉が娟麗であることから、貴重な真珠と同様のものだという隠喩である。また林真珠の衣裳を「白い薄地の絹」や「ミルク色の羅」などとした設定は鮫人が絹を織ったことを想起させる。さらに、その住居は「河岸通りにあつた」「洒落た住居」であり、「裏手が直ぐと大川の水に面して」いる。「往來からは二階家であるが中に這入ると川縁の方が三階になつて居る。林真珠はこの河縁の地下室に住んでいる。そこは河に一番近い部屋で、ある意味で陸から水に入る中間地帯でもあり、陸と水を往來するには最も都合のいい場所でもある。彼女が深夜になると人目を避けて部屋を離れたという不思議な行動はいつとき人間世界に交じりながらも結局水中に戻つたという鮫人に関わる伝説を暗示しているであろう。

以上分析してきたように、題名の「鮫人」は浅草の人気女優林真珠を暗喩しているだろう。ところが、「鮫人」という言葉は冒頭の漢詩に見出されるほかは、作中に一度も見られない。作者が歌劇団の女優たちを比喩する際、「鮫人」ではなく「人魚」という言葉を使ったところに注目したい。たとえば作品に次のような文句がある。

日本近代の産物たる此の愛すべきオペラの人魚どもは、浅草に住みながら恐らく「大金」や「草津」の有難味も知らないであらう。

また作中ではシェークスピア「真夏の夜の夢」(一五九四〜一五九五年頃)が演じられるが、人魚に扮したのは林真珠である。ここには単なる言葉の選択ではなく、その言葉を使つた文化的背景があると考えられる。(鮫人)よりも(人魚)に関する記録またその伝説は実に広く、世界各国にわたっている。さて、作中に描かれた「オペラの人魚ども」は如何なる人魚伝説に関わるだろうか。日本従来の人魚伝説のみならず、大正時代に流入した西洋の人魚伝説も考察する必要がある。

第三節 林真珠のイメージとヨーロッパの人魚像

日本の人魚伝説に関して、九頭見和夫の『日本の「人魚」像——『日本書紀』からヨーロッパの「人魚」像の受容まで』⁽²⁷⁾によれば、日本における人魚伝説は清寧天皇五(四八〇)年の「八百比丘尼人魚を食う」といった伝説に遡る。⁽²⁷⁾その後の人魚の記録は、奈良時代の『日本書紀』から江戸時代の『六物新志』まで、様々な歴史書や随筆や博物書によく見られる。そして、井原西鶴「命とらるる人魚の海」や山東京伝「箱入娘面屋人魚」や曲亭馬琴「南総里見八犬伝」などの小説にも現われる。ただし、江戸時代まで古典に描写された人魚像は、中国『山海経』⁽⁸²⁾『史記』⁽⁸²⁾『本草綱目』⁽³⁰⁾から大いに影響を受けたものである。その多くは本草学の領域に属し、人魚の医学的効能が強調された。あるいはその膏を灯油に使えば、なかなか消えないなどと伝わっていた。一方で日本独自の発展も見られる。例えば、人魚の肉を食べると(不老長寿)になるとか、吉凶の前触れと捉えられるなどである。このような日本従来の人魚像は、作品中の(人魚)特にその中心的な存在である林真珠との関連が薄い。作中の林真珠はあくまで魅力に溢れた美少女として描かれていた。その容姿について次のような描写がある。

それは南が先舞台裏で見た通りの、白い寛やかな衣裳を着けた、優雅な手足を持った円顔の少女だった。明るい処で見る容貌は先より数段美しく思はれたが、此の少女の人を魅する力は顔立ちよりも寧ろ全身の肉と

骨とを蔽ふ奇妙に滑かな皮膚の色つやにあつた。自分でもそれを知つて居るのか襟から下には少しの白粉気も施してないのに、冷たい感じがするほど青白く冴えた肌には曇り硝子を日に透かしたやうな幽かな深い光沢があり、且つその光沢に怪しい潤ほひを添へて居るものは、腕、肩、脚のところどころに縞子の目の如く密生して居る銀色の尨毛であつた。その細かな而も燦然と生え揃つた尨毛の部分は日本人よりも西洋人の肌に近く、明りに反射すると猫や海豹の毛皮を連想させ、無邪気な顔の表情と対照すると艶麗ではあるが一種の鬼気を帯びて居た。人は恐らく此の顔と此の皮膚との神秘的調和に惹き付けられることであらう。

彼女は西洋人のような肌を持つており、無邪気ながら人を魅する力を備えている。観客のみならず周りの男性も皆彼女の虜となつた。服部が浅草を離れない理由の一つは彼女のためであつた。彼は林真珠に対する思いを友人の南に次のように打ち明けた。

公園の奴等には秘密なんだが、君だから白状しまはう。実は惚れて居る以上なんだ。あの女の児の顔を見ないぢや僕は生きちや居られないんだ。あの児の傍に居さへすりやあ僕は今にきつといゝ絵が画ける。

舞台姿の林真珠に見惚れている服部は、その「眼つきの裏にこそ、彼の憧れつつある永遠なものが影を宿して居る」という。服部のみならず団長の梧桐寛治も林真珠の不思議な美しさに惹かれた。

「今日は一つ遠廻しに聞いてやらう。」——さう思つては居たのだが、その決心は真珠の顔を見ると同時に消えて行つた。其の上、真珠のふざけ方はいつでも妙に執拗い馴れ馴れしいものだつた。其れでなくても女好きの梧桐は、さうされると一種抵抗し難い魔力で縛られるやうに感じた。

林真珠は普通ではない魔性に近い妖艶さと美貌の持ち主である。特に夜の浅草を舞台に妙なる歌声で多くの男性の心を迷わせる不思議な魅力を持っている。これはヨーロッパに伝わるライン川を航行する舟人を誘惑し溺死させるローレライ伝説や、美しい人魚との愛を求めるために魂を捨てたオスカー・ワイルドの童話「漁師とその魂」(一八九一・一一)を連想させる。

ヨーロッパには「ローレライ」伝説を扱う文学作品が少なくないが、その中でハイネの詩は一八九一年五月「ロオレライ」という題名で雑誌「海潮」に日本語訳された。³¹ 全詩を左に掲げる。

涙こぼれぬいかなれば 心かなしく胸痛む／ふりにし時の物語 思ひ出されてあはれ也

あたり涼しく暮れ初めて 「ライン」の流れ静なり／入日まはゆく夕栄へて 山のいたゞき照らしける

婀娜なる乙女笑みつゝも 彼方の岩にたゞずめり／皓齒金髪薔薇の頬 錦の装ひかゝやきぬ

黄金の櫛もて梳りつゝ 歌へる調の聲清く／雲の足をや止むらん 空ふく風もやみぬへし

此処漕き下る舟人は 心奪はれ気も融けて／危き暗礁をも打忘れ 嬌態に媚ふるぞあはれなる

さかまく波は鱷の口 舟諸共に吞まれけり／これぞ謎の終りなる 多情多恨ロオレライの歌³²

ライン川の美しい乙女ローレライは、その怪しい歌声で人々の心を揺さぶり、聞き惚れた舟人を死に追いこむ。それと同じように流動する夜の浅草の「海」で歌劇団のソプラノ林真珠は、妙なる歌声と不思議な魅力を以て多くの人を誘惑した。彼女が登場すると、人気が沸騰する。

彼女は別に歌をうたふのでもなくむづかしい台辞があるのでなく、ただ其処に出て居るだけで、出てさへ

居れば観客は此の少女に歓呼を浴びせた。

童話「漁師とその魂」はワイルド第二の童話集『A House of Pomegranates』に収録され、一八九一年一月に発行された。日本においては本間久雄によって翻訳され、『柘榴の家——ワイルド童話集』というタイトルで一九一六年一二月に春陽堂より刊行された。その中の一節を引用する。

一日一日と彼女の歌声は彼れの耳に快く響いて来ました。そしてその歌声が餘りに快く響いたものですから、彼れはどうとうとう自分の綱を忘れ、自分の手業を忘れて、自分の職業などはもうどうでもよいやうになつて了ひました。(…)そこで若い漁夫はかう独言をいひました。『一体、俺の魂は俺に取つてどんな用をするといふのだ？俺は魂を見ることが出来ない。魂に触ることも出来ない。魂を知ることが出来ない。俺はもう身体の中から魂といふ奴を投げ出してはふ。さうすると、却つて喜ばしいことが沢山おこるに相違ない。』と。

漁師は美しい人魚に魅せられ、彼女への恋を叶えるために、人魚の言い付け通りに人間としての魂を捨てた。これは林真珠に対する服部の気持ちと類似している。

君の知つて居る通り僕は我ながら愛憎が尽きるほど意志が弱いんだ。誘惑されれば直ぐに悪魔に魂を売る意気地なしなんだ。うまい酒があればほんの一杯でも買収されちまふし、惚れた女になら指一本で自由に動かされる。

林真珠の人物像から考えれば、谷崎がこれらの書物を読んでいたことはほぼ間違いない。特に一九一八年に書いた小説「人魚の嘆き」の貴公子・孟世壽が美しい西洋人魚のとりことなり、莫大な財産を払って人魚を入手した設定は、「漁師とその魂」の話と類似している。谷崎は東西の人魚伝説に刺激され、自分なりの想像を付け加えて、様々な要素が絡み合った林真珠のような人物を作り上げたと思われる。

第四節 二人の芸術家と谷崎の東洋への関心

作品の設定でもう一つ注目したのは、二人の登場人物、服部と南である。墮落した青年画家服部は、近代都市になりつつある東京に対して不満を抱き、慰藉を求めるために浅草に逃げてきた。ところが、近代化した東京を批判する傍ら、西洋から入ってきた活動写真や歌劇などといった各種の娯楽に耽溺し、浅草にますます夢中になっていく。もう一方、山手の教養のある家庭で生まれ育ち、支那趣味の父の供をして中国を漫遊してきた南は、中国旅行を通じて東洋芸術の偉大なる美に目覚め、油絵をやめて南画を習得することに腹を決めた。二人はそれぞれの芸術理念を持ちながら、それぞれが主張する芸術の境地に到達しようとする。二人は趣味や追求を異にするが、対立関係ではなく、むしろ互いに「この世で信じてくれる唯一の友人」である。再会した二人は、それぞれ自分の求める芸術の境地について語り合った。特に作者は南を通して東西芸術について長々と述べている。

東洋の芸術と西洋の芸術とは形式が違ふばかりでなく、根本の精神が違つて居るから。一と口に云へば、西洋では次から次へと常に新しい美をクリエートして行く、自分で自分独得の美の世界を建設する、有らゆる方面へ美を分化させ発達させる、其処に芸術の目的があり芸術家の生命がある。ところが東洋の芸術は美をクリエートするのでなく美を暗示すればいゝのだ。東洋人の考へて居る美は、暗示するより外に形で現はしやうのないものなのだ。つまり西洋人の考へて居る美の種々相のもう一つ奥にあるたつた一つの美、――

美の真髄とも云ふべきもの、——たゞ其れだけを東洋人は狙つてゐる。(…)だから東洋では水滸伝や紅樓夢よりも李太白の五言絶句の方が貴い。李太白は僅か二十十字の詩でもつて、ダンテやゲエテの領域へ一と息に行き着くことが出来る。

以上は南の芸術観であると同時に、谷崎のこの時期における美に対する思考でもあろう。谷崎は「鮫人」を發表する前年、雑誌「雄弁」にエッセイ「或る時の日記」(一九二〇・一)を書いた。そこでもほぼ同じような芸術論を述べている。

東洋——主として支那——の芸術では、「美」を通じて「虚無」に到達することを目的とする。或は「虚無」が即ち「美」であると云つても差支へはない。また「虚無」と云つて悪ければ、仏教の涅槃の觀念に似た宗教上の絶対境——永遠の世界——である。だから「意は言外に在り」で、其処に現はされたものよりは隠されたものゝ方に「美」が存在する。支那文学の精髓とも云ふべき唐詩は最も其の模範的なものであらう。(…)ところが西洋では何処までも「美」其物に目的を置く。芸術家は新しい美を創造すること、クリエートすることが大切である。「美」を通じてなく「美」それ自身のうちに永遠の生命を認め、「美」それ自身に魂を託して彼等は解脱しようとする。(…)東洋の美の觀念は単一不動のものであるが、西洋の美の觀念は地上の生命の流れと等しく永久に活動し、分化し、發達する。

谷崎の芸術論を実践に移し創作した小説が、まさにこの「鮫人」ではなかるうか。谷崎は中国文学の真髄が唐詩だと考え、「僅か二十十字の詩でもつて、ダンテやゲエテの領域へ一と息に行き着くことが出来る」という意識のもとに、小説「鮫人」のエピグラフを漢詩にしたのであろう。その漢詩と小説内容と一体如何なる関連性を持つた

ろうか。エピグラフとなった唐・岑参「送張子尉南海」（前述）の内容は次のようなものである。

不扞南州尉 高堂有老親 南州の尉を選ばざるは、高堂に老親有ればなり。

楼台重蜃氣 邑里雜鮫人 楼台 蜃氣重なり、邑里 鮫人雜はる。

海暗三山雨 花明五嶺春 海は暗し 三山の雨、花は明らかなり 五嶺の春。

此郷多宝玉 慎勿厭清貧 此の郷 宝玉多し。慎んで清貧を厭ふ勿かれ。⁽³⁴⁾

これは南海へ赴任する友人の張子（引用者注——男性への敬称）に贈った餞別の詩である。岑参はこの詩において南海地方が蜃気楼が重なって現れたり、村里には鮫人がまじっていたりする怪しいところであると述べた。そこは常に気候が悪く、雨が絶えず降り三山を籠めて海上をうす暗くする。しかし、この地方はもともと宝玉の多いところであるため、必ず清貧の境涯を厭うことなく、いつまでも廉潔な役人であるようにと友人に忠告した。南海は、中野美代子が指摘したように、「暗くおそろしいもので」、「流刑の地、あるいは絶望的な左遷の地だった」。その一方で大陸を離れるほど「エキゾティズムもかきたてられる」⁽³⁵⁾ 地方でもある。

南海は中国内陸に対して周辺的かつ後進的な地域であり、エキゾチシズムに満ちた別世界でもある。これに対して、作品中の浅草は次のように描かれた。

彼（引用者注——南）は歩きながら、自分が始めて足を踏み入れた其の辺の町、——曖昧な、下品な、低い小さな家ばかりがごたごたと押し合つて居る其の辺の露地の匂ひを嗅いだ。さうして其処に、そのじめじめした濁った空気と服部の生活とを結び付けて、或るぼんやりした好奇心を起さずには居られなかつた。（…）
たまにこんな所へやつて来ると、都会の暗黒面に潜む町の様子が、全く別の世界へでも来たやうな心地を覚

えさせるのである。彼はふと、去年の十一月の或る日の暮れに、父につれられて南京の秦淮の町をさ迷ったことを想ひ出した。

西原大輔は「江戸趣味と支那趣味」（『季刊アーガマ』一九九七・九）において、植民地と下町はその後進性や貧困という点で共通していると述べ、「鮫人」において谷崎は浅草と中国を結びつけて同一の地平に据えたと指摘した。中国に対して浅草は「内なる植民地」である。そして西洋のオペラなどをまねて浅草独特のオペラは作られ上演された。「すべての要素が混ざり合い、独特な雰囲気（36）の文化を創出する」浅草は「混合文化」の地、また東京の中の最もエキゾチックな場所だったといえよう。

南海は宝玉の名所であるのに対して浅草は食べ物や女色の歓楽の地である。いずれも人間の欲望を掻き立てる場所といえる。しかし清貧を厭わないという詩人の忠告に反して、服部は日々浅草で食物や女性に耽溺して墮落のどん底に落ちぶれた。こうしてみると、「鮫人」における人物造型、舞台設定などは、エピソードの漢詩に凝縮され、まさに「僅か二十字の詩でもつて、ダンテやゲーテの領域へ一と息に行き着くことが出来」たのである。

本章は「鮫人」における東洋と西洋からの影響を考察した。ヒロイン林真珠の人物設定と描写を中心に、その人物像と中国の鮫人伝説と西洋の人魚伝説との関連性を検討することを試みた。林真珠は鮫人と人魚の合体であり、その「混血児」のように設定されたことから東西芸術を融合しようという作者の創作意図が窺われる。

ところが、もともと「千枚位、少なくとも七八百枚」を書くつもりだったこの作品は作者の「最後まで必ず書き通す決心」（『鮫人附記』一九二〇・一）に背いて結局未完のまま終わった。その理由について、「何分活動の方をやつてみると長い物に取りつく余裕がなし、気分が統一されないので弱つて居ます」（『不幸な母の話』の文末に掲載される断書 一九二一・三）という作者自らの釈明があるが、そう簡単に片付けられない。谷崎は、ヒロイ

ンを両性具有、東西合体のような人物に設定した結果、謎に包まれた物語をいかに展開するかという難題に直面したのではないか。

「鮫人」は、谷崎が真剣に東洋芸術を考えはじめた重要な一作である。東洋への開眼と従来信仰してきた西洋芸術との間に生じた葛藤を解決するための試みでもあろう。作品の中絶はこの試みが結局失敗したことを意味しているだろう。失敗ではあったが、この失敗を通して東西芸術の融合が困難であることを自覚した谷崎が、東西の融合を諦め、完全な中国趣味の作品「鶴唳」（『中央公論』一九二一・七）の創作を経て、さらに関西移住をきっかけに「新しい東洋」として「古い日本」に目を向けるまでの文学の道程を考えると、大正から昭和へという谷崎文学の過渡期におけるその歩みと方向性が一層明確になってくるだろう。

注

- (1) 伊藤整『谷崎潤一郎全集』第九卷「解説」（中央公論社 一九五八・一一・三〇 259頁）
- (2) 松崎天民「過去の千日前とこれからの浅草」（『中央公論』第三五年夏季特別号 一九二〇・七・一五 103頁）
- (3) 野村尚吾『伝奇谷崎潤一郎』（六興出版 一九七二・五・二五 234頁）
- (4) 生方智子「谷崎潤一郎『鮫人』における『民衆芸術』のモダニティ」（『立正大学人文科学研究年報』別冊 第一八号 二〇一二・三・二〇 31〜37頁）
- (5) 森山由美「谷崎潤一郎『鮫人』小論——東西両芸術をめぐる作者の意識を中心に」（『方位』第一三号 一九九〇・八・一）
- (6) 新村出編『広辞苑』第六版（岩波書店 二〇〇八・一・一一 946頁）
- (7) 諸橋轍次『大漢和辞典』（修訂第二版）卷二二（大修館書店 一九九一・三・一〇 742頁）

- (8) 後漢・郭憲「洞冥記」『景印文淵閣四庫全書・子部三四八 小説家類』(台湾商務印書館 一九八五・一〇・五 304頁)
- (9) 左思「吳都賦」高步瀛著、曹道衡、沈玉成点校『文選李注義疏』第三冊卷五(中華書局 一九八五・一一 1119頁)
- (10) 佐野誠子著、竹田晃、黒田真美子編『中国古典小説選2 搜神記・幽明録・異苑他(六朝)』(明治書院 二〇〇六・一一・二五 286頁)。同じ記述は東晋(三一六〜四二〇)干宝『搜神記』卷十二・三一―にも見られる。
- (11) 中野美代子『中国の妖怪』(岩波書店 一九八三・七・二〇 140頁)
- (12) 早川光三郎編訳『新釈漢文大系 58 蒙求(上)』(明治書院 一九七三・八・二五 425頁、426頁)
- (13) 高橋忠彦編訳『新釈漢文大系 81 文選(賦篇)下』(明治書院 二〇〇一・七・二五 47頁、61頁)
- (14) 李昉等撰『太平御覽』第四冊卷七九〇「鮫人」(上海涵芬樓影印宋本複製重印 一九六〇・二 3502頁)引用者訳。
- (15) 黒川洋一、鈴木虎雄訳注『杜詩』第七冊(岩波書店 一九七三・六・一六 203頁)
- (16) 「鮫人潜織」「天竺国胡僧水晶念珠」「莫徭歌」「鮫人歌」の出典はそれぞれ『全唐詩』(中華書局 一九八〇・四)卷七八〇 882⁴頁、卷七八五 886⁰頁、卷三五四 396²頁、卷一三三 135⁰頁。
- (17) 「次韻家弟碧線泉」と「鮫人曲」の出典は詩詞名句網 <http://www.haoshici.com/>による。
- (18) 清・沈起鳳著、伍国慶点『諧鐸』卷七「鮫奴」(一九八六・二、岳麓書社 106頁、108頁)

- (19) 増子和男「鮫人泣珠考」(『村山吉広教授古稀記念中国古典学論集』汲古書院 二〇〇〇・三・三一 557頁)
- (20) 曲亭馬琴「新作塩梅余史」(武藤禎夫編『漸本大系』第一三巻 東京堂出版 一九七九・六・三〇 264頁)
- (21) 前掲、中野美代子『中国の妖怪』138頁。
- (22) 李昉等編『太平広記』(談愷本影印)第一冊巻四六四(国家図書館出版社 二〇〇九・六 86頁)
- (23) 田辺悟『ものと人間の文化史』143 人魚』(法政大学出版局 二〇〇八・七・一五 32頁)の日本語訳を用いた。
- (24) 前掲、田辺悟『ものと人間の文化史』143 人魚』36頁。
- (25) 「漁家傲」は詞譜の一種であり、この詞譜に合わせて様々な歌詞が作られている。それぞれの題名は歌詞の内容によって決められる。例えば、范仲淹「漁家傲・秋思」、李清照「漁家傲・雪里已知春信至」、晏殊「漁家傲・画鼓声中昏又晓」など。『水滸伝』で燕青が歌った「漁家傲」は単なる曲名(詞譜)を指しており、具体的な題名は明記されていない。
- (26) 駒田信二訳『水滸伝』下巻『中国古典文学全集』第一二巻(平凡社 一九六一・二・二八 265頁)
- (27) 九頭見和夫『日本の「人魚」像——『日本書紀』からヨーロッパの「人魚」像の受容まで』第一章「江戸時代の『人魚』像(1)——文学作品に登場した『人魚』——」(和泉書院 二〇一二・三・一〇 2頁)
- (28) 『山海経・北山経』(先秦く前二二一)「さらに東北へ二百里、竜侯の山といい、草木なくて金・玉が多い。決決の水ながれて東流し河に注ぐ。水中に人魚多し。其の状は鯢魚(さんしゅうお)の如く、四つの足、その声は嬰兒のよう」。引用文は本田斎、沢田瑞穂、高馬三良編訳『中国古典文学大系8 抱朴子・列仙伝・山海経』(平凡社 一九六九・九・一二 470頁)による。
- (29) 『史記 秦始皇本紀第六』(『新釈漢文大系』38 史記(一))『明治書院 一九七三・二・二五 366頁)に「以

人魚膏為燭、度不滅者久之」(人魚の膏を以て燭と為す。滅えざる者之を久しうするを度ればなり)とある。

(30) 李時真『本草綱目』は人魚を「鯨魚」と「鯢魚」と解釈し、その医学的効能を論じていた(白井光太郎・

鈴木真海『国訳本草綱目』第一〇冊(春陽堂 一九三〇・一一・一四 532〜535頁)。

(31) 前掲、九頭見和夫『日本の「人魚」像——『日本書紀』からヨーロッパの「人魚」像の受容まで』。

(32) ハイネ著 踏青軒主人訳「ロオレイ」(『海潮』第一号 一八九一・五・一五)

(33) ワイルド著、本間久雄訳『柘榴の家——ワイルド童話集』(春陽堂 一九一六・一二・二六 97〜99頁)

(34) 目加田誠編訳『新釈漢文大系 19 唐詩選』(明治書院 一九六四・三・一〇 343〜345頁)

(35) 前掲、中野美代子『中国の妖怪』140頁。

(36) 張栄順『谷崎潤一郎と大正期の大衆文化表象——女性・浅草・異国』第六章『鯨人』における浅草表象と

脚色される支那趣味——『鯨人』論』(語文学社 二〇〇八・六・一〇 223頁)

第六章 「鶴唳」における漢籍要素と東洋的詩情

「鶴唳」（『中央公論』第三十六年第七号、一九二一・七）は、谷崎が（支那趣味）の作品を集的に創作した時期に書かれた作品であり、作家自身の支那趣味が、中国に対して強い憧憬の念を持つ主人公靖之助に託されているとこれまで指摘されてきたが、^①内容の面における漢籍との比較考察はまだ少なく、管見によれば、詩人林逋（九六七―一〇二八年）関連説話の一つである「梅妻鶴子」（引用者注――梅を妻として鶴を子とする）のエピソードからヒントを受けたという千葉俊二の指摘以外、^②見当たらない。また、この「梅妻鶴子」は中国宋の時代に書かれた『夢溪筆談』巻一〇「人事」に初めて記載され、^③後の清の時代の短編小説集『西湖佳話』^④『西湖拾遺』^⑤などにも収められているが、谷崎が参考にしたのがどの書であるかは明確にされていない。

本章では、先行研究で指摘された「梅妻鶴子」との関連以外に、白楽天の詩（以下白詩と略す）からの影響があったことを指摘したい。谷崎は早い時期から創作の際にしばしば白詩を引用し、のち京都下鴨に構えた自邸・潺湲亭の命名も白詩にちなんだと考えられる。^⑥「鶴唳」においても、靖之助が日本で中国庭園を再現したという一挿話は、退官後の白楽天が洛陽で江南風景を再現し、悠閑な生活を送ることを想起させる。作家は直接言及してはいないが、内容上の類似性から見れば、「鶴唳」が白詩からヒントを受けたことは推測できる。

さらに、「鶴唳」における鶴は、漢籍に描かれた林和靖の鶴及び白楽天の鶴詩（鶴に関する詩）における鶴のイメージと共通する部分が見られるが、後に詳述するように新たな特徴が付加されてもいる。「鶴唳」に書かれた鶴のイメージは、谷崎後年の作品にもつながっているため、「鶴唳」の鶴像を分析することは谷崎作品全体を考える上で意義があるものと考えられる。

第一節 谷崎と『西湖佳話』

西湖の麓に隠居生活を送り、梅と鶴を愛し、未婚のまま一生を終えた宋の隠居詩人林和靖の事跡は、「梅妻鶴子」として知られている。「梅妻鶴子」の類話が収録されている漢籍は、稿者が調査した限り、日本において『西湖佳話』『西湖拾遺』『通俗西湖佳話』の三つが見られる。このうち、谷崎が自分の作品の中で言及しているのは『西湖佳話』のみである。まず「改造」一九一九年六月号に発表した小説「西湖の月」において次のように述べている。

食堂車のまづい洋食で飢を凌いで、しよざいなさに携へて来た石印の西湖佳話を読んで居るうちに、戸外は真つ暗になつてしまつた。

また、「聞書抄初出巻頭」（「大阪毎日新聞」一九三五・一・八）においても以下のように記述されている。

嘗て私は南支那を旅行して杭州の西湖に遊んだ時、昔蘇東坡が此の地に左遷されたことを思ひ起して、左遷と云つてもかう云ふ山紫水明の土地に流されるなら何を悲しむことがあらうぞ（…）「西湖佳話」に載つてゐる彼の詩に曰く、「湖光滄澹晴るれば偏に好し、山色空濛雨も亦奇なり、若し西湖を把つて西子に比ぶれば、淡粧濃沫也相宜し」と。

右の「西湖の月」において、注目すべきは、小説の主人公が所在なさを紛らわすために石印版の『西湖佳話』を読むという設定である。陳美林「墨浪子及其『西湖佳話』」⁽⁸⁾を参考に、『西湖佳話』の刊本を調査したところ、谷崎に年代的に近いものに一八九二年に上海文選局により刊行された石印版がある。さらに、ほぼ同じ時期に谷崎

が書いた戯曲「蘇東坡」（「改造」一九二〇・八）を参照すれば、谷崎が石印版の『西湖佳話』を読んだことがありと確定できる。

「蘇東坡」は、登場人物、人物名、中に引用された漢詩文、エピソードなどいづれも中国の典拠によったものと考えられる。当時日本で「蘇東坡」と類似した話を収めている漢籍は、大庭修『江戸時代における唐船持渡書の研究』⁹によれば、前述した石印版の『西湖佳話』のほか、『西湖拾遺』がある。また、中国からの「持渡書」のみならず、文化二（一八〇五）年に大坂敦賀屋九兵衛より出版された『西湖佳話』の日本語抄本『通俗西湖佳話』がある。この三つのうちで、『通俗西湖佳話』は日本語版で読みやすいと思われるが、抄本であるため、内容の削除・省略が多く見られる。例えば「蘇東坡」の主要なストーリーであるところの主人公の毛沢民の暇乞いをめぐる蘇東坡とのやり取りなどはすべて見当たらない。また「蘇東坡」に引用される次の詩も、『通俗西湖佳話』には見当たらない。

涙は欄干を湿ほし花は露を着く／愁は眉に到つて峰の碧聚まる／此の恨み平分して取れば／さらに言語なうして空しく相窺ふ二細雨／残雲意緒なし、朝々暮々¹⁰／今夜山深きところ／断魂潮に分付して回り去らん

『西湖佳話』と『西湖拾遺』のいずれにも出てくる「惜分飛」という詩である。その原文は以下のとおりである。

淚湿欄干花着露、愁眉峰碧聚。此恨平分取、更無言語、空相窺二細雨、殘雲無意緒、寂寞朝朝暮暮。今夜山深處、断魂分付潮回去。

このような点から、谷崎が参照したのは『通俗西湖佳話』ではなく、『西湖佳話』または『西湖拾遺』のいずれか

であると推察される。

『西湖佳話』と『西湖拾遺』とは、『西湖拾遺』の方が『西湖佳話』より後に世に出たため、収録している物語の数はより多いものの、両者が共有する説話の内容はほとんど一致する。谷崎の戯曲「蘇東坡」と関係のある蘇東坡関連説話は両方に収録されている。登場人物とエピソードは全く同じであるが、漢詩文には微かな違いが見られる。例えば、左に挙げた詩文はほとんど同じ内容ながら、傍線部の表現が異なっている。

碧澄澄凝一萬頃、徹底瑠璃、

青娜々列三百面、交加翡翠、春風吹過、艷桃穠李如描、夏日照來、綠蓋紅蓮似畫、秋雲掩映、滿籬嫩菊堆金、冬雪分飛、孤嶼寒梅破玉、曉霞連絡三天竺、暮靄橫堆九里松、風生於呼猿洞口、雨飛來龍井山頭、簪花人逐淨慈來、訪友客投靈隱寺。

（『西湖佳話』）

碧澄澄凝一萬頃、徹底瑠璃、青娜々列四圍、交加翡翠、春風吹過、艷桃穠李如描、夏日照來、綠蓋紅蓮似畫、秋雲掩映、滿籬嫩菊堆金、冬雪分飛、孤嶼寒梅破玉、曉霞遠帶三天竺、暮靄高籠九里松、習習風生把酒、虎跑泉上、濛濛雨至、煮茗龍井山辺、聞遊人過淨慈來、好靜客投靈隱寺。

（『西湖拾遺』）

一方、谷崎の戯曲「蘇東坡」におけるこの漢詩文は、次のとおりである。

碧澄々として、凝たり一萬頃、徹底瑠璃／青娜々として、列なる三百面、交翡翠を加ふ／春風吹いて過ぐれば、艷桃穠李描くが如く／夏日照らし来れば、綠蓋紅蓮画に似たり／秋雲掩映すれば、滿籬の嫩菊金を集め／冬雪分飛すれば、孤嶼の寒梅玉を破る／曉霞は連絡す三天竺／暮靄は横堆す九里松／風は呼猿洞口に生じ

／雨は龍井山頭に飛来す／簪花人は逐ふ、浄慈来訪の友／客は投ず靈隠寺

傍線部の箇所を見れば、「蘇東坡」におけるこの詩の引用が、『西湖佳話』によったものであることは明らかであろう。谷崎は『西湖佳話』に単に言及したのみならず、実際それを熟読し、自ら創作の材源にしていたのである。戯曲「蘇東坡」のほか、「鶴唳」においても『西湖佳話』の投影が見られる。先行研究において、千葉俊二が指摘したように「鶴唳」の創作にあたって、谷崎がヒントを受けた「梅妻鶴子」の話は『西湖佳話』巻五「孤山隠蹟」所収のものによっていると推測できる。

第二節 「鶴唳」と『西湖佳話』巻五「孤山隠蹟」

「鶴唳」と『西湖佳話』巻五「孤山隠蹟」との関連性については、まず、主人公の名前の類似性が指摘できる。「鶴唳」の主人公である星岡靖之助の名前は、「孤山隠蹟」の主人公である林和靖の「靖」にちなんでいると思われる。また、二者とも結婚を拒否したことも重要な一点であろう。『西湖佳話』において林和靖の結婚拒否は、以下のように書かれている。

人有勸其娶者、又有勸其出仕者、君復俱以不為然。因自思曰、人生貴適志耳、志之所適、方為吾貴。然吾志之所適、洵室家也、洵功名富貴也、只覺青山綠水與我情相宜。而鼓鐘琴瑟未嘗不佳、以我志揆之則落英饑可餐。笑拏案齋眉之多事、紫綬金章未嘗不顯、以吾心較之、則山林偏有味、愧碌碌因人之洵高。

（人に其れ娶ることを勸む者有り。又其れ出仕を勸む者有り。君復は俱に以て然りと為さず。因つて自ら思ひて曰く人生は志に適ふことを尊ぶのみ。志の適ふ所、方に吾が尊ぶことと為す。然るに、吾が志の適ふ所、

室家に非ざるなり、また功名富貴に非ざるなり。只だ青山緑水我が情と宜しと覚ゆるのみにして。鐘琴瑟を鼓すこと未だ嘗て佳からず。我が志を以て之を揆るに則ち落英、飢えに餐ふべし。挙案齊眉多き事を笑ひ。紫綬金賞未だ嘗て顕れず。吾心を以て之を較ずるに、則ち山林偏に味有り。碌々として人の非高を愧ず。⁽¹¹⁾

同じく「鶴唳」の主人公靖之助も東京の大学を卒業した後、祖父が建築した「梅崖荘」に閉じこもって終日漢籍ばかり読み耽り、母に結婚の話を持ち出されるたびに固く断っている。

母親は伴の身を堅めさせようといろいろ気を揉みましたが、何分当人がそんな風で、とても結婚する意志などはないらしく、手の付けやうがなかつたのです。

さらに、結婚を拒否した林和靖と靖之助は、二人とも鶴を愛している。和靖は、俗世を離れ、西湖の麓にある孤山で隠居生活を送っている。毎日遊山翫水に出て、客が尋ねてきてもわからないので、和靖は二羽の鶴を飼い、客の来訪を伝達させる。そして、言うことをよく聞き分けた鶴を自分の子になぞらえる。

和靖毎因山水之好、多不在家、便想一法、買下仙鶴二雙、置之園中、參養已馴、遂縦之入雲、少頃、即歸入籠内、和靖大喜、道此猶吾子也。

(和靖は毎に山水之を好むに、家に不在多し。便ち、一法を想ひ、仙鶴二隻を買ひ下げて園中に置く。參養して己に馴れ、遂に之をして雲に入らしむ。少頃して、即ち帰りて籠内に入る。和靖は大きに喜びて道ふ「猶ほ吾子のごとし」。⁽¹²⁾)

一方、「鶴唳」において、靖之助は、中国から戻ってきた時、一人の少女と一羽の鶴を一緒に連れてきて、それらを朝夕の友とする。

茲に断つて置かなければならないのは、靖之助は一人で帰つて来たのではなく、奇妙な二つの土産物を携へて来たのです。その一つは私があゝの庭で見た鶴でした。そしてもう一つは、それもあゝの鶴のやうな優しい姿をした、十七八の可愛らしい支那の婦人でした。(…)彼は一旦しづ子に与へた家屋敷を取り返して、置き所のない自分の身をそこに落ち着かせ、支那の鶴と支那の婦人とを朝夕の友としつゝ、煩ひのない、好きな生活を営まうとしたのです。

林和靖と靖之介は、それぞれの性格などの差異はさておき、表層的な面においては結婚への拒否や鶴への愛着といった特徴が共通すると言うことができよう。ただし、両者の共通性はそれぞれ全く違ふところから生じたものである。まず、結婚を拒絶した理由について、林和靖は西湖の山水を愛し、俗世間の功名富貴を追求するより遊山翫水のほうが一層心性を陶冶できると、自ら結婚を拒否する。いわば悠々自適な隠居生活を送ろうと望んだからである。それに対して、靖之助は、人間の欲望を捨てるよりむしろその極致を追求しようとするために、平凡かつ新奇のない生活に不満を持ち、平凡な女性との結婚を拒否した。作品には次のように書かれている。

その陰鬱を紛らすために酒を飲んだり芸者買をしたりして、始終母親に心配の種を蒔いたのでした。彼が東京の帝大の文科を出たのは三十七八年頃のことと、その時分は放蕩生活がますます募るばかりだったので。(…)さうして為す事もなくブラブラと日を送るより外に、彼には何の楽しみもないやうでした。其の頃の話ですが、靖之助はよく、「日本は詰まらない、何処か外国へ行つてしまひたい」と、口癖のやうに云つて

居たさうです。

また、両者の鶴に対する感情にも違いが見られる。林和靖は、鶴を自分の子になぞらえながら、あくまで客の来訪を伝達させる従僕として扱っている。一方、靖之助は、中国から持ち帰ってきた一羽の鶴を、中国の少女と同じく自分の朝夕の友とし、自分と対等な立場に置いている。

そのほか、「梅」も『西湖佳話』と同じく、「鶴唳」にも多く書かれており、「鶴」以外のもう一つの重要な記号として注目すべきである。人物造形との関係において梅が果たす役割は二作で異なっている。まず、『西湖佳話』において林和靖と梅との関係は、彼の梅への愛着として以下のように捉えられている。

園中艶桃穠李、魏紫姚黃、春蘭秋菊、月桂風荷、泚不概植、而獨於梅花更自鍾情。高高下下、因山傍水、遶屋依欄、無泚是梅。和靖所愛者、愛其一種縞素襟懷、冷香滋味、與己之性情相合耳。自此月增日曩、不覺恰好種了三百六十株。

（園中に、艶桃、濃李、魏紫、姚黃、春蘭、秋菊、月桂、風荷を概ね植ゑざるには泚¹³ずして、独り梅花にさら¹³に自ずから鐘情す。高高下下、山に因り水に傍し、屋を遶り欄に依るも、是れ梅に泚ざるは無し。和靖の愛す所の者は、其の一種の縞素襟懷、冷香滋味、己の性情と相合ふるを愛するのみ。此れより日を増し月を重ね、覺えず恰も好き三百六〇株植たり。）

中国では古来より（梅・蘭・竹・菊）は高潔、淡泊、世に媚びないといった品格によつて君子の象徴と見なされている。歴代の文人たちは自らの詩や画の題材として、（梅・蘭・竹・菊）を好んでおり、その愛着によつて、自

分が君子であることを表明する。⁽¹⁴⁾従って、『西湖佳話』において林和靖が梅を愛することの描写は、和靖が高潔な君子という性格を強調する役割を果たしている。

一方、「鶴唳」においては梅に関する描写がしばしば出てくるが、その多くは物語が展開される前に語り手である「私」が散歩した東京郊外の公園の風景として書かれており、主人公靖之助が登場する場面に梅が描写されることは少ない。「鶴唳」の冒頭に書かれている「東京から程遠くない海岸にある暖かい」、「旧幕府時代に何十万石かの或る大名の城下」、「とどこどころの百姓家や邸の庭の梅の花はあらかた散つてしま」ったという物語の舞台描写は、谷崎が一時暮らした小田原のことを連想させるであろう。小田原は昔から梅の名所として知られていた⁽¹⁵⁾。谷崎終平の回想録『懐かしき人々 兄潤一郎とその周辺』⁽¹⁶⁾によれば、谷崎一家は大正八年の暮に小田原に引っ越したという。その風景について「城下町の名残りあつて静かな東京より暖かく良い処」、「海岸までは二、三町あつた」と述べられているところから、物語の舞台とよく似ていることが分かる。従って、作中の梅に関する描写は単なる林和靖の説話からの影響だけではなく、住んでいた場所とも関連するものと推測される。作品における梅の描写中で主人公・靖之助と関わる部分は以下の一箇所のみである。

築山と云ふ程でもない極く柔かな勾配を持ったその丘には、公園のそれにも劣らない見事な梅の古木が五六株植わつて居る中に、支那の太湖石に似た岩がところどころに据ゑてあつて、その先の方はどうなつて居るのかハツキリ分らない、(…)

ここで梅は単なる庭の一要素として描かれ、主人公靖之助がそれに対して愛着を持つとは描写されない。従って『西湖佳話』巻五「孤山隠蹟」において重要視される「鶴」と「梅」との二つの要素は、「鶴唳」においてそれぞれが持つ元来の意味合いが変化したり、薄れたりしているということが指摘できる。さらに谷崎は「梅妻鶴子」

から変奏したモチーフを、後に述べるように、その他の要素と新たに組み合わせることによって独自の物語を完成させたのである。

第三節 「鶴唳」と白楽天の詩

「鶴唳」を検討する上で、『西湖佳話』所収の「梅妻鶴子」譚以外に、もう一つの漢籍の影響が見られる。それは白詩である。日本において白詩を最も多く収録している『白氏文集』には様々な刊本が存在するため、⁽¹⁷⁾谷崎が読んだものを確定するのは難しい。本章においては、年代的に谷崎に近い刊本の『白氏文集』（支那哲学研究会訳注、菊地屋書店 一九一二・四）を使用し、考察を行うことにする。

(1) 谷崎と白詩

先行研究において「鶴唳」と白詩との関連性は言及されていないが、小説の内容と白楽天の鶴に関する一群の詩、「池上篇併序」とを比較すれば、その類似が見られる。詩と作品の内容との関連を考察する前提として、谷崎の白詩との接触について確認しておく必要がある。谷崎は早い時期からしばしば創作に白詩を引用した。白詩への言及はエッセイ「道徳的観念と美的観念」（『学友会雑誌』一九〇二・六）が最初のもものと見られる。

天然は往々逆境に呻吟せる人をして詩人化せしむ、見よ、船を遶る明月江水寒き夜、潯陽江頭空船の孀婦が述懐は、白楽天が筆に依て以て琵琶行を為さしめしに非ずや（…）。

ここでは、白楽天の「琵琶行」が言及されている。その後は、例えば「異端者の悲しみ」（『中央公論』一九一七・六）、「蘆刈」（『改造』一九三一・一一〜一二）、「少将滋幹の母」（『毎日新聞』一九四九・一一・一六〜一九五〇・

二・九）などにおいても白詩が言及・引用されている。引用の白詩は題名とそれを言及した谷崎の作品を挙げてみれば、「長恨歌」（「異端者の悲しみ」）、「琵琶行」（「蘆刈」）、「醉歌・示妓人商玲瓏」「勸我酒」「失鶴」「夜雨」「洛陽東花下作」「秋夕」「自嘆二首」（「少将滋幹の母」）である。

序章で述べたように谷崎の少年時代は漢学が必要な教養として要求されることが薄れつつあったが、漢学を学ぶという前時代の名残がまだ尽きないため、基礎的な漢文古典との接触がまだ多く見られる時代だった。谷崎も漢塾に通い、学校でも漢文に触れ、漢詩の試作も行っている。また、日本において白樂天は李白、杜甫と比肩する唐の詩人であり、『白氏文集』は平安期に日本に伝わり、歴代の知識人の愛読の書と見なされ、日本文学に大きな影響を与えた。¹⁸⁾従って、谷崎の『白氏文集』との接触はごく自然なことといえる。

（2）白詩と「鶴唳」

さて、「鶴唳」と白詩との関連について、まず作品のタイトルである「鶴唳」という言葉が注目される。白詩には「鶴唳」またはその類似表現がいくつか見られる。

池上篇併序 露清鶴唳之夕（…）

霓裳羽衣歌 翔鸞舞了却收翅、唳鶴曲終長引聲。

「鶴唳」という題名を単なる鶴の鳴き声という意味の言葉として解するに止まるだけでは、白詩との関連は明確にはならない。しかし、小説の内容、主人公に関する挿話などの諸方面を総合して考察すると、谷崎が白詩からヒントを受けた可能性は十分にあると考えられる。特に「池上篇」に「鶴唳」の語が使われていることは注目値する。「鶴唳」において支那趣味を持つ主人公の靖之助が中国への強い憧れから自家に中国江南風の庭園を構

築し、そこで隠居生活を送るといふ一節と、蘇州・杭州の刺史を辞して洛陽で江南庭園を再現した白樂天の悠々自適な隠居生活との類似性を指摘できるからである。

白樂天が杭州刺史を辞めて洛陽に戻った長慶四（八二四）年、老後のために、また杭州から持ち帰った天竺石と華亭鶴二羽を安置するために水の豊かな宅を求めた。⁽¹⁹⁾ その庭を詠む数多くの詩に表現された自邸は、江南の河や湖を髣髴させる、そのミニチュアとも言い得るものであったようだ。庭に配置せられた風物も、彼がわざわざ江南から買い求めたものであるという。この景観を詠んだ一群の詩をとりまとめたものが「池上篇」である。その序において、庭の配置物の出所について「樂天罷杭州刺史時、得天竺石一、華亭鶴二以帰（…）罷蘇州刺史時、得太湖石、白蓮、折腰菱、青版舫以帰」⁽²⁰⁾（樂天杭州刺史を罷めし時、天竺石一、華亭の鶴二を得て以て帰る。（…）蘇州刺史を罷めし時、太湖石、白蓮折腰菱、青版舫を得て以て帰る）と書かれている。また、庭の様子に關しては、「池上篇序」に述べられている池を巡る径や三島徑に通ずる橋のほか、以下のように書かれている。

十畝之宅、五畝之園、有水一池、有竹千竿、勿謂士狹、勿謂地偏、足以容膝、足以息肩。有堂有亭、有橋有船、有書有酒、有歌有絃、有叟在中、白鬚飄然、識分知足、外無求焉。如鳥選木、姑務巢安、如龜居坎、不知海寬、靈鶴怪石、紫菱白蓮、皆吾所好、盡在吾前。時飲一杯、或吟一篇、妻孥熙熙、鷄犬間間、優哉遊哉、吾將終老乎其間。

白樂天の庭には、池、竹、堂、橋、池を巡る径、鶴、築山、怪石などが配置されている。一方、「鶴唳」の靖之助の庭に關しても、「池の汀をうねつて居る路」、「二三丈の高さの崖」、「清新な竹」、「『亥』の字のやうな形に幾つも折れ曲つた橋」、「支那の太湖石に似た岩」、「池を前にして建てられた或る支那風の建物」などの描写が見られ、白樂天の庭にある池、竹、堂、橋、鶴、池を巡る径、太湖石などの配置と同じである。さらに、それらの配置物

は日本ではなく、遠く中国から運ばれてきたものである。

靖之助が帰ってから間もなく、或る日支那から材木だの瓦だの、種々な建築材料が届きました。それが着くと、靖之助は待ち構へて居たやうに大工を庭へ入れて、長い間住む人もなく荒れ果てて居たところの、――しかし、祖父以来深い由緒のある梅崖荘を、取り壊してしまひました。そしてその跡に、自分が一々指図して、それらの材料を組み立てました。それがあの鎖瀾閣だつたのです。

鎖瀾閣の名称は、西湖周辺にある名所・文瀾閣と鎖瀾橋にちなんだものではなからうか。文瀾閣は杭州西湖孤山の南麓にあり、清・乾隆四九（一七八四）年に建てられた。近くに白堤（白樂天が造ったという西湖の人工堤防）や西冷橋（西湖周辺にある蘇小小ゆかりの地）などの観光名所がある。『四庫全書』を蔵する文瀾閣は全国的に修築された七大官府蔵書閣の一つである。江南にあった三閣において唯一現存している。現在の文瀾閣は光緒六（一八八〇）年に再建されたものである。谷崎は一九一八年の中国旅行の時、西湖周辺を見物した際に恐らくこの建物を見ただろうと考えられる。鎖瀾橋は蘇堤（蘇東坡が造ったという西湖の人口堤防）にかかる二番目の橋で、蘇堤六橋の一つである。（小説）「西湖の月」にある「蘇東坡が築いたと伝へられる所謂蘇堤の六橋のうち、左から数へて第一の映波橋と第二の鎖瀾橋とは樹蔭に隠れて居るけれども、第三の望山橋と第四の庄堤橋とは私の船の行く手にあたつて弓の如く反つて居るのである」という描写から谷崎は確かにここにも来たと推測できる。ちなみに一九二八年に谷崎が自らデザインして建てた阪神間唯一の自邸――岡本梅ノ谷の家は阪神大震災で全壊したが、復元されたものはたつみ都志が小説「鶴唳」にちなんで「鎖瀾閣」と命名した。²¹

靖之助の日本における中国江南庭園の造作と白樂天の洛陽における江南の再現とは、発想の面においてのみならず、設計などにおいても共通点が多く見られるわけである。

第四節 鶴のイメージの変容とタイトル「鶴唳」の象徴性

「鶴唳」と白詩については、前述した「池上篇」との関連以外に、鶴を詠む詩との関連も見られる。王秀傑は、『仙鶴——鶴文化雑談集』において、鶴を愛する唐代文人の逸話の中から、とりわけ白楽天の例を挙げ、「白居易は非常に鶴を愛し、鶴を詠んだ漢詩が凡そ三〇首もある」と指摘したが、具体的なものは挙げなかった。稿者が改めて調査・考証したところ、白楽天の鶴詩は三十一首あることが明らかとなった。この三十一首の鶴詩における鶴のイメージは、基本的には、「感鶴」の「不群の者であり、飢えても腐鼠を啄まず、渴いても盗泉を飲まず」というような、高潔な君子として見なされている。また、「劉蘇州以華亭一鶴遠寄以詩謝之」のような詩人自身の喩えも見られるが、その多くは（「病中對病鶴」「和裴侍中南園靜興見示」「失鶴」「郡西亭偶詠」「自喜」「答裴相公乞鶴」「家園三絶」）のように「伴」として描かれる。

それに対して、「鶴唳」の鶴は、常に女性と同時にあらわれ、女性と鶴という組み合わせの存在として登場し、時に鶴が女性らしく、時に女性が鶴らしく描写されている。

送り込むと同時に鶴はぐつと唾液を嚥んで、眼には切ない涙を溜めさうに思ひますが、それは人間の考へで、彼女は猶も空を向いたまゝ、切なかつたのか旨かつたのか、兎に角ガアガアと鵝鳥の啼くやうな声で啼きます。(…)彼女の神々しい真白な体が、——多分その鶴は丹頂だったのでせう。(…)その叫び声を誰も気に留めなかつたのは、鶴の唳き声だと思つたからださうです。彼女は、やつと照子と同じくらゐな小柄な女で、而も非常に小ひさな足を持つて居たので、實際鶴が歩くやうにチョコチョコと走りながら、池の周りを逃げ廻つて南の丘の方へ駆けて行きました。(…)殺された時の支那の女の悲鳴が、それが又、鶴の唳き声にそつくりだつたと云ふ話です。

靖之助の鶴は、中国から連れて帰ってきた「支那の婦人」と同じように、彼にとって朝夕の友である。彼女の死ぬ直前の叫び声が鶴の鳴き声と同じように聞こえてくるという描写には、鶴と女性のイメージが重なったという含意が読みとれるであろう。つまり、作中の女性と鶴の関係は、女性の影に鶴があり、鶴の中に女性があるような、曖昧かつ奇妙なものである。それは林和靖の客の来訪を知らせる鶴とは本質的に異なっている。また、同伴者という意味合いにおいては、白楽天の鶴と変わらないようにみえるが、白楽天の高潔な君子である鶴に対して、靖之助の鶴はあくまで女性的な存在として扱われている。このような鶴像は、後年の谷崎の作品「少将滋幹の母」（前掲）にも見られる。

父は最初、子供に覚え易いやうに、一句づゝ句切つてゆつくりと云ひ、滋幹が一句を唱へ終るのを待つて次に進むやうにしたが、さうしてゐるうちにだん／＼教へてゐると云ふ心持を忘れ、己れの感情の赴くまゝに声を張り上げ、抑揚をつけて朗吟し出した。――／＼失うて庭の前の雪となり／＼飛んで海の上の風に因る／＼九霄に侶を得たるなるべし／＼三夜籠に帰らず／＼声は碧の雲の外に断え／＼影は明けき月の中に沈む／＼郡齋これより後は／＼誰か白頭の翁に伴はん／＼滋幹は他日成長してから、此の詩が白氏文集にある「鶴を失ふ」と云ふ題の五言律詩であることを発見したので、当時は何のことか解し得なかつたのであるが（：）。

「少将滋幹の母」においても、美貌の若妻・北の方を奪われた国経は、白詩「失鶴」を吟じ、妻を鶴になぞらえ、つきない悲嘆の念を訴える。このような鶴像は直接に鶴を詠む白楽天の鶴詩に見られないが、鶴と関係のある詩に「雨中聴琴者弾別鶴操」（雨中琴者の別鶴操を弾くを聴く）があり、「双鶴分離一何苦、連陰雨夜不堪聞。莫教遷客孀妻聽、嗟嘆悲啼詭殺君」（双鶴の分離は一に何ぞ苦しき、連陰雨夜聞くに堪はぬ。遷客孀妻をして聴かせること莫れ。嗟嘆悲しく泣きて君を殺めるや。）とある。これは詩人が雨夜に名曲・商陵牧子の作と言われる「別鶴

操」を聞いた後の悲しい心境を詠う詩である。牧子は妻を娶って五年も経っていたが子供ができず、そのため父兄に新妻を勧められ今の妻との別れを強いられた。牧子は夜中に泣き出した妻の悲しみを察してこの曲を作ったという。歌詞には「将乖比翼兮隔天端。山川悠遠兮路漫漫。攬衣不寐兮食忘餐。」⁽²⁴⁾（将に比翼に乖かんとすれば天の端を隔つることなり。山川悠遠として路漫々たり。衣を攬り寝ねば食ふに餐を忘るるなり。）とある。谷崎が作った鶴像は全くこの典拠によるものではないが、女性を鶴に譬えるところが共通するだろう。

また「鶴唳」というタイトルは、「風声鶴唳」という四字熟語を連想させる。「風声鶴唳」は『晋書』（唐・房玄齡等編）「謝玄伝」の故事からきている。「謝玄伝」では中国前秦（三五―三九四年）の苻堅の軍が敗走し、その敗軍の兵が風の音や鶴の鳴き声を聞いただけで、敵兵の追撃と思い恐れおののいたという故事が記録された。「風声鶴唳」は後におじけづいた人が少々のことにも心を驚かすことの譬えになった。「鶴唳」というタイトルは、支那少女が殺された時に発した鶴の鳴き声のような悲鳴を指すのみならず、その鳴き声に一種の恐怖を感じたことも暗示しているだろう。少女の悲鳴によって、靖之助は自ら築いた詩情的な世界と別れなければならない。この声は支那への熱中が危険であることを予告する警鐘のようなものだ。「鶴唳」の後谷崎は中国関係の作品の創作がほとんど見られなくなる。

第Ⅱ部では、谷崎の初回の中国旅行以後に発表された小説「鮫人」と「鶴唳」の典拠と受容の実態及び小説のモチーフを考察した。第五章では、「鮫人」の典拠とヒロイン林真珠の人物像、小説の構成やこの時期の谷崎の思想の変遷を考察した。ヒロイン林真珠の人物像をはじめ小説に東西要素の対立項がいくつか設定されている。例えばエピソードとしての漢詩とその後の小説との対立、東洋画へ転向した南と西洋画を描く服部という二人の芸術家の対立などである。この思想的変遷の原因は、つまり南が話した、中国旅行を通じて真の東洋を実感しその自然や芸術に深い感銘を覚えたことである。これは中国旅行後の谷崎の心境でもあり、その後の純（支那趣味）の作品「鶴唳」の創作にもつながる。第六章では、「鶴唳」の典拠を明らかにした上で、小説と漢籍における鶴の

イメージの異同を検討した。その他、江南を愛し鶴を愛する点において靖之助は唐の詩人白楽天との共通性も指摘した。しかし「鶴」のイメージにおいて、白詩の高潔な君子のイメージと違い、靖之助の鶴は支那少女と一体化された、東洋文化や東洋詩情の象徴だった。靖之助はこの少女と鶴を身近に置くことによって憧れの中国との接近を求めた。

旅行後に書かれたこの両作品はそれ以前の素材を中心とする中国古典の受容と違い精神面の受容も見られる。このような変化は、「鮫人」の東洋と西洋の特徴を兼ね備えた人物林真珠の設定から既に窺われていた。さらに「鶴唳」に登場した抽象的な美を持つ支那少女の設定によって一層明確に見えてくる。「鶴唳」に描かれたへ支那趣味へは皮相的なものではなく、鶴と支那少女の登場や女性像の描写などによって東洋芸術の精神も表現された。「鶴唳」は暗示的、抽象的な東洋美が形にされたものであり、そこには女性の妖艶な肉体も男性の欲望もなく、あるのは東洋的詩情のみである。

中国古典の受容において、「麒麟」「人魚の嘆き」「人間が猿になった話」が素材に留まる表層的な受容とすれば、東西洋を象徴する様々な二項対立を設定する「鮫人」はその過渡的なもので、「鶴唳」は詩的という東洋芸術の真髓を最も体現する思想的受容であるといえよう。

注

- (1) 西原大輔『谷崎潤一郎とオリエンタリズム——大正日本の中国幻想』(中央公論新社 二〇〇三・七・二五
127頁)
- (2) 千葉俊二「オリエンタリズムを越えて」『谷崎潤一郎 上海交遊記』(みすず書房 二〇〇四・一〇・二〇)
所収、253頁。
- (3) 筆記、全一九巻、宋沈括撰。人物、説話、政治、芸術、薬学などの知識が一七の部類に分けて記述されて

いる。林和靖の逸話は卷一〇「人事」の「林逋隱居」というタイトルで記されている。原文は、「林逋隱居杭州孤山、常畜兩鶴、縱之則飛入雲霄、盤旋久之、復入籠中。逋常汎小艇、游西湖諸寺。有客至逋所居、則一童子出応門、延客坐、為開籠縱鶴。良久、逋必棹小船而歸。蓋嘗以鶴飛為驗也。逋高逸倨傲、多所学、唯不能棋。常謂人曰…『逋世間事皆能之、唯不能担糞與着棋』」。宋・沈括著、唐俐注訳『夢溪筆談』（崇文書局 二〇〇七年五月 59頁）から引用。

(4) 王秀傑『仙鶴——鶴文化雑談集』（遼海出版社 二〇〇八・一一 42頁）

(5) 清墨浪子編全書名『西湖佳話古今遺跡』、一六七三年に成書。西湖にまつわる説話十六篇を収録する短篇小説集。

(6) 清陳梅溪編、一七九一年に成書。西湖にまつわる説話四八篇収録する短篇小説集。

(7) 谷崎は『潺湲亭』のこととその他（「中央公論」一九四七・一）というエッセイを書いているが、命名の典故については明確に言及していない。命名の理由として、「窓の外には絶えず白川の水の音がした。ふと私は、此処に住んでこの家を「潺湲亭」と呼んだら、などと思つた」の一文が挙げられる。一方、白楽天詩集にも同じ「潺湲」が用いられ、類似した趣向を詠む詩が数首見られる。「亭西墻下伊渠水中置石激流潺湲成韻頗有幽趣以詩記之」「六月灘聲如猛雨、香山樓北暢師房。夜深起凭闌干立、滿耳潺湲滿面涼」などである。谷崎が白楽天を愛読したため、「潺湲」という言葉には、白詩からの投影があると推測できる。

(8) 陳美林「墨浪子及其『西湖佳話』」（『東南大学学報』第一卷第二期 一九九九・五・二〇 90頁）

(9) 大庭修『江戸時代における唐船持渡書の研究』（関西大学東西学術研究所 一九六七・三・一）。『西湖佳話』『西湖拾遺』に関する記録はそれぞれ 598頁、734頁と 475頁、623頁、738頁に見られる。

(10) 「此恨平分取、更無言語、空相窺細二雨、殘雲無意緒、寂寞朝々暮々」という句に関して、谷崎の書下し文には、「寂寞」という言葉が訳されなかったが、そのまま引用する。

- (11) 引用者訳。
- (12) 引用者訳。
- (13) 引用者訳。
- (14) 諸橋轍次『大漢和辞典』(修訂第二版) 卷三(大修館書店 一九八九・六・一〇 12頁)と相賀徹夫『日本大百科全書』巻一〇(小学館 一九八六・七・一 672頁)によれば、蘭・菊・梅・竹は、草木や花のなかで気品があり高潔であるところから、草木の四君子と呼ばれ、東洋画の題材とされ、中国で特に宋・元代の文人画家の間で流行し、日本でも盛んに描かれたという。例えば明(一三六八〜一六四四)・黄鳳池(生没年不詳)が編集した画譜集に梅竹蘭菊を画題にした『梅竹蘭菊四譜』があり、その序文に「文房清供、独取梅竹蘭菊四君者、無他、則以其幽芬逸致、偏能滌人之穢腸而澄瑩其神骨」とあるように梅竹蘭菊を四君子と称した。引用の出典は黄鳳池編『新鐫梅竹蘭菊四譜』(文物出版社 一九八二・三 1頁)。
- (15) 遠藤元男、児玉幸多、宮本常一編『日本の名産事典』(東洋経済新社 一九七七・一〇・一七 282頁)によれば、小田原の梅は、神奈川県の特産である。小田原城主久保忠真が寛政八年に、藩士の家には梅を必ず植えること、また古木を保存することを命じて梅の栽培を奨励していたことをきっかけに、それ以来、町人、農民も梅を栽培するようになったという。
- (16) 谷崎終平『懐かしき人々 兄潤一郎とその周辺』(文藝春秋 一九八九・八・一五 58頁)。初出は「兄・潤一郎と千代夫人のこと」(『文学界』昭和六十三年五月号 一九八八・五・一)。
- (17) 例えば、『白氏文集抄』(阿忍寫 建長二年(一一二五〇))、『白氏文集』全七一巻(那波道圓校刊 元和四年(一一六一八))、『白楽天詩集』(近藤元粹編 全五巻 一八九六)、『白氏文集』(支那哲学研究会訳注、菊地屋書店 上・下 一九一二・四)、『白楽天詩集』(南州近藤元粹評訂 嵩山堂刊行 1・2 一九一二)などが挙げられる。

- (18) 堤留吉『白楽天研究』（春秋社 一九六九・一二・三〇）による。
- (19) 中純子「白居易と詞——洛陽履道里における江南の再現」——『白居易研究講座第一卷 白居易の文学と人生1』（勉誠社 一九九三・六・一二 19頁）による。
- (20) 『全唐詩』卷四六一（中華書局 一九八〇・四 5250頁）
- (21) たつみ都志「『場』の作家・谷崎潤一郎（その一）」（『日本語日本文学論叢』第一号 二〇〇六・九・二 99頁）
- (22) 王秀傑（一九五三年）中国作家協会会員、国家一级作家、代表作品『鶴羽芦花』『中華鶴跡』など。
- (23) タイトルは以下のとおりである。①病中對病鶴 ②感鶴 ③洛下卜居 ④寄庾侍郎 ⑤解印出公府 ⑥代鶴 ⑦和裴侍中南園靜興見示 ⑧失鶴 ⑨題籠鶴 ⑩郡西亭偶詠 ⑪自喜 ⑫有雙鶴留在洛中忽見劉郎中依然鳴顧劉因為鶴嘆二篇寄予與二絕句答之 ⑬答裴相公乞鶴 ⑭送鶴與裴相臨別贈詩 ⑮池鶴二首（一）
- ⑯池鶴二首（二） ⑰問江南物 ⑱嘆鶴病 ⑲問鶴 ⑳代鶴答 ㉑家園三絕 ㉒雞贈鶴 ㉓鶴答雞 ㉔烏贈鶴 ㉕鶴答烏 ㉖鳶贈鶴 ㉗鶴答鳶 ㉘鵝贈鶴 ㉙鶴答鵝 ㉚鶴 ㉛劉蘇州以華亭一鶴遠寄以詩謝之
- (24) 欽立編『先秦漢魏晉南北朝詩』（上）漢詩卷 卷一一（中華書局 一九八三・九 305頁）

終章 中国古典の受容と終焉

第一節 艶情から詩情へ

本論文では谷崎の少年時代の試作から一九二一年頃までの間に書かれた中国古典と関連のある作品を対象にそれぞれの典拠を掘り下げ、谷崎文学における中国古典の捉え方を考察してきた。

第一章では少年谷崎の思想遍歴を考察した。谷崎は少年時代に漢学塾で漢籍古典を勉強し、儒教復興の時代風潮や学校の先生の影響で、一時、儒教特に陽明学に興味を持っていた。しかし家運の傾きによって自負と屈辱という相反するものを同時に体験せざるをえなかった谷崎は、苦悶を感じカントやニーチェや莊子、仏教類など多くの哲学書や思想書を読み漁って精神的な救済を得ようとした。その結果として、谷崎はカント倫理学と儒家思想が「胸中に蟠れる煩悶に対して、懊悩に対しまりに冷淡なり」（『文藝と道德主義』一九〇四・五）と、儒家やカントが代表する道德主義に反抗し、自分の本命が文学にあると自覚しはじめた。この時期の谷崎の思想の実態は文壇デビュー以後の創作にもつながっている。例えば「麒麟」（『新思潮』一九一〇・一二）の題材及び儒家、道家への言及などは、谷崎の少年時代の読書経験に負うところが大きく思想的つながりも見られる。

第二章で考察した「麒麟」は谷崎がデビューして以来、中国古典と関わって書かれた本当の意味での第一作といえる。『論語』『史記』などの記録に基づき儒家の聖人・孔子と衛霊公の妃・南子との物語が書かれた。本章では中国古典における麒麟の記録から「麒麟」のイメージと孔子との関連性を掘り下げその象徴性を明らかにした。「麒麟」と孔子に関する逸話に漂った悲劇的な色彩は小説全体の基調を定め物語の結末も暗示している。これは谷崎が小説のタイトルに選んだ深層的な理由とも考えられる。また古典において南子が孔子に徳性に対して畏怖を感じたと描かれたが、「麒麟」においては自ら徹底的に孔子に徳性に挑戦しようとする肉体や欲望の代表者として描かれた。この相違こそが「麒麟」のモチーフの所在である。さらに南子、孔子、林類らの人物像から小説全

体の構図を読み取ることができ、第一章で述べた谷崎の少年時代の思想との一致も見られた。

第三章では、「人魚の嘆き」（「中央公論」一九一七・一）の舞台設定の意味と典拠を考察した。小説の舞台・南京はかつて江南地域の廓の町であり才子佳人の地としてよく知られた。享楽の空間でありながらもそこにまつわる数々の伝説のヒロインたちの不運な身の上から、感傷的情绪も生じていた。谷崎がそこに舞台を設定したのは、放蕩や贅沢の限りを尽くした貴公子の登場に相応しく、また美しい人魚と遭遇して不思議な体験をした場所にも似つかわしい。さらに人魚と貴公子の物語の発展と結末にもふさわしい場所である。主人公の話柄やその他の登場人物の人物像からは清・余懷『板橋雜記』との関連が見られた。谷崎はこれらの中国的要素を取り入れ、「鏤心刻骨の苦しみ」（『明治大正文学全集第三十五卷 谷崎潤一郎篇』解説）一九二八・二）によって東洋的情绪にあふれた物語空間を作り上げること成功した。このような空間は西洋の人魚が持つ異質な美と神秘性を一層引き立て、貴公子にも読者にもより激しい刺激を与えた。谷崎の初めての人魚関係の作品として、舞台は東洋的であるが、そこに登場する人魚は、「ローレライ」伝説やワイルド「漁師とその魂」などの人魚伝説に描かれた女性のイメージと重なり純然たる西洋女性として描かれた。このような人魚像は谷崎の西洋憧憬の象徴と見られる。彼女が茫々たる海に消えたことは谷崎の西洋への接近の不可能性を意味する。

第四章では、「人間が猿になつた話」（「雄弁」一九一八・七）の典拠と創作動機を考察した。初回の中国旅行直前に発表されたこの小説は、登場人物やストーリーの発展などにおいて中国の伝奇小説「白猿伝」との類似性が見られた。その創作の経緯として、中国旅行までの谷崎の読書行為と芥川龍之介との交流との関連性を明らかにした。谷崎は旅行準備の一環として漢籍の読書に取りかかり、その中で芥川を経由して『唐代叢書』を手に入れ「人間が猿になつた話」の素材である「白猿伝」を読んだと推測した。さらに「人間が猿になつた話」は、同年の芥川の小説「首を落とす話」（「新潮」一九一八・一）と「地獄変」（「大阪毎日新聞」「東京日日新聞」一九一八・五・一〇五・二二）と、同じスタイルを採ったり、内容の取り合わせが一致したりするなどの共通性から芥川を

意識した可能性が考えられる。

第五章では、「鮫人」（「中央公論」一九二〇・一、三、五、八、一〇）の典拠とヒロイン林真珠の人物像、小説の構成やこの時期の谷崎の思想の変遷を考察した。まず中国の文献における記録から鮫人のイメージを明らかにした。鮫人とは海底で機織りをしており、泣くと真珠の涙を流す、性別不明な存在である。ここにヒロイン林真珠の人物像との類似性が見られる。林真珠は真珠という名前や性別不明といった特徴において中国の伝説上の鮫人との類似が見られるが、同時に妖艶な美貌によって男性たちを誘惑するところにローレライ伝説や「漁師とその魂」との関連も見られた。林真珠の人物像における東西要素の融合は、小説のその他の面にも見られる。例えばエピグラフとしての漢詩とその後の小説との対立、東洋画へ転向した南と西洋画を描く服部という二人の芸術家の対立などである。「鮫人」は人魚を描いた作品として「人魚の嘆き」に続く二作目である。しかし「人魚の嘆き」の純然たる西洋人魚のイメージと違い、鮫人＝林真珠には西洋的要素もあるが、中国的要素が圧倒的に多く見られた。これは谷崎の西洋から東洋への開眼の証拠として見てもよからう。この思想的変遷の原因は、南と服部の対談から窺われた。つまり南が話した、中国旅行を通じて真の東洋を実感しその自然や芸術に深い感銘を覚えたことである。これは中国旅行後の谷崎の心境でもあり、その後の純（支那趣味）の作品「鶴唳」（「中央公論」一九二一・七）の創作にもつながる。

第六章では、「鶴唳」に用いられた漢籍を明らかにした上で、小説と漢籍における鶴のイメージの異同を検討してきた。まず主人公靖之助の物語と宋・林和靖「梅妻鶴子」の逸話との類似性を指摘し、『西湖佳話』が典拠であることを明らかにした。「鶴唳」の典拠の一つと見られる「梅妻鶴子」の逸話は『西湖佳話』巻五「孤山隱蹟」に収録されている。その他、江南を愛し鶴を愛する点において靖之助は唐の詩人白樂天との共通性も見られた。さらに白樂天と同じく靖之助は江南から鶴を連れて来て自邸に江南の風景を再現した。谷崎は早い時期からしばしば創作に引用したことから白詩を愛読することがわかり、「鶴唳」の創作にも白詩の影響が窺われた。しかし「鶴」

のイメージにおいて、白詩の高潔な君子のイメージと違い、靖之助の鶴は支那少女と一体化された、東洋文化や東洋詩情の象徴だった。靖之助はこの少女と鶴を身近に置くことによつて憧れの中国との接近を求めた。

ここで注目されるべきは、「鶴唳」の支那少女がこれまで描かれてきた女性像と異なることである。作中には少女についてただ「揚州の生まれ」と書かれただけで容貌などの描写はほとんど見られない。強調されたのはその象徴性のみである。

此の女が傍に居てくれれば、自分は日本に居ても支那に居られる。自分は「支那」を愛するやうに此の女を愛する、自分が憧れる「支那」の凡べては、今では此の女と鶴にあるのだと、さう彼は云ふのでした。

彼女はそれ以前の谷崎の作品に登場した、美しく旺盛な生命力を持ち、男性の上に君臨したり、虜にしたりする妖艶なヒロインと違い、性的な魅力が感じられない、妖艶と官能とは無縁の存在である。目に見える具象的な美や生気に溢れた生命力より彼女の美はあくまで暗示的かつ情緒的なものである。これは谷崎が小説「鮫人」(前掲)の中で指摘した東洋芸術の真髄——「美をクリエートするのではなく美を暗示すればいゝ」、暗示するより外に形で現はしやうのないもの」と一致している。

谷崎作品における芸術観及び美的意識の変化は、東洋と西洋の特徴を兼ね備え、妖艶な美貌や美しい肉体や謎めいた魔性を持つ人物林真珠の設定から既に窺われていた。さらに「鶴唳」に登場した抽象的な美を持つ支那少女の設定によつて一層明確に見えてくる。この美的意識の変化は、「鮫人」の服部と南の話からもわかる。服部は「瞳の中へ投げ込んで居る美しい反映」そのものを美であると述べたが、南は「美の真髄」が「美の種々相のもう一つ奥にある」と述べた。似た観点は谷崎のエッセイ「或る時の日記」(「雄弁」一九二〇・一)にも見られる。つまり「其処に現はされたものよりは隠されたものゝ方に「美」が存在する。」服部と南はそれぞれ西洋と東洋の

芸術及び美的意識の代表者である。この異なる芸術について大西克礼は次のように指摘した。

東洋にありては、象徴性はむしろ常に最高級の芸術的表現が自然に具有する性格として考えられる。西洋の藝術では、一般に表現の積極性によって、美的効果の増大を期待するのが普通であるに反し、東洋芸術は寧ろその消極性（例えば減筆、省略、暗示、余白という如き）によって、却ってその特殊の効果の増進を庶幾するものであることは、既に多くの美術史家や批評家が論じている通りである。^①

大西は、「詩的」が東洋芸術の大きな特徴で、東洋人の美的意識が「自然」の中に「常」に詩を読むことを教えられていと指摘し、その代表的な様式として詩や東洋画を列挙した。特に東洋画について大西は、東洋画において「自然の究極的内容、即ち『ポエジー』の視覚的表現のために」、常に「色彩の滅却、遠近法の無視、対象形式の類型化」など種々の手法によって「不必要なる一切のものを排除せんとする」と指摘した。これは「鮫人」における南の東西洋芸術論と「或る時の日記」（前掲）における谷崎のそれと共通している。第五章で論じたようにおそらく谷崎は中国旅行を通じて初めて東洋芸術の真髄を理解できたのだろう。初回の中国旅行について谷崎は「鮫人」の南の口を借りて次のように述べた。

明け暮れ此の荘嚴なる景色の中に育てられたら、「自然」に対する自分の感覚はどんなに早く眼を開いたらう。自分の芸術はどんなに此の自然から深い秘密を汲み取ることが出来たらう。

（「或る芸術家の憧れ」「鮫人」前掲）

このような東洋芸術論を実践する作品が「鶴唳」である。「鶴唳」は谷崎の（支那趣味）を最も表現した作品と

しばしば位置づけられるが、ここで描かれた〈支那趣味〉は皮相的なものではなく、鶴と支那少女の登場や女性像の描写などによって東洋芸術の真髓も表現された。「鶴唳」は暗示的、抽象的な東洋美及び谷崎の理解が形にされたものであり、そこには女性の妖艶な肉体も男性の欲望もなく、あるのは東洋的詩情のみである。

中国古典の受容において、「麒麟」「人魚の嘆き」「人間が猿になつた話」が素材に留まる表層的な受容とすれば、東西洋を象徴する様々な二項対立を設定する「鮫人」はその過渡的なもので、「鶴唳」は詩的という東洋芸術の真髓を最も体現する思想的受容であるといえよう。

だが「鶴唳」以後、谷崎の中国関係の作品は二回目の中国旅行後に書かれた「上海交遊記」（「女性」原題「上海交遊記」一九二六・五〇六、八）と「上海見聞録」（「文藝春秋」一九二六・五）のような旅行記以外ほとんど見られなくなる。

第二節 受容の終焉及びその理由

一九一八年の中国旅行から約七年後の一九二六年一月に谷崎はふたたび中国を訪れた。二回目の中国旅行は谷崎が関西移住以後のことである。前回の旅行とは違い上海のみの滞在だった。出発前に土屋計左右宛ての手紙に「多分年内に（大晦日頃）上海へ遊びに行こうと思つて居ります。（…）或は将来、上海と日本と両方に家を置き、往つたり来たりしようと思つて居ります」とあるように、二回目の中国旅行は前回の各地への漫遊ではなく目的地に行く前に既に特定されていた。中国旅行というよりむしろ上海旅行というほうが適当だろう。当時の上海は〈魔都〉と呼ばれるほど著しく西洋化した近代都市であつた。〈支那趣味〉の作家にとって、上海は中国の古き良き文化や風景を求めるには決してよい選択ではない。では谷崎の二回目の中国旅行の目的地はなぜ上海のみに絞つたのか。おそらく初回のように〈支那趣味〉を慰めるためのものではなかつたためだろう。初回の中国旅行の時に資金の工面で悩まされた谷崎だが、この時期は円本ブームで経済的余裕ができ、上海一流のホテル一

品香の上等部屋に滞在した。⁴ 上海に滞在した一か月余りの間に、日本人の旧友のほか、内山完造の斡旋で郭沫若や田漢、歐陽予倩など数多くの中国の知識人と交流した。⁵ この交流について、西原大輔は「中国の知識人との対話を通じて、オリエントとしての中国イメージを、問いなおさざるを得」ず、もう「安心してオリエント的な『支那趣味』の美に浸ることができなくなった」と、〈支那趣味〉作品の創作を諦めた理由を指摘したが、⁶ 実際にはその創作は「鶴唳」が最終作だと考えられる。谷崎は「鶴唳」で熱狂的な〈支那趣味〉を持つ人物靖之助を設定しながらそれを危険視する人物——靖之助の娘・照子も設定した。この対立的な人物関係は、谷崎の東洋芸術に対する矛盾した感情の現れでもあろう。一方は深い感銘から生じた憧憬、他方は恐怖を感じさせて敬遠しなければならぬ不安。小説の結末として、照子は「お母さんの敵」と見た『支那』の凡べて⁷を象徴する少女を殺した。この結末は、中国関係作品の創作の終焉も暗示していると考えてもよからう。

谷崎は思想のない作家と言われたように政治や社会問題に無関心な作家である。中国が抱える困難な現状を知ったために〈支那趣味〉の作品を創作しなくなったという見方は不適切なように思われる。ほかにもっと深層的な理由があるだろう。

この問題を究明するにあたり谷崎の初回の中国旅行が重要な意味を持つ。前述したように初回の中国旅行は二回目のように上海のみの滞在と違い、奉天から天津、北京へ、北京から武漢へ、武漢から九江、廬山へ、さらに江南の諸地域まで回り、その範囲はかなり広がった。谷崎は雄渾な大陸の自然を身をもって感じ漢籍で知った中国が目の前に現れ深い感興をそそられた。この体験と当時の心情は、「鮫人」（前掲）の登場人物南の口を借りて以下のように語られた。

さう云ふ僕があゝの雄大な支那の自然——洞庭湖や揚子江の景色を眺めながら、東洋芸術の理想を説かれたのだから、実際酔はされてしまったのだ。

南が中国旅行をきっかけに油絵を諦め南画へと転向したことは、谷崎の思想変化の反映でもあろう。この旅行から受けた感興は、後年にも語られている。

昔私は支那の田舎を旅行して、その特異なる自然美にいたく魅せられたことがあるからである。世界で一番美しい国は埃及と支那と印度だと云ふ説を唱へる旅行者もあるさうであるが、事ほど左様に支那の田舎は美しい。そしてその美しさは大体に於いて南画的情趣であつて、支那内地を旅行して見て始めて南画の技法と云ふものが真に支那の自然に基づいてゐることを知るのである。(…)支那の田舎を知つてゐる者が読めば自然にあの魅力ある南画的風景が到る所で眼前に髣髴として来るのであつて、苟くもあれを映画に直すからには、その方面を忽諸にすると云ふ手はない。(…)ほんたうの支那風景と云ふものは、あゝ云ふ奇異な、人の眼に驚かすやうなところにあるのではなくて、もつと平穩な、なごやかな、のんびりとしたものなのである。

(「きのふけふ」 「文藝春秋」一九四二・六〇一)

谷崎は中国大陸の偉大なる自然に酔わされ東洋芸術の真髓を理解し、それに心酔する一方一種の恐怖も感じている。「支那趣味と云ふこと」(「中央公論」一九二二・一)に次のように書いている。

私は、斯くの如き魅力を持つ支那趣味に対して、故郷の山河を望むやうな不思議なあこがれを感じるとともに、一種の恐れを抱いて居る。なぜなら、余人は知らないが私の場合には、その魅力は私の芸術上の勇猛心を銷磨させ、創作的熱情を麻痺させるやうな気がするから。——此の事は他日委しく書く時であらうが、支那伝来の思想や芸術の真髓は、静的であつて動的でない、それが私には善くない事のやうに思へる。——私

は、自分が、特に誘惑を感じずるだけ、猶更恐れて居るのである。(…)そして其の後、一度は支那へも遊びに行つて来た。私は支那を恐れながらも、私の書棚には支那に関する書籍が殖えていくばかりである。(…)私の空想はハリーウッドのキネマ王国の世界に飛び、限りない野心が燃え立つやうに感ずるが、さて一度高青邱を繙くと、たつた一行の五言絶句に接してさへ、その閑寂な境地に惹き入れられて、今迄の野心や活潑な空想は水を浴びたやうに冷えてしまふ。「新しいものが何だ、創造が何だ、人間の到り得る究極の心境は、結局此の五言絶句に尽きて居るぢやないか」と、さう云はれて居るやうな気がする。私はそれが恐ろしいのである。此の後の私はどうなつて行くか、——今のところでは、成るだけ支那趣味に反抗しつゝ、やはり時々親の顔を見たいやうな心持で、こつそりと其処へ帰つて行くと云ふやうな事を繰り返してゐる。

この矛盾した心理は「鮫人」の服部と南という芸術理念の全く相反する二人の登場と、「鶴唳」における対立関係を持つ靖之助と照子の設定からも窺われる。東洋芸術の虚無と枯淡は作家にあるべき勇猛なる創作欲と想像力と二極のようなものと自覚した谷崎は、〈支那趣味〉に恐怖と危険性を感じ、それによる新たな文学局面の打開を放棄せざるを得なかつた。谷崎は中国旅行からある程度の刺激を受けたが、元来期待する生活と芸術のジレンマからの脱出が依然として実現できないままであつた。この道は生活と芸術の一致が実現できないどころか、相反する方向へと二者のギャップを広めるばかりである。

この矛盾した心境は既に初回の中国旅行後に生まれた。この問題を解決するには、〈日本回帰〉まで待たなければならぬ。一九二三年九月の関東大地震をきっかけに谷崎は関西の地に移住した。京都や奈良などの古都に日本の伝統を再発見し伝統への開眼によって自分の文学の方向性を明確にした。西原大輔が「谷崎は、西洋人が日本をエキゾテックに感じるように、奈良や京都に異国趣味的な美を発見したのである。」⁽⁷⁾と指摘したように、谷崎における〈日本回帰〉は〈西洋崇拜〉と〈支那趣味〉を含むその異国趣味の延長や変形であり谷崎文学の最後

の帰着点でもあろう。此の過程において初回の中国旅行による谷崎の東洋（中国）芸術の理解は（日本回帰）の大きなきっかけといってもよからう。また「鶴唳」における実像が薄いが象徴性に富む支那少女の設定は、後の谷崎文学に登場するナオミやお久のような観念としての「永遠女性」とは全く無関係ではなからうか。大正期の谷崎文学はどのように昭和時代への飛翔や成熟を実現させたのか、特に中国古典の受容や（支那趣味）は昭和期の文学とどう関連しているか、これらの問題は今後の課題としたい。

注

- (1) 大西克礼『東洋的藝術精神』（書肆心水 二〇一三・五・三〇 82頁）
- (2) 注（1）に同じ、91頁。
- (3) 序章注（2）に同じ、214頁。
- (4) 注（3）に同じ、216頁。
- (5) 中国知識人との交流に関しては西原論が詳しい。
- (6) 注（3）に同じ、256頁
257頁。
- (7) 注（3）に同じ、257頁。

参考文献一覧

凡例

- 一、本文献目録は博士論文作成にあたって参照した資料の一覧である。本文中で示した文献以外に参考にしたものも含む。
- 一、文献は項目ごとに、発表された時期が早い順に示した。
- 一、単行本の表記は、執筆者名（编者または監修者名）『書名』（発行年月日、発行所名）の順に記載した。翻訳者がある場合は、執筆者の後に記した。単行本に収録された作品・論文で主に参照した文献は、書誌の後に「――」を付し、執筆者名とタイトルを示した。
- 一、雑誌・新聞に掲載された作品・論文等では、雑誌の場合は執筆者名「タイトル」（「掲載誌名」巻号、発行年月日、発行所名）、新聞の場合は執筆者名「タイトル」（「掲載紙名」、発行年月日、発行所名）のように示した。
- 一、執筆者の署名のない文献は「無署名」と表記した。
- 一、全ての項目の発行年の表記は、博士論文本文の表記に合わせて、奥付の表記に関係なく、西暦の年号で記した。発行年月日が不明の文献や中国語文献（中国の書物は出版年月までしか記されていない）はやむを得ず出版年または出版年月まで記した。
- 一、書名・論文名・個人名などは、原文献に記載されているとおりに記載する。
- 一、敬称はすべて省略した。

【谷崎潤一郎関連論文】

- ・無署名「消息」(「新思潮」第二次第三号、一九一〇年十一月一日、臨川書店)
- ・永井荷風「谷崎潤一郎氏の作品」(「三田文学」第二卷第一号、一九一一年十一月一日、三田文学会)
- ・無署名「文芸消息」欄(「時事新報」一九一八年七月九日、時事新報社)
- ・無署名「よみうり抄」(「読売新聞」一九一八年七月二〇日、読売新聞社)
- ・無署名「よみうり抄」(「読売新聞」一九一八年八月二二日、読売新聞社)
- ・宮島新三郎「小説界(三)・主なる作家及び作品」(「早稲田文学」第一五八号、一九一九年一月一日、早稲田文学社)
- ・芥川龍之介「『人魚の嘆き・魔術師』広告文」(「新小説」第二四年第一〇号、一九一九年一月一日、春陽堂)
- ・辰野隆『辰野隆選集第四卷 忘れ得ぬ人々と谷崎潤一郎』(一九四九年四月三〇日、改造社)
- ・酒井森之介「『麒麟』の意義」(「明治大正文学研究」第五号、一九五一年四月三〇日、東京堂)
- ・伊藤整「解説」『谷崎潤一郎全集』第九卷(一九五八年一月三〇日、中央公論社)
- ・吉田精一『近代文学鑑賞講座9 谷崎潤一郎』(一九五九年一月五日、角川書店)
- 吉田精一「谷崎文学と西欧文学」
- ・小玉晃一「潤一郎と外国文学——その異国趣味に関連して」(「國文學 解釈と教材の研究」第九卷第五号、一九六四年四月一日、學燈社)
- 日、學燈社)
- ・塚田満江「潤一郎作品における女性像」(「國文學 解釈と教材の研究」第九卷第五号、一九六四年四月一日、學燈社)
- ・高田瑞穂「谷崎文学の本質」(「國文學 解釈と教材の研究」第九卷第五号、一九六四年四月一日、學燈社)
- ・津島寿一『芳塘随想第十三集 谷崎潤一郎君のこと』(一九六五年三月一日、芳塘刊行会)
- ・橋本芳一郎『近代の文学8 谷崎潤一郎の文学』(一九六五年六月一〇日、桜楓社)
- ・円地文子「若き日に愛読した作品」(『谷崎潤一郎全集』月報5、一九六七年三月二五日、中央公論社)

- ・伊藤整編『近代日本の文豪』(一九六七年一〇月一日、読売新聞社)
 - ――伊藤整「谷崎潤一郎」
- ・原田親貞「谷崎潤一郎と中国文学(一)」(「学苑」第三四八号、一九六八年一月一日、昭和女子大学光葉会)
- ・原田親貞「谷崎潤一郎と中国文学(二)」(「学苑」第三五〇号、一九六九年二月一日、昭和女子大学光葉会)
- ・日本近代文学館編『日本近代文学と外国文学』(一九六九年二月一〇日、読売新聞社)
 - ――太田三郎「潤一郎の摂取した外国文学」
- ・吉田精一編『日本近代文学の比較文学的研究』(一九七一年四月一〇日、清水弘文堂書房)
 - ――小出博「谷崎潤一郎とワイルド・序説」
- ・野村尚吾『伝記谷崎潤一郎』(一九七二年五月二五日、六興出版)
- ・荒正人『近代文学研究双書 谷崎潤一郎研究』(一九七二年一月二〇日、八木書店)
- ・高田瑞穂「回覧雑誌『学生倶楽部』――谷崎潤一郎の最初期文章」(「日本近代文学館館報」第一〇号、一九七二年一月一日、日本近代文学館)
- ・大島真木「谷崎潤一郎の初期の創作方法――『麒麟』再論と『信西』の材源」(「東京女子大学論集」第二三卷第二号、一九七三年三月一日)
- ・野口武彦『谷崎潤一郎論』(一九七三年八月二五日、中央公論社)
- ・石内徹「谷崎潤一郎――『人魚の嘆き』論――美の形象化について」(「芸術至上主義文芸」第三号、一九七七年九月一〇日、芸術至上主義文芸学会)
- ・『文芸読本 谷崎潤一郎』(一九七七年一月二五日、河出書房新社)
- ・永栄啓伸「谷崎潤一郎『人魚の嘆き』覚え書」(「群女国文」第八号、一九七九年六月一日、群馬女子短期大学国文学研究室)
- ・稲澤秀夫『谷崎潤一郎の世界』(一九七九年九月二〇日、思潮社)

- ・長野嘗一『谷崎潤一郎——古典と近代作家』（一九八〇年一月二〇日、明治書院）
- ・笠原伸夫『谷崎潤一郎——宿命のエロス』（一九八〇年六月三〇日、冬樹社）
- ・日本近代文学館編『橘弘一郎収集 谷崎潤一郎文庫目録』一九八二年九月二五日、日本近代文学館）
- ・千葉俊二編『鑑賞日本現代文学 8 谷崎潤一郎』（一九八二年一月三〇日、角川書店）
- ・森安理文『谷崎潤一郎——あそびの文学』（一九八三年四月二〇日、国書刊行会）
- ・日夏耿之介『谷崎文学』（一九五〇年三月一〇日、朝日新聞社、一九八三年一月二五日、日本図書センター）
- ・古川弘之「ワイルドと谷崎潤一郎——『人魚の嘆き』と『魔術師』について」（『英米文学』第三号、一九八四年三月一九日、京都光華女子大学英米文学会）
- ・中村光夫『近代作家研究叢書 39 谷崎潤一郎論』（一九八四年九月二五日、日本図書センター）
- ・秦恒平「谷崎潤一郎の大正時代」（『國文學 解釈と教材の研究』第三〇巻第九号、一九八五年八月二〇日、學燈社）
- ・武田寅雄『谷崎潤一郎小論』（一九八五年一月一五日、桜楓社）
- ・山口政幸「アイデアの追求——大正中期の谷崎潤一郎」（『上智大学国文学論集』一九八七年一月一七日、上智大学国文学会）
- ・田村理江「大正期の谷崎の側面——東洋的なものへの憧れ」（『成蹊国文』第二〇号、一九八七年三月二五日、成蹊大学文学部日本文学研究室）
- ・遠藤祐『谷崎潤一郎——小説の構造』（一九八七年九月三〇日、明治書院）
- ・徳田進『中国古典と日本近代文学との交渉論集』一九八八年四月一〇日、芦書房）
——徳田進「谷崎文学と中国古典との交渉——『麒麟』を中心に」
- ・永栄啓伸『谷崎潤一郎試論——母性への視点』（一九八八年七月一〇日、有精堂）
- ・藤田修一『谷崎潤一郎論』（一九八八年一月一五日、曜曜社）
- ・榊敦子「化身の万華鏡——谷崎潤一郎の大正後期小品群をめぐる一考察」（『比較文学研究』第五五号、一九八九年六月一〇日）

- 日、東大比較文学会)
- ・谷崎終平『懐かしき人々 兄潤一郎とその周辺』(一九八九年八月一五日、文藝春秋社)
- ・細江光『『人魚の嘆き』の典拠について』(『日本近代文学』第四一集、一九八九年一〇月一五日、日本近代文学会)
- ・森山由美「谷崎潤一郎『鮫人』小論——東西両芸術をめぐる作者の意識を中心に」(『方位』、第一三号、一九九〇年八月一日、熊本近代文学研究会)
- ・井上泰山「日本における『西廂記』研究」(『中国俗文学研究』第八号、一九九〇年一二月二〇日、中国俗文学研究会)
- ・宮内淳子『谷崎潤一郎——異郷往還』(一九九一年一月七日、国書刊行会)
- ・三好行雄、高橋英夫、大岡信編『日本の作家8 谷崎潤一郎』(一九九一年五月一〇日、小学館)
- ・長谷川泉「谷崎潤一郎の宗教観」(『国文学 解釈と鑑賞』第五七巻第二号、一九九二年二月一日、至文堂)
- ・西田禎元「谷崎潤一郎と中国」(『創大アジア研究』第一三号、一九九二年三月一日、創価大学アジア研究所)
- ・詹秀娟「谷崎潤一郎と中国——その中国旅行を通して」(『新潟産業大学紀要』第九号、一九九三年六月三〇日、新潟産業大学経済科学研究所)
- ・西田禎元「谷崎潤一郎の中国再訪」(『創大アジア研究』第一五号、一九九四年三月一日、創価大学アジア研究所)
- ・千葉俊二『谷崎潤一郎 狐とマゾヒズム』(一九九四年六月一〇日、小沢書店)
- ・新保邦寛「神の如く美しく、神に呪われしもの——『人魚の嘆き』論」(『稿本近代文学』第二〇集、一九九五年一二月一〇日、筑波大学日本文学会近代部会)
- ・馬場夕美子「谷崎潤一郎——大正七年の中国旅行」(『同志社国文学』第四四号、一九九六年三月二〇日、同志社大学国文学会)
- ・永栄啓伸『評伝 谷崎潤一郎』(一九九七年七月二五日、和泉書院)
- ・西原大輔「江戸趣味と支那趣味」(『季刊アーガマ』第一四三号、一九九七年九月二〇日、阿含宗出版社)

- ・長島裕子「都市を描くということ——谷崎潤一郎・浅草・『鮫人』」(『國文學 解釈と教材の研究』第四三卷第六号、一九九八年五月二〇日、學燈社)
- ・千葉俊二「感覚の錯乱」(『潤一郎ラビリンス』怪奇幻想倶楽部』解説、一九九八年十一月八日、中央公論社)
- ・佐々木冬流「谷崎潤一郎『人魚の嘆き』と『魔術師』」(『茨城キリスト教大学紀要 人文科学』第三二号、一九九八年一二月二五日、茨城キリスト教大学紀要編集委員会)
- ・阿部寿行「谷崎潤一郎『人魚の嘆き』への一視点——虚構と実在の(場)をめぐる」(『緑岡詞林』第二四号、二〇〇〇年三月三十一日、青山学院大学日本文学科学院生の会)
- ・千葉俊二編『別冊國文學⁵⁴ 谷崎潤一郎必携』(二〇〇一年一月一〇日、學燈社)
- ・錢曉波「谷崎潤一郎の思想性の在処について——『麒麟』に於ける漢学の受容を中心に」(『杏林大学研究報告 教養部門』第一九卷、二〇〇二年二月二五日、杏林大学)
- ・錢曉波「谷崎文学における『支那趣味』について——大正八年前後を中心として」(『研究年報』第五号、二〇〇二年三月二〇日、杏林大学付属国際交流研究所)
- ・千葉俊二「谷崎潤一郎『人魚の嘆き』『青塚氏の話』原稿」(『日本近代文学館館報』第一九二号、二〇〇三年三月一五日、日本近代文学館)
- ・千葉俊二「『人魚の嘆き』について——解題に代えて」(『ユリイカ』第三五卷第八号、二〇〇三年五月一日、青土社)
- ・野崎敏「谷崎潤一郎と異国の言語」(二〇〇三年六月二〇日、人文書院)
- ・西原大輔「谷崎潤一郎とオリエンタリズム——大正日本の中国幻想」(二〇〇三年七月二五日、中央公論新社)
- ・ウオララック・クラウプトック「『人間が猿になった話』試論」(『続…谷崎潤一郎作品の諸相』二〇〇三年一二月三十一日、専修大学文学研究科畑研究室)
- ・細江光「谷崎潤一郎——深層のレトリック」(二〇〇四年三月三十一日、和泉書院)

- ・劉岸偉 「分析と実証——谷崎潤一郎の中国への眼差し」(「東方」第二七八号、二〇〇四年四月五日、東方書店)
- ・千葉俊二 『谷崎潤一郎 上海交遊記』「解説——オリエンタリズムを超えて」(二〇〇四年一月二〇日、みすず書房)
- ・陳雲哲 「谷崎潤一郎の中国幻想」(「西南学院大学国際文化論集」第一九卷第二号、二〇〇五年二月二五日、西南学院大学)
- ・たつみ都志 「『場』の作家・谷崎潤一郎(その一)」(「日本語日本文学論叢」第一号、二〇〇六年九月二五日、武庫川女子大学大学院文学研究科)
- ・山中剛史 「光る人魚——谷崎潤一郎『人魚の嘆き論』」(「江古田文学」第六五号、二〇〇七年七月三十一日、日本大学芸術学部江古田文学会)
- ・尾高修也 『青年期谷崎潤一郎』(二〇〇七年九月二五日、作品社)
- ・川本三郎 『大正幻影』(二〇〇八年四月一六日、岩波書店)
- ・張栄順 『谷崎潤一郎と大正期の大衆文化表象——女性・浅草・異国』(二〇〇八年六月一〇日、語文学社)
- ・石原千秋 「この名作を知っていますか——近代小説の愉しみ 第三回 輸入品としての『気分』」谷崎潤一郎『人魚の嘆き』(「文蔵」第四〇号、二〇〇九年一月、PHP研究所)
- ・李雁南 「美味・美景・美女の理想郷——谷崎潤一郎における『中国江南』」(「神女大國文」第二〇号、二〇〇九年三月一日、神戸女子大学国文学会)
- ・閻瑜 「谷崎潤一郎の中国旅行と『支那趣味』の変貌」(「大妻國文」第四一号、二〇一〇年三月一五日、大妻女子大学国文学会)
- ・安藤礼二 「迷宮と宇宙(4) 人魚の嘆き——谷崎潤一郎の大正」(「すばる」第三二卷第八号、二〇一〇年七月六日、集英社)
- ・川端夕貴 「中国資料に見られる『麒麟』の一考察」(「東洋史訪」第一七号、二〇一一年三月三十一日、兵庫教育大学東洋史研究会)
- ・王書「イ」 「大正作家の『支那趣味』——谷崎潤一郎と芥川を軸として」(「千葉大学人文社会科学研究」第二二号、二〇一一

年三月三〇日、千葉大学大学院人文社会科学研究所)

・谷川渥『『日本人離れ』の美学——谷崎潤一郎をめぐる——』(『大正イマジユリイ』第七号、二〇一二年三月三一日、大正イマジユリイ学会)

・田鎖数馬『谷崎潤一郎と芥川龍之介——「表現」の時代』(二〇一六年三月三〇日、翰林書房)

——「補論 谷崎と孝子説話」

・千葉俊二、銭暁波編『谷崎潤一郎——中国体験と物語の力』(二〇一六年八月二四日、勉誠出版)

——林茜茜「十年一覚揚州夢——谷崎潤一郎『鶴唳』論」

——銭暁波「『隠逸思想』に隠れる分身の物語——『鶴唳』論」

【漢籍関係文献(漢籍、その訳書、研究論文など)】

・顧元慶『陽山顧氏文房小説』(明・正徳嘉靖間(一五〇六—一五六六年)顧元慶刻本の影印)

・林羅山『怪談全書』巻一(一六九八年、福森兵左衛門)

・『西湖拾遺』(「乾隆辛亥孟冬月」序、一七九一年の刊行と推測、京都大学図書館所蔵)

・『通俗西湖佳話』(一八〇五年、大坂敦賀屋九兵衛)

・古呉墨浪子輯『西湖佳話』(「光緒壬辰中秋月」序、一八九二年の刊行と推測、上海文選局石印)

・三宅雪嶺『王陽明』(一八九三年一月二八日、政教社)

・中川忠英『清俗紀聞』(寛政一一年本の翻刻、一八九四年一月一五日、博文館)

・金檀注『高青邱全集』巻三(一八九七年、青木嵩山堂)

・余懷著、山崎長卿訳『唐土名妓伝(上・下)』(明和年間刊本の再印、一九〇〇年、松山堂書店)

・井上哲次郎『日本陽明学派之哲学』(一九〇〇年一月一三日、富山房)

- ・支那哲学研究会訳注『白氏文集』（一九一二年四月八日、菊地屋書店）
- ・松宮春一郎編訳『四書集訳 上』（一九二〇年八月二〇日、世界聖典全集刊行会）
- ・国民文庫刊行会編『国訳漢文大成文学部第一二巻 晋唐小説』（一九二〇年一月一八日、国民文庫刊行会）
- ・白井光太郎、鈴木真海編訳『国訳本草綱目』第一〇冊（一九三〇年一月一四日、春陽堂）
- ・岡本綺堂編訳『支那怪奇小説集』（一九三五年一月二〇日、サイレン社）
- ・麻生磯次『江戸文学と支那文学——近世文学の支那的原拠と読本の研究』（一九四六年五月一〇日、三省堂）
- ・一海知義注『中国詩人選集第四巻 陶淵明』（一九五八年五月二〇日、岩波書店）
- ・吳梅村『吳梅村詩集箋注』（一九五九年三月一日、廣智書局）
- ・李昉等撰『太平御覽』第四冊卷七九〇「鮫人」（上海涵芬樓影印宋本複製重印、一九六〇年二月、国家図書館出版社）
- ・駒田信二編訳『中国古典文学全集12 水滸伝（下）』（一九六一年二月二八日、平凡社）
- ・近藤康信編訳『新釈漢文大系13 伝習録』（一九六一年九月一日、明治書院）
- ・福本雅一注『中国詩人選集二集第一二巻 吳偉業』（一九六二年六月二二日、岩波書店）
- ・内野熊一郎編訳『新釈漢文大系4 孟子』（一九六二年六月一五日、明治書院）
- ・王夫之等撰『清詩話（上）』（一九六三年九月、上海古籍出版社）
- 徐增「而庵詩話」
- ・前野直彬、文入宗義編訳『新釈漢文大系18 文章軌範（下）』（一九六三年一月三十一日、明治書院）
- ・目加田誠編訳『新釈漢文大系19 唐詩選』（一九六四年三月一〇日、明治書院）
- ・前田愛「『板橋雜記』と『柳橋雜記』」（『國語と國文学』第四一巻第三号、一九六四年三月一日、東京大学國語國文学会）
- ・市野澤寅雄『漢詩大系』第一四巻（一九六五年八月三〇日、集英社）
- ・中川忠英著、村松一弥、孫伯醇編『清俗紀聞1』（一九六六年三月一〇日、平凡社）

- ・黒川洋一、鈴木虎雄訳注『杜詩』第七冊（一九六六年六月一六日、岩波書店）
- ・中川忠英著、村松一弥、孫伯醇編『清俗紀聞2』（一九六六年七月一〇日、平凡社）
- ・阿部吉雄、山本敏夫、市川安司 遠藤哲夫編訳『新釈漢文大系7 老子・莊子（上）』（一九六六年一月五日、明治書院）
- ・吉田賢抗編訳『新釈漢文大系1 論語』（一九六七年一月二〇日、明治書院）
- ・市川安司編訳『新釈漢文大系8 莊子（下）』（一九六七年三月二五日、明治書院）
- ・小林信明編訳『新釈漢文大系22 列子』（一九六七年五月二五日、明治書院）
- ・堤留吉『白樂天研究』（一九六九年一月三〇日、春秋社）
- ・高木友之助編訳『中国古典新書 說苑』（一九六九年四月三〇日、明德出版社）
- ・藤井專英編訳『新釈漢文大系6 荀子（下）』（一九六九年六月三〇日、明治書院）
- ・本田齋、沢田瑞穂、高馬三良編訳『中国古典文学大系8 抱朴子・列仙伝・山海経』（一九六九年九月一二日、平凡社）
- ・赤塚忠編訳『新釈漢文大系2 大学・中庸』（一九七〇年三月二五日、明治書院）
- ・前野直彬編訳『中国古典文学大系42 閱微草堂筆記・子不語・述異記・秋燈叢話・諧鐸・耳食録』（一九七一年二月五日、平凡社）
- ・竹内照夫編訳『新釈漢文大系27 礼記（上）』（一九七一年四月二五日、明治書院）
- ・吉田賢抗、三樹彰、田中忠編訳『新釈漢文大系38 史記（一）』（一九七三年二月二五日、明治書院）
- ・早川光三郎編訳『新釈漢文大系58 蒙求（上）』（一九七三年八月二五日、明治書院）
- ・鈴木修次『人と思想38 莊子』（一九七三年一月三〇日、清水書院）
- ・吉田賢抗編訳『新釈漢文大系85 史記（五）』（一九七七年九月二五日、明治書院）
- ・汪辟疆校録『唐人小説』（一九七八年一月、上海古籍出版社）
- ・岩城秀夫編訳『板橋雜記 蘇州画舫録』（一九七八年七月一日、平凡社）

- ・竹内照夫編訳『新釈漢文大系 29 礼記（下）』（一九七九年三月一〇日、明治書院）
- ・『全唐詩』（一九八〇年四月、中華書局）
- ・大野實之助注『李太白詩歌全解』（一九八〇年五月一〇日、早稲田大学出版部）
- ・中野美代子『孫悟空の誕生——サルの民話学と『西遊記』』（一九八〇年一〇月五日、玉川大学出版部）
- ・吉田賢抗編訳『新釈漢文大系 87 史記（七）』（一九八二年二月一〇日、明治書院）
- ・黄鳳池編『新鐫梅竹蘭菊四譜』（一九八二年三月、文物出版社）
- ・中野美代子『中国の妖怪』（一九八三年七月二〇日、岩波書店）
- ・遼欽立編『先秦漢魏晉南北朝詩（上）』（一九八三年九月、中華書局）
- ・小川環樹、山本和義訳注『蘇東坡詩集』第二冊卷六く卷九（一九八四年五月三〇日、筑摩書房）
- ・『景印文淵閣四庫全書・子部三四八 小説家類』（一九八五年一〇月五日、台湾商務印書館）
 - 郭憲「洞冥記」
- ・高歩瀛著、曹道衡、沈玉成点校『文選李注義疏』第三冊（一九八五年一月、中華書局）
- ・沈起鳳著、伍国慶点『諧鐸』卷七「鮫奴」（一九八六年二月、岳麓書社）
- ・太田次男等編『白居易研究講座第一卷 白居易の文学と人生』（一九九三年六月一二日、勉誠社）
 - 中純子「白居易と詞——洛陽履道里における江南の再現」
- ・南山春樹編訳『新編漢文選 呂氏春秋（中）』（一九九七年五月二五日、明治書院）
- ・山崎純一編訳『列女伝（下）』（一九九七年七月一五日、明治書院）
- ・石川忠久編訳『新釈漢文大系 110 詩経（上）』（一九九七年九月三〇日、明治書院）
- ・符国棟『唐代伝奇』（一九九八年一〇月、海南出版社、三環出版社）
- ・遠藤哲夫編訳『新釈漢文大系 43 管子（上）』（一九九八年一〇月二五日、明治書院）

- ・陳美林「墨浪子及其『西湖佳話』」（『東南大學學報』第一卷第二期、一九九九年五月二〇日、東南大學）
- ・同論集刊行会『村山吉広教授古稀記念中国古典學論集』（二〇〇〇年三月三十一日、汲古書院）
 - 増子和男「鮫人泣珠考」
- ・高橋忠彦編訳『新釈漢文大系 81 文選（賦篇）下』（二〇〇一年七月二五日、明治書院）
- ・大木康『中国遊里空間——明清秦淮妓女の世界』（二〇〇二年一月一〇日、青土社）
- ・檜崎洋一郎「『莊子』齋物論篇における「彼」「是」の問題について」（『哲学年報』第六三号、二〇〇四年三月五日、九州大學學院人文科学研究院）
- ・魯迅『魯迅全集 8 集外集拾遺補編』（二〇〇五年一月、人民文學出版社）
 - 「破『唐人說薈』」
- ・佐野誠子著、竹田晃、黒田真美子編『中国古典小説選 2 搜神記・幽明録・異苑他』（二〇〇六年一月二五日、明治書院）
- ・沈括著、唐俐注訳『夢溪筆談』（二〇〇七年五月、崇文書局）
- ・西川幸宏「サルの異類婚姻譚と『白猿伝』」（『アジア学科年報』第一号、二〇〇七年一月一日、追手門學院大學國際教養学部アジア学会）
- ・王秀傑『仙鶴——鶴文化雑談集』（二〇〇八年一月、遼海出版社）
- ・菊地恵善「莊子とニーチェ」（『哲学年報』第六九号、二〇一〇年三月一日、九州大學學院人文科学研究院）
- ・寺西光輝「『莊子』における死生の超越——内篇を中心として」（『人体科学』第二〇卷第一号、二〇一一年六月四日、人体科学会）
- ・顧炎武『顧炎武全集 19 日知録（二）』（二〇一一年一月、上海古籍出版社）
- ・徐增著、国家清史編纂委員會編『清代詩文集彙編 41 九誥堂集』（二〇一一年一月、上海古籍出版社）
- ・前秦・王嘉等撰、梁・蕭綺録、王根林等校点『拾遺記』卷三「周靈王」（二〇一二年八月、上海古籍出版社）

- ・ 晋・皇甫謐著、清・任渭長、沙英絵『高士伝』(二〇一四年一二月、上海古籍出版社)
- ・ 陳鼓応『莊子今注今訳(上・下)』(二〇一四年一月、中華書局)

【その他の文献】

- ・ ハイネ著、踏青軒主人訳「ロオレライ」(「海潮」第一号 一八九一年五月一五日、弘文館)
- ・ 村井弦齋『近江聖人』(一八九二年一〇月一三日、博文館)
- ・ 無署名「発行の辞」(「陽明学」第一卷第一号、一八九六年七月五日、鉄華書院)
- ・ 無署名「理想の独立と特性の独立」(「陽明学」第五卷第六号、一八九九年六月、鉄華書院)
- ・ 森岡常蔵「小学校教則大綱」(森岡常蔵『小学教授法』付録、一八九九年一〇月二二日、金港堂)
- ・ 高山樗牛「美的生活を論ず」(「太陽」第七卷第九号、一九〇一年八月一日、博文館)
- ・ 登張竹鳳「美的生活論とニイチェ」(「帝国文学」第七卷第九号、一九〇一年九月一日、帝国文学会)
- ・ 久保天随「我が所謂『美的生活』」(「新文藝」第一卷第九号、一九〇一年九月一日、新文藝社)
- ・ 真岡勢舟「青鬼堂に與ふる書——莊子とニイチェとを論ず」(「精神界」第二卷第二号、一九〇二年二月一〇日、精神界発行所)
- ・ 黒岩周六「藤村操の死に就て」(「万朝報」一九〇三年六月一六日〜一八日、朝報社)
- ・ 大町桂月「今の思想界」(「太陽」第九卷第八号、一九〇三年七月一日、博文館)
- ・ 大塚素江「自殺と青年」(「太陽」第九卷第八号、一九〇三年七月一日、博文館)
- ・ 姉崎正浩「現時青年の苦悶について」(「太陽」第九卷第九号、一九〇三年八月一日、博文館)
- ・ 石川栄司編『倫理学書解説』(増補改訂) 所収、一九〇五年一〇月五日、育成会)
- 蟹江義丸「カント倫理学」

- ・井上哲次郎『国民道德概論』（一九一二年八月一日、三省堂）
- ・松崎天民「過去の千日前とこれからの浅草」（『中央公論』第三五年夏季特別号、一九二〇年七月一日、中央公論社）
- ・国民精神文化研究所編『教育勅語渙発関係資料』第一卷（一九四〇年六月二五日、国民精神文化研究所）
- ・長谷川泉『近代文学論争事典』（一九六二年一月一五日、至文堂）
- ・村松定孝「唐代小説『杜子春伝』と芥川龍之介の童話『杜子春』の発想の相違点」（『比較文学』第八卷、一九六五年一月一日、日本比較文学会）
- ・『西田幾多郎全集』第一三卷（一九六六年二月二六日、岩波書店）
- ・大庭修『江戸時代における唐船持渡書の研究』（一九六七年三月一日、関西大学東西学術研究所）
- ・水田紀久 頼惟勤編『中国文化叢書 9 日本漢学』（一九六八年二月二〇日、大修館書店）
- ・久山康『現代日本記録全集 16 青春の記録』（一九六八年一月二五日、筑摩書房）
 - 藤村操「巖頭の感」
- ・日本近代文学館編『現代文学と古典』（一九七〇年一月二五日、読売新聞社）
- ・吉川哲史、石田一良編『日本思想史講座 6 近代の思想 1』（一九七六年二月一五日、雄山閣）
 - 石田一良「明治の精神と国民道德の形成」
- ・宮城公子編『日本の名著 27 大塩中斎』（一九七八年一月一〇日、中央公論社）
- ・町田則文『教育名著叢書 5 明治国民教育史』（一九八一年九月二五日、誠進社）
- ・高松敏男、西尾幹二『ニーチェ全集別巻 日本人のニーチェ研究譜』（一九八二年九月二五日、白水社）
- ・大久保利謙『明治国家の形成』（一九八六年五月一〇日、吉川弘文館）
- ・海老井英次「芥川龍之介文学典拠一覽」（『國文學 解釈と教材の研究』第三七卷第二号、一九九二年二月二〇日、學燈社）
- ・吉見俊哉『都市の空間・都市の身体』（一九九六年五月一五日、勁草書房）

- ・泉谷周三郎「国民道徳と個人主義」(「横浜国立大学教育人間科学部紀要目録 社会科学」第三号、二〇〇〇年一〇月三十一日、横浜国立大学教育人間科学部)
- ・末木文美士『近代日本の思想・再考』——明治思想家論』(二〇〇四年六月二〇日、トランスビュー)
- ・斎藤希史『漢文脈の近代』(二〇〇五年二月二十八日、名古屋大学出版会)
- ・斎藤希史『漢文脈と近代日本』(二〇〇七年二月二十五日、日本放送出版協会)
- ・湯浅弘「日本におけるニーチェ受容史瞥見(2)」——ニーチェをめぐる明治期の言説(1)』(「川村学園女子大学研究紀要」第一八巻第一号、二〇〇七年三月一日、川村学園女子大学)
- ・岡野浩「若き日の西田とカント倫理学」(「学習院大学史料館紀要」第一二号、二〇〇三年三月三十一日、学習院大学史料館)
- ・荻生茂博『近代・アジア・陽明学』(二〇〇八年四月三〇日、ペリかん社)
- ・田辺悟『ものとの人間の文化史』¹⁴³ 人魚』(二〇〇八年七月一日、法政大学出版局)
- ・吉川登編『近代大阪の出版』(二〇一〇年二月一日、創元社)
 - 青木育志「青木嵩山堂の出版活動」
- ・平石典子『煩悶青年と女学生の文学誌——「西洋」を読み替えて』(二〇一二年二月一日、新曜社)
- ・九頭見和夫『日本の「人魚」像——『日本書紀』からヨーロッパの「人魚」像受容まで』(二〇一二年三月一日、和泉書院)
- ・三枝博音『近代日本哲学史』(二〇一四年七月、書肆心水)
- ・木村洋『文学熱の時代——慷慨から煩悶へ』(二〇一五年一月一日、名古屋大学出版会)

【文学作品】

- ・オスカア・ワイルド著、本間久雄訳『柘榴の家——ワイルド童話集』(一九一六年一月二十六日、春陽堂)
- ・芥川龍之介「首を落とす話」(「新潮」第二八巻第一号、一九一八年一月一日、新潮社)

- ・芥川龍之介「地獄変」(「大阪毎日新聞」「東京日日新聞」、一九一八年五月一日～二二日、大阪毎日新聞社)
- ・芥川龍之介「文芸雑談 饒舌」(「新小説」第二三年第五号、一九一八年五月一日、春陽堂)
- ・芥川龍之介「江南游記」(「大阪毎日新聞」一九二二年一月一日～二月一三日、大阪毎日新聞社)
- ・谷崎潤一郎『人魚の嘆き』(一九二七年五月一八日、春陽堂)
- ・谷崎潤一郎『明治大正文学全集第三十五卷 谷崎潤一郎篇』(一九二八年二月一五日、春陽堂)
- ・永井荷風「柳橋新誌につきて」(「中央公論」第四二年第五号、一九二七年五月一日、中央公論社)
- ・馬場孤蝶『明治の東京』(一九四二年五月二〇日、中央公論社)
- ・古谷綱武編『小泉八雲集 (上)』(一九五〇年七月二八日、新潮社)
 - ――田部隆次訳「鮫人の感謝」
- ・高山樗牛等著、瀬沼茂樹編『明治文学全集 40 高山樗牛・斎藤野の人・姉崎嘲風・登張竹風集』(一九七〇年七月三〇日、筑摩書房)
- ・黒岩涙香著、木村毅編『明治文学全集 47 黒岩涙香』(一九七一年四月三〇日、筑摩書房)
 - ――曲亭馬琴「新作塩梅余史」
- ・武藤禎夫編『嘶本大系』第一三卷(一九七九年六月三〇日、東京堂出版)
- ――曲亭馬琴「新作塩梅余史」
- ・『荷風全集』第七卷(一九九二年一〇月二二日、岩波書店)
- ・『荷風全集』第一六卷(一九九四年五月二七日、岩波書店)
- ・『芥川龍之介全集』第五卷(一九九六年三月八日、岩波書店)
- ・『芥川龍之介全集』第八卷(一九九六年六月一〇日、岩波書店)

【事典、データベース】

- ・遠藤元男、児玉幸多、宮本常一編『日本の名産事典』（一九七七年一月一七日、東洋経済新社）
- ・相賀徹夫『日本大百科全書』卷一〇（一九八六年七月一日、小学館）
- ・相賀徹夫『日本大百科全書』卷二二（一九八八年七月一日、小学館）
- ・諸橋轍次『大漢和辞典』（修訂第二版）卷三（一九八九年六月一〇日、大修館書店）
- ・諸橋轍次『大漢和辞典』（修訂第二版）卷七（一九八九年一月一〇日、大修館書店）
- ・諸橋轍次『大漢和辞典』（修訂第二版）卷一二（一九九一年三月一〇日、大修館書店）
- ・日本国語大辞典第二版編集委員会、小学館国語辞典編集部『日本国語大辞典』（第二版）第五卷（二〇〇一年五月二〇日、小学館）
- ・平凡社地方資料センター編『日本歴史地名大系13 東京都の地名』（二〇〇二年七月一〇日、平凡社）
- ・新村出編『広辞苑』第六版（二〇〇八年一月一日、岩波書店）
- ・小谷野敦「谷崎潤一郎詳細年譜」<http://akoyano.la.coocan.jp/tanizaki.html>
- ・王文誥『唐代叢書』（出版年月不詳 清嘉慶丙寅年（一八〇六）海塩馬緯雲の序文あり）
<http://www.cadal.zju.edu.cn/book/62003817/1/search@query=唐代丛书,type=all,tag=publisher=http://www.cadal.zju.edu.cn/book/62003464/1/search@query=唐代丛书,type=all,tag=publisher=>
- ・毛奇齡『四書改錯』第十六卷「子見南子」（扉に西河合集、嘉慶辛未学圃重刊の文字あり）
[http://guji2.guoxuedashi.com/4130/\[国学大师www.guoxuedashi.com\]50378_八.pdf](http://guji2.guoxuedashi.com/4130/[国学大师www.guoxuedashi.com]50378_八.pdf)
- ・詩詞名句網 <http://www.shicimingju.com/>
- ・中華詩詞網 <http://www.haoshici.com/>

谷崎潤一郎全集・書簡に言及された漢籍

はじめに

本論では谷崎潤一郎の少年時代の漢文教育経験をはじめとして、文壇デビュー以前の初期文章、以後の「麒麟」「人魚の嘆き」「鮫人」「鶴唳」などと中国古典との関連を考察してきた。しかしこれらの考察によって明らかにされた漢籍は谷崎が読んだ数多くの漢籍のごく一部である。谷崎と中国古典を考察する以上、谷崎がどのような漢籍を読んでいたかを知る必要がある。ところが、夏目漱石や芥川龍之介ら旧蔵書目録が一部であれ整備されている作家と異なり、谷崎の蔵書は頻繁な引越しのため散逸してしまい、その詳細は詳らかではない。谷崎が読んだ可能性のある漢籍を推測する一つの手かがりとして、稿者は現在見られる谷崎の全作品（書簡も含む）に言及／引用／活用された漢籍をまとめて一覧表を作成した。一覧表は『谷崎潤一郎全集』（決定版 中央公論新社 二〇一五年五月一〇日～二〇一七年六月一〇日）第一巻～第二六巻、書簡、という順で配列し、個々の作品の初出年月、作品に言及された漢籍名・文人名、その詳細、備考といった項目を立てた。書簡は、決定版全集に未収録のため、愛読愛蔵版『谷崎潤一郎全集』第二五巻（中央公論社 一九八三年九月二五日）、二六巻（中央公論社 一九八三年一月一〇日）を底本としている。

一覧表にまとめた漢籍は、『論語』や『莊子』『史記』などのように書籍名が明記されたものだけでなく、名が明記されていないが、谷崎の引用／活用から推測したものも含む。さらに漢籍のみならず、谷崎と中国古典の

関連事項として、谷崎作品における古代から近代までの中国の詩人、作家、画家、書家などの文人・知識人の名前も採りあげた。あまり知られていない漢籍、漢詩や知識人などについて、備考項で簡略に説明した。

引用の際、ルビを簡略化し、漢字は原則として新体字に改めた。引用に際して付した「／」は、実際の本文では改行されていることを示す。誤字・誤植であると見られる箇所には「ママ」を付した。省略箇所は（…）と表記した。

| 巻数 | 作品名 | 発表年 | 言及された中国古典名／人名 | 詳細 | 備考 |
|----|-----|---------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1 | 刺青 | 1910・11 | 紂王の寵妃末喜(妲己) (『史記』『殷本紀]) 『論語』『微子第十(八)』 『論語』『雍也第六』 蔡邕『琴操』『龜山操』 『列子』『天瑞』 『列女伝』 『論語』『子罕第九』 『論語』『泰伯第八』 | 清吉は暇を告げて帰らうとする娘の手を取って、大川の水に臨む二階座敷へ案内した後、巻物を二本とり出して、先づ其の一つを娘の前に繰り展げた。それは古の暴君紂王の寵妃、末喜を描いた絵であった。瑠璃珊瑚を鑲めた金冠の重さに得堪へぬなよやかな体を、ぐつたり勾欄に靠れて、羅綾の裳袖を階の中段にひるがへし、右手に大杯を傾けながら、今しも庭前に刑せられんとする犠牲の男を眺めて居る妃の風情と云ひ(…)。(12～13頁) | 鳳兮。鳳兮。何徳之衰。往者不可諫。來者猶可追。已而。已而。今之從政者殆而。(19頁) われ魯を望まんと欲すれども、龜山之蔽をひたり。手に斧柯なし、龜山を奈何にせばや。(19頁) それからまた北へと三日ばかり旅を続けると、広々とした野に、安らかな、屈托のない歌の聲が聞こえた。(…)「先生は、さうして歌を唄うては、遺徳を拾つていらつしやるが、何も悔いる所はありませんか。」(…)「わしの楽しみとするものは、世間の人が皆持つて居て、却つて憂として居る。幼い時に行を勤めず、長じて時を競はず、老いて妻子もなく、漸く死期が近づいて居る。」「人は皆長寿を望み、死を悲しむで居るのに、先生はどうして、死を楽しみますか。」と、子貢は重ねて訊いた。「死と生とは、一度往つて一度返るのぢや。此処で死ぬのは、彼処で生れるのぢや。わしは、生を求めて麒麟するのには感いぢやと云ふ事を知つて居る。今死ぬるも昔生れたのと変りはないと思つて居る。」(20～21頁) 惨々たる女手、以て裳を縫ふ可し。(25頁) 備考：(「麒麟」において『列女伝』『論語』『子罕第九』、『論語』『泰伯第八』)の直接の引用が見られないが、本論第二章での考察と原田親貞の論考「中国文学と谷崎潤一郎(一)」(『学苑』第三四八号 一九六八・一二)、谷崎潤一郎と中国文学(二)」(『学苑』 |

| | | | | | |
|---------------------------------|---------------|------------------------------------------|--|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------|
| | | | | 第三五〇号、一九六九・二)によると、「麒麟」との関連性があることがわかる。 | 安知營營而求生非惑乎。亦又安知吾今之死、不愈昔之生乎。 |
| 信西 | 1911・1 | 孔子 老子 陰陽五行 | | わしは若い時分に、唐士の孔子の道を学んだ。さうして僅か一年程の間に其の奥義を究めて了つた。それからわしは老子の道を学んだ。(…) さうして此れも一年ばかりの間に、残らず学び尽くして了つた。最後にわしは、此の宇宙の間にある凡べての事柄を、悉くしらうとして。天文でも、医術でも、陰陽五行の道でも、わしの学ばない処はなかつた。(128 頁) | |
| 藝 | 1912・7～ 11 | 王陽明「菴譚夜坐」 | | 成らう事なら、二人の前に自分の悲のいきさつを打ち明けて、一緒に泣いて貰ひたいやうな気分にもなつた。「かう云ふ晩に月があると猶いゝんだがな。(…) 江北江南無限の情だね。」(195 頁) | 菴譚夜坐 何処花香入夜清？石林茅屋隔溪声。 幽人月出每孤往、栖鳥山空時一鳴。 草露不辭芒履濕、松風偏与葛衣輕。 臨流欲寫荷蘭意、江南江北無限情。 |
| The Affair of Two Matches | 1910・10 | 諸葛孔明 | | 諸葛孔明の生涯は偉大なる悲劇だ。あんな大人物でありながら自己の全部を玄徳に捧げたのは感心だ。(400 頁) | |
| 2 | 1910・9 | 『史記』『五帝本紀』 | | 文章博士広業、寝殿勾欄の辺りに立ちて、史記第一卷五帝本紀「黄帝者小典之子。姓公孫。名曰軒轅。少而神靈。弱而能言。幼而向齋。長而敦敏。成而聰明。治五氣。芸五種。撫万民。諸侯咸尊軒轅。為天子。」の句を三唱す。(66 頁) | |
| 3 | 1916・6 | 唐・張鷟『游仙窟』(唐 伝奇小説) 唐・杜牧「阿房宮賦」 | | 游仙窟の詩を思ひ出すやうな支那流の樓閣が聳え、繚乱たる花園の噴水の周囲には希臘式の四角な殿堂が石の柱を繞し(…)。(202 頁) 「蜀山兀として阿房出づ」と云ふ古の詩の文句がさながら此処に現出されたかと訝しめます。(202 頁) | 「蜀山兀として阿房出づ」は、唐・杜牧「阿房宮賦」「六王卒、四海一、蜀山兀阿房出」の句から。 |
| | 1916・1 | 神童 四書五経 『老子』 『莊子』 『孟子』「公孫丑上」 | | この早熟な少年は四書五経を読み始めてから、詩や歌を作るのが嫌ひになつて、一生懸命に東洋の哲学や倫理学に関する書籍を漁り求めた。(…) 老子を読み、莊子を読み、しまひに仏教の方へ手を伸ばして俱舍論や起信論や大智度論など云ふ物にまで眼を通した。(279 頁) | 四書：『論語』『孟子』『中庸』『大学』 五経：『詩経』『尚書』『礼記』『周易』『春秋』 |

| | | | | |
|---------|----------|------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | | | 「千万人と雖吾は往かん矣」と云つた孟子の言葉を、彼はそらに思ひ浮かべた。(314頁) | 「千万人と雖吾は往かん矣」は、『孟子』「公孫丑上」 「雖千万人吾往矣」の句から。 |
| 法成寺物語 | 1915・6 | 唐・吳道玄(画家) | 唐の吳道玄、我が朝の巨勢金剛が蘇生つて参らうとも、よもこれほどには描かれまい。(367頁) | 吳道玄(生没年不詳)は、吳道子ともいい、唐玄宗時代の画家である。その優れた画芸によって「画聖」と呼ばれた。日本や韓国にも影響を与え、日本には彼の作とされる「送子天王図」が残されている(住所不明)。 |
| 4 鬼の面 | 1916・1～5 | 『易経』 『康熙字典』(清) 『佩文韻府』(清) 四書五経 『論語』「述而第七」 | 易の講義を書いて居るのだが、出来上つたら一つ君にも見て貰はう。易と云ふ奴はなかなか面白いもんだよ。易に就いちやあ私の親父が大得意で、二十年もかゝつて『易経衍義』と云ふ物を書きかけたくらゐなんだが(…)。(24頁) 彼が此の二階に出入りし始めてから六七年来、部屋の方の壁に添うて堆く盛り重ねてある康熙字典と佩文韻府と四書五経の本箱が、今も昔と同じやうに煤にまみれて並んで居る。(25頁) あの見すばらしい老人にあれ程の強味を持たせ、「楽在其中矣」(156頁) | 「楽在其中矣」は、『論語』「述而第七」 「飯疏食飲水、曲肱而枕之、樂在其中矣」の一句から。 |
| 魔術師 | 1917・1 | 明・吳承恩『西遊記』 | しかしあなたは、支那小説の西遊記の、西梁女国の艶魔の媚笑を御覧になつた事がありませうか。(227頁) | |
| 鶯姫 | 1917・2 | 白居易『題峽中石上』 | 巫女廟花紅似粉、昭君村柳翠於眉。(299頁) | 「題峽中石上」 巫女廟花紅似粉、昭君村柳翠於眉。 誠知老去風情少、見此爭無一句詩。 |
| 人魚の嘆き | 1917・1 | 宋・王達『蠡海集』 清・余懷『板橋雜記』 | (「人魚の嘆き」において『蠡海集』と『板橋雜記』の直接の引用が見られないが、本論第三章での考察と細江光『人魚の嘆き』の典拠について) (『日本近代文学』 第四一号—一九八九・一〇) の論考によると、「人魚の嘆き」との関連性が窺われる。) 今度は入浴の快感を歌つた有名な唐詩の名句、「温泉水滑洗凝脂。」と云ふ長恨歌の一節が、古い古い記憶の底から呼び醒された。(321頁) | |
| 異端者の悲しみ | 1917・7 | 白居易『長恨歌』 『論語』 | 自分勝手な章三郎は、古い謡にある「人の将に死なんとする時、其の言や善し。」と云ふ | 『論語』「泰伯第八」に「曾子言曰：鳥之將死、其鳴也哀、人之將死、其言也善。」という文句がある。 |

| | | | | |
|------------------------|--------------|---------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | | | 格言を覚えて居た。(351頁) | |
| 亡友 | 1916・9 | 『論語』 | 二階の居間の壁には、半紙へ丹念な楷書を以て書き記された、教育勸諭だの、論語やバイブルの金言だのが、隙間もなく貼付けられて居たさうである。(485頁) | |
| ボオトリエルの詩 | 1916・6 | 李白 | 此れに匹敵するもの織かに支那の李太白(Li-tai-pe)の詩あるのみと、ゴオライエが極力賞讃して居る。(497頁) | |
| 5 | 1917・11 | 孔子 『論語』 | 支那でも孔子は、怪力乱神を語らずなと云つて居ます。(83頁) | 『論語』「述而第七」に「子不语怪力乱神」の文句がある。 |
| 兄弟 | 1918・2 | 仲尼(孔子) | それ仲尼の智も、瞳上の塵を視る能はずか。(126頁) | |
| 6 | 1919・2～ | 晏鐸「金陵春夕」 | 「花月楼、花月楼」と、私は織かに彼女の名前を支那音で呼び続けつゝ、両手の間に細長い顔を抱き挟んだ。(160頁) | 南京(旧称金陵)の妓女花月楼の名前も、晏鐸「金陵春夕」「花月春風十四楼」の句から採ったと推測される。 |
| 蘇州紀行 (別題：南 京奇望街) | 1919・2～ 3 | 『剪燈新話』「聯芳樓 記」 宋・范仲淹 | さうして、あの剪燈新話の聯芳樓記の中にある、蘭英蕙英の美しい姉妹が住んでゐた閭門外の運河の方まで、船を廻して見よう。(168頁) 伝説によればあの山に昔館娃宮と云ふ宮殿があつて、其処に西施が住んで居た。(…)館娃宮中樂鹿游、西施去泛五湖舟と云ふ「聯芳樓記」の中にある蘇台竹枝曲の文句が思ひ出される。(172頁) 此に於いて思ひ出すのは、度び度び引用するやうではあるが矢張りあの蘇台竹枝曲の一節である。——虎丘山上塔層層 夜静分明見仏燈 約伴姪香寺中去 自将銀劍施山僧(…)。(175頁) 宋の范仲淹の為に建てたといふ天平山白雲寺の白壁は、其れ等の楓樹の間に見え隠れして、山の麓を取り囲んで居る。(169頁) | 『剪燈新話』は中国明代(1368～1644年)瞿佑によって編まれた怪異小説集である。「蘇州紀行」の最後に、谷崎は「聯芳樓記」の中にある以下の詩を引用した。 姑蘇台上月团团 姑蘇台下水潺潺 月落西边有时出 水流东去幾時還 門泊东吴万里船 鸟啼月落水如煙 寒山寺裏鐘声早 漁火江楓宿客眠 洞庭金柑三寸黄 笠沢銀魚一尺長 東南佳味人知少 玉食無由進尚方 楊柳青青楊柳黃 青黄變色過年光 妾以柳采易憔悴 郎如柳絮太顛狂 一綸鳳髻綠於雲 八字牙梳白似銀 斜倚朱欄細首立 往来多少斷腸人 |

| | | | | |
|------|--------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 西湖の月 | 1919・6 | <p>高啓 (高青邱) 楊銖崖 (楊維梅) 王士禎 (王漁洋) 李笠翁 (李漁) の十種曲 『西湖佳話』 白樂天 林和靖 『水滸伝』 蘇小小</p> | <p>(...) よしや高青邱の詩の謂はゆる、渡水復渡水 看花還看花／春風江上路 不覺到君家 といふやうな南国特有の行楽を悉まにする訳には行かないにしても、(...)。(269頁) 私の夢はひとりでに楊銖崖や高青邱や王漁洋の詩の世界に迷ひ込んで行くやうな心地になる。(274頁) 松江と云へば元末の詩人楊銖崖が嘗て乱を此の地に避けた事を憶ひ出す。草枝、柳枝、桃枝、杏枝と呼ぶ四人の妾を従へて、彼が日々画舫の遊びを恣にしたのは、思ふに私の汽車が今通り過ぎつゝある此の近辺なのであらう。(275頁) 戲曲家の李笠翁なども、浙江の生れである云ふから、あの十種曲の中に現はれて来る場面や人物は、此の窓の外を走つて居る山や、川や、都会や、街道や、此の室内に座を占めて居るやうな佳人才子の間から、さまざまな生きた材料を得た事であらうと想像される。(...) 十種曲の中にある屋中樓伝奇を読むと、東海の浜辺へ遊びに行つた柳士肩と云ふ青年が、(...) それから又女優の劉貌姑と稱世の才人の譚楚玉とが相抱いて川へ身を投げた後、可憐な二匹の比目魚と化して嚴陵地方へ流れて行つたと云ふ比目魚伝奇の物語も、日常お伽噺のやうな山水や樓閣や人物を目にして居るうちに (...)。(275頁) 食堂車のまつい洋食で飢を凌いで、しよざいなさに携へて来た石印の西湖佳話を読んで居るうちに、戸外は真つ黒になつてしまつた。(276頁) 白樂天が築いたと云ふ伝説のある白公堤や、孤山の麓にあると云ふ林和靖の放鶴亭や、文世高と秀英小姐との恋物語で名高い漸橋の情蹟や (...)。(277頁) 林和靖が「疏影横斜水清浅」と云つたのは思ふに此の湖のことであらうが、(...)。(284頁) 水滸伝中に豪傑どもが町のまん中で棒を使つたり槍を振つたりする光景が描かれて居るのは、蓋しかう云ふ先生をモデルにしたのかも知れない。(281頁) 私は其の話を聞いて、図らずも彼女と同じく此の湖の畔でみまかつた六朝の名妓蘇小々の事を思ひ出した。(289頁)</p> | <p>高啓 (1336～1374年) は、中国明代初期の詩人、号青邱。「渡水復渡水 (...) 不覺到君家」は、その詩「尋胡隱君」である。 楊銖崖 (1296～1370年) は、号鉄崖、中国元代の詩人、著作に『鉄崖古樂府』(10巻) 『樂府補』(6巻) 『楊銖崖詩集』(26巻) などがある。 王士禎 (1634～1711年) は、号漁洋、中国清朝初期の詩人、文学者。詩集に『漁洋山人精華錄』(12巻) などがある。 李笠翁の十種曲：燐香伴、風箏誤、意中縁、屋中樓、鳳求凰、奈可天、比目魚、玉搔頭、巧团月、慎露交。 林和靖 (967～1028年) は即ち林逋のこと、宋代の詩人、隠士。西湖の孤山に住み、梅と鶴を愛した。 谷崎は小説の最後に引用した漢詩： 六朝金粉香車何在 才華一代青塚猶存 (葉赫題) 千載芳名留古蹟 六朝遺事著西冷 湖山此地管埋玉 花月其人可鍊金 (皮林集) 桃花流水杳然去 油碧香車不再逢 (徐蘭修) 花鬢柳眼渾無賴 落絮游絲亦有情 (孔惠集句)</p> |
|------|--------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

| | | | | |
|---|----------------|-------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | | | | 燈火珠簾儘有佳人居北里 笙歌画舫独教芳塚 占西冷 (平湖王成瑞) |
| | 活動写真の 現在と将来 | 1917・9 | 『西遊記』 | 写実劇に適する事は説明する迄もないが、例へば全く芝居にする事の出来ないダンテの神曲とか、西遊記とか、ボオの短篇小説の或る物とか、或ひは泉鏡花氏の「高野聖」「風流線」の類 (...) は、きつと面白い写真になると思ふ。(389頁) |
| | 詩と文字と | 1917・4 | 李太白 | (...) 漢字の葬らるゝ事ありとも、李太白の詩は永遠に生きん。(414頁) |
| | 南京夫子廟 | 1919・2 | 杜牧「泊秦淮」 | 杜牧の詩に「煙籠寒水月籠砂 夜泊秦淮近酒家 商女不知亡國恨 隔江猶唱後庭花」といふのがあります。(474頁) |
| 7 | 女人神聖 | 1917・9～ 1918・6 | 明・王陽明『伝習録』 『王陽明全書』 | 「陽齋」と云ふ雅号は、彼が若い時分に伝習録を読んで、熱心なる王陽明の崇拜者となつたために、自ら選んだものである。(112頁) 手製の白木の書棚があつて、王陽明全書と書いた大部の唐本が堆く積んである。(113頁) |
| | 天鷹絨の夢 | 1919・11 ～12 | 李白「望廬山瀑布」 | 七宝の香炉からは紫の煙がゆらゆらと立ち、天井には例の如く無数の魚が集まつて居ました。(418頁) |
| 8 | 鯨人 | 1920・1 ～10 | 岑参「送張子尉南海」 倪雲林(倪瓚) 王摩詰(王维) 黄大痴(黄公望) 賀知章「題袁氏別業」 『唐詩選』 『水滸伝』 『紅樓夢』 李太白酒の五言絶句 | 不沢南州尉、高堂有老親。樓台重溼氣、邑里雜鯨人。海暗三山雨、花明五嶺春。此郷多宝玉、慎勿厭清貧。(9頁) もともと支那に比べれば小規模で貧弱な此の国の自然のうちで、倪雲林の山水や王摩詰の詩境を何処に求めたらいふであらう。(35頁) かうして居ると、彼はいつも「主人不相識。偶坐為林泉。」と云ふ唐詩選に在る賀知章の五言絶句を思ひ出した。(39頁) だから東洋では水滸伝や紅樓夢よりも李太白酒の五言絶句の方が貴い。(46頁) 倪雲林や黄大痴の南画はミケラフジェロの壁画と同一の高さに届いて居る(46頁) 昔、今から千二三百年も前、唐の代に二人の詩人があつた。一人を宋之間と云ひ、一人を |
| | | | 望廬山瀑布 日照香炉生紫煙、遥看瀑布掛前川。 飛流直下三千尺、疑是銀河落九天。 | 王陽明(1472～1528年)、中国明代の思想家。名は守仁、字は伯安、陽明は号。陸九淵の心学をうけ継ぎ、知行合一説、致良知説を主張して一派を成し、王学、陽明学と呼ばれる。 |
| | | | 倪雲林(1301～1374年) 中国元末の画家、詩人。 題袁氏別業 主人不相識。偶坐為林泉。 莫讓愁沽酒。囊中自有錢。 黄大痴(1269～1354年) 黄公望、中国元末の水墨画家。倪雲林、呉鎮、王蒙と並び「元末四大家」と賞され、代表作に「富春山居図」などがある。 | |

| | | | | |
|----|------------------------|-----------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | | 宋之問、劉廷芝「白頭翁」 | 劉廷芝と云つた。(…) 劉は或る時あの有名な「白頭翁」の詩を作つて「年々歳々花相似。歳々年々人不同。」の句を得たので(…)。(47頁) 一別家御音信杳なり、百種の相思、腸ちぎること何れの時にか了らん、燕子来たらず花又老ゆ、一春瘦せて腰小なり、薄幸の郎君いつれの日にか至らん。(98頁) | 谷崎が言及した宋之問、劉廷芝の逸話は、「大唐新語」(唐・劉肅)、「劉賓客嘉話錄」(唐・韋綯)と『唐才子伝』(元・辛文房)などに記されている。『古代叢書』『陽山羅氏文房小説』などに収録。 |
| | 蘇東坡 | 清・墨浪子『西湖佳話』 | 谷崎の戯曲「蘇東坡」は『西湖佳話』巻之三「六橋才蹟」を底本とするものと見られる。 | 第六章参照。 |
| 9 | 芸術一家言 1920・4～ 11 | 杜甫「戲為六絶句・二」 杜甫「夢李白・其二」 | 軽薄な批評家を罵つた杜子美の詩に、楊王盧駱當時体 軽薄為文晒未休 爾曹身与名俱滅 不廢江河万古流 と云ふのがある。(365頁) 同じく杜子美が李白を憐れみ慰めた詩の中に「千秋万歳名 寂寞身後事」とも云つて居る(365頁)。 | 夢李白・其二 浮雲終日行、游子久不至。三夜頻夢君、情親見君意。告歸常局促、苦道來不易。 江湖多風波、船楫恐失墜。出門搔白首、若負平生志。冠蓋滿京華、斯人獨憔悴。 孰云綱恢恢、將老身反累。千秋万歳名、寂寞身後事。 |
| | 支那趣味と云ふこと | 1922・1 『十八史略』 李白、杜甫、高青邱、吳梅村 | 私も子供の時には漢学の塾へ通つたし、母は私に十八史略を教へたものであつた。(…) 私は支那を恐れながらも、私の書棚には支那に関する書籍が殖えて行くばかりである。止さう止さうと思ひながら、私は時々二十年も前に愛読した李白や杜甫を開いて見る。(…) 西洋人臭い街に住まひ、西洋館に住んで居ながらも、私のデスクの左右にある書棚の上には、亜米利加の活動雑誌と共に高青邱や吳梅村が載つて居る。(410頁) | |
| | 廬山日記 | 1921・9 吳宗慈『廬山誌』 | 午前中は日記をつけ廬山誌を読みなす。 (461頁) | 吳宗慈 (1879～1951年) 歴史学者、地方誌学者。 |
| 10 | なし | | | |
| 11 | なし | | | |
| 12 | 友田と松永の話 5 | 1926・1～ 陶淵明「桃花源記」 | 恐らく武陵桃源とはかう云ふ長閑な、うらうらとした気分を理想化したものであらう。(151頁) | 武陵桃源は「桃花源記」「晋太原中、武陵人捕魚為業。(…) 忽逢桃花林、夾岸數百步、中無雜樹(…)。」の内容から。 |

| | | | | |
|----------------|-------------------------|------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------|
| 饒舌録 | 1927・2～ 12 | 李白 杜甫 明・瞿佑『剪燈新話』 『論語』「為政第二」 孔明、周瑜（『三国志』） | 彼等は永久に李白や杜子美の詩境を理想とし、その伝統以外の美を求めようとしなければ、又求める必要もなかった。(317頁) そのいっ例は圓朝の牡丹灯籠である。剪燈新話の牡丹灯籠之記は至極短篇ではあるが、あれはあれだけで纏まってゐて、非常に気品の高いものである。(321頁) 遠く離れて、長い眼で見れば分るもので「人焉んぞ瘦さん哉」である。(328頁) 昔孔明と同じ時代に生まれて、いろいろな方面で孔明とよく似てゐながら、而もどの方面でも少しづつ孔明に劣つてゐた周瑜と云ふ男は実に不幸だ。(333頁) 唄は水滸伝や三国志の一節さうだが、どうも張さんのほど面白くなかつた。(424頁) | 『論語』「為政第二」子曰：視其所以、觀其所由、察其所安。人焉廋哉？人焉廋哉？ |
| 上海交遊記 | 1926・5～ 8 | 『水滸伝』 『三国志』 | | |
| なし | | | | |
| 13 なし | | | | |
| 14 「蓼食ふ虫」序詞 | 1928・11 | 宋・鶴林玉露』 | しかし、その後調べてみたら、この諺は「蓼虫不知苦」といふ支那の諺が元祖であることを発見した。詳しくいへば「氷蚕不知寒、火鼠不知熱、蓼虫不知苦」である。(466頁) | |
| 15 なし | | | | |
| 盲目物語 | 1931・9 | 白楽天「長恨歌」 | そのうちに一人、「梨花一枝雨を帯びたるよそほひの、雨を帯びたるよそほひの」と、 (…) いまの楊貴妃のうたの文句に耳をかたむけてをりますと、「雨を帯びたるよそほひの、太液の芙蓉のくれなゐ、未央の柳のみどりも、これにはいかでまさるべき、げにや六宮の粉黛の、顔色のなきもことわりや」と。(388～389頁) | この部分は、「長恨歌」「梨花一枝春帶雨」「太液芙蓉未央柳」「六宮粉黛無顔色」から。 |
| 吉野葛 | 1931・1～ 2 | 唐・錢起「帰雁」 | 地質は多分塩瀬であらう、表は上の方へ紅地に白く八重梅の紋を抜き、下の方に唐美人が高樓に坐して琴を弾じてゐる図がある。樓の柱の両側に「二十五弦彈月夜」「不慙清怨却飛來」と、一對の聯が懸つてゐる。裏は月に雁の列を現れした傍に「雲みちによそへる琴の柱をはつらなる雁とおもひける哉」と云ふ文字が読めた。(449頁) | 帰雁 瀟湘何事等閑回、水碧沙明兩岸苔。 二十五弦彈月夜、不慙清怨却飛來。 |
| 16 武州公秘話 | 1931・10 ～1932・ 11 | 明・王陽明『伝習録』 | 王守仁曰。破山中賊易。破心中賊難。(9頁) | |

| | | | | |
|--------------|----------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 懶惰の説 | 1930・5 | 元・柳貫「自宗正府西移 居尚食局後雜書兩首・其 二 未明車」 宋・許月卿「挽李左藏」 唐・杜甫「奉酬嚴公寄題 野亭之作」 老莊哲學 『三國志』 『史記』「蘇秦傳」 | 「懶」の方は、「ものうし」「なまける」「おこたる」「つかれふす」の意で、柳貫の詩の、借得小窓容我懶、五更高枕聞春雷。と云ふ句が引例として挙げられてゐる。なほ「字源」から孫引きすれば、許月卿の詩に「半生懶意琴三疊」、杜甫の詩に「懶性從來水竹居」など々ある。(159頁) 佛教や老莊の無為の思想、「怠け者の哲学」に影響されてゐるのであらうが、(…)仏教や老莊の哲学は寧ろそれらの環境が逆に生み出したものであると考へる方が自然に近い。(163頁) 諸葛孔明が玄德に三度も草廬を驚かされて、仕方なしにその重い腰を持ち上げたのは三國志でお馴染みの話である。(165頁) 戦国の世に蘇秦が錦を着て故郷へ帰り、「我をして負郭の田二頃あらしめば豈六国の相印を佩びんや」とか何とか云つて威張つたと云ふ話があるが(…)。(165頁) | 未明車 未明車馬省門開、面面風霜一寸埃。 借得小窓容我懶、五更高枕聞春雷。 挽李左藏 少年謂子氣橫秋、壯已辺城汗漫游。 筮仕弗如掃亦好、讀書未了死方休。 半生懶意琴三疊、千古詩情土一丘。 月落錫林煙霧冷、松風無賴自颺颺。 奉酬嚴公寄題野亭之作 拾遺管奏數行書、懶性從來水竹居。 奉引濫騎沙苑馬、幽栖真釣錦江魚。 謝安不倦登臨費、阮籍焉知禮法疏。 柱沐煙塵出城府、草茅無徑欲教锄。 『史記』「蘇秦傳」：使吾有洛陽負郭田二頃。 吾豈能佩六國相印。 |
| 恋愛及び色情 | 1931・4～6 | 四書五経、史記、文章軌範 森槐南「唐詩選評釈」 李白「峨眉山月歌」 | 私が少年の時漢文学の教科書として用ひた書物、四書だの、五経だの、史記だの、文章軌範だのは凡そ恋愛とは最も縁の遠いもので(…)。(179頁) 森槐南は嘗てその「唐詩選評釈」の中で、あの有名な「峨眉三月歌」の詩を挙げ、「君を思つて見ず」とは表面月を意味する如くであるけれども(…)。(180頁) | 峨眉山月歌 峨眉山月半輪秋、影入平羌江水流。 夜發清溪向三峽、思君不見下渝州。 |
| 現代口語文の欠点について | 1929・11 | 李白「玉階怨」 | たとへば李白の玉階怨を取つて見よう、玉階白露生、夜久侵羅襪、却下水晶簾、玲瓏望秋月。(221頁) | |
| 「つゆのあとさき」を読む | 1931・11 | 『金瓶梅』 『紅樓夢』 老莊思想 『水滸伝』 | 少なくとも「金瓶梅」はその代表的なものだと思ふ。「紅樓夢」は全巻を通読してゐないが、これも恐らくはさうであらう。(249頁) これは老莊の虚無思想などから来てゐるのであらうが、(…)。たとへば「水滸伝」などは、官僚の悪政治に憤りを抱く文人が(…)。(257頁) | |

| | | | | | |
|----|--------------|--------------------|-----------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 17 | 芦刈 | 1932・11 ～12 | 杜甫「瀟洞庭湖」 白楽天「琵琶行」 蘇東坡「赤壁賦」 唐・玄覺禪師「証道歌」 | 洞庭湖の杜詩や琵琶行の文句や赤壁の賦の一節など、長いこと思ひ出すをりもなかつた耳ざはりのいゝ漢文のことばがおのづから明々たるひびきを以て唇にのぼつて来る。(18頁) わたしは提げてきた正宗の囀を口につけて喇叭飲みながら潯陽江頭夜送客、楓葉荻花秋瑟瑟と酔ひの発するまゝにこゑを挙げて吟じた。そして吟じながらふとかんがへたことゝいふのはこの蘆荻の生ひしげるあたりにも嘗ては白楽天の琵琶行に似たやうな情景がいくたびか演ぜられたであらうといふ一事であつた。(18頁) もうそのことは忘れたやうに、江月照ラン松風吹ク、永夜清宵何ノ所為ゾと悠々たる調子で吟じた。(22頁) | 「証道歌」は唐の高僧永嘉玄覺禪師が悟つた後に作つた歌である。該当部分の原文は「江月照松風吹、永夜清宵何所為」 |
| | 春琴抄 | 1933・6 | 宋・林和靖「山園小梅」 | 今一人の暫間が春琴の前に立ち塞がり「わたい梅の樹だつせ」と道化た格好をして疎影横斜の態を為したので一同がどつと笑ひ崩れた。(95頁) | 「疎影横斜」という語は、林和靖の詩「山園小梅」「疎影横斜水清淺」の句から来たと思われる。「鶴唳」に林和靖の人物像とよく似た主人公靖之助が設定されたことから、谷崎は林和靖の逸話とその詩文が熟知していたことがわかる。 |
| | 顔世 | 1933・8～ 10 | 王昭君 | あれでは胡国の夷とやりに嫁かれたと云ふ王昭君も同じこと、どんなにあじきない月日を送つていらつしやるかと、人事ながらお可哀さうでなりませぬ。(124頁) | 王昭君、中国前漢の元帝の宮女。名は嬪。昭君は字。明妃・明君とも呼ばれる。匈奴との和親政策のため呼韓邪単于に嫁がせられた。その逸話は史書、詩文、戯曲などさまざまな文学作品に書かれていく。また貂蟬、西施、楊貴妃と共に中国古代四大美人と呼ばれる。 |
| | 直木君の歴史小説について | 1933・11 ～1934・1 | 『詩経』、諸子百家 『史記』、『左伝』 『資治通鑑』 『十八史略』 『水滸伝』 | われわれの習つた漢文学と云ふものと、詩と、諸子百家との外は、その大部分が史記とか、左伝とか、通鑑とか、十八史略とか、日本外史とか、近古史談とか云ふやうな歴史的著述であり(…)。(240頁) 支那でも水滸伝などは血腥い立ち廻りで埋まつてゐるが、しかし剣の果たし合ひそのものを、もしくは白刃の魅力と云ふやうなものを主題とし(…)。(267頁) | 『左伝』は、中国春秋時代の歴史書『春秋左氏伝』とも呼び、春秋時代魯の左丘明の著と伝えられる。 『資治通鑑』は、宋代の歴史書。司馬光撰。 『十八史略』は中国の通俗史書。元代の曾先 |

| | | | | | |
|----|--------|-----------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | | | | | <p>この著。日本にも室町時代に渡来。江戸時代に盛んに読まれ、明治時代には全国小学校の教科書に採用された。</p> <p>『水滸伝』は、中国明代の口語小説。『金瓶梅』、『三国志演義』、『西遊記』と共に中国四大奇書と呼ばれる。</p> <p style="text-align: center;">春望</p> <p>国破山河在、城春草木深。感時花濺淚、恨別鳥驚心。烽火連三月、家書抵万金。白頭搔更短、渾欲不勝簪。</p> |
| | 東京をおもふ | 1934・1～4 | 杜甫 「春望」 | <p>昔の詩人は「国破れて山河在り」と歌ったが、今の東京はコンクリートの橋や道路が徒らに堅牢にして人は路上を舞って行く紙屑の如く、と云ったやうな趣がないでもない。(335頁)</p> | |
| 18 | きのふけふ | 1942・6～11 | <p>『唐詩選』 欧陽子倩 唐林の漢詩 辜鴻銘 田漢 郭沫若 魯迅 「阿Q正伝」 胡適 「四十自述」 豐子愷 「綠緣堂隨筆」 周作人 林語堂 「北京の日」 陶淵明 王維 『紅樓夢』 『金瓶梅』</p> | <p>唐詩選で教育されたわれ我日本人にも読み得る古典型の詩を作ると云ふのは多少意外の感もする。(427頁)</p> <p>なほもう一幅、欧陽氏の書と同じ表装をして保存してゐるものに左の詩がある。—— 寂寞空庭樹 猶發旧時花 一夜東風起 吹落委黃沙 落花安足惜 枝葉已參差 人生不相見 処々是天涯 此の詩を書いてくれたのは、矢張その晩にゐた唐林と云ふ青年文人で、(…)。(427頁)</p> <p>清朝の遺臣を以て自ら任じてゐた辜翁は、晩年にもなほ辮髪を蓄へてゐたと見えて、たまたま洋服姿の田漢氏に会ふや、皮肉のつもりか、英語でマイ、ネクタイと云ひながら自分の辮髪を振つて見せたと云ふ話。(430頁)</p> <p>往年、郭沫若氏が日本へ逃げて来たのは、当時蔣介石が共產党と絶縁した結果氏も亦遂はれるに至つたのであらうと想像するが、(…)。(432頁)</p> <p>魯迅氏の阿Q正伝が訳されたのはいつであつたか、あれなどは比較的早い方であるが(…)。(439頁)</p> <p>しかし胡氏の自伝である四十自述(私が読んだのは吉川幸次郎氏訳、創元社発行創元支那叢書の一冊である)を読むと、氏は「光緒十七年十一月十七日(一八九九年十二月七日)に生まれた」とあるから、(…)。(440頁)</p> | |

| | | | | |
|----|--------------|--------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | | | <p>縁縁堂隨筆の著者である豊子愷と云ふ人の名は、從來殆ど我が国に聞えておない。(…)</p> <p>此の著者の経歴については吉川氏も「多くを知らぬ」と云つてゐるが、(…)、書者には隨筆集が四冊と、音楽理論、絵画理論に関するものが数冊あること、等が知られてゐる。(447頁)</p> <p>私は昨年周作人氏が来朝した時、京都に於いてちよつと一時間ばかり同席する機会を得、始めて此の現代支那の文学者——(…)の警咳に接したのであるが、(…)。(454頁)</p> <p>林語堂氏のもは近年相当我が国に紹介され、(…)。私は日本文に翻訳された氏の著作には大概一通りは眼を通したつもりであるが、中で最も感興を覚えたのは何と云つてもその創作北京の日 (Moment in Peking) である。(456頁)</p> <p>陶淵明、王維 (447頁)</p> <p>鶴田氏の訳文は流麗で、漢文臭いものではないが、何と云つても日本文には漢字が多く使はれるのであるから、支那文程ではないとしても、矢張漢字の魅惑から逃れ出ることが出来ず、そのために一層内容が紅樓夢や金瓶梅に近いやうに見えるのであらう。(459頁)</p> | |
| 19 | なし | | | |
| 20 | 細雪 (下) | 1947・3 ～1948・10 | 爛柯の説話 | <p>晋の王質と云ふ樵夫が山の中で童子が碁を打つてゐるのを見ておたら、その間に斧の柯が爛れて、とやら云ふやうなことではございませんでしたせうか (37頁)</p> |
| | | | | |
| | 磯田多佳女の こと | 1946・8～ 9 | 李北海 | <p>(…) 李北海の拓本をすゝめたので、多佳女はその教を守り、毎日二十分くらゐソラソラ書することを二三年続けたと云ふ。(323頁)</p> |
| | 月と狂言師 | 1949・1 | 辜鴻銘の詩 | <p>有人対月數扁期と云ふ辜鴻銘の聯を掲げて(…)。(366頁)</p> |
| | | | | <p>爛柯の説話は南朝・梁の任昉 (460～508年) 『述異記』や酈道元 (?～527年) 『水経注』 (515年)、唐・房玄齡・李延寿編『晋書』 (648年以後)、唐・段成式の『酉陽雜俎』など多くの古典に記されている。</p> <p>李北海 (678～747年) は字泰和、中国唐代の書家。</p> <p>辜鴻銘 (1857～1928年) 中国清末民初の学者。中国の伝統文化と西洋文化の両方に精通しており、西洋人に東洋の文化と精神を称揚し、大きな影響を与えた。</p> |

| | | | |
|------------------|--------------|-------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 奉天時代の 李太郎氏 | 1946・10 | 『莊子』 | (….) 又奉天に來てからは中国人の教師に就いて中国の古典を学び、當時は、「莊子」を習つてゐるといふことも聞いてゐたが、(….)。(549頁) |
| 21 少将滋幹の 母 | 1950・8 | 白楽天『勸我酒』 白楽天『醉歌』 白楽天『失鶴』 白楽天『夜雨』 | 我に酒を勸む、我辞せず、請ふ君歌へ、歌うて遅きこと莫れ。 洛陽の兒女面は花に似たり、河南の大尹頭は雪の如し。(61頁) 玲瓏々々老いたるを奈何にせん(62頁) 失うて庭の前の雪となり／飛んで梅の上の風に因る／九宵忘に侶を得たるなるべし／三夜籠に帰らず／声は碧の雲の外に断え／影は明けき月の中に沈む／郡齋これより後は／誰か白頭の翁に伴はん(115～116頁) 我念ふ所の人あり／隔たりて遠き遠き郷にあり／我感ずる所の事あり／結ばれて深き深き腸にあり／郷は遠くして去くことを得ざれども／日として思ひ量らざることなし／腸は深くして解くことを得ざれども／夕として思ひ量らざることなし／況んや此の殘燈の夜に／独り宿りて空堂にあるをや／秋の天殊に未だ曉けず／風と雨と正に蒼々／頭陀の法を学ばざれば／前よりの心安んぞ忘る可けん(117頁) |
| 乳野物語 | 1951・1～ 3 | 宋・魏野『書友人屋壁』 | 洗硯魚吞墨／烹茶鶴避煙。(153～154頁) (この二句の詩は京都下鴨の住居露梁亭の中門の柱に懸っている) |
| | | | 勸我酒、我不辞。請君歌、歌莫遲。歌声長、辞亦切、此辞聽者堪愁絕。洛陽女兒面如花、河南大尹頭如雪。 醉歌 罷胡琴、掩秦瑟、玲瓏再拜歌初卒。誰道使君不解歌、聽唱黃雉與白日。黃雉催曉丑時鳴、白日催年酉前沒。腰間紅綬糸未穩、鏡里朱顏看已失。玲瓏玲瓏奈何向、使君歌了汝更歌。 失鶴 失為庭前雪、飛因海上風。九宵忘得侶、三夜不歸籠。声斷碧雲外、影沈明月中。郡齋從此後、誰伴白頭翁。 夜雨 我有所念人、隔在遠遠鄉。我有所感事、結在深深腸。鄉遠去不得、無日不瞻望。腸深解不得、無夕不思量。況此殘燈夜、獨宿在空堂。秋天殊未曉、風雨正蒼蒼。不学頭陀法、前心安可忘。 |
| | | | 書友人屋壁 達人野綠位、居外傍林泉。洗硯魚吞墨、烹茶鶴避煙。嬾催歌聖代、老不恨流年。 靜想閑來者、還忘我最偏。 |

| | | | | |
|------------------|-----------|-----------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------|
| 幼少時代 | 1957・3 | 『論語』 『大学』 『西遊記』 『王陽明全集』 『伝習録』 朱熹「勸学詩／偶成」 『大学』『中庸』『孟子』 『十八史略』『文章軌範』 | 論語の郷党第十「与上大夫言、聞々如也」(240頁) 先進第十一「関子侍側、聞々如也」(同上) 『大学』「富潤屋、徳潤身」(同上) 西遊記と弓張月を合本にした帝国文庫(…)さう云ふ本を折々買ふことが出来た(…)。(327頁) 私は先生が青木嵩山堂で売つてゐた、六号でベタで組んだ活字版の白文王陽明全集十巻を蔵してゐて(…)王陽明の詩集の中から、晩夷原不滞脚中。何異浮雲過大空。夜静海濤三万里。月明飛鶴下天風。と云ふ詩や、破山中賊易。破心中賊難。と云ふ詩などを黒板に記して説明してくれたことを覚えてゐる。(353頁) 先生はその頃王陽明全集や伝習録や井上哲次郎の「日本陽明学之哲学」などを読み、陽明学に心酔してゐた。(364頁) 朱熹「勸学詩／偶成」：少年易を学難成、一寸光陰不可軽。未覚池塘春草夢、階前梧葉已秋声。(354頁) 秋香塾では「大学」から「中庸」、「論語」、「孟子」と云ふ順序で進み、十八史略、文章軌範くらゐまで習つた。(367頁) | その他、『漢楚軍談』にも言及された。漢籍ではなく江戸時代の読本で、明代の「西漢通俗演義」の翻訳で、漢の劉邦と楚の項羽との戦いを小説化したもの。(356頁) |
| 22 過酸化マンガン水の夢 | 1955・11 | 『史記』「呂后本紀」 | 史記呂后本紀に云ふ、「太后遂二戚夫人ノ手足ヲ断チ、眼ヲ去リ耳ヲ燻ベ、精葉ヲ飲マンメテ廁中ニ居ラシム、命ケテ人處ト曰フ」と。(23頁) | |
| 小野篁妹に恋する事 | 1951・1 | 王羲之、王献之 『論語』『大学』 『史記』「高祖本紀」 前漢・劉向『列仙伝』 | 草書と隸書が巧みであつて、古への王羲之や王献之にも比較せられ(…)。(44頁) 秋香先生が、論語や大学の四角な大きな文字の上を字突で突きながら素読を授けてくれたのであつた。(47頁) 馬卿とは司馬相如のことで相如が琴の音調を以て卓王孫の娘卓文君を挑んだことが史記列伝に載つてをり、鳳史とは籙史のことで、籙史が籙を吹いて秦の穆公の娘弄玉を得たことが列仙伝に見えてゐる。(57頁) | 『列仙伝』は中国仙人の伝記集。前漢時代の劉向の作と言われる。前漢の武帝～宣帝間の仙人70人について逸話的な伝記を記したものの。 |
| 健 | 1956・1～12 | 『大学』(慎独)の思想 | 亡くなつた父は昔よく「慎独」(ひとりをつつしむ)と云ふことを教へた。(96頁) | |

| | | | | |
|-------------|-------------------|-------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 夢の浮橋 | 1959・11 | 元・呉鎮 「草亭詩意图」 宋・魏野 「書友人屋壁」 | 門の左右に竹の籬が懸つてゐて、林深禽鳥樂、塵遠竹松清 とあつたが、誰の書であるかは父もしらないと云つてゐた。(214頁) 後年私は大人になつてから、洗硯魚吞墨 と云ふ句を何かで見かけたが、この池の鯉や鮒どもは麩にばかり寄つて来ないで(…)。(218頁) | 草亭詩意图 依村構草亭、端方意匠宏。林深禽鳥樂、塵遠竹松清。泉石俱延賞、琴書悅性情。何当謝凡近、任適慰平生。 書友人屋壁 達人輕祿位、居住傍林泉。洗硯魚吞墨、烹茶鶴避煙。嫻惟歌聖代、老不恨流年。靜想閑來者、還応我最偏。 |
| 親不孝の思ひ出 | 1957・9～ 10 | 『史記』 『十八史略』 『史記』「項羽本紀」 | 当時の小学校の先生は大概史記や十八史略ぐらゐは読んでゐたので、野川先生は多分さう云ふ書物に基づいてこの話(舜の話)をしてくれたのであらう。(286頁) 恰も鴻門の会の樊噲が殿肩の肉をくらふが如くで、「臣は死をすら且避けず、卮酒安んぞ辞するに足らん」と云つてゐるやうであつた。(298頁) | |
| 「緑波食談」に寄す | 1955・7 | 『孟子』 | これ〔引用者注——食前方丈〕は孟子の尽心の章にある句で、御馳走を沢山眼前に並べて漉を垂らしてゐる意である。(356頁) | |
| 欧陽予倩君の長詩 | 1957・2 | 『唐詩選』 清・『唐宋詩醇』 | 今の中興の要人たちの中でも、老人組に属する人々は唐宋詩醇や唐詩選にあるやうな古い形の詩を好んで作るやうである。(387頁) | 『唐詩選』は中国の唐詩の選集。明の李攀竜の編というが未詳。計128人の465編を詩体別に収めたもの。日本には江戸初期に伝来し、漢詩人入門書として大いに流行した。 『唐宋詩醇』は清・乾隆15(1749)年に編集され、李白、杜甫、白居易、蘇東坡など唐宋の詩文を多く収録した。 |
| 23 三つの場合 | 1960・9～ 1961・2 | 前漢・班固 『前漢書』 明・謝肇淛 『五雜俎』 唐・白樂天 『酬谷公雪中見贈詩不与夢得同相訪』 | 「奇術隨筆」の「マングロウ樹の奇術」の中には前漢書の張敖伝や五雜俎の原文を引いて「植瓜種樹」の術や、食火や吞刃の術が漢の武帝の時に既に印度から中国へ渡来してゐることを語り、本朝の今昔物語巻廿八にも「以外術被盜食瓜語第四十一」があることを教へてゐる。(15頁) 白樂天の詩に「人は鶴鬢を抜て立つて徘徊す」などあり、昔の中国には「鶴鬢衰」な | 『前漢書』は『漢書』ともいう。前漢の歴史を紀伝体で記した書。後漢の班固が撰し、妹の班昭らが補った。 『五雜俎』は中国明末の隨筆。謝肇淛著。1619年成立。明代の政治、経済、文化、科学など |

| | | | | | |
|----|------------------------------|----------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------|
| | | | | どゞ云ふ羨もあつたらしいのであるが (84 頁) | を天、地、人、事、物の五類に分けて考証した もの。 酬令公雪中見贈呀不与夢得同相訪 雪似鵝毛飛散乱、人披鵝氈立徘徊。 郷生枚叟非無興、唯待梁王召即來。 |
| 24 | 癡癩老人日記 1961・11 ～1962・5 | 唐・玄奘『大唐西域記』 | 大唐西域記に依れば、お釈迦様の足跡が今も摩揭陀国に遺つてゐる (161 頁) | 『大唐西域記』は唐代の僧玄奘の西域、印度 旅行の見聞録。弟子の弁機の編録により 646 年成立、西域記ともいう。 | |
| | 雪後庵夜話 9 1963・6～ | 元・曾先之『十八史略』 『四書』『文書軌範』 | 私は小学校の高等二三年の頃、放課後漢学の塾へ通つて十八史略を習つてみたが、(…)。 (388 頁) 明治初年頃のことなので、町人の家の女の子でも四書や文章軌範ぐらゐは読んでゐたのに 違ひない。(388 頁) | | |
| 25 | 牧童 (七言 絶句) 1901・10 | 杜牧「清明」 | 牧笛声中春日斜、青山一半入紅霞。行人借問扁何処、笑指梅花溪上家。(32 頁) (杜牧の詩「清明」を意識した上で作られたものと考えられる。) | 清明 清明時節雨紛紛、路上行人欲斷魂。 借問酒家何処有？牧童遙指杏花村。 | |
| | 時代と聖人 1902・1 | 堯舜 仲尼 | 支那の古聖堯舜の如き者、亦天帝の命を信ず(…)。(35 頁) 婆羅門蔓延して悉達現れ、春秋徳乱れて仲尼生ず(…)。(36 頁) | | |
| | 厭世主義を 評す 1902・3 | 潮州：韓愈 首陽：伯夷 汨羅：屈原 | 潮州の風雲、徒に志士の跡を吊ひ、大宰府の名月、空しく忠臣の腸を断つ、或は首陽に餓 死せしめ、或は汨羅に投ぜしむ(…)。(39 頁) | 伯夷と屈原のエピソードはそれぞれ『史記』 「伯夷列伝」、「莊子」『駢母』と『史記』「屈 原賈生列伝」などの文献に記されている。ま た韓愈は潮州に左遷した際に作つた詩には 「左遷至藍關示姪孫湘」がある。 | |
| | 道徳的觀念 と美的觀念 1902・6 | 『論語』「為政第二」 徐增『而庵說唐詩』 白樂天「琵琶行」 韓愈「左遷至藍關示姪孫 | 詩三百、一言以蔽之、曰思無邪。(45 頁) 欲學詩、先學道、學道則性情正、性情正則原本得。詩以道性情。(45 頁) 潯陽江頭空船の孀婦が述懐は、白樂天が筆に依て琵琶行を為さしめしに非ずや、其の身潮 州に貶せらるゝ夕、馬を藍關に止めて姪孫と哀別の涙にくれし時に、雲橫秦嶺家何在。雪 | 陶淵明「飲酒 其七」「飲酒二十首 其五」 「歸去來兮辭」「九日閑居」などの詩に菊を 讃えている詩句がよく見当たる。菊を愛する ことがよく知られる。 | |

| | | | | | |
|---------|---------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | | | 湘 屈原 (屈平) 「離騷」 『論語』「雍也第六」 陶潛 (陶淵明) 周敦頤 杜甫 (杜子美) | 擁藍閭馬不前。と千古所賜の詩句を吐きしものは、即ち韓文公にあらずや。(45頁) 屈平は楚國にすてられてその憂心を離騷に吐く(46頁) 孔子曰く「智者は水を好み、仁者は山を好み」と(46頁) 陶淵明が菊における、周敦頤が蓮における(47頁) 釈迦孔子を崇拜すると共に、杜子美を崇拜し、沙翁を崇拜せざるべからざる也。(47頁) | 周敦頤即ち周茂叔は宋代の大儒。「愛蓮説」、 「通書」を著し、宋学の開祖となる。廬山蓮 花峯下に住む。その居所を濂溪といひ、濂溪 先生といわれる。また蓮を愛することがよく 知られる。 |
| 夏季休暇 | 1903・9 | 『孟子』「公孫丑上」 | 浩然の気を養ふに足る。(48頁) | 公孫丑：敢問夫子悪乎長？ 曰：我知言、我善養吾浩然之氣。 | |
| 無題録 | 1903・9 | 王陽明『伝習録』 陸子 (陸九淵) 『語録』 孟子 『孟子』「梁惠王 上」 王陽明「汎海」 劉邦「大風歌」 項羽「垓下歌」 杜牧「阿房宮賦」 賈誼「弔屈原賦」 | 此心無私欲之蔽即天理、不需外面添一分(…)。これ王陽明が伝習録中の言也(49頁) 陸子曰く『六経我れを注し我れ六経を注す』と。(49頁) 木に縁りて魚を求め水に入りて火を求むが如し動すれば曰、「能はざる也」と(…)『王之 不王。不為也。非不能也。』(…) (49～50頁) 陰夷原不滞胸中。何異浮雲過大空。夜静海濤三万里。月明飛鶴下天風。と是れ王陽明の詩 也。(50頁) 大風起兮雲飛揚。威加海内兮掃故郷。安得猛士兮守四方。之れ劉邦が故郷沛を過ぎ置酒高 会の席に於て歌ひし句なり。(51頁) 項羽の述懐力拔山兮氣蓋世。時不利兮雅不逝。雅不逝兮可奈何。虞兮虞兮奈若何。の如き 一は英雄の盛時を歌ひ一は英雄の末路を悲しむ両々相對して真に人を動かすに足る或は 『六王畢四海一。蜀山兀阿房出』と歌ひし杜牧之の阿房宮賦に於ける或は『恭承嘉惠兮。 瑛罪長沙。(…)。』と賈誼の弔屈原賦の如き沈痛悲壯、実に千古の大文字と謂ふべし文学 は忽にすべからざるもの也。(51頁) | 「六経注我我注六経」は陸子『語録』の句で ある。 | |
| 春風秋雨録 | 1903・12 | 『莊子』「法篋」 『莊子』「盜跖」 | 莊子が法篋、盜跖の篇を味ひては、もろとも此の世の中を笑ひ(…)。(62頁) | | |
| 文芸と道徳主義 | 1904・5 | 仲丘、老子、列子、莊子、韓非、孟軻、楊墨 | 仲丘、不世出の資を以て遂に春秋混乱の世に死し(…)。(69頁) 「莊子は東洋のニイチエにして、ニイチエは西洋の莊子なり」と。彼が真人の理想を以 | | |

| | | | | |
|-------|----------------------------|---------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--|
| | | 『莊子』「逍遙遊」 『中庸』 『列子』「天瑞」 『莊子』「齊物論」、 『莊子』「駢拇」 『莊子』「胠篋」 | て、此が超人に必し、その逍遙遊を以て、このザラトフストラに比す。(70頁) 支那にありては、老子あり、列子あり、莊子あり、韓非子あり、楊墨の徒ありて儒教の道徳主義に反対せり。(70頁) 彼等に向かつて中庸は説くべからず、彼等に向かつて仁義忠孝は教ふべからず(…)。(71頁) 孔子游太山。見榮啓期行乎薮之野。鹿裘帶索。鼓琴而歌。(…)是れ列子天瑞篇の説く所也。(71頁) 「南郭子綦隠机而坐。仰天而嘘。荅焉似喪其耦。」を以て起せる莊子齊物論の一篇は莊子中の大文章也。(72頁) 更に彼が道徳に対する熟罵を聴かんとする者は、乞ふ、駢拇篇を讀め。胠篋篇を讀め。夫れ明に駢なる者は五色を乱り、文章青黃黼黻の煌々たるを淫するにあらずや、而して禹朱是れのみ(…)。(73頁) 嗚呼仲尼、孟軻の徒、以て氣死せしむべく、道学先生をして顔色なからしむべし。(74頁) | |
| 学校時代 | 1916・4 | 四書、『莊子』、『老子』 | 四書は素よりの事ですが、莊子老子なぞにも手をつけてゐたのです。(169頁) | |
| 幼年の記憶 | 1947・5 | 『大学』、『十八史略』、 陽明学、四書五経 | 僕等町人でも塾へ行つて十八史略など習つてゐたが、わからないところは母親に聞いたことを覚えてをる。(222頁) それで陽明学の話などをよくしてゐたことを記憶してをります。(223頁) 高等科になつてからですが学校で習ふ外に、そこへ四書五経などを習ひに行かされました。(224頁) | |
| 少年の頃 | 1950・11 | 四書五経、『十八史略』 | 私は小学校で習うほかに漢学の塾へ通つて、四書五経や十八史略を勉強しました。(257頁) | |
| 続松の木影 | 1938 夏～ 1940 秋創 作ノート | 林語堂『北京の日』 | 隨筆系文のこと、林語堂「北京の日」のこと(五三～六七)(468頁) | |
| 瀟瀟亭 | | 白居易「失鶴」 | 失レ鶴(第二十三卷) 失為庭前雪、飛因海上風。九宵忘得侶、三夜籠不帰籠。声嘶碧雲外、影沈明月中。郡齋徒 | |

| | | | | | |
|----------|----------------------------------|------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------|
| | | | | 此後、誰伴白頭翁。(496頁) | |
| 子 | 1953・6～ 1955・11 創作ノ一 ト | 蒲松齡『聊齋志異』 李白『峨眉山月』『山中 問答』『秋浦歌十七首』 など、屈原『楚辭』 | | 「鍵」の主人公が死んでから、妻の行動をあの世から見てゐる。聊齋志異参考(522頁) 峨眉三月、雪後峨眉影、心自閑、雪魄皓皓、莫煩悶、人不知、我為我、青娥、鏡中白髮、吾 往矣、(…)白髮三千丈、鏡裡秋霜(…)。(528頁) 突梯(楚辭ニアリ、辭苑ヲ見る)(530頁) | 聊齋志異：中国、清代の怪異小説集。16 卷、445編。1679年ごろ成立、1766年刊。 |
| 丑 | 1956・1～ 1958・11 月創作ノ 一ト | 『莊子』 | | A——職人、料理屋の板場、Aハニヒラスト、莊子ヲ詠ムコト、自分ハ世間ニ生キテオテ モ別ニ何ノ樂シミモナイカラ(…)。(544頁) | |
| | | 朱蕙「進学詩ノ偶成」 | | 春の日の草をしとねの夢さめずはや悟の葉に秋の風吹く 未覚池塘春草夢、階前梧葉已秋声(707頁) | |
| | 1943～ 1963 歌集 | | | | |
| 26 | なし | | | | |
| 新全集未収録書簡 | 愛蔵版谷崎 潤一郎全集 二五巻 左右宛 | 1927・1・ 27 土屋計 左右宛 | 李長吉集五巻(石印) 青丘詩集注十八巻鳧藻集 五巻(石印) 疑雨集注四巻(石印) 漁洋精華録箋注十二巻補 遺一卷(石印) 隨園女弟子詩選六巻(石 印) 關秀詞話四巻(同) 小石山房印譜四巻附集名 刻帛去來辭(同) 鄭板橋寫四書(同) 茶余客話二十二巻 | さて毎々御手敷恐れ入りますが御地の掃葉山房書店(上海市棋盤街)に於いて左の書籍 を購入御郵送下され度御願ひいたします 李長吉集五巻(石印) 青丘詩集注十八巻鳧藻集五巻(石印) 疑雨集注四巻(石印) 漁洋精華録箋注十二巻補遺一卷(石印) 隨園女弟子詩選六巻(石印) 關秀詞話四巻(同) 小石山房印譜四巻附集名刻帛去來辭(同) 鄭板橋寫四書(同) 茶余客話二十二巻 以上 (…)今度のは真面目な本でありますから普通郵便小包で書留にして送って頂き度存じ | |

| | | | |
|---------------------------|-------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| | | <p>ます。掃葉山房と云ふ本屋は三井銀行からさう遠くない所にあつたと記憶いたします、商務印書館につぐ有名な店でありますから直きに分かる筈であります。(77～78頁))</p> | |
| <p>愛蔵版谷崎潤一郎全集 二六卷</p> | <p>1961・6・29 鈴木信太郎宛</p> | <p>唐・鮑溶「上陽宮月」 明・高青邱「題美人对鏡図」</p> | <p>娥影は、娥月ともいい、月に住む仙女嫦娥のことから月光或は美人の姿を指している。関係の漢詩は、唐鮑溶「上陽宮月」と高青邱「題美人对鏡図」がある。 上陽宮月</p> |
| | <p>1963・4・20 鮑耀明宛</p> | <p>『中国鈇印源流』</p> | <p>水北宮城夜柝聲、宮西新月影纖纖。 受環花幌小開鏡、移燭瑤房皆卷簾。 字織機邊娥影靜、拜新衣上露華沾。 合裁班扇思行幸、願托涼風篋笥嫌。 題美人对鏡図 曉院鹿盧鳴鶴井、玉人夢斷梨雲冷。 起開粧閣笑窺窳、月里分明見娥影。 白对猶隣况主家、春風一面惱腸花。 何由鑄入青銅内、不遣秋霜換娥翠。</p> |
| | <p>1965・5・30 鮑耀明宛</p> | <p>『我的前半生』</p> | <p>「鈇」は、「鈇」の異体字である。 谷崎がここで言及した“中国鈇印源流”は、1963年に上海書局より出版された『中国鈇印源流』のことである。作者は錢君匋と葉潯淵。この本は1984年に日本の木耳社より出版。</p> |
| | <p>1965・5・30 鮑耀明宛</p> | <p>『我的前半生』</p> | <p>宣統皇帝自傳「我的前半生」たしかに頂戴いたしました この漢文はなかなか読みにくいですがぼつぼつ読ませていただきます(163頁)</p> |

| | | | |
|--|-----------------------|--------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------|
| | | | |
| | 1965・7・15 鮑耀 明宛 | 『金石篆刻研究』 | 「金石篆刻研究」お送り下さいますと有難うございました。御礼申し上げます。(165頁) |
| | 1962・2・14 鮑耀 明宛 | 斎白石詩文篆刻集 栄宝斎印譜用空白冊 白石書画集 | “斎白石詩文篆刻集”“栄宝斎印譜用空白冊”ともに到着いたしました。白石の書画集は前から持っていました。が、篆刻集は始めて興味深く拝見いたしました。(137頁) |
| | | | 李健『金石篆刻研究』は、1964年に商務印書館より出版。 |

おわりに

一覧表では、『谷崎潤一郎全集（決定版）』と書簡（主に愛読愛蔵版全集 二五巻、二六巻）で言及された漢籍名や中国知識人名などをまとめた。一覧表にまとめた漢籍は、そのすべてを谷崎が読んでいたわけではなく、また谷崎が実際読んでいたものが必ずこの中にあると断言することもできないが、谷崎が作品執筆において参照したであろう漢籍の把握、中国知識人との交友関係、各時期の関心の一面などがある程度で窺い知ることができるだろう。谷崎の中国及び中国文学・芸術などへの関心が生涯を通して続いていたことがわかる。

本資料の作成はあくまで基礎的な作業であり、谷崎文学における漢籍が果たした文学的な役割、各時期における谷崎の関心の所在といった問題については考察の余地を残しており、今後の課題としたい。

初出一覧

序章 谷崎潤一郎と中国（書下ろし）

第一部 少年時代から初回の中国旅行まで

第一章 少年谷崎の思想遍歴——儒・道思想の受容と理解（書下ろし）

第二章 「麒麟」論——漢籍から変奏した物語

（原題「谷崎潤一郎『麒麟』再考——漢籍との関わりから」「同志社国文学」第八五号 六七頁〜八一頁、二〇一六・一二・二〇、同志社国文学会）

第三章 「人魚の嘆き論」論——背景としての東洋

（原題「谷崎潤一郎『人魚の嘆き』論——典拠をめぐって」「同志社国文学」第八七号 四一頁〜五二頁、二〇一七・一二・二〇、同志社国文学会）

第四章 「人間が猿になった話」論——典拠と創作動機

（原題「谷崎潤一郎『人間が猿になった話』と『白猿伝』の関連性についての一考察」「同志社国文学」第八二号 七八頁〜八八頁、二〇一五・三・二〇、同志社国文学会）

第五部 初回の中国旅行以後

第五章 「鮫人」論——東西融合の試みと東洋への接近

（原題「谷崎潤一郎『鮫人』に見る林真珠の人物像」「同志社国文学」第八四号

第六章 一四四頁～一五七頁、二〇一六・三・二〇、同志社大学国文学会）
「鶴唳」における漢籍要素と東洋的詩情

（原題「谷崎潤一郎『鶴唳』における漢籍要素」同志社国文学「第七九号、六七頁～七九頁、二〇一三・一二・二〇、同志社大学国文学会」）

終章 中国古典の受容と終焉（書下ろし）